厚真町

豊沢５遺跡
富里１遺跡
豊沢10遺跡
豊丘２遺跡

－勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 29 年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

厚真町

豊沢５遺跡
富里１遺跡
豊沢10遺跡
豊丘２遺跡

－勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 29 年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調査風景（西から）

基本層序（R 22 区南壁）

沢部堆積状況（北東から）

口絵 2

Ⅵ・Ⅶ群土器

たたき石

例　　言

1．本書は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が行う厚幌導水路工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成28・29（2016・2017）年度に発掘調査を実施した、厚真町豊沢５遺跡、富里１遺跡、豊沢10遺跡、豊丘２遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は第２調査部第３調査課が担当した。

3．豊沢５遺跡、富里１遺跡の整理作業は立田　理が担当した。豊沢10遺跡、豊丘２遺跡の現地調査および整理作業は村田　大が担当した。

4．現場の写真撮影は、村田、新家水奈、立田が、遺物の写真撮影は第１調査部第１調査課の中山昭大が行った。写真図版のレイアウトは、豊沢５遺跡、富里１遺跡を立田、豊沢10遺跡、豊丘２遺跡を村田が行った。

5．石器などの石材鑑定は、豊沢５遺跡、富里１遺跡を立田が、豊沢10遺跡、豊丘２遺跡を第１調査部普及活用課の柳瀬由佳が行った。

6．本書の執筆は、村田、立田が行い、編集はⅢ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ－１章を立田が、それ以外と全体のとりまとめを村田が担当した。

7．富里１遺跡の各種分析・同定は下記に委託した。

放射性炭素^{14}C年代測定：㈱加速器分析研究所

金属製品分析：岩手県立博物館

動物遺存体同定・炭化種実同定：㈱パレオ・ラボ

8．調査にあたっては、下記の諸機関、各氏からご指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略、所属は発掘調査時）。

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課

厚真町教育委員会　乾　哲也、奈良智法

平取町教育委員会　森岡健治

様似町教育委員会　髙橋美鈴

苫小牧勇武津資料館　赤石慎三

宮塚文化財研究所　宮塚義人

鹿児島考古学会　西田　茂

記号等の説明

1．本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。
　Ｐ：土坑　TP：Ｔピット　Ｆ：焼土　FC：フレイク・チップ集中域
2．遺構図の縮尺は原則として40分の１である。その他の縮尺を用いるものはスケールを付した。
3．遺構平面図の小数字は標高（単位m）を表している。
4．基本土層図、遺構の土層断面図に表記した数字は、標高（単位m）を示している。
5．基本土層はローマ数字、それ以外の土層はアラビア数字を用いて表した。
6．遺構の規模は、「確認面の長軸長×短軸長、床面（坑底面）の長軸長×短軸長／確認面からの最大深」を単位mで示してある。なお、一部破壊されているものは数値に（　）を付した。
7．火山灰について以下の略号を用いている部分がある。これらは層位的な検出状況と外見から判断しており、分析による同定は行なっていない。
　Ta－b：樽前bテフラ、Ta－b 火山灰（1667年降灰）
　B－Tm：白頭山－苫小牧火山灰（10世紀）
　Ta－c：樽前cテフラ、Ta－c 火山灰
　Ta－d：樽前dテフラ、Ta－d 火山灰
8．掲載した遺構図等の縮尺は原則として以下のとおりである。これ以外の縮尺を用いる場合にはスケールを付した。

遺構実測図	１：40	遺物出土状況図	１：20	土器実測図・拓影図	１：３
剥片石器実測図	１：２	礫石器実測図	１：３	土製品実測図	１：２

9．石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。なお､破損しているものについては、現存の最大幅を（　）で示した。
10．遺構図で用いた方位は真北である。
11．遺構出土状況を表した図中、以下の記号を用いた部分がある。
　土器：◎、剥片石器：▲、礫石器（石斧含む）：■、礫・礫片：●、金属製品：★、剝片：△、その他の遺物：×、番号のみ示される場合は礫・礫片。
12．遺物実測図中でたたき痕は∨―∨、すり痕は　|――|　で範囲を表した。また、自然面はドットで表現した。
13．豊丘２遺跡では、土層の混合状態を表現するために、以下のように表記した。
　A＋B：AとBが同量混じる。　　A≒B：AとBの土層が類似する。
　A＞B：AにBが少量混じる。　　A≫B：AにBが微量混じる。
14．土層の色調には『新版標準土色帖』30版（小山・竹原2008）を使用し、カラーチャートの番号を付したものがある。
15．豊沢５遺跡、富里１遺跡の石器石材について、一覧表に以下の略号を用いた。
　Sa：砂岩、Sh：頁岩、Si：珪化岩、Obs：黒曜石、Cha：チャート、Qua：珪岩、Ag：メノウ、MS：泥岩、Tu：凝灰岩、Rh：流紋岩、Da：デイサイト、An：安山岩、Ba：玄武岩、Sc：片岩、Grs：緑色片岩（＝アオトラ）、Gls：藍閃石片岩、Dol：粗粒玄武岩、Rod：ロジン岩、Tor：トロニエム岩

目　　次

口絵
例言
記号等の説明
目次
挿図目次
表目次
図版目次

Ⅰ章　緒　言
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査にいたる経緯と経過 …… 2
（1）調査に至る経緯　（2）調査の経過
4　調査結果の概要（豊沢５遺跡） …… 4
5　調査結果の概要（富里１遺跡） …… 6
6　調査結果の概要（豊沢10遺跡） …… 6
7　調査結果の概要（豊丘２遺跡） …… 6

Ⅱ章　遺跡の位置と環境
1　厚真町の位置 …… 7
2　各遺跡の位置と環境 …… 7
（1）豊沢５遺跡　（2）富里１遺跡　（3）豊沢10遺跡　（4）豊丘２遺跡

Ⅲ章　豊沢５遺跡
1　発掘区の設定 …… 15
2　調査の方法 …… 15
3　遺物整理の方法 …… 15
4　遺物の分類 …… 16
5　基本層序 …… 17
6　遺構とその出土遺物 …… 18
7　包含層出土の遺物 …… 20

Ⅳ章　富里１遺跡
1　発掘区の設定 …… 23
2　調査の方法 …… 23
3　遺物整理の方法 …… 24
4　遺物の分類 …… 24
5　基本層序 …… 25
6　Ⅲ層検出の遺構と出土遺物 …… 31
7　Ⅲ層出土の土器 …… 42
8　Ⅴ層検出の遺構とその出土遺物 …… 44

9　Ⅴ層出土の遺物 …… 75

Ⅴ章　豊沢10遺跡
1　遺跡の地形と環境 …… 103
2　発掘区の設定 …… 103
3　発掘調査の方法 …… 106
4　整理作業の方法 …… 107
（1）一次整理　（2）二次整理
5　遺物の分類 …… 107
（1）土器等　（2）石器等　（3）その他の遺物（自然遺物）
6　基本土層 …… 108
7　遺構と出土遺物 …… 110
（1）概要　（2）焼土　（3）包含層出土の遺物

Ⅵ章　豊丘２遺跡
1　遺跡の地形と環境 …… 131
2　発掘区の設定 …… 131
3　発掘調査の方法 …… 131
4　整理作業の方法 …… 135
（1）一次整理　（2）二次整理
5　遺物の分類 …… 135
（1）土器等　（2）石器等
6　基本土層 …… 138
7　遺構と出土遺物 …… 139
（1）概要　（2）Ｔピット・焼土　（3）包含層出土の遺物

Ⅶ章　自然科学的分析
1　富里１遺跡における放射性炭素年代測定 …… 149
2　富里１遺跡出土の炭化種実同定 …… 153
3　富里１遺跡出土鉄製品の金属考古学的調査 …… 155
4　富里１遺跡出土動物遺存体 …… 162

Ⅷ章　総括
1　豊沢５遺跡・富里１遺跡 …… 163
（1）北大Ⅰ式土器について　（2）たたき石について
2　豊沢10遺跡・豊丘２遺跡の遺構と遺物 …… 168

引用・参考文献 …… 169

写真図版 …… 171
豊沢５遺跡
富里１遺跡
豊沢10遺跡
豊丘２遺跡

挿図目次

〔緒言〕
図Ⅰ－１　厚幌導水路計画路線と遺跡の位置（富里１遺跡）…… 3
図Ⅰ－２　厚幌導水路計画路線と遺跡の位置（豊沢５、豊沢10、豊丘２の各遺跡）…… 5

〔遺跡の位置と環境〕
図Ⅱ－１　遺跡の位置…… 8
図Ⅱ－２　豊沢５遺跡と周辺の地形…… 9
図Ⅱ－３　豊沢５遺跡、豊沢10遺跡周辺の遺跡…… 10
図Ⅱ－４　富里１遺跡周辺の遺跡…… 11
図Ⅱ－５　富里１遺跡と周辺の地形…… 12
図Ⅱ－６　豊丘２遺跡周辺の遺跡…… 13
図Ⅱ－７　厚真町の旧地名と遺跡の位置…… 14

〔豊沢５遺跡〕
図Ⅲ－１　発掘区設定図…… 15
図Ⅲ－２　調査区土層断面図…… 17
図Ⅲ－３　遺構位置図…… 18
図Ⅲ－４　住居跡Ｈ－１…… 19
図Ⅲ－５　土器集中１…… 20
図Ⅲ－６　遺構・包含層出土遺物…… 21

〔富里１遺跡〕
図Ⅳ－１　発掘区設定図…… 23
図Ⅳ－２　Ⅲ層残存範囲と先行調査グリッド… 24
図Ⅳ－３　調査区土層断面図（１）…… 26
図Ⅳ－４　調査区土層断面図（２）…… 27
図Ⅳ－５　調査区土層断面図（３）…… 28
図Ⅳ－６　調査区土層断面図（４）…… 29
図Ⅳ－７　調査区土層断面図（５）…… 30
図Ⅳ－８　Ⅲ層遺構位置図…… 32
図Ⅳ－９　Ｆ－１・２／SP－１～３…… 33
図Ⅳ－10　Ｆ－３・４・５…… 35
図Ⅳ－11　Ｓ－２・３…… 37
図Ⅳ－12　Ｓ－４・５／土器集中５・６…… 38
図Ⅳ－13　土器集中１・２…… 40
図Ⅳ－14　鉄製品…… 40
図Ⅳ－15　土器集中の出土遺物…… 41
図Ⅳ－16　Ⅲ層出土の土器…… 43
図Ⅳ－17　Ⅴ層遺構位置図…… 45
図Ⅳ－18　Ｈ－１・４…… 47
図Ⅳ－19　Ｈ－２…… 48
図Ⅳ－20　Ｈ－３…… 49
図Ⅳ－21　Ｈ－１出土遺物…… 50
図Ⅳ－22　Ｈ－２～４出土遺物…… 51
図Ⅳ－23　Ｐ－１・３・６…… 53
図Ⅳ－24　Ｐ－２・７・８・14…… 54
図Ⅳ－25　Ｐ－４・５…… 56
図Ⅳ－26　Ｐ－９・10・16・20…… 59
図Ⅳ－27　Ｐ－15検出面遺物出土状況…… 60
図Ⅳ－28　Ｐ－11・12・15・27・28…… 61
図Ⅳ－29　Ｐ－17・19・29…… 63
図Ⅳ－30　Ｐ－21～25…… 65
図Ⅳ－31　Ｐ－26・30～32…… 66
図Ⅳ－32　Ｐ－18、TP－１…… 68
図Ⅳ－33　土坑、PS－３・４出土の土器…… 70
図Ⅳ－34　土坑出土の石器…… 71
図Ⅳ－35　Ｆ－８・９／SP－４～12…… 73
図Ⅳ－36　土器集中３・４…… 74
図Ⅳ－37　Ⅴ層出土の土器（１）…… 76
図Ⅳ－38　Ⅴ層出土の土器（２）…… 77
図Ⅳ－39　Ⅴ層出土の土器（３）…… 79
図Ⅳ－40　包含層出土の剝片石器（１）…… 81
図Ⅳ－41　包含層出土の剝片石器（２）・磨製石斧（１）…… 82
図Ⅳ－42　包含層出土の磨製石斧（２）・礫石器（１）…… 83
図Ⅳ－43　包含層出土の礫石器（２）…… 84
図Ⅳ－44　包含層出土の礫石器（３）…… 85
図Ⅳ－45　包含層出土の礫石器（４）…… 86
図Ⅳ－46　包含層出土の礫石器（５）…… 88
図Ⅳ－47　包含層出土の礫石器（６）・土製品・石製品…… 89
図Ⅳ－48　グリッド別点数（１）…… 90

図Ⅳ－49　グリッド別点数（２）…… 91
図Ⅳ－50　グリッド別点数（３）…… 92
図Ⅳ－51　グリッド別点数（４）…… 93
図Ⅳ－52　グリッド別点数（５）…… 94
図Ⅳ－53　グリッド別点数（６）…… 95
図Ⅳ－54　グリッド別点数（７）…… 96

〔豊沢10遺跡〕

図Ⅴ－１　遺跡周辺の地形（１）…… 104
図Ⅴ－２　遺跡周辺の地形（２）…… 105
図Ⅴ－３　発掘区設定図…… 106
図Ⅴ－４　土層柱状図…… 109
図Ⅴ－５　遺構位置図…… 111
図Ⅴ－６　遺構位置図（拡大）…… 112
図Ⅴ－７　Ｆ－１・２・３…… 113
図Ⅴ－８　Ｆ－４…… 114
図Ⅴ－９　焼土出土の遺物…… 115
図Ⅴ－10　遺物出土状況（１）…… 117
図Ⅴ－11　遺物出土状況（２）…… 118
図Ⅴ－12　遺物分布図（１）…… 119
図Ⅴ－13　遺物分布図（２）…… 120
図Ⅴ－14　遺物分布図（３）…… 121
図Ⅴ－15　包含層出土の土器（１）…… 122
図Ⅴ－16　包含層出土の土器（２）…… 123
図Ⅴ－17　包含層出土の土器（３）…… 124
図Ⅴ－18　包含層出土の土器（４）…… 125
図Ⅴ－19　包含層出土の土器（５）・土製品 … 126
図Ⅴ－20　包含層出土の石器…… 127

〔豊丘２遺跡〕

図Ⅵ－１　遺跡周辺の地形（１）…… 132
図Ⅵ－２　遺跡周辺の地形（２）…… 133
図Ⅵ－３　発掘区設定図…… 134
図Ⅵ－４　土層断面図と柱状図（１）…… 136
図Ⅵ－５　土層断面図と柱状図（２）…… 137
図Ⅵ－６　遺構位置図…… 140
図Ⅵ－７　ＴＰ－１　Ｆ－１…… 141
図Ⅵ－８　遺物分布図（１）…… 142
図Ⅵ－９　遺物分布図（２）…… 143
図Ⅵ－10　遺物分布図（３）…… 144
図Ⅵ－11　包含層出土の土器…… 145
図Ⅵ－12　包含層出土の石器…… 146

〔自然科学的分析〕

図Ⅶ－１　暦年較正年代グラフ（参考）…… 152
図Ⅶ－２　暦年較正年代グラフ
（マルチプロット図）…… 152
写真Ⅶ－１　富里１遺跡の炭化種実…… 154
図Ⅶ－３　採取した試料の組織観察結果…… 159
図Ⅶ－４　採取した試料のEPMAによる分析結果
…… 160
図Ⅶ－５　調査鉄器に含有されるCu・Ni・Co
三成分比 …… 161
図版１　富里１遺跡から出土した鳥網骨片…… 162

〔総括〕

図Ⅷ－１　Ⅵ群遺物詳細分布状況…… 164
図Ⅷ－２　厚真町出土のⅤ群a類土器 …… 168

表目次

〔緒言〕
表Ⅰ－１　出土遺物点数一覧…… 6
表Ⅰ－２　遺構数一覧…… 6
表Ⅰ－３　出土遺物点数一覧…… 6

〔遺跡の位置と環境〕
表Ⅱ－１　豊沢５・豊沢10遺跡周辺の遺跡…… 10
表Ⅱ－２　富里１遺跡周辺の遺跡…… 11
表Ⅱ－３　豊丘２遺跡周辺の遺跡…… 13

〔豊沢５遺跡〕
表Ⅲ－１　遺構一覧…… 22
表Ⅲ－２　掲載土器一覧…… 22
表Ⅲ－３　跡掲載石器一覧…… 22

〔富里１遺跡〕
表Ⅳ－１　遺構一覧…… 97
表Ⅳ－２　遺構別出土遺物一覧…… 98
表Ⅳ－３　掲載復元土器一覧…… 99
表Ⅳ－４　Ⅲ層出土掲載拓本土器一覧 …… 99
表Ⅳ－５　Ⅴ層検出住居出土拓本土器一覧 …… 99
表Ⅳ－６　Ⅴ層検出土坑出土拓本土器一覧 …… 99
表Ⅳ－７　遺構出土掲載石器一覧 …… 100
表Ⅳ－８　Ⅴ層出土掲載拓本土器一覧 …… 100
表Ⅳ－９　鉄製品一覧…… 101
表Ⅳ－10　包含層出土掲載石器一覧…… 101
表Ⅳ－11　フローテーション結果一覧…… 102

〔豊沢10遺跡〕
表Ⅴ－１　遺構一覧…… 110
表Ⅴ－２　出土遺物一覧…… 110
表Ⅴ－３　遺構規模一覧…… 128
表Ⅴ－４　出土遺物集計…… 128
表Ⅴ－５　掲載土器等一覧（１）…… 129
表Ⅴ－６　掲載土器等一覧（２）…… 130
表Ⅴ－７　掲載石器等一覧…… 130

〔豊丘２遺跡〕
表Ⅵ－１　遺構一覧…… 139
表Ⅵ－２　出土遺物一覧…… 139
表Ⅵ－３　遺構規模一覧…… 147
表Ⅵ－４　出土遺物集計…… 147
表Ⅵ－５　掲載土器等一覧…… 148
表Ⅵ－６　掲載石器等一覧…… 148

〔自然科学的分析〕
表Ⅶ－１　放射性炭素年代測定結果…… 150
表Ⅶ－２　放射性炭素年代測定結果…… 151
表Ⅶ－３　富里１遺跡における炭化種実同定結果 …… 153
表Ⅶ－４　富里１遺跡における炭化種実同定結果 …… 154
表Ⅶ－５　非金属介在物中に見出された化合物のEPMAによる定量分析結果 …… 156
表Ⅶ－６　調査資料の化学組成…… 156

図版目次

〔豊沢 5 遺跡〕

図版 1　調査状況（北から）
　　調査状況（南から）
図版 2　土層断面（南西から）
　　土層断面（西から）
　　H－ 1 全景（南から）
図版 3　H－ 1 床面土器出土状況（南から）
　　H－ 1　HP－ 1 全景（南から）
　　土器集中 1 出土状況（北から）
　　石槍出土状況（北から）
　　遺構出土の遺物
図版 4　包含層出土の土器
　　包含層出土の剝片石器
　　包含層出土の礫石器

〔富里 1 遺跡〕

図版 5　調査状況（西から）
　　調査状況（北から）
図版 6　メインセクション　R22区南壁（北から）
　　メインセクション　38ライン付近南壁
　　（北西から）
　　F－ 1 断面（北から）
　　F－ 2 断面（北から）
図版 7　SP－ 1 断面（北から）
　　SP－ 2 断面（北から）
　　SP－ 3 断面（北から）
　　S－ 1 検出（北東から）
　　F－ 3 断面（北から）
　　F－ 4 断面（北西から）
　　F－ 5 検出（東から）
　　F－ 6 断面（北から）
　　F－ 7 断面（北から）
図版 8　S－ 2 ・ 3 検出（西から）
　　S－ 4 検出（西から）
　　土器集中 5 検出（西から）
　　S－ 5 ／土器集中 6 検出（北から）
図版 9　土器集中 2 検出（北から）
　　土器集中 1 検出（北から）
　　土器集中 1 ・ 2 検出（北から）
図版10　H－ 1 全景（北西から）
　　H－ 2 全景（西から）
図版11　H－ 2 全景（北から）
　　H－ 2 土層断面（西から）
図版12　H－ 3 全景（北西から）
　　H－ 3 土層断面（南南から）
　　H－ 3　HP－ 1 土層断面（南西から）
　　H－ 3　HP－ 3 土層断面（北西から）
図版13　P－ 1 全景（東から）
　　P－ 2 土層断面（西から）
　　P－ 3 土層断面（北西から）
　　P－ 4 土層断面（北西から）
　　P－ 5 土層断面（南西から）
　　P－ 6 土層断面（西から）
図版14　P－ 3 ～ 7 全景（西から）
　　P－ 7 土層断面（西から）
　　P－ 8 土層断面（東から）
　　P－ 9 土層断面（東から）
　　P－10土層断面（南から）
図版15　P－11・12全景（東から）
　　P－11土層断面（北東から）
　　P－12土層断面（東から）
　　P－11全景（東から）
　　P－12全景（東から）
図版16　P－14土層断面（南西から）
　　P－15検出面遺物出土状況（南から）
　　P－15土層断面（南東から）
　　P－15全景（南から）
　　P－16土層断面（東から）
　　P－17土層断面（南西から）
図版17　P－18土層断面（西から）
　　P－19全景・土層断面（北から）
　　P－20全景・土層断面（南から）
　　P－21土層断面（南から）
　　P－22土層断面（南から）
　　P－23全景（南から）
図版18　P－24全景・土層断面（北から）

Ｐ－25全景（北から）
Ｐ－26全景（北西から）
Ｐ－27土層断面（西から）
Ｐ－28検出状況（北から）
Ｐ－28土層断面（東から）
図版19　Ｐ－29全景・土層断面（北から）
Ｐ－30全景（南西から）
Ｐ－31土層断面（東から）
TP－１土層断面（南西から）
TP－１坑底検出状況（北西から）
図版20　TP－１全景（北東から）
TP－１杭土層断面（北西から）
TP－１杭土層断面（東から）
TP－１杭完掘（北東から）
TP－１杭完掘（南東から）
図版21　Ｆ－８土層断面（北東から）
Ｆ－９土層断面（南から）
SP－４土層断面（北から）
SP－５土層断面（北から）
SP－６土層断面（南東から）
SP－７土層断面（東から）
SP－８土層断面（西から）
SP－９土層断面（東から）
図版22　SP－10土層断面（北東から）
SP－11土層断面（東から）
SP－12土層断面（北東から）
土器集中３検出（西から）
土器集中４検出（東から）
図版23　鉄製品
図版24　土器集中の出土遺物１
土器集中の出土遺物２
土器集中の出土遺物３
土器集中の出土遺物４
土器集中の出土遺物５
Ｆ－４出土遺物
図版25　Ⅲ層出土の土器
住居跡出土の土器
図版26　住居跡出土の剝片石器・石斧
住居跡・土坑出土の礫石器
図版27　土坑出土の土器
土器集中４出土の土器
土器集中３出土の土器
図版28　Ⅴ層出土の土器（１）
図版29　Ⅴ層出土の土器（２）
図版30　包含層出土の剝片石器
図版31　包含層出土の磨製石器
包含層出土のたたき石（１）
図版32　包含層出土のたたき石（２）
包含層出土のたたき石（３）
図版33　包含層出土の礫石器
包含層出土の石皿
図版34　包含層出土の土製品・石製品
Ⅲ層検出遺構出土の棒状礫・円礫

〔豊沢10遺跡〕

図版35　調査状況　基本土層
１　遺跡全景（北東から）
２　調査状況（南から）
３　基本土層
図版36　Ｆ－１・Ｆ－２
１　焼土検出（南西から）
２　Ｆ－１断面（北東から）
３　Ｆ－２断面（北東から）
４　Ｆ－１・Ｆ－２断面（北東から）
図版37　Ｆ－３（１）
１　Ｆ－３検出（南西から）
２　Ｆ－３①検出（西から）
３　Ｆ－３①断面（北西から）
４　フレイク・チップの取り上げ状況
５　Ｆ－３②断面（北西から）
図版38　Ｆ－３（２）・Ｆ－４
１　Ｆ－３③検出（南西から）
２　Ｆ－３③断面（北西から）
３　Ｆ－３④シカ焼骨出土状況
４　Ｆ－３④断面（北西から）
５　Ｆ－４検出（北東から）
６　Ｆ－４検出（北西から）
７　Ｆ－４土器出土状況
８　Ｆ－４断面（北西から）

図版39　遺物出土状況（１）
1　Ｊ・Ｋ26区付近遺物出土状況（東から）
2　Ｊ・Ｋ26区遺物出土状況（北西から）
3　Ｊ・Ｋ26区遺物出土状況（南東から）
4　Ｊ・Ｋ26区土器底部出土状況
5　Ｊ・Ｋ26区土器口縁部出土状況
図版40　遺物出土状況（２）
1　Ｋ26区遺物出土状況（南西から）
2　Ｋ26区遺物出土状況（北西から）
3　Ｌ25区遺物出土状況（西から）
4　調査状況（南西から）
図版41　調査状況
1　調査状況（南西から）
2　調査状況（北西から）
図版42　焼土の遺物・包含層出土の土器（１）
1　焼土出土の土器
2　焼土出土の石器
3　図Ｖ－15－５
4　図Ｖ－15－６
図版43　包含層出土の土器（２）
1　図Ｖ－15－７
2　図Ｖ－15－８
3　図Ｖ－15－９
4　図Ｖ－15－10
5　図Ｖ－15－11
6　図Ｖ－15－12
図版44　包含層出土の土器（３）
1　Ⅳ群ａ類土器
2　Ｖ群ａ類土器（１）
図版45　包含層出土の土器（４）・土製品
1　Ｖ群ａ類土器（２）・土製品
図版46　包含層出土の石器
1　包含層出土の石器

〔豊丘２遺跡〕

図版47　調査状況
1　調査前現況（南から）
2　遺構確認作業状況（南から）
図版48　基本土層
1　基本土層
2　斜面部の土層
3　遺物出土状況
4　調査状況（北から）
図版49　焼土　Ｔピット
1　Ｆ－１調査状況
2　Ｆ－１断面（南西から）
3　ＴＰ－１断面（南から）
4　ＴＰ－１完掘（南から）
5　ＴＰ－１調査状況
6　斜面部の調査状況（北西から）
図版50　包含層出土の遺物
1　包含層出土の土器
2　包含層出土の石器

Ⅰ章　緒　言

1　調査要項

事　業　名	勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
事業受託者	公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
遺　跡　名	豊沢５遺跡（北海道教育委員会登載番号　Ｊ－13－109）
	富里１遺跡（北海道教育委員会登載番号　Ｊ－13－37）
	豊沢10遺跡（北海道教育委員会登載番号　Ｊ－13－139）
	豊丘２遺跡（北海道教育委員会登載番号　Ｊ－13－111）
所　在　地	（豊沢５遺跡）勇払郡厚真町字豊沢284－１
	（富里１遺跡）勇払郡厚真町字富里42－１
	（豊沢10遺跡）勇払郡厚真町字豊沢473－１
	（豊丘２遺跡）勇払郡厚真町字豊丘325－３
調 査 面 積	（豊沢５遺跡）729㎡
	（富里１遺跡）1,551㎡
	（豊沢10遺跡）613㎡
	（豊丘２遺跡）1,034㎡
現地調査期間	（豊沢５遺跡）平成28年７月14日～８月10日
	（富里１遺跡）平成28年８月30日～10月28日
	（豊沢10遺跡）平成29年５月22日～６月７日
	（豊丘２遺跡）平成29年７月26日～８月７日
整 理 期 間	（豊沢５遺跡）平成28年11月１日～平成29年３月31日
	（富里１遺跡）平成29年４月３日～平成30年３月30日
	（豊沢10遺跡、豊丘２遺跡）平成29年９月１日～平成30年３月30日

2　調査体制

〔平成28年度〕

理 事 長	越田　賢一郎
副理事長	中田　仁
専務理事	山田　寿雄（事務局長兼務）
常務理事	長沼　孝（第１調査部長兼務）
第２調査部長	三浦　正人
第３調査課課長	村田　大（発掘担当者）
主　　査	新家　水奈（発掘担当者）
主　　査	立田　理（発掘担当者）

〔平成29年度〕

理 事 長	越田　賢一郎
副理事長	中田　仁
専務理事	山田　寿雄（事務局長兼務）
常務理事	長沼　孝（第１調査部長兼務）
第２調査部長	鈴木　信
第３調査課課長	村田　大（発掘担当者）
主　　査	新家　水奈（発掘担当者）
主　　査	立田　理（発掘担当者）

３　調査に至る経緯と経過

（１）調査に至る経緯

厚幌導水路事業は、安定的かつ効率的な農業用水の供給を目的として、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（以下、室蘭開建）が実施中の農業農村整備事業で、国営勇払東部（二期）土地改良事業の一つである。事業は、現在、北海道胆振総合振興局が推進中の厚幌ダム建設事業と連動し、厚幌ダムができる厚真町幌内地区から町南部の鯉沼地区までの総延長24.5㎞に、地下埋設導水管を敷設するもので、平成７年に北海道と厚真町の間で締結された「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」に含まれているものである。

厚幌導水路建設事業が具体化されるに伴い、平成15年10月に室蘭開建より北海道教育委員会（以下、道教委）へ埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。事業者からの早急な所在確認調査の実施要求を受けて、対象範囲について、平成15年11月に厚真町教育委員会（以下、町教委）が所在確認調査を実施し、結果を道教委へ報告した。この報告を受けて道教委は、平成15年12月、４か所で試掘調査が必要と事業者に回答した。試掘調査は平成16年10月と平成17年４月に実施され、ニタップナイ遺跡、幌内５遺跡、幌内６遺跡、幌内７遺跡について発掘調査が必要と提示された。

これ以後、道教委は、導水路の本線および支線用水路の施工路線が確定次第、順次、所在確認調査および試掘調査を実施している。発掘調査または遺構確認調査が必要とされた遺跡は、平成29年12月現在、18遺跡で面積の合計は約20,000㎡である。

発掘調査は、平成19年度から町教委によって行われ、現在まで、ニタップナイ遺跡（厚真町2009、2010b）、厚幌１遺跡（厚真町2010a）、幌内７遺跡（厚真町2010a）、幌内５遺跡（厚真町2010b）、富里２遺跡（厚真町2010b）の５遺跡で調査が行われ調査報告書が刊行されている。

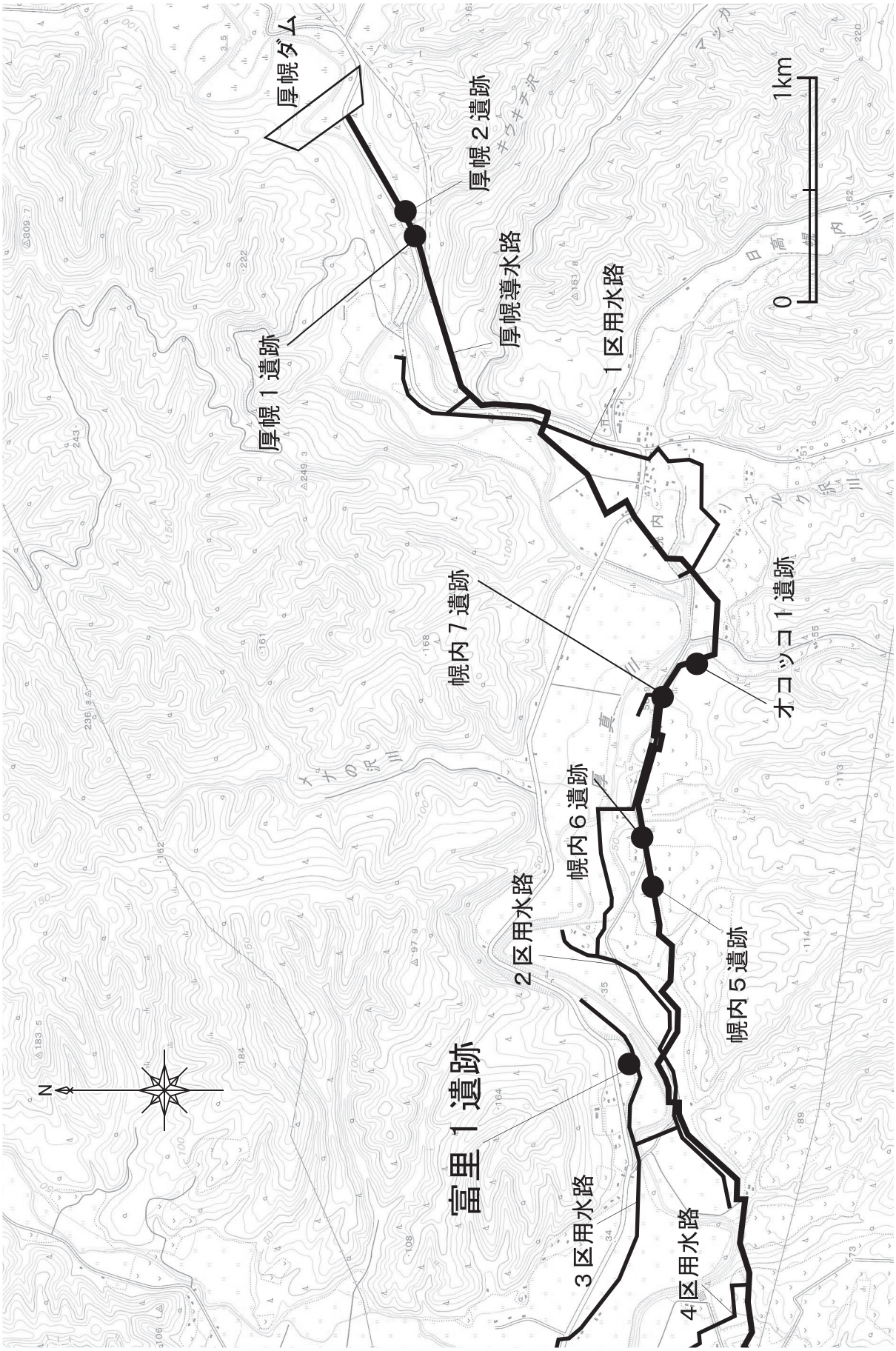
また、厚幌導水路建設事業が本格化するに伴い、平成25年度から当センターも発掘調査に参入することとなった。これまでに、調査を実施した遺跡は、厚幌１遺跡（平成25・27年調査）、厚幌２遺跡（平成27・28・29年調査）、オコッコ１遺跡、幌内６遺跡、富里３遺跡（ともに平成27年調査）、幌内７遺跡（平成27・28年調査）、豊沢５遺跡、富里１遺跡（ともに平成28年調査）、豊沢10遺跡、豊丘２遺跡（ともに平成29年調査）の10遺跡である。このうち、富里３遺跡、厚幌１遺跡、幌内６遺跡、幌内７遺跡については報告書刊行済みである（北埋調報326集・336集）。今回は、豊沢５遺跡、富里１遺跡、豊沢10遺跡、豊丘２遺跡について報告する。

（２）調査の経過

豊沢５遺跡は、道教委により平成19年11月20日に「18－１」として試掘調査が行われ、縄文時代後期初頭頃の土器が出土した。その結果、発掘調査が必要な面積500㎡で、ⅡB層（Ⅴ層）の調査が必要と報告された。この範囲は、新発見の遺跡「豊沢５遺跡（J－13－109）」として登載されている。その後、導水路計画路線の設計変更があったため、調査面積は729㎡となり、工事工程の都合から平成28年度に実施することになった。

調査は、平成28年７月５日から表土除去や調査杭打設作業などの準備工を開始し、同月14日から着手した。耕作土下の整地盛土が想定よりかなり厚く堆積しており、安全確保のため法面を付けて掘り下げた。現地調査は８月10日に終了した。

富里１遺跡の調査範囲は、厚幌導水路の支線用水路で「３区用水路」にあたる。道教委は、平成19年11月20日に「３区－１」として、用水路予定路線上の長さ約230mに、12か所のテストピットを設定し、試掘調査を実施した。調査区の大半は耕作による削平を受けていたが、ⅡB層（Ⅴ層）から



国土地理院発行２万５千分の１地形図「幌内」「厚真」に加筆

図Ⅰ－１　厚幌導水路計画路線と遺跡の位置（富里１遺跡）

土器・石器が出土した。その結果、発掘調査が必要な面積は、ⅡB層（Ⅴ層）の575㎡と段丘縁の一部にⅠB層（Ⅲ層）が残存することから、ⅠB層（Ⅲ層）は全体の50％以下の調査が必要と報告された。その後、支線用水路の路線幅が変更となったため調査面積は1,551㎡となり、工事工程の都合から、調査は平成28年度に実施することとなった。

調査は、平成28年８月22日から表土除去や調査杭打設作業などの準備工を開始し、同月30日から着手した。現地調査は10月28日に終了した。

豊沢10遺跡については、道教委が平成28年11月24・25日に「可能性地」として4,697㎡に10か所のテストピットを設定し、試掘調査を実施した。そのうち１か所から、縄文時代晩期に属すると思われる土器・石器が出土したため、そのテストピットを中心に導水管の掘削範囲77.5㎡（Ⅴ層）について、発掘調査が必要と報告された。この範囲は新発見の遺跡「豊沢10遺跡（J－13－139）」として登載されている。その後、工事範囲などを精査した結果、調査面積は613㎡となり、工事工程の都合などから、調査は平成29年度に実施し、当該年度内に報告書を刊行することとなった。

調査前の現況は、雑木の生える荒地であったが、以前は畑地として利用されていた。

調査は、平成29年５月16日から、雑木の伐採、表土除去などの準備工を開始し、同月22日より着手した。耕作土下の整地盛土が想定よりかなり厚く堆積しており、安全確保のため法面を付けて掘り下げた。現地調査は６月７日に終了した。

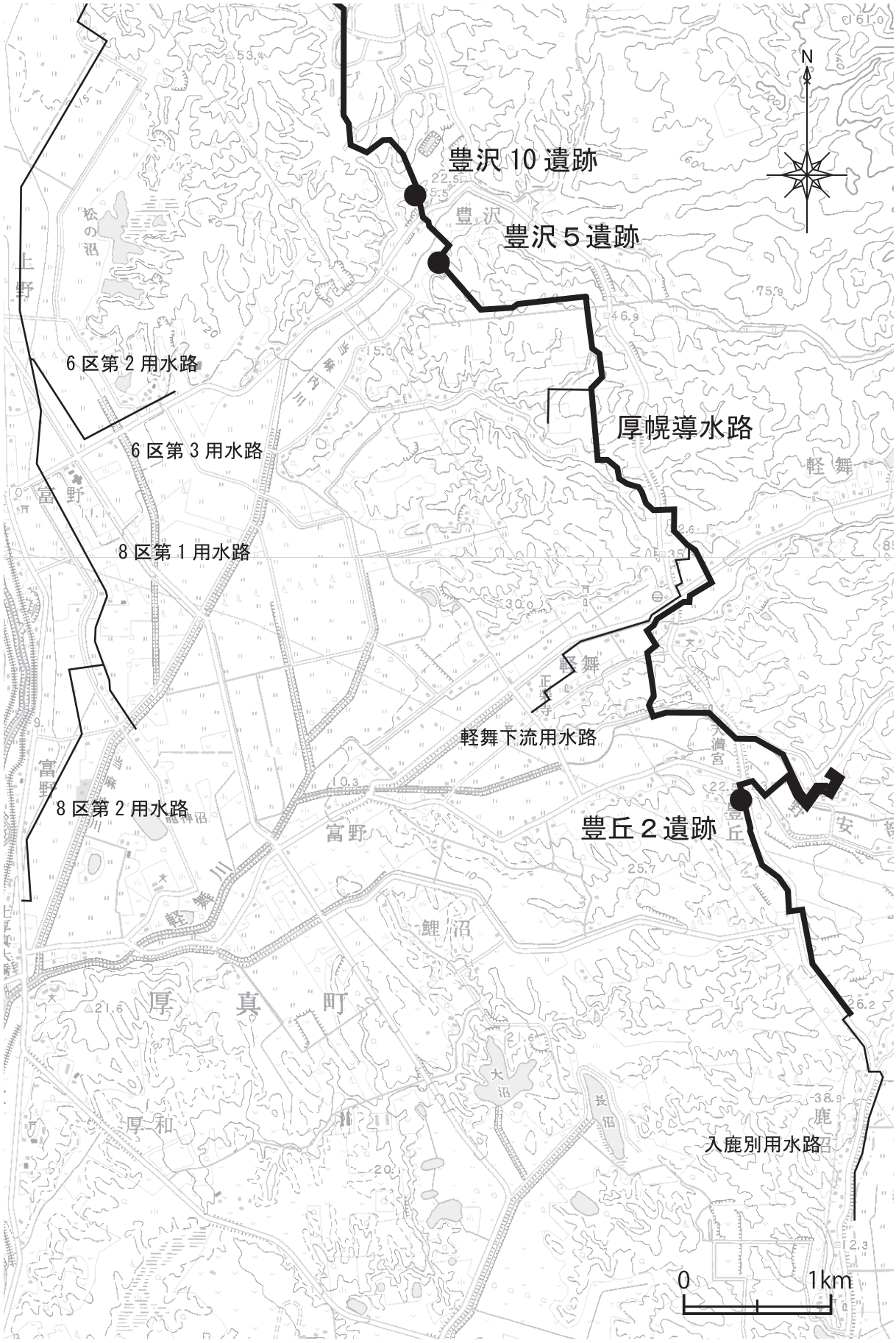
豊丘２遺跡は、道教委が平成20年６月に、導水路施工予定路線の中間点「IP№271」から南側の山林部分について、延長約260mに10か所のテストピットを設定し試掘調査を行い、１か所から縄文時代早期の土器片が出土した。また、北側の畑地部分については、作物の収穫作業終了後の同年12月３日に、延長約135mに８か所のテストピットを設定し、調査を実施したところ１か所から縄文時代早期の土器片が出土した。その結果、発掘調査が必要な範囲は、遺物が出土した２か所のテストピット付近を通常の発掘範囲とし、その中間と前後は遺物包含層が拡がる可能性があり遺構確認区域として範囲に含まれた。調査面積は、全体が928㎡でそのうち通常発掘は304㎡である。その後、工事計画が具体化し、工事範囲などを精査した結果、調査面積は1,034㎡となり、そのうち363㎡が通常発掘範囲となった。工事工程の都合などから、調査は平成29年度に実施し、当該年度内に報告書を刊行することとなった。

調査は、豊沢10遺跡の調査終了後、６月末までに雑木の伐採や表土除去作業の準備工を終了し、７月３日から調査に着手する予定であった。しかし、工事施工業者から伐採業者の手配がつかない事や鹿侵入防止柵の移設の目途が立たない事から、着手時期の遅延に関する申し出があった。関係機関と調整した結果、調査の着手は７月26日となった。当初は、２班体制（作業員約12人）で調査を行う予定であったが、着手時期が遅延したため、４班体制（作業員約24名）で調査を実施した。現地調査は８月７日に終了した。

平成29年度は、豊沢10遺跡、豊丘２遺跡の調査のほか厚幌２遺跡の調査を併行して実施しており、厚幌２遺跡から当初の想定より多くの遺物が出土した。現地調査を優先させるため、一次整理作業は出土遺物の水洗と分類作業のみを実施し、遺物の注記作業や台帳作成などは、９月以降に江別市の当センター作業棟で実施することとなった。（村田　大）

４　調査結果の概要（豊沢５遺跡）

遺跡は当麻内川に面する段丘緩斜面に立地する。調査の結果検出された遺構は、竪穴住居跡１軒、土器集中域１か所である。いずれも調査区中央の緩斜面に位置する。



国土地理院発行数値地図25000「札幌」に加筆

図Ⅰ－２　厚幌導水路計画路線と遺跡の位置（豊沢５、豊沢10、豊丘２の各遺跡）

出土遺物の総点数は285点、うち遺構出土の遺物は、土器集中１の縄文時代晩期の土器片、竪穴住居跡H－１の後期前葉の土器、フレイクがあり、合計146点と、ほぼ半数である。なお総点数には、2006年11月に行った試掘調査で出土した土器38点が含まれている。

表Ｉ－１　出土遺物点数一覧

遺物名	土器		石器等												総計
	Ⅳa	Ⅴc	石鏃	石槍	つまみ付きナイフ	スクレイパー	フレイク	石斧破片	たたき石	砥石(片)	加工痕ある礫	礫・礫片	陶磁器		
包含層	54	5	3	1	1	1	62	1	1	2	1	6	1		139
遺構	28	106	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0		146
合計	82	111	3	1	1	1	74	1	1	2	1	6	1		285

5　調査結果の概要（富里１遺跡）

遺跡は厚真川中流域の右岸にあたり、標高43～44mの河岸段丘上に立地する。調査区は舌状に張り出した地形の先端部に位置し、段丘崖縁辺を囲むように細長く設定されている。

検出遺構は住居跡４軒、土坑33基のほか下表のとおりである。住居跡は全て縄文時代の竪穴住居で、縄文時代早期後半が１軒、中期前半が１軒、中期後半が１軒、時期不明が１軒である。このほか擦文文化期の平地住居の炉跡とみられる焼土が確認されている。土坑には縄文時代晩期と早期後半ないし前期前半の可能性があるものが多い。

出土遺物は縄文時代早期後半から中期、後期、晩期、また続縄文時代、擦文文化期と、アイヌ文化期にあたるかと思われるものも出土している。土器の総点数は3,218点であり、多いものから、続縄文時代（756点）縄文時代早期後半（715点）、前期前半（463点）、中期後半（282点）等となっている。石器は各時期のものが出土しているが、石鏃、石槍、つまみ付きナイフ等の各時期の石器の他、断面形状が三角形となる礫を使用したすり石、焼けた砂岩礫が多数出土している。　（立田　理）

表Ｉ－２　遺構数一覧

遺構種	住居跡	土坑（TP含む）	焼土	遺物集中	土器集中	小柱穴	総計
Ⅲ層	0	0	7	5	3	3	18
Ⅴ層	4	33	2	0	2	9	50
							68

表Ｉ－３　出土遺物一覧

分類	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳ・Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	Ⅴa	Ⅴ・Ⅴb	Ⅴc	Ⅵ	Ⅶ	陶磁器	石鏃(片)	石槍(片)	石錐	両面調整石器	つまみ付きナイフ(片)	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	石斧・石のみ(片・破片)	石斧加工品・再加工品	石斧原材	たたき石(片)	すり石(片)	加工痕ある礫	石皿(片)	砥石(片)	石製品	有孔自然石	有意の礫	円礫・板状礫	礫・礫片	総計
遺構	22	16	1	30	43	7	0	118	0	0	0	300	144	0	8	2	2	0	5	6	8	0	515	3	0	0	10	0	1	13	4	0	1	8	131	351	1749
包含層	693	447	18	192	239	272	16	61	4	22	34	456	72	11	80	35	20	1	44	43	35	6	1127	26	2	7	282	28	13	9	50	6	6	50	84	5957	10448
合計	715	463	19	222	282	279	16	179	4	22	34	756	216	11	88	37	22	1	49	49	43	6	1642	29	2	7	292	28	14	22	54	6	7	58	215	6308	12197

6　調査結果の概要（豊沢10遺跡）

遺跡は、厚真川支流の当麻内川に流入する小河川の左岸段丘上に立地する。調査区内のやや平坦な部分から、４か所の焼土を検出した。シカの焼骨片、炭化物、フレイク・チップの集中を伴うものもある。周辺からは、Ⅴ群a類の土器がまとまって出土しており、焼土もこの時期のものと考えられる。

7　調査結果の概要（豊丘２遺跡）

遺跡は、厚真川支流の野安部川左岸の緩斜面上に立地する。Tピット１基と焼土１か所を検出した。遺物は、縄文時代早期後半の中茶路式土器と剥片石器が少量出土した。　（村田）

Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　厚真町の位置

遺跡の所在する厚真町は、太平洋に面する勇払平野の東端に位置し、胆振総合振興局管内勇払郡に属する（図Ⅱ－１）。北部の山林地帯と南部の平野で構成され、町域のほぼ中央を厚真川が貫流する。厚真川は流路約52㎞で、夕張山地南部を水源とし太平洋へ注ぐ二級河川で流域には水田地帯が広がる。北側は、夕張山地から続く山地で、太平洋と日本海の分水界として夕張市・由仁町と接し、東側はむかわ町、西側は、山地性丘陵を挟み安平町と、勇払平野で苫小牧市と接し、南側は砂浜が続き太平洋に臨んでいる。

町内は、大きく厚真川沿いとむかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区に分かれる。厚真川沿いは、海岸と広大な水田地帯のある下流域の浜厚真、上厚真地区、中流域は厚真市街地を形成し、中流域から上流域にかけては幌内地区となっている。

町名になっている「厚真」は、アイヌ語の「アットマム」（向こうの湿地帯）が転訛したもので、厚真川の河口付近の地名であると言われている（『厚眞村史』厚眞村　1956）。

2　各遺跡の位置と環境

（1）豊沢５遺跡

遺跡は、当麻内川左岸の緩斜面上に位置する。調査前の現況は畑地であった。切土と盛土によって畑地造成が行われている（図Ⅱ－２）。

遺跡名の「豊沢」は、以前の地名は「当麻内」であった。厚眞村史によると「トー・オマ・ナイ」（沼が・そこにある・沢）とある（『厚眞村史』厚眞村　1956）。

周辺の遺跡で、縄文時代後・晩期に相当する遺跡は、豊沢６・７・８・10遺跡がある。いずれも、当麻内川の支流沿いに位置する（図Ⅱ－３）。

（2）富里１遺跡

遺跡は、厚真川右岸の段丘上に位置する。調査前の現況は畑地であった（図Ⅱ－３）。

遺跡名の「富里」は、昭和32年の字名地番改正以前は、「トニカ」（当仁加、富仁加）であった。厚眞村史によると「トンニカ」（かしわの林の・かみ）とある。

遺跡の背後にある標高164mの山は、アイヌ語地名で「コムニヌプリ」と呼ばれる。地元では楢山と呼ばれ、麓には、現在は廃校となったが、楢山小学校があった。明治29年製版の『早来』５万分の１地形図には「コムヌプリ」の記載があり、厚眞村史には、「コムシヌプリ」（ドングリの･群在する･山）とある。遺跡付近の様子は、明治末期頃は「厚真川の川縁は、ヤチダモやアカダモの密林～中略～トニカの高台はナラノキ林」（池田・亀井　1978）、開拓初期の頃は「巨木鬱蒼の森林と、茅葦叢然の原野」（厚眞村1956）との記録がある。また、安政５年に松浦武四郎がこの地を訪れ２泊しており、「戊午　東部　安都麻志　全」『戊午　東西蝦夷山川地理取調日誌　中』（松浦･秋葉　1985）には「此地槲柏多き」と記述があり、開拓期以前の遺跡周辺、特に河岸段丘上は、ブナ科を主体とする落葉広葉樹が繁茂していたことが想像される。

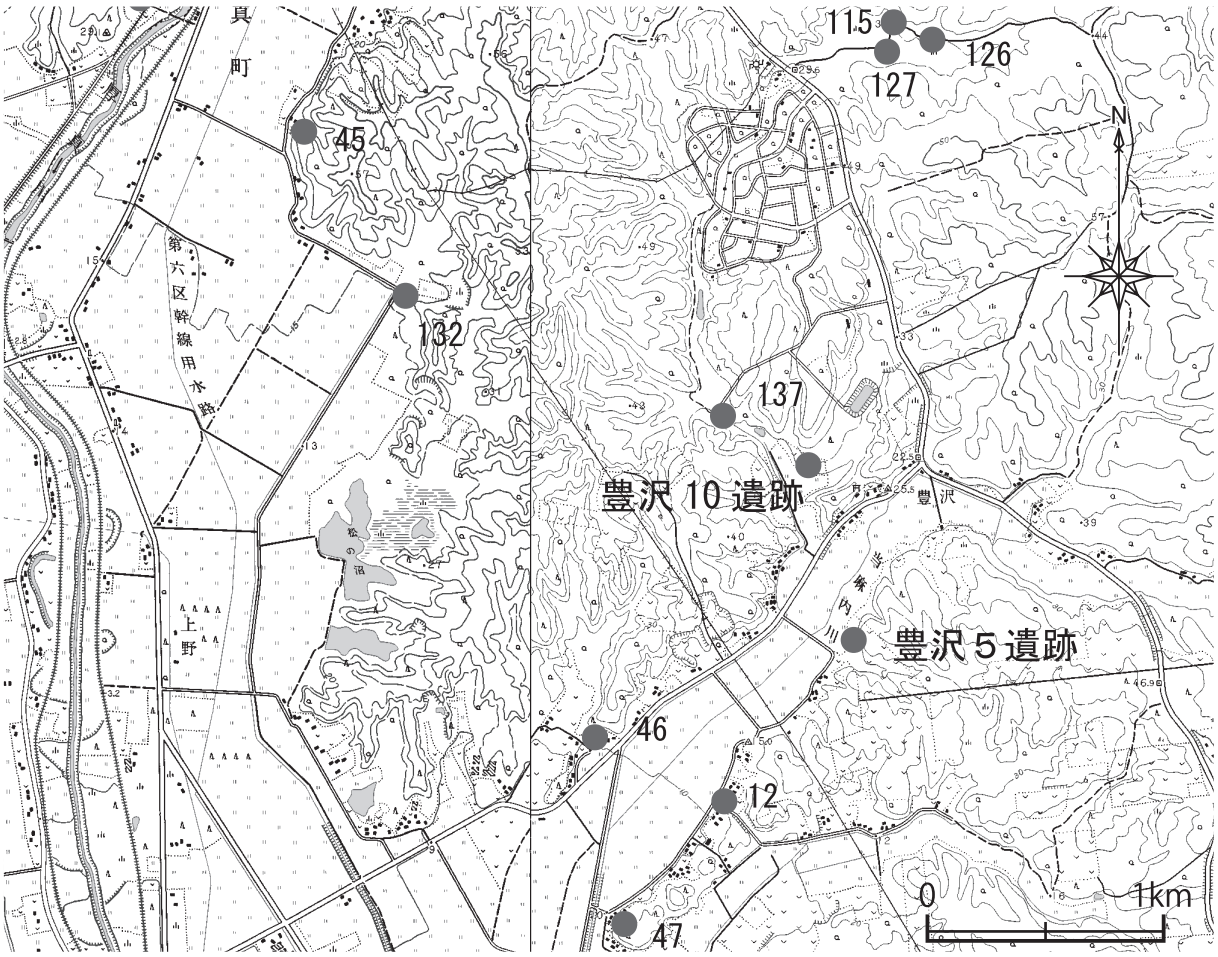
遺跡の周辺では、厚幌導水路建設に伴う発掘調査が行われている。いずれも厚真川の左岸段丘上に位置する遺跡である。富里地区では、ニタップナイ遺跡でアイヌ文化期の平地住居跡、焼土、灰の集

国土地理院発行20万分の１地勢図「夕張岳」「浦河」「札幌」「苫小牧」に加筆

図Ⅱ－１　遺跡の位置

室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所作成の図を加工、加筆

図Ⅱ－２　豊沢５遺跡と周辺の地形



国土地理院発行数値地図25000「札幌」に加筆

図Ⅱ－３　豊沢５遺跡、豊沢10遺跡周辺の遺跡

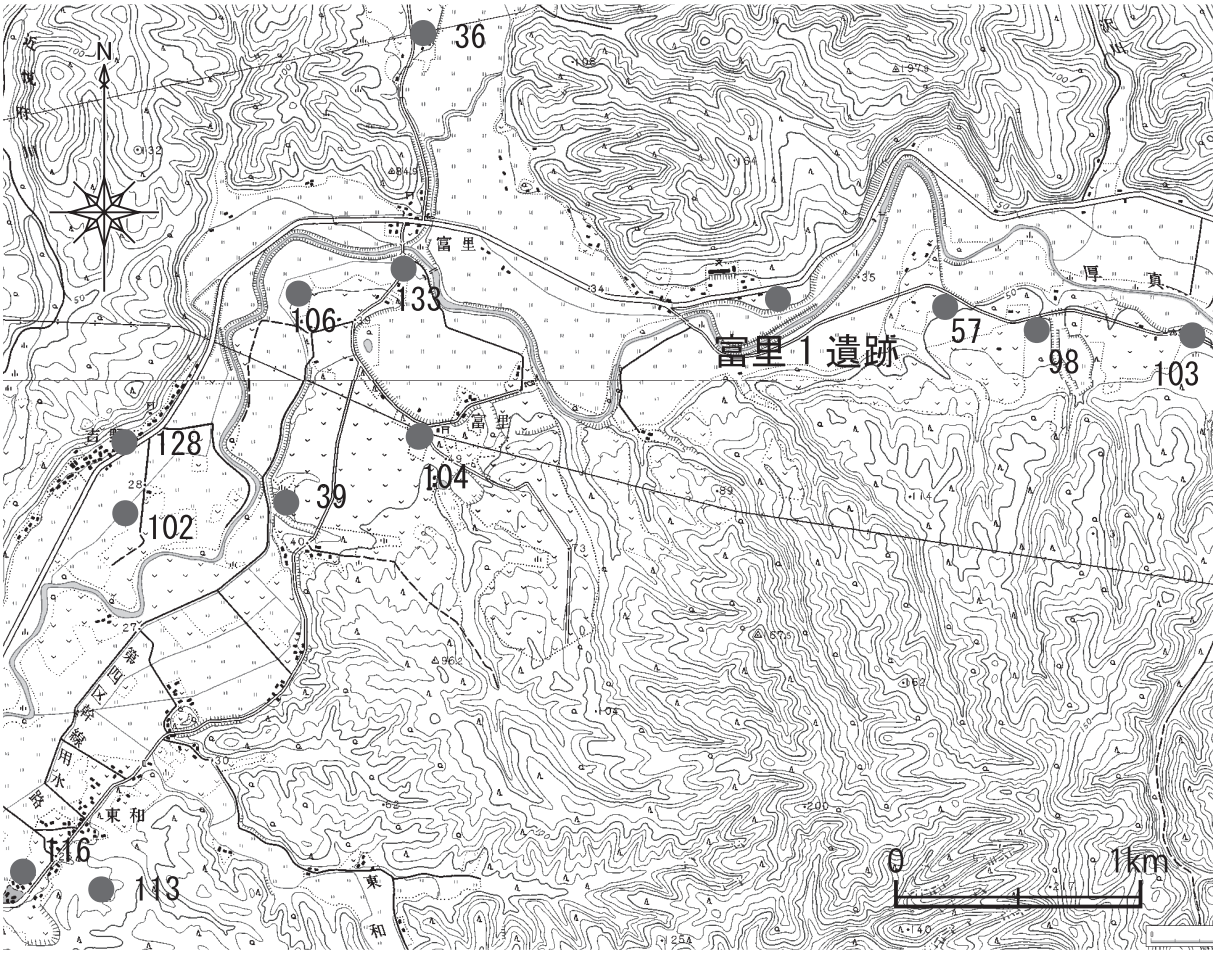
表Ⅱ－１　豊沢５・豊沢10遺跡周辺の遺跡

包蔵地登載番号（J-13）	遺跡名	種別	時代	立地	標高	調査
12	豊沢１遺跡	遺物包含地	続縄文	丘陵	30m	
45	美里１遺跡	遺物包含地	縄文中期	厚真川左岸段丘上	30～35m	
46	豊沢２遺跡	遺物包含地	擦文	丘陵裾部	15～20m	
47	豊沢３遺跡	遺物包含地	続縄文		15m	
109	**豊沢５遺跡**	**遺物包含地**	**縄文後期**	**当麻内川左岸段丘上**	**19～22m**	**H28(2016)道埋文**
115	豊沢６遺跡	遺物包含地	縄文早・中・後期	当麻内川支流右岸舌状台地裾緩斜面	34～40m	
126	豊沢７遺跡	遺物包含地	縄文中・後期	当麻内川に面する斜面およびテラス状台地	40～70m	
127	豊沢８遺跡	遺物包含地	縄文後期	当麻内川支流に面する微高地	33～34m	
132	上野１遺跡	遺物包含地	縄文中期	厚真川左岸独立丘頂部	40m	
137	豊沢９遺跡	遺物包含地	縄文		20～25m	
139	**豊沢10遺跡**	**遺物包含地**	**縄文晩期**	**当麻内川支流、平井の沢川左岸段丘上**	**20m**	**H29(2017)道埋文**

＊道教委HP「北の遺跡案内」に追加

中、獣骨の集中、杭列、擦文文化期の平地住居跡、竪穴住居跡、土坑、焼土、縄文時代の竪穴住居跡、小土坑、Tピットなどが見つかっている。富里２遺跡でアイヌ文化期の住居跡、建物跡、焼土、灰や獣骨の集中、続縄文･擦文文化期の土坑、焼土、溝状遺構、縄文時代のTピットなどが見つかっている。富里３遺跡でアイヌ文化期の灰の集中と漆の椀が出土している。

幌内地区では、幌内５遺跡で縄文時代前期の土地削平に伴う「排土層」が確認されている。幌内６遺跡でアイヌ文化期の平地住居跡と擦文土器が出土している。幌内７遺跡でアイヌ文化期の平地住居跡、縄文時代の土坑、焼土、Tピットなどが見つかっている。出土した土器は、擦文文化期、続縄文



国土地理院発行数値地図25000「札幌」に加筆

図Ⅱ－４　富里１遺跡周辺の遺跡

表Ⅱ－２　富里１遺跡周辺の遺跡

包蔵地登載番号（J-13）	遺跡名	種別	時代	立地	標高	調査
36	高丘９遺跡	遺物包含地	続縄文	河岸段丘	35～40m	
37	**富里１遺跡**	**遺物包含地**	**縄文早期～晩期、続縄文、擦文、アイヌ**	**厚真川右岸段丘**	**45m**	**H27・28(2015・2016)町教委 H28(2016)道埋文**
39	チコマナイ９遺跡	遺物包含地	縄文	河岸段丘	30～40m	
57	幌内５遺跡	墳墓	縄文前期、アイヌ	厚真川左岸段丘	58～62m	H21(2009)町教委
98	幌内６遺跡	遺物包含地	縄文後期、擦文、アイヌ	厚真川左岸段丘	50m	H27(2015)道埋文
102	吉野１遺跡	遺物包含地	縄文早・中・後期	厚真川右岸自然堤防	25m	
103	幌内７遺跡	遺物包含地	縄文晩期、擦文	厚真川左岸段丘	57m	H20(2008)町教委 H27・28(2015・2016)道埋文
104	ニタップナイ遺跡	遺物包含地	縄文前期～晩期、続縄文、擦文、アイヌ	河岸段丘	46m	H19・20(2007・2008)町教委
106	富里２遺跡	遺物包含地	縄文後・晩期擦文、アイヌ	厚真川左岸段丘	32～35m	H21(2009)町教委
113	東和２遺跡	遺物包含地	縄文晩期	厚真川左岸台地	30m	
116	東和３遺跡	遺物包含地	縄文早期	山地性丘陵	43m	
128	ヲイカルマイ遺跡	遺物包含地	近世	丘陵裾微高地	30m	H23(2011)町教委
133	富里３遺跡	遺物包含地	縄文中・晩期	厚真川左岸段丘	34m	H27(2015)道埋文

＊道教委HP「北の遺跡案内」に追加

時代、縄文時代前期、晩期のものが多い。

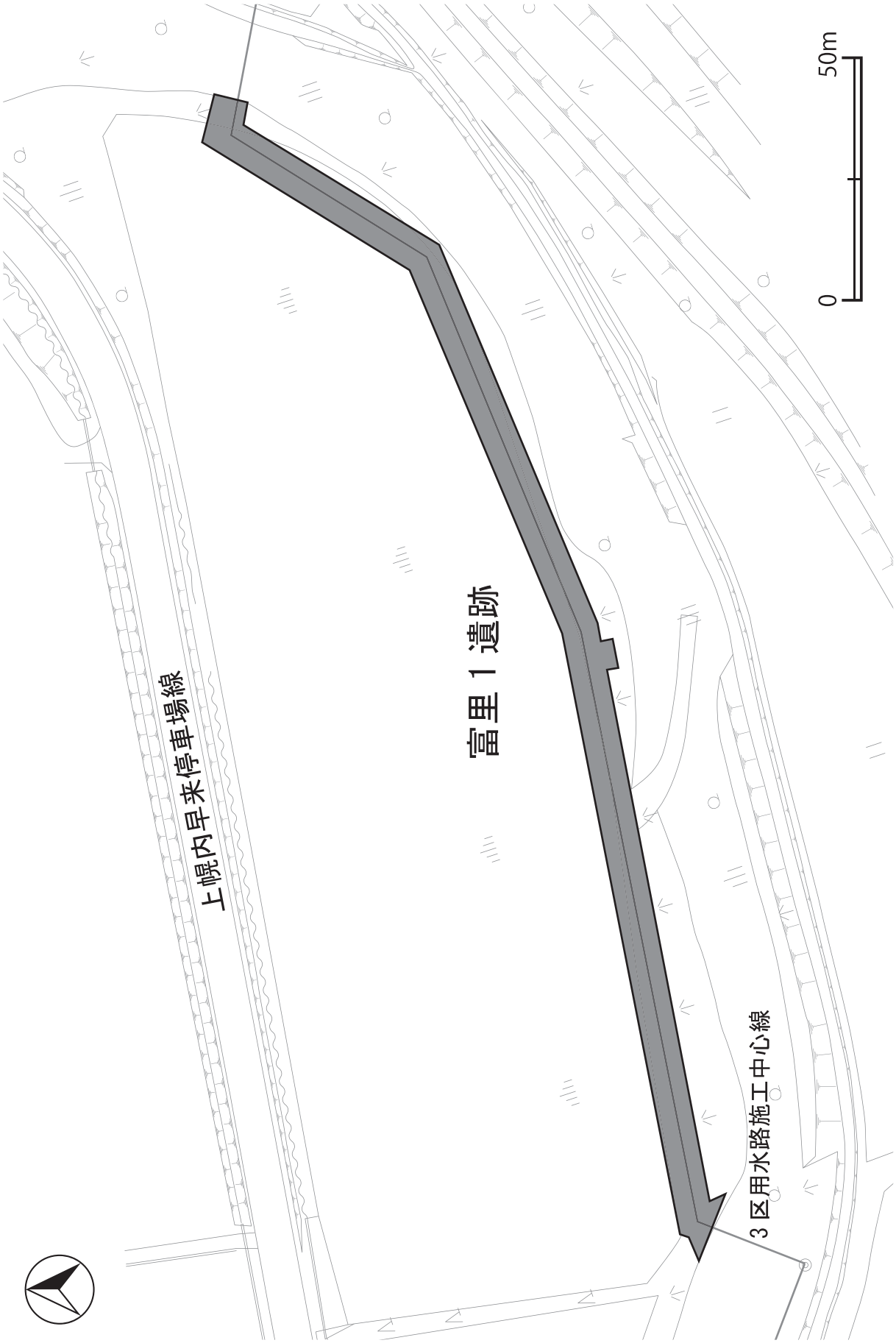
（３）豊沢10遺跡

遺跡は、当麻内川に流入する小河川（平井の沢）の左岸段丘上に位置する。

周辺の遺跡は、豊沢５遺跡の項を参照。

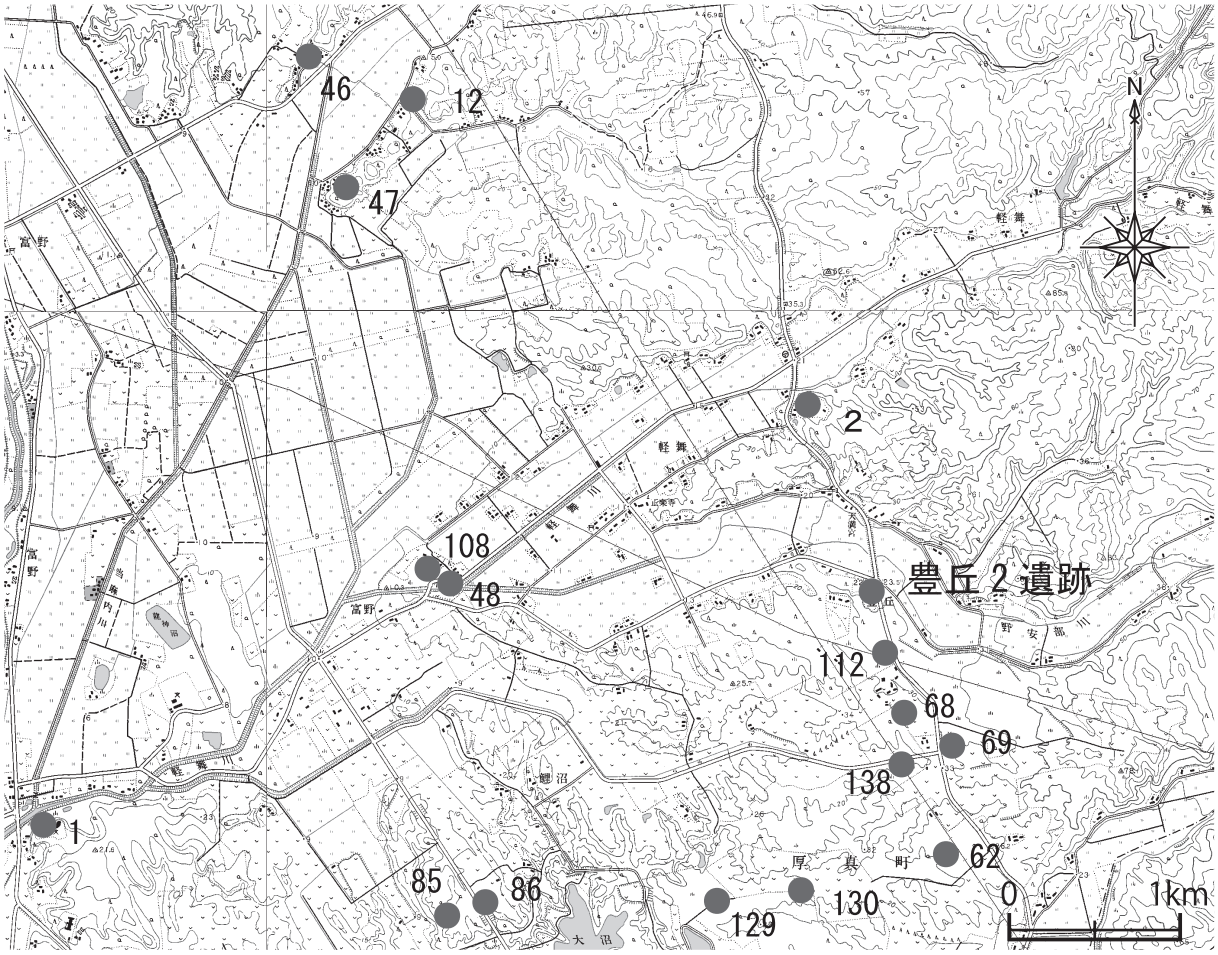
（４）豊丘２遺跡

遺跡は、野安部川左岸の緩斜面から段丘上にかけて位置する。



室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所作成の図を加工、加筆

図Ⅱ－５　富里１遺跡と周辺の地形



国土地理院発行数値地図25000「札幌」「室蘭」に加筆

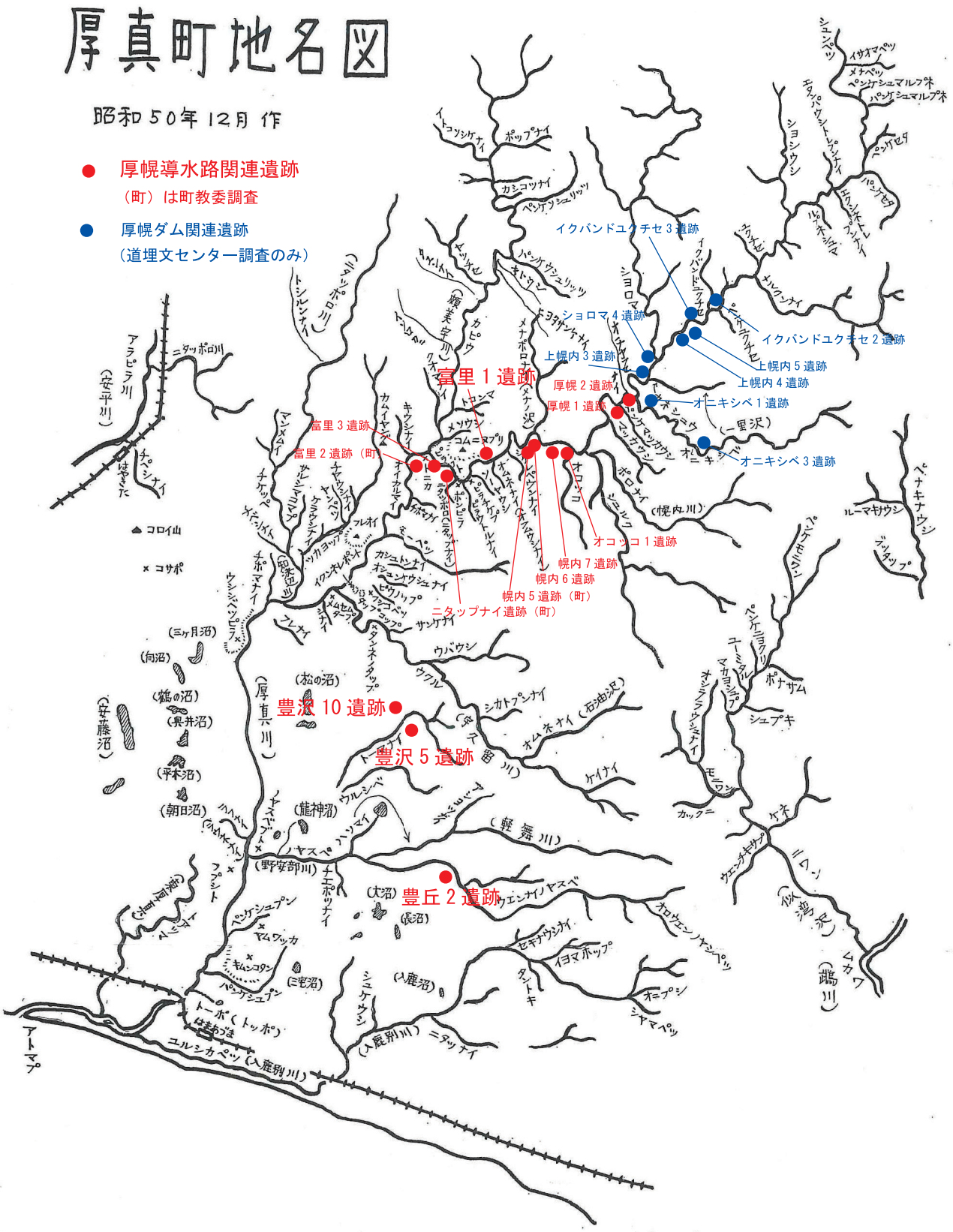
図Ⅱ－６　豊丘２遺跡周辺の遺跡

表Ⅱ－３　豊丘２遺跡周辺の遺跡

包蔵地登載番号（J-13）	遺跡名	種別	時代	立地	標高	調査年度
1	上厚真遺跡	遺物包含地	縄文中期、続縄文、擦文	厚真川と野安部川の合流点河岸段丘上	10～18m	
2	軽舞遺跡	遺物包含地	縄文中期、続縄文	丘陵	25～28m	H24(2012)町教委
12	豊沢１遺跡	遺物包含地	続縄文	丘陵	30m	
46	豊沢２遺跡	遺物包含地	擦文	丘陵裾部	15～20m	
47	豊沢３遺跡	遺物包含地	続縄文		15m	
48	鯉沼１遺跡	遺物包含地	縄文		10m	
62	鹿沼４遺跡	遺物包含地	縄文	丘陵斜面	15m	
68	鯉沼２遺跡	溝穴遺構	縄文	火山灰大地を開析した涸沢の沢頭付近	30m	
69	豊丘遺跡	遺物包含地	縄文前・中・後期	開析の進んだ段丘から更新世末火山灰大地への移行部、湧水点付近	32m	
85	鯉沼３遺跡	集落跡	縄文前・中・後期	北側に伸びる台地（尾根上）と樹枝状に開析する沢地形	14～18m	
86	鯉沼４遺跡	遺物包含地	縄文後期	野安部川・入鹿別川沿いの氾濫原に挟まれた台地上	18m	
108	軽舞２遺跡	遺物包含地	縄文前期、続縄文	旧軽舞川に面した段丘上	９～11m	
111	**豊丘２遺跡**	**遺物包含地**	**縄文早期**	**野安部川左岸台地（低位）**	**25～30m**	**H29(2017)道埋文**
112	豊丘３遺跡	遺物包含地	縄文中期	野安部川左岸台地	約30m	
129	長沼１遺跡	遺物包含地	縄文早期	長沼東岸の微高地	20m	
130	長沼２遺跡	溝穴遺構	縄文	長沼東岸の低丘陵地	20m	
138	鯉沼５遺跡	溝穴遺構	縄文	無名沢・沖積地に突出した低位段丘面	15～16m	

＊道教委HP「北の遺跡案内」に追加

周辺の遺跡は、軽舞川や野安部川の段丘上や小河川に開析された沢頭や湧水点付近、大沼や長沼付近に多い。縄文時代早期に相当する遺跡は少ない。　（村田）



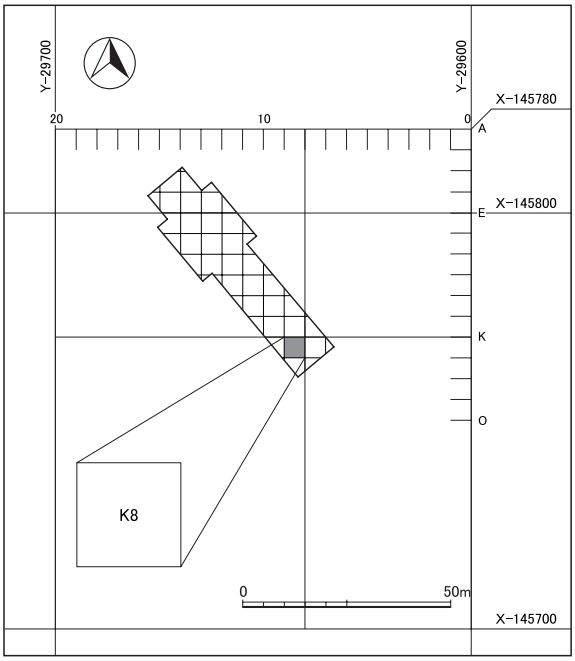
厚真の旧地名を尋ねて　池田・亀井 1976「厚真町地名図」に加筆

図Ⅱ－７　厚真町の旧地名と遺跡の位置

Ⅲ章　豊沢５遺跡

１　発掘区の設定

発掘区は世界測地系（平面直角座標ＸⅡ系）を使用した。起点をＸ－145780、Ｙ－29600として、調査区を覆うように５ｍの方眼を設定した。X軸にアルファベットを、Y軸に数字を与え、起点をそれぞれA、０とし、X軸は南にA、B、C…、Y軸は西に向かい０、１、２、３…と割り付けた。調査区はグリッドの交点で示され、北に向かい右上にあたる杭がそのグリッドの名称としている（図Ⅲ－１）。例えばアミで記されたグリッドはK８となる。



図Ⅲ-1　発掘区設定図

２　調査の方法

調査区の現況は畑であり、調査区は全面に耕作の攪乱を受けていた。この耕作による攪乱層、および樽前火山灰b層（Ta-b）、から樽前火山灰c層（Ta-c）までをバックフォーで除去することから調査を行った。調査区は北西側を流れる当麻内川に向かう緩斜面となっており、その斜面に沿いTa-bが残存していた。Ta-b下位の黒褐色土、いわゆるⅢ層は調査対象ではなかったが、バックフォーを慎重に進め遺構、遺物の確認を行った。Ⅲ層の層厚は10㎝前後と発達しておらず、遺物も出土しなかった。

Ta-cより下位の黒褐色土は遺物包含層である。これをⅤ層とし人力により遺構確認、包含層調査を行った。樽前火山灰d層（Ta-d）まで掘り下げ、上面で再び遺構確認を行い、植生の影響とみられる黒褐色土の落ち込みや風倒木などの自然攪乱層を掘り下げて調査を終了した。

３　遺物整理の方法

（１）図面

遺構、有意な遺物の出土状況、表土除去後と調査終了時に図面を作成した。遺構は原則縮尺20分の１で平面図、断面図を作成した。これらは調整して素図を作成し、素図に墨入れをしたものを報告書の版下としている。

（２）写真

発掘現場での撮影はブローニサイズのカメラを主とし、デジタルカメラを整理用に用いた。主に撮影対象としたものは、遺構、遺構の遺物出土状況である。

撮影に用いた機材はMamiya社製RZ67PROⅡである。フィルムは、富士フィルム社　フジPROVIA100F、NEOPAN　ACROS100を使用した。

室内の撮影はデジタルカメラ、シグマDP３を用いた。俯瞰撮影にあたってはトヨ・無影撮影台を使用した。露出計はセコニック社製L-408、ストロボはコメット社製CB-2400a、CLX-25miniHである。

（３）遺物

一次整理：出土した遺物は、水洗ののち、土器、石器にわけ、分類を行った。分類された遺物は、それぞれ遺物カードを付し、遺構毎、グリッドごと番号を記して遺物番号とした。この遺物カードの情報をパソコン（マイクロソフト社、エクセル）に入力し、遺物点数の集計を行なった。出土遺物のうち土器に以下のように注記した。

遺構出土遺物	**遺跡名**	**遺構名**	**ハイフン**	**遺物番号**	**層位**
	トヨ５	P-1	-	20	フ２
包含層出土遺物	**遺跡名**	**グリッド**	**ハイフン**	**遺物番号**	**層位**
	トヨ５	C8	-	44	Ⅴ

二次整理：土器は注記の後、接合作業を行なった。石器は分類して掲載遺物を選別した。

（４）収納・保管

本報告に掲載された遺物は、ポリエチレン袋に個別に入れ、掲載番号、掲載図を付し、59×39×15cmのプラスチックコンテナ（サンボックス製　36－２B）に収納した。その他の遺物は報告書名、分類内容を明記し同コンテナに収納した。コンテナには遺跡名、報告書名、分類名、収納番号を記したラベルを貼り、収納台帳を作成した。遺物は報告後、厚真町で保管する。

４　遺物の分類

（１）土器

出土遺物のうち、土器は縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期Ⅲ群、後期Ⅳ群、晩期をⅤ群とし、続く続縄文時代をⅥ群､擦文文化期をⅦ群とした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半（a類）、後半（b類）あるいは、前葉（a類）、中葉（b類）、後葉（c類）に分類した。

Ⅰ群　［縄文時代早期の土器群］＝当調査では出土していない。

Ⅱ群　［縄文時代前期の土器群］＝当調査では出土していない。

Ⅲ群　［縄文時代中期の土器群］＝当調査では出土していない。

Ⅳ群　［縄文時代後期の土器］

a類：余市式に相当するもの

b類：ウサクマイC式、手稲式に相当するもの＝当調査では出土していない

c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里３式に相当するもの＝当調査では出土していない

Ⅴ群　［縄文時代晩期の土器群］

a類：大洞B・BC式に相当・併行するもの。東三川Ⅰ式など。＝当調査では出土していない

b類：大洞C１・C２式に相当・併行するもの。美々３式など。

c類：大洞A・A´式に相当・併行するもの。タンネトウL式など。

Ⅵ群　［続縄文時代の土器群］＝当調査では出土していない

Ⅶ群　［擦文文化期の土器群］＝当調査では出土していない

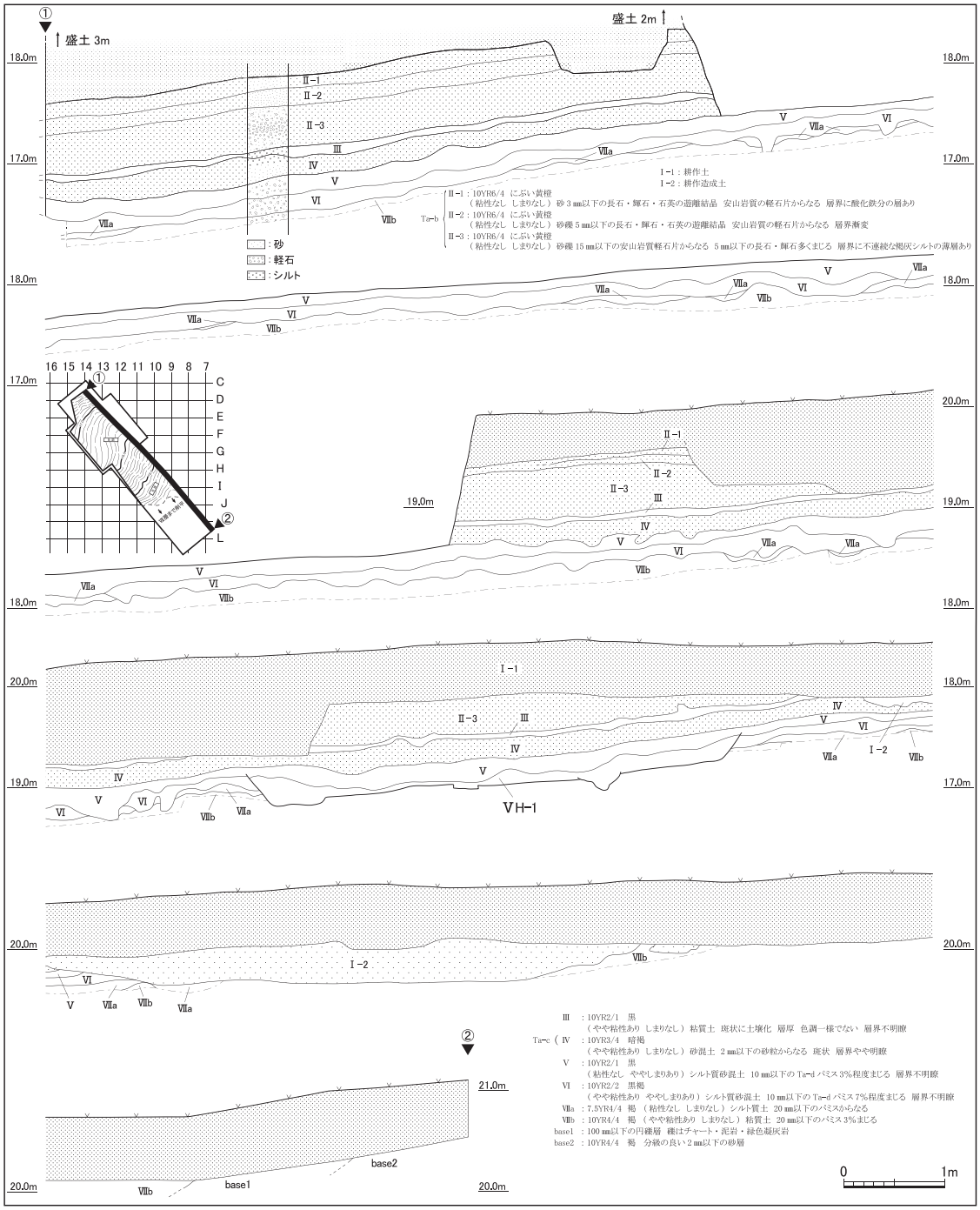
（２）石器等

石器等は、石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石核、原石、たたき石、砥石、加工痕ある礫、礫、礫片に分類した。

5　基本層序

本遺跡の土層は、色調などの特徴から以下のように区分した。

Ⅰ層：耕作土また耕作地造成に伴う攪乱層。Ⅱ層：樽前火山灰b層（1667年降下）。層厚は最大70cm、３つのユニットに分層できる。Ⅲ層：黒色土、層厚10cm前後で不均一。Ⅳ層：樽前火山灰c層。層厚は残りの良い部分で20cm程度である。Ⅴ層：黒色土（遺物包含層）ややシルト質。Ⅵ層：漸移層。Ⅶ層：樽前火山灰d層。シルト質のa層と軽石を多く含む粘土b層に分層した。Ⅶ層下位にbase１、２とした分級の良い砂礫層を確認した。これらは段丘を形成した堆積物とみられるが、両者の先後関係は不明である。調査区長軸で土層断面図を作成している（図Ⅲ－２）。



図Ⅲ－２　調査区土層断面図

６　遺構とその出土遺物

豊沢５遺跡の調査では、竪穴住居跡１軒、土器集中域１か所の遺構を確認している。いずれも調査区中央の緩斜面に位置している。

（１）竪穴住居跡

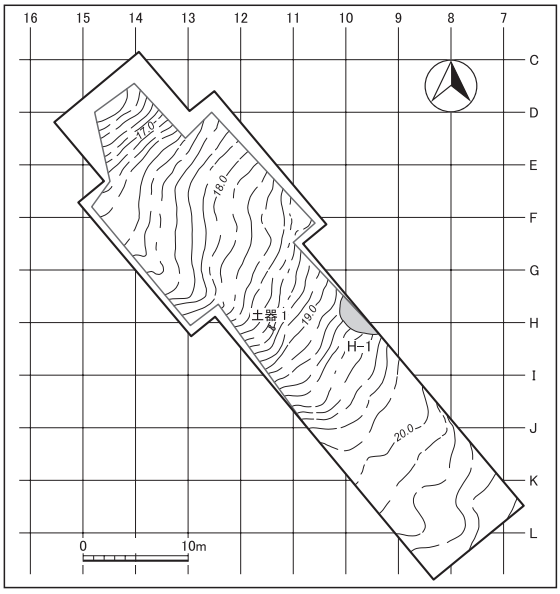
Ｈ－１（図Ⅲ－４、６、表Ⅲ－１、２、図版２、３）

位　　置　Ｇ９・10、Ｈ９・10

規　　模　4.92×(1.66)／4.50×(1.56)／0.32m

平面形態　円形か

確認・調査　調査区中央の北東側に位置する。火山灰除去時にH10杭付近の地形が不自然に平坦であった。調査区北東壁沿いにメインセクション作成のためのトレンチを掘削していたので、H10付近を中心とした遺構の存在を想定し、南西方向にベルトを残してトレンチをⅦ層まで掘削した。その結果、概ね平坦面に対応する壁の緩やかな立ち上がりを確認した。周囲を掘り込み面付近まで掘り下げると落ち込みの輪郭を明瞭に確認できた。平面形は明瞭で、確認できた部分では半月状を呈し、北東方向の調査区外に延長している。このことから住居跡であることがわかった。



図Ⅲ－３　遺構位置図

ベルトを残して覆土を掘り下げた。掘り下げにあたっては床面近くの遺物を残しながら行った。床面を露出させると南西方向にも明瞭な壁の立ち上がりを確認できた。出土遺物と外形を図化し、床面を精査し柱穴の検出を試みた。結果６基の柱穴を確認した。柱穴はいずれも小規模で、明確な配列を示さない。

遺物出土状況　覆土から黒曜石のフレイク11点、床面からⅣ群a類土器28点、フレイク１点が出土している。床面出土の土器は住居中央よりやや西よりに破片がまとまるが、調査区外に広がるものとみられる。

覆　　土　Ⅴ層自然堆積とみられる黒色土の単層である。

時　　期　床面から出土した土器から、縄文時代後期前葉、余市式の時期とみられる。

掲載遺物　１a、b、２は床面出土のⅣ群a類土器。接合しないが同一個体とみられるものである。口唇と口縁下には厚い貼付帯が巡らされ、口縁下の貼付帯には縄線がつけられている。器面全体にLR、RLの縄文を交互に横位につけることにより、羽状縄文となっている。口唇は角形に整形され、内面は平滑に仕上げられている。胎土には砂粒が含まれる。砂岩、チャート、流紋岩、輝石自形結晶が目立つ。

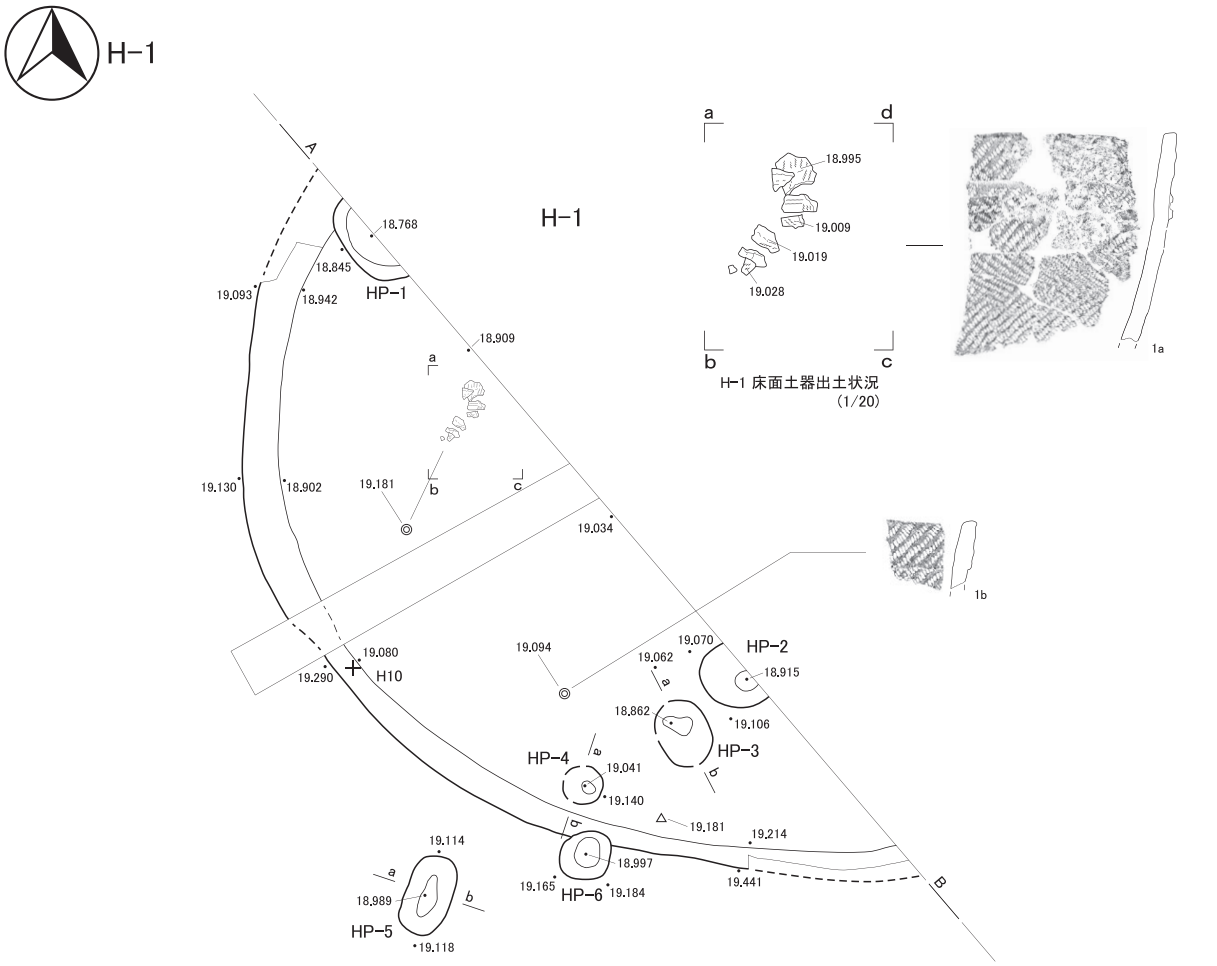
土器集中１（図Ⅲ－５、６、表Ⅲ－１、２、図版３）

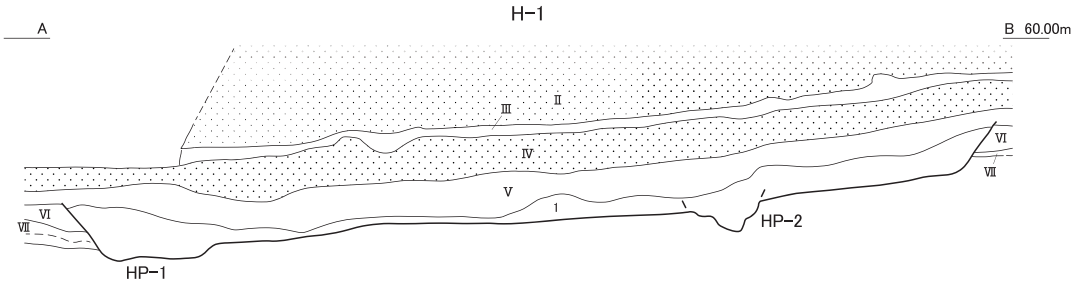
位　　置　Ｈ11区　　**規　　模**　0.69×0.27m

確認・調査　調査区中央の緩斜面に位置する。Ⅴ層上面を精査していたところ、微細な土器片のまとまりを検出した。精査し広がりを確認して記録を作成した。伴う遺構の有無を確認するため、トレンチを設定してⅦ層まで掘り下げた。落ち込み等の層位の変化がないため、土器集中として取り上げた。破片106点は一個体の浅鉢とみられ、口縁部の破片はなく、全て胴部以下のものである。

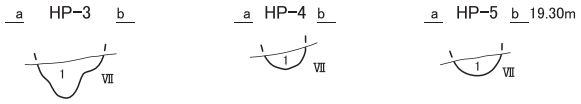
時　　期　出土遺物から、縄文時代晩期後葉のものとみられる。

掲載遺物　６a、bはⅤ群c類土器。接合しないが同一個体である。aは胴部、bは底部の屈曲部。やや細かなLR斜行縄文が全面につけられる。底部は弱く丸みを帯び、胴部の立ち上がりはやや急角度である。内面は平滑に調整される。胎土は若干砂粒が混じる。チャート、泥岩が目立つ。





1　10YR1.7/1　黒（粘性なし　しまりなし）20 ㎜以下の Ta-d パミス 7%まじる　層界やや画然

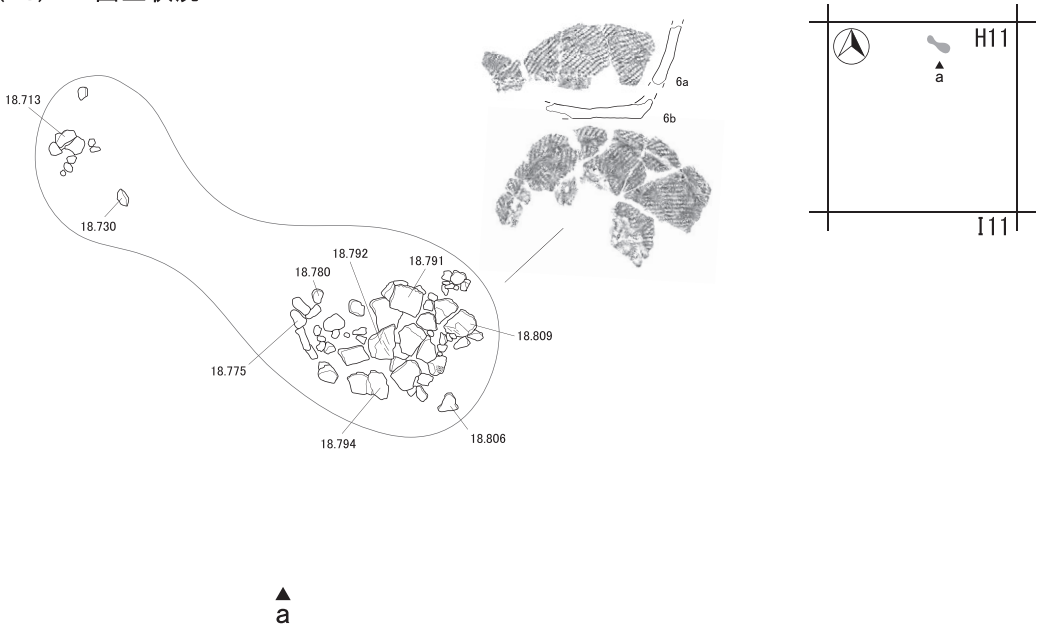


1　10YR1.7/1　黒（粘性なし　しまりなし）砂質シルト　Ta-d パミス 3%まじる　層界漸変

0　(1:40)　1m

図Ⅲ－４　住居跡H－１

土器集中(PS)-1 出土状況



図Ⅲ－５　土器集中１

７　包含層出土の遺物

（１）土器（図Ⅲ－６、表Ⅲ－２　図版４）

包含層から出土した土器は、試掘調査出土の土器も含め59点である。内訳はⅤ群土器が５点、Ⅳ群a類土器が54点である。

Ⅳ群a類土器（図Ⅲ－６－２～５、表Ⅲ－３、図版４）

拓影５点を図示した。全て余市式に相当するものとみられる。

２～４は胴部片である。２は貼付帯上に縄線がつくもの。地文は２、３が羽状縄文。４がRL斜行縄文である。３の胎土はやや緻密な胎土で輝石が目立つ。５a、bは試掘調査で出土した資料である。貼付帯による文様帯を持つ深鉢。口縁に無文部を設け、体部に羽状縄文を施したのち、口縁と体部の貼付帯上に縄文が加えられる。口縁の貼付帯の下縁に径８～10mmの円形刺突文が器表面から内面に向けて施文される。一部内面に付瘤を形成している。胎土は粗く、５mm以下のチャート、泥岩、軽石等の砂粒、輝石、石英、長石等の鉱物を多く含むものである。

（２）石器等（図Ⅳ－７～11　表Ⅳ－３　図版４）

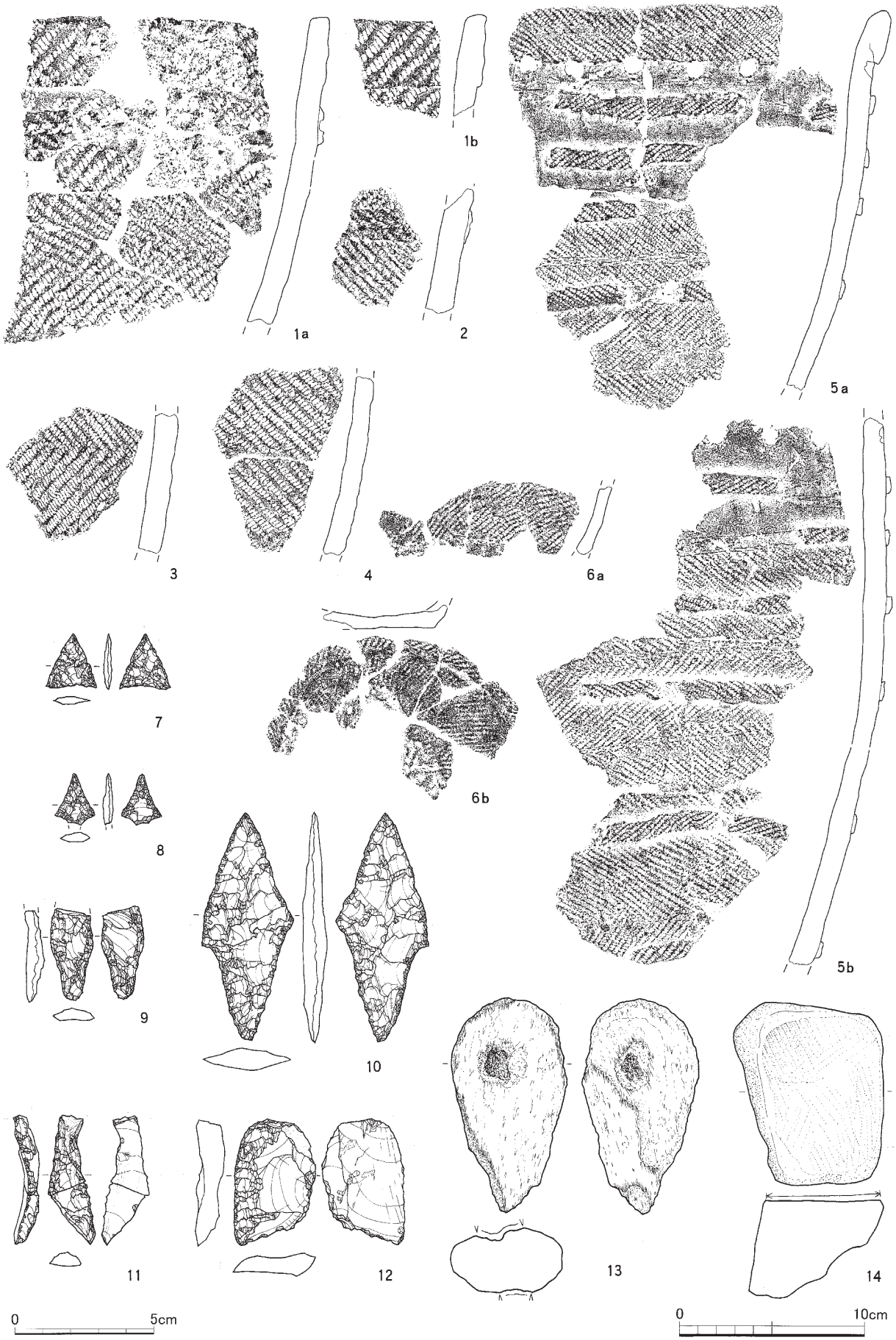
出土グリッドを限定できない表採資料を含め、包含層から出土した石器等の総点数は80点である。うち９点を図示した。

石鏃（図Ⅲ－６－７～９、図版４）

３点出土している。全て図示した。７は表採品であるが、完形で三角形を呈するものである。基部が抉れ入念な細部調整により作出されている。８、９は茎を持つもの。８は基部、９は先端を欠損する。すべて黒曜石製である。

石槍（図Ⅲ－６－10、図版４）

図示した１点のみ出土している。10は茎を持つもの。かえしは明瞭で、入念な細部調整が両面に行われる。黒曜石製。



図Ⅲ－６　遺構・包含層出土遺物

つまみ付きナイフ（図Ⅲ－６－11、図版４）

図示した１点のみ出土している。11は素材剥片の背面両側縁に細部調整され、急角度の刃部が作出されている。つまみ部は明瞭ではない。中央から破断しているが、つまみ部は破断後にも細部調整がなされている。黒曜石製。

スクレイパー（図Ⅲ－６－12、図版４）

図示した１点のみの出土である。縦長気味の素材剥片の左側縁に直線状の刃部が作出されるもの。黒曜石製。

たたき石（図Ⅲ－６－13、図版４）

図示した１点のみ出土している。片麻岩の扁平な棒状礫の表面を敲打するものである。敲打部は図上半の素材礫の最大幅付近、中心よりややずれた位置にあり、明瞭にくぼむ。裏面の同様な位置にも弱い敲打痕がある。

砥石（図Ⅲ－６－14、図版４）

２点出土している。１点図化した。14は砂岩礫の一部が擦られて平滑になるものである。石皿の破片かもしれない。（立田）

表Ⅲ－１　遺構一覧

遺構名	調査区	規模(m) 確認面の長径×短径	規模(m) 床・底面の長径×短径	深さ	確認面	出土遺物	時期	備考
H-1	G9・10、H9・10	4.92×(1.66)	4.50×(1.56)	0.32	V	床・Ⅳ群a類土器28、フレイク1 覆・フレイク11	縄文後期前葉	半円形、調査区外に延びる
PS-1	H11	0.69×0.27	—	—	V	Ⅴ群c類土器106	縄文晩期後葉	浅鉢底部付近の破片

表Ⅲ－２　掲載土器一覧

掲載番号		接合・未接合	遺構・発掘区	層位	遺物番号	点数	分類	備考	特徴	胎土
図Ⅲ-6	1a	接合	H－1	床	1	9	Ⅳa		口縁に厚い貼付帯 異原体による羽状縄文	砂粒多い(Sa・Cha・Rh・自形輝石)
			H－1	床	1	5	Ⅳa	未注記		
			H－1	床	3	2	Ⅳa			
		未接合	H－1	床	1	8	Ⅳa	うち4点接合		
	1b		H－1	床	2	1	Ⅳa			
	2		F13	V	1	1	Ⅳa		貼付帯上に縄線	砂粒やや多い
	3		G11	V	1	1	Ⅳa		異原体による羽状縄文	自形輝石多い
	4	接合	D13	V	1	1	Ⅳa		RL斜行縄文	砂粒多い 自形輝石あり
			D14	V	1	1	Ⅳa			
	5a	接合	BTR-2	V		7	Ⅳa		異原体による羽状縄文 胴部に6条の貼付帯 口縁部無紋面に円形刺突	砂粒多い(MS・Sa・Cha)
	5b	接合	BTR-2	V		9	Ⅳa			
			I10	V	1	1	Ⅳa			
	5	未接合	BTR-2	V		2	Ⅳa			
	6a	接合	PS-1	V	1	2	Ⅴc		浅鉢(下半のみ) LR斜行縄文	砂粒多い (Cha・MS)
			PS-1	V	1	2	Ⅴc	未注記		
			F13	V	1	1	Ⅴc			
	6b	接合	PS-1	V	1	5	Ⅴc			
			PS-1	V	1	7	Ⅴc			
	6	未接合	PS-1	V	1	27	Ⅴc	未注記含む		

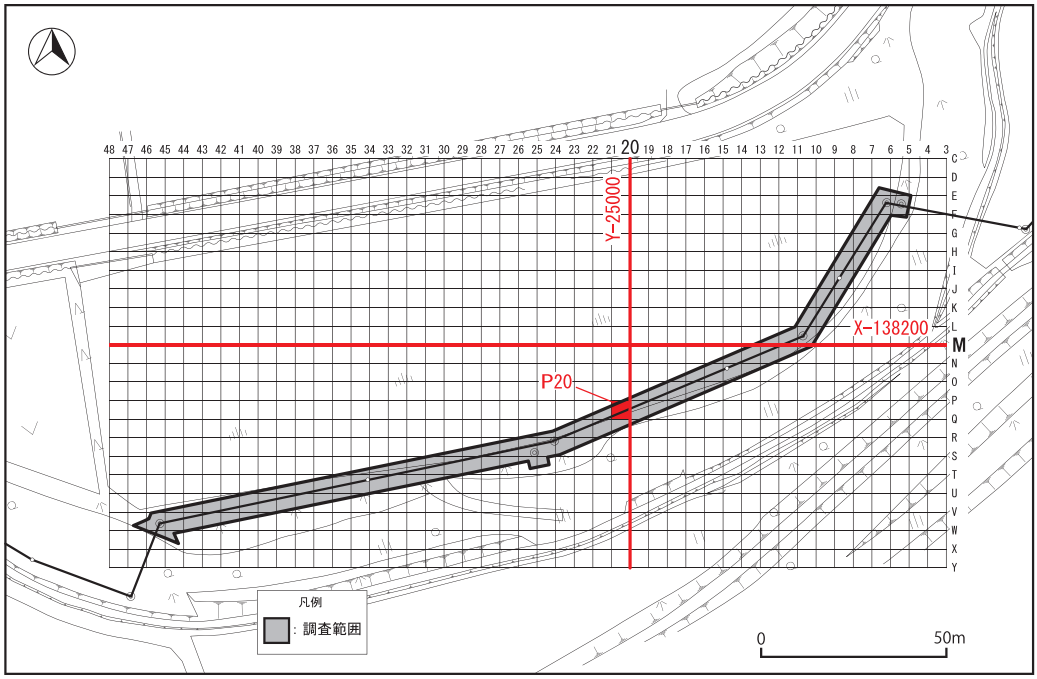
表Ⅲ－３　掲載石器一覧

図番号		発掘区	層位	遺物番号	取り上げ日	遺物名	石材	長さ(cm)	厚さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	備考
図Ⅲ-6	7	表採		－	－	石鏃	Obs	2.0	1.8	0.3	0.6	
	8	G10	V	4	2016/8/4	石鏃	Obs	(3.3)	1.5	0.6	(2.7)	
	9	C14	V		2016/7/15	石鏃	Obs	(1.8)	1.4	0.4	0.5	
	10	H11	V	2	2016/7/29	石槍	Obs	8.2	3.3	0.9	13.6	
	11	F13	V	4	2016/7/22	つまみ付きナイフ	Obs	4.6	1.7	0.9	3.5	
	12	F11	V	1	2016/7/15	スクレイパー	Obs	4.5	2.9	1.1	11.9	
	13	G13	V	1	2016/7/21	たたき石	Gn	11.5	6.2	3.5	356.0	
	14	G11	V	2	2016/8/4	砥石	Sa	9.8	8.0	5.2	445.9	

Ⅳ章　富里１遺跡

１　発掘区の設定

発掘区は世界測地系（平面直角座標ＸⅡ系）を使用した。調査区中央付近に交点をもつ任意の線Ｘ－138200、Ｙ－25000をそれぞれM、20ラインとした。この二線にそれぞれ平行な直線を５m間隔で調査区全体を覆うように設定し、方眼とした。X軸にはアルファベット、Y軸には数字を与え、南、西に向かうと加算するよう割り付けた。調査区はグリッドの交点で示され、北に向かい右上にあたる杭がそのグリッドの名称としている。例えば図Ⅳ－１において朱で記されたグリッドはP20となる。



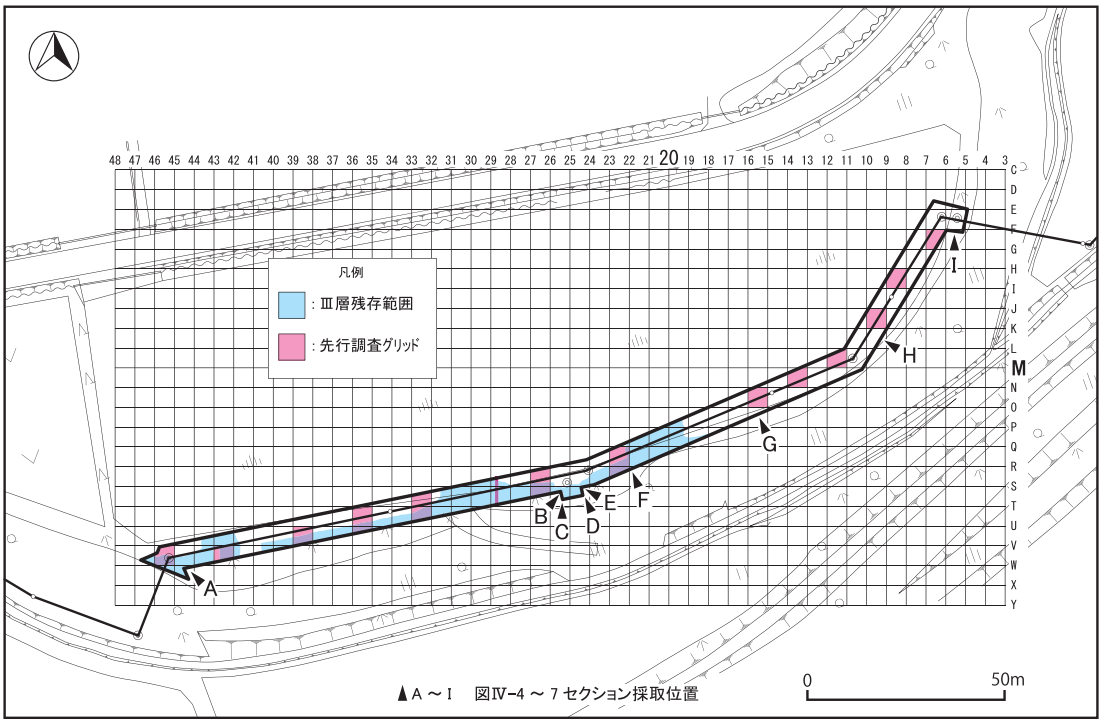
図Ⅳ－１　発掘区設定図

２　調査の方法

調査区の現況は耕作地である。2009年に行った試掘調査の結果から、調査地は耕作によって大きく攪乱を受けていること。全般に包含層の残存状況はよくないものの、調査区を含む南側の段丘崖においては、比較的残りがよいことがわかっていた。12か所の試掘個所では遺構が検出されなかったが、遺物は量が少ないけれども全ての個所で出土している。なお基本土層はⅢ章、豊沢５遺跡と同じ呼称を用いている。

調査にあたり耕作土とⅡ層（Ta-b）をバックフォーで除去した。結果は試掘のとおりに南に向かうに従い下位の層位の残存状況は良好であった。図Ⅳ－２の青アミはⅢ層が残存していた範囲を示している。それ以外ではⅣ層ないしⅤ層が露出した状況であった。さらにほぼ調査区の全面にトレンチャーの痕跡とみられる溝状の攪乱が認められた。調査区の中央、27～30ライン付近には埋没した沢を一条検出している。

調査期間が２か月の予定であったので、詳細な遺構遺物の様相を早期に確認する必要があった。調査の当初から内容把握のための１グリット単位の先行調査を行った。朱アミで示したように調査区全体を覆うよう約10m間隔で行っている（図Ⅳ－２）。



図Ⅳ－２　Ⅲ層残存範囲と先行調査グリッド

先行調査の結果、前述した調査区中央の沢周辺において遺物出土量、遺構数ともに多いことがわかった。このことから、Ⅲ層の調査終了後、当域についてⅤ層をできるだけ人力で調査し、以外の部分についてはバックフォーによりⅤ層を除去し、Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認調査を行うこととした（図Ⅳ－２）。

除去したⅤ層は一部遺物回収を行った。除去にあたって土を北側に積んで移動する形をとっていることから、東西方向の移動は少ないと推定できる。この遺物回収時の出土遺物は、出土地点の数字ラインを記し、層位を「Ⅴ層重機」として取り上げている。

３　遺物整理の方法

（１）図面・写真・遺物・収納・保管

これらについては、Ⅲ章の豊沢５遺跡と同じであるが注記方法が異なっている。富里１遺跡出土の土器は以下のように注記を行った。

遺構出土遺物	**遺跡名**	**遺構名**	**ハイフン**	**遺物番号**	**層位**
	トミ１	Ｐ－１	-	20	フ２
包含層出土遺物	**遺跡名**	**グリッド**	**ハイフン**	**遺物番号**	**層位**
	トミ１	Ｃ８	-	44	Ⅴ

４　遺物の分類

（１）土器

出土遺物のうち、土器は縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期Ⅲ群、後期Ⅳ群、晩期をⅤ群とし、続く続縄文時代をⅥ群､擦文文化期をⅦ群とした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半（a類）、後半（b類）あるいは、前葉（a類）、中葉（b類）、後葉（c類）、もしくは初頭（a類）、

前葉（b類）、後葉（c類）末様（d類）に分類した。なお報告書掲載以外の土器はアルファベットによる細分を行わなかった群もある。

Ⅰ群　［縄文時代早期の土器群］

a類：貝殻腹縁圧痕文・貝殻条痕文のある土器群＝当調査では出土していない

b類：縄文・撚糸文・絡条体圧痕文・貼付文のある土器群　東釧路Ⅳ式・東釧路Ⅳ式・中茶路式・コッタロ式など。

Ⅱ群　［縄文時代前期の土器群］

a類：胎土に繊維を含み厚手で縄文が施された丸底・尖底の土器群　綱文式・静内中野式・加茂川式など。

b類：円筒土器下層式・植苗式に相当する土器群

Ⅲ群　［縄文時代中期の土器群］

a類：円筒土器上層式・厚真１式・萩ヶ岡１式・萩ヶ岡２式に相当するもの

b類：天神山式・柏木川式・北筒式（トコロ６類）に相当するもの

Ⅳ群　［縄文時代後期の土器］

a類：余市式・タプコプ式・入江式に相当するもの

b類：ウサクマイC式・手稲式・鮏澗式に相当するもの

c類：堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当するもの

Ⅴ群　［縄文時代晩期の土器群］

a類：大洞B・BC式に相当・併行するもの　東三川Ⅰ式・上ノ国式など。

b類：大洞C１・C２式に相当・併行するもの　美々３式など。

c類：大洞A・A´式に相当・併行するもの　タンネトウL式など。

Ⅵ群　［続縄文時代の土器群］

a類：砂沢・二枚橋式に相当するもの＝当調査では出土していない

b類：アヨロⅡ群に相当するもの＝当調査では出土していない

c類：後北A・B・C_1式に相当するもの

d類：後北C_2D式、北大Ⅰ・Ⅱ式に相当するもの

Ⅶ群　［擦文文化期の土器群］

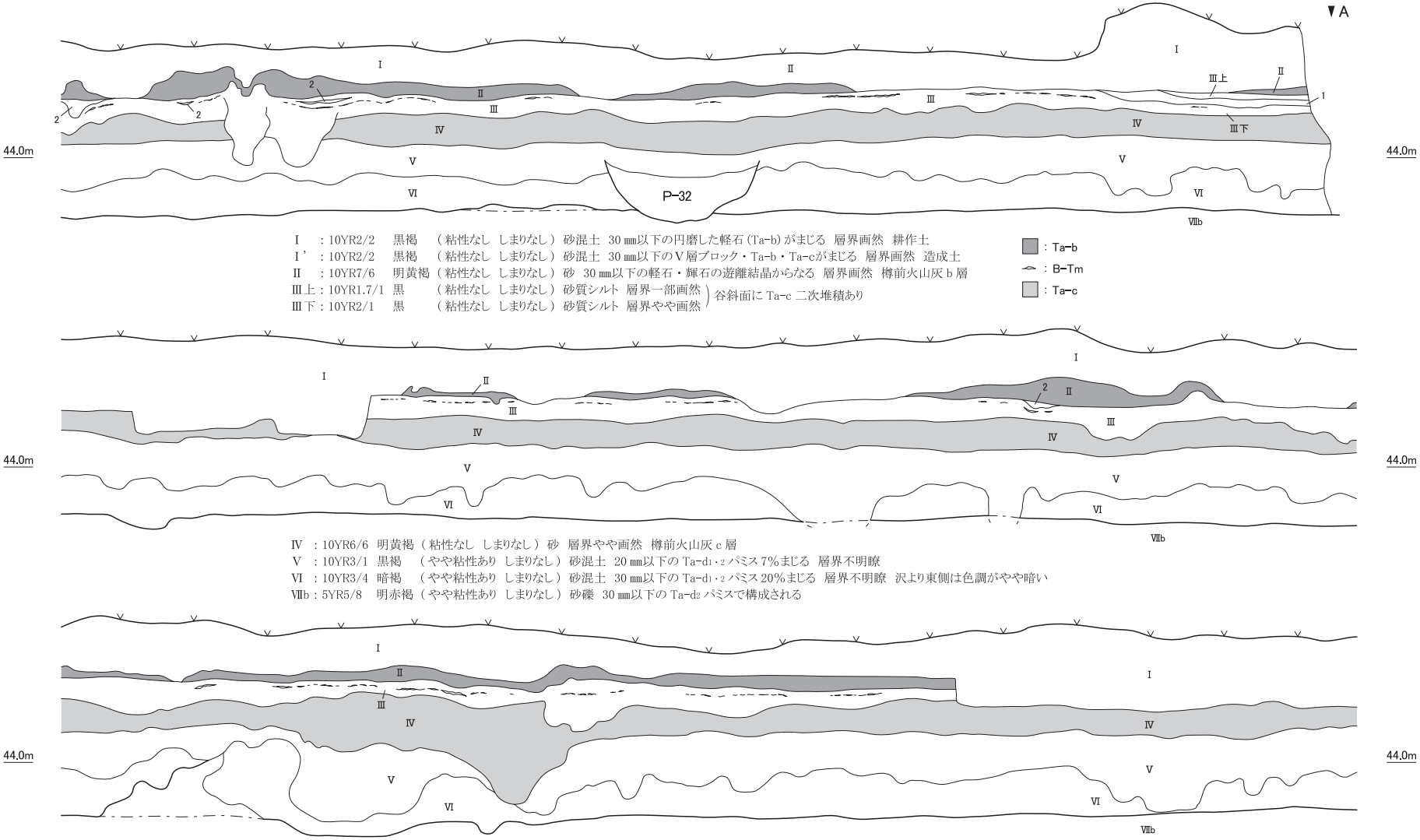
（２）石器等

石器等は、石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石核、原石、たたき石、砥石、加工痕ある礫、礫、礫片に分類した。

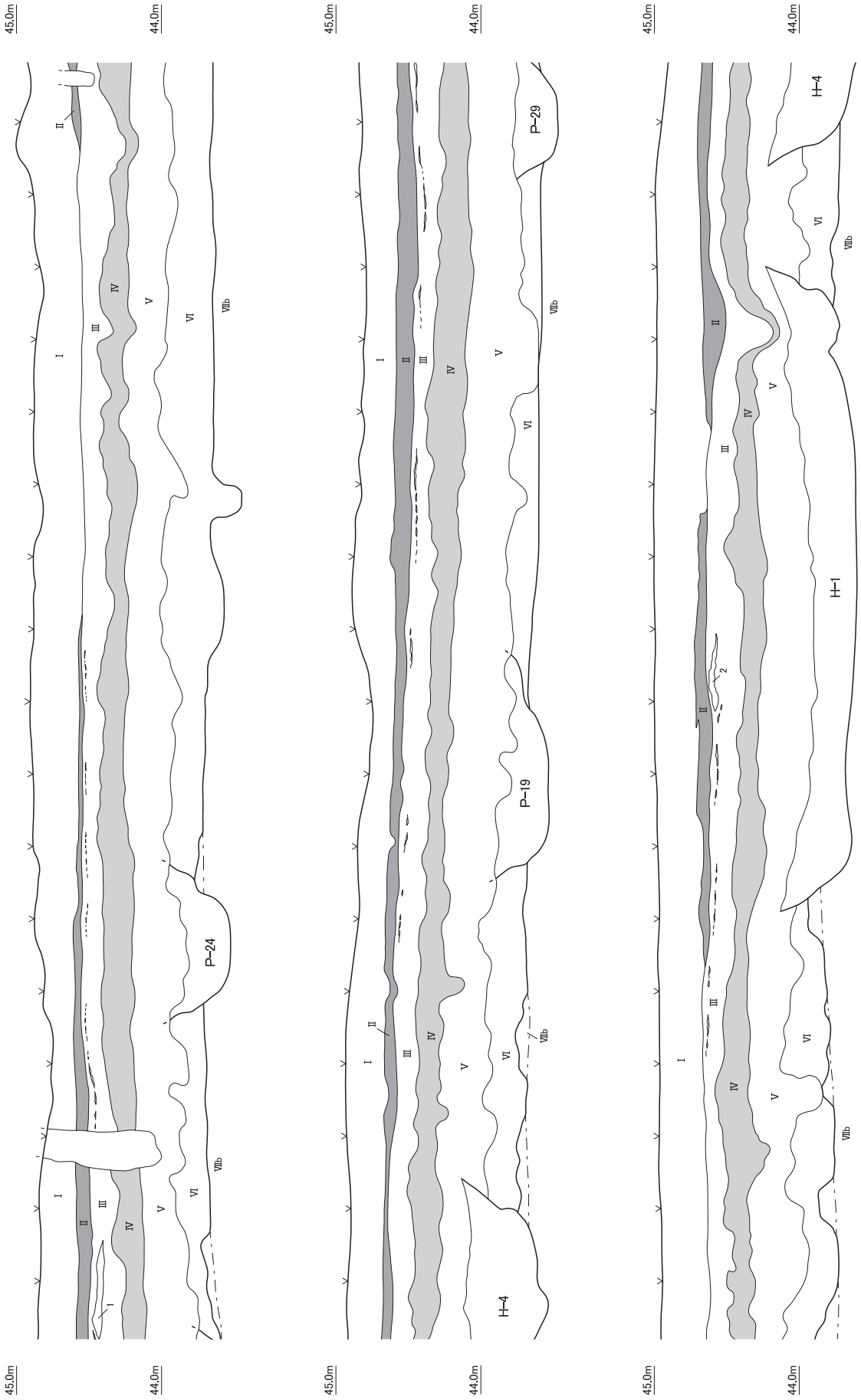
５　基本層序

本遺跡の土層は、豊沢５遺跡にほぼ同じであるが、各層の層厚や特徴、さらに無遺物層であるⅥ、Ⅶ層の状況について若干の相違点がある（図Ⅳ－３～５）。Ⅳ層中に認められるB-Tmテフラの特徴と、Ⅶ層以下の状況について補足する。

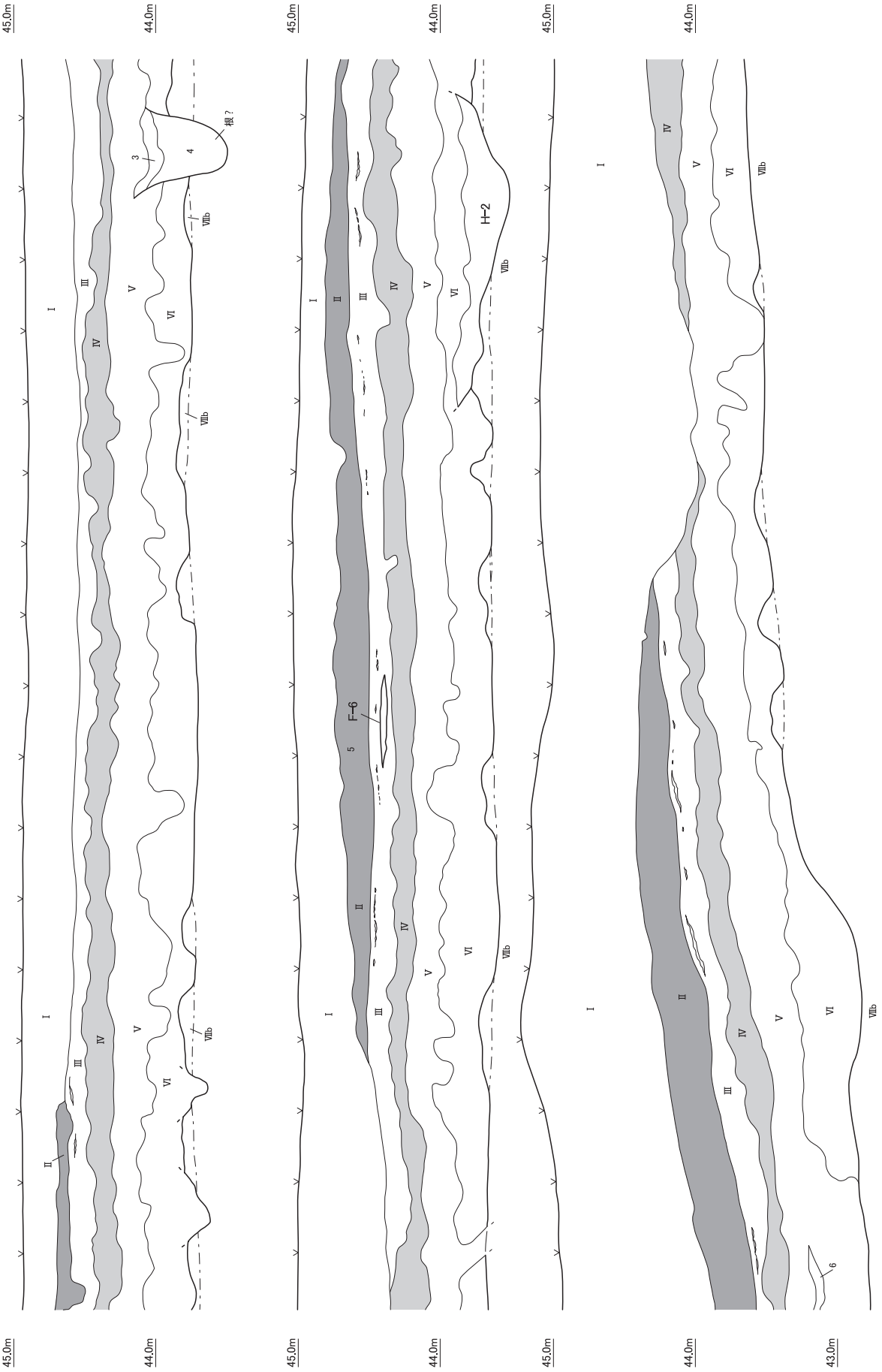
B-Tmは最大厚３㎝、Ⅲ層上位に認められる。沢部では検出されておらず、平坦面に断続的に存在する。Ⅶ層とした樽前ｄテフラは、軽石からなるⅦb層下位の堆積が異なる。H－３柱穴、またTP－１の断面で確認したところによると、Ⅶb層下位には白色粘土層があり、褐色粘土層を挟んでシルト層が、その下位には輝石の単結晶を多量に含む淘汰のよい砂層が検出されている。凍結擾乱の影響もありそれぞれの層厚は一定ではなく、また部分的な確認であるため堆積状況の詳細は明らかにできない。



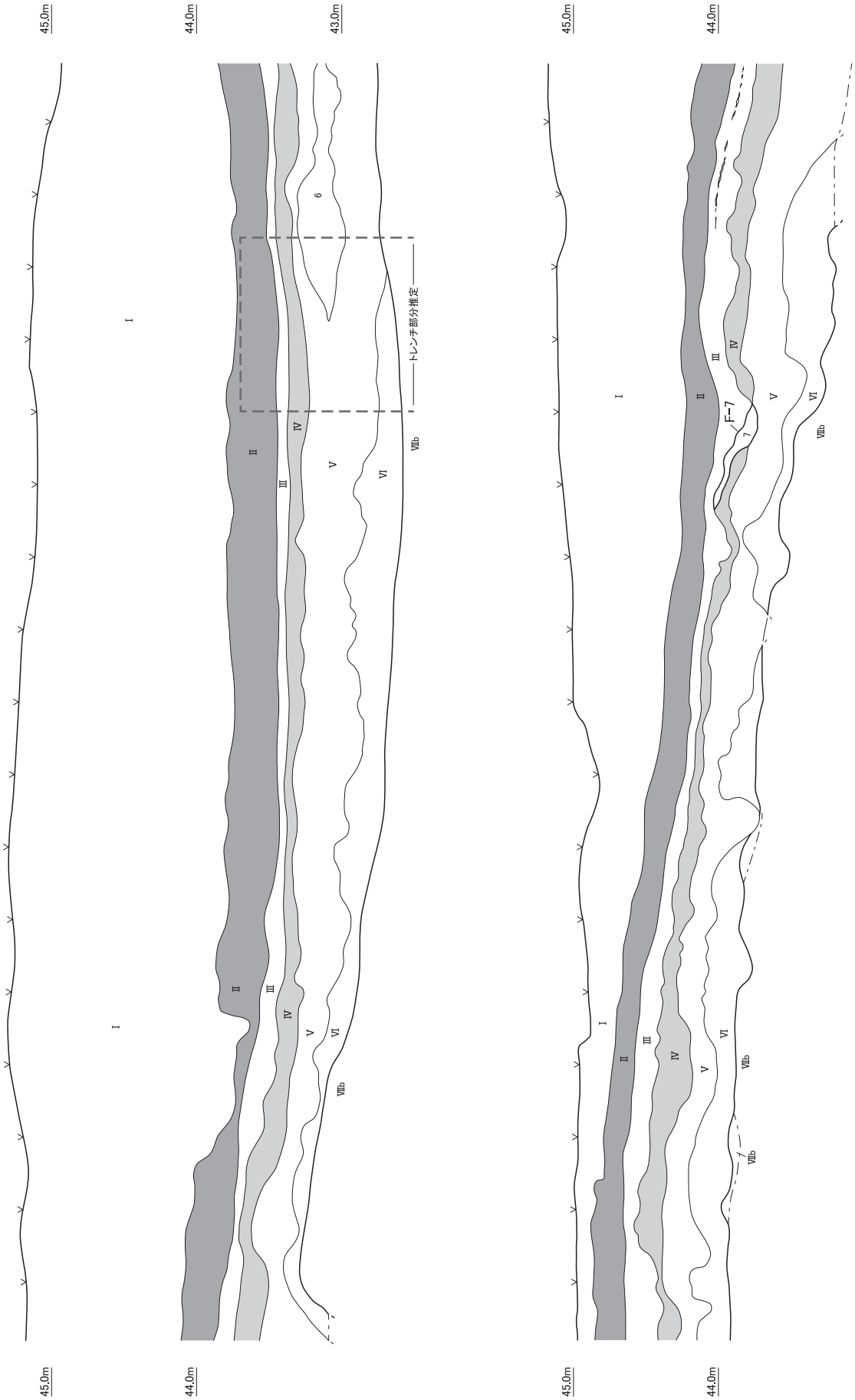
図Ⅳ－3　調査区土層断面図（1）



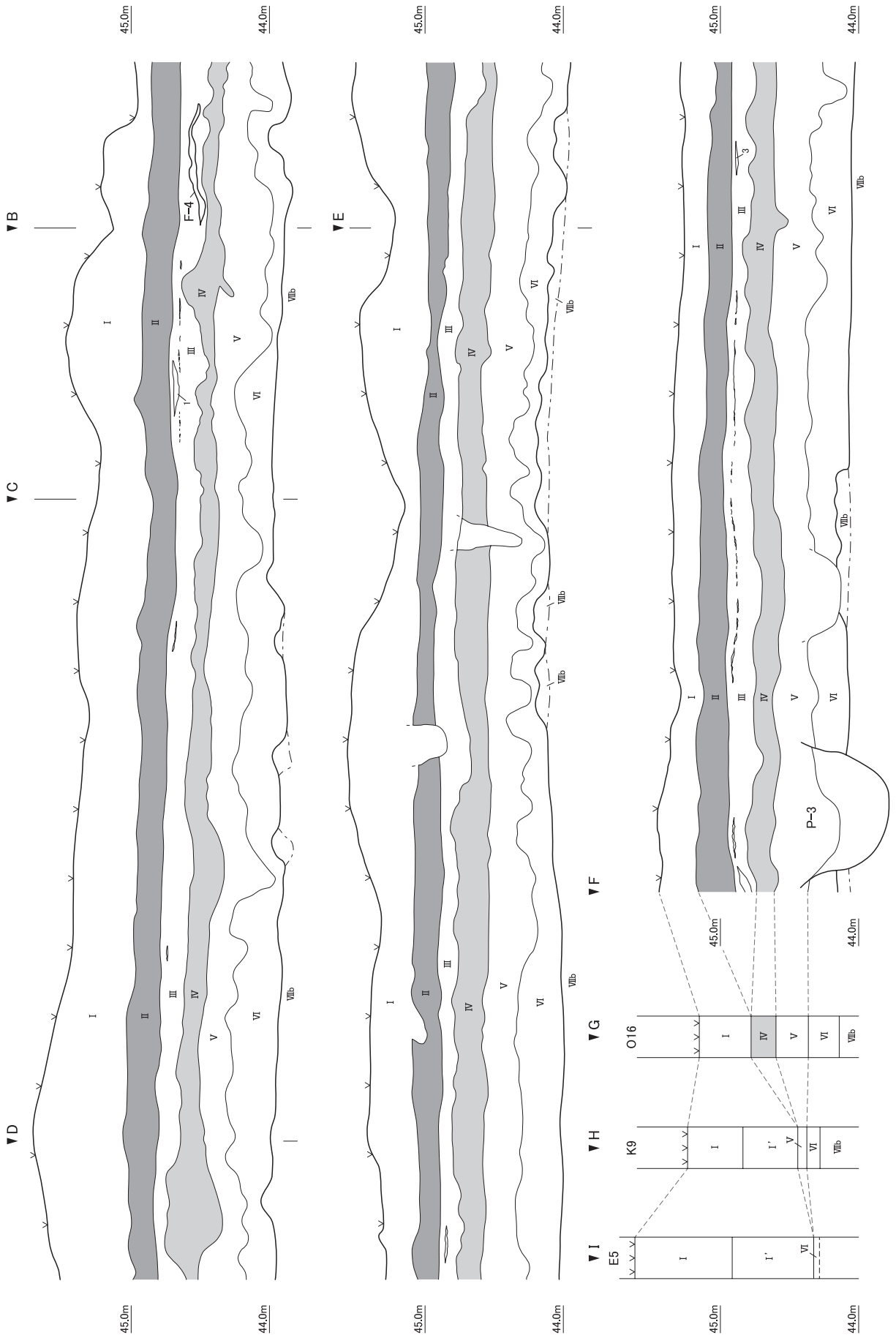
図Ⅳ－４　調査区土層断面図（２）



図Ⅳ－５　調査区土層断面図（３）



図Ⅳ－６　調査区土層断面図（４）



図Ⅳ－７　調査区土層断面図（５）

６　Ⅲ層検出の遺構と出土遺物

Ⅲ層の調査において、焼土７か所、遺物集中域５か所、土器集中域４か所が検出された。焼土のうちF－１、２としたものは、Q、R21区で近接している。調査区外に延長し全体が不明であるが、平面形が長軸のそろった楕円形を呈し、骨片や炭化物を混じる明瞭な焼土であることから、平地住居の炉跡とみられる。SP－１～３はこの住居の柱の可能性がある。遺物集中S－１はこれらに近接しており、この住居に伴うものの可能性が高い。F－３、４、遺物集中S－２～４、土器集中５、６は25ライン南側の調査区張り出し部に集中している。土器集中１、２は調査区西端で検出されている。伴う遺構は検出されないが、当区周辺の壁面では、成因を周囲に求めることができない再堆積層がほぼ同一層位で確認されており、調査区外に住居などの遺構があることが暗示される。焼土F－６、７はⅢ層調査中ではなく土層断面を精査中に検出したものである。そのため平面図を作成することができなかった。

なお、Ⅴ層検出として掲載したP－５、６は、覆土中にⅣ層（Ta-c）が混じることから、Ⅲ層から掘り込まれるものである。類似の土坑は周囲で多く検出されており、便宜上これらについてはⅤ層検出の遺構として一括して扱った。

（１）焼土

Ｆ－１・２（図Ⅳ－10、11、表Ⅳ－１、２、図版６）

位　　置　Q21区　　**規　　模**　0.68×0.48／0.05m（Ｆ－１）

位　　置　Q21・R21区　　**規　　模**　(0.98)×(0.25)／0.11m（Ｆ－２）

確認・調査　調査区中央部の平坦面に位置する。表土除去時に焼土確認した。この焼土をF－１として周囲を精査したところ、F－１の南西側調査区境にも焼土を確認し、これをＦ－２とした。両焼土は骨片を伴いよく焼成している。F－１はトレンチにより、F－２は半截して土層断面を確認した。ともにフローテーションサンプルを採取している。結果ブドウ種子１点、骨片44.9ｇ（鳥綱骨７点を含む。Ⅶ章参照）等が得られた。２か所の焼土は、SP－１～３、遺物集中S－１とともに平地住居を構成していた可能性がある。

時　　期　不明であるが、Ⅱ層との間に黒褐色土が４㎝ほど形成されていること、平地住居の炉跡である可能性を考慮すると、遺跡から出土している擦文文化後期の可能性がある。

掲載遺物　なし。焼土の周囲で出土した遺物の位置を記録した。全て砂岩の礫・礫片である。

Ｓ－１（図Ⅳ－９、表Ⅳ－１、２、図版７）

位　　置　Q・R22区　　**規　　模**　0.92×0.68m

確認・調査　調査区中央部の平坦面に位置する。表土除去中に一部の出土礫を確認していたものである。フレイク１点、棒状礫・円礫19点、礫９点、礫片20点からなる遺物集中である。このうち33点について出土地点を記録し、23点については法量を記録した。平均値は長さが5.8、幅が3.7、厚さ2.5㎝、重さ55.2ｇである。写真を図Ⅳ－11に示した。

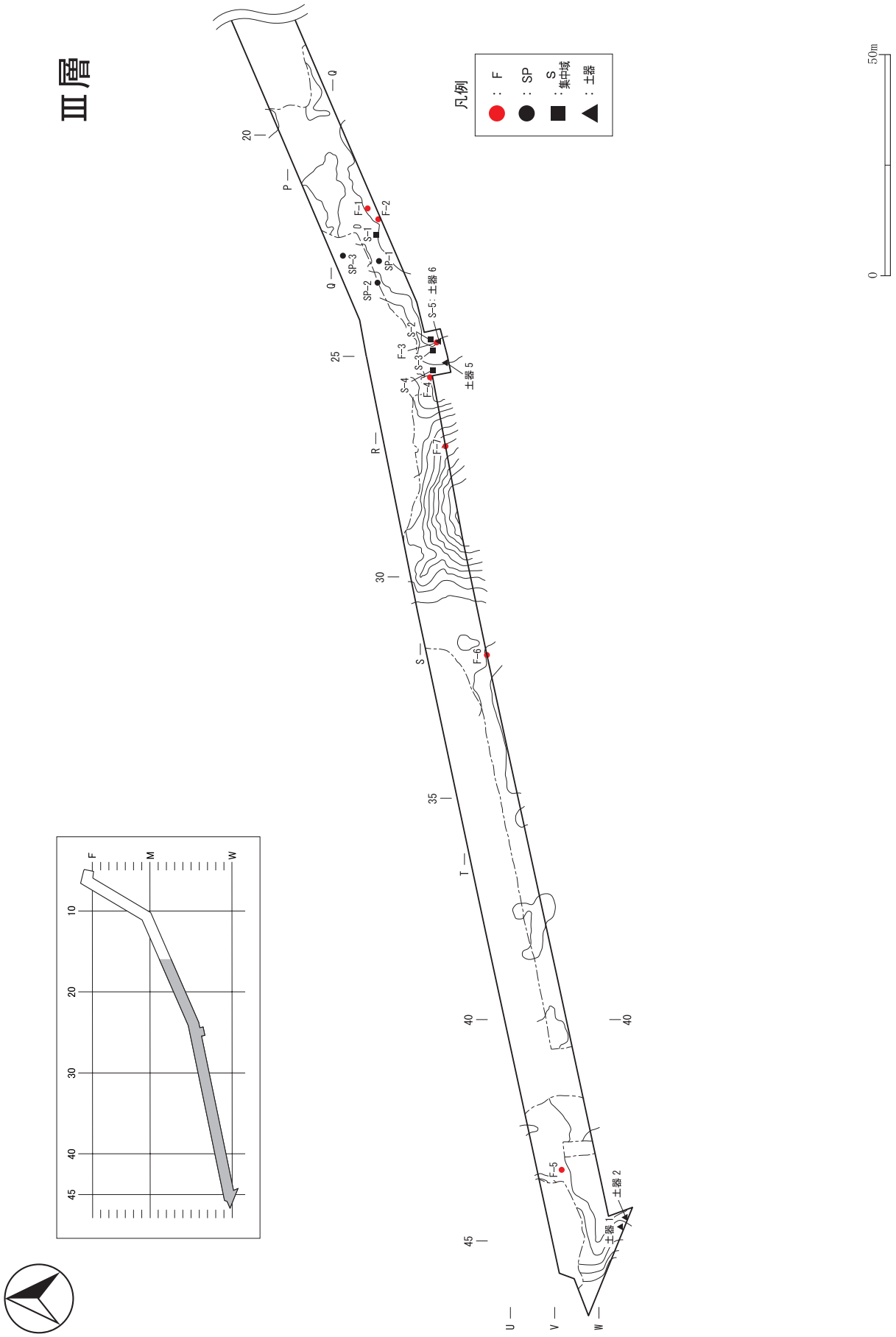
時　　期　F－１、２と一連のものと推定されるため、擦文文化後期と推定される。

掲載遺物　なし

Ｆ－３（図Ⅳ－10、表Ⅳ－１、２、図版７）

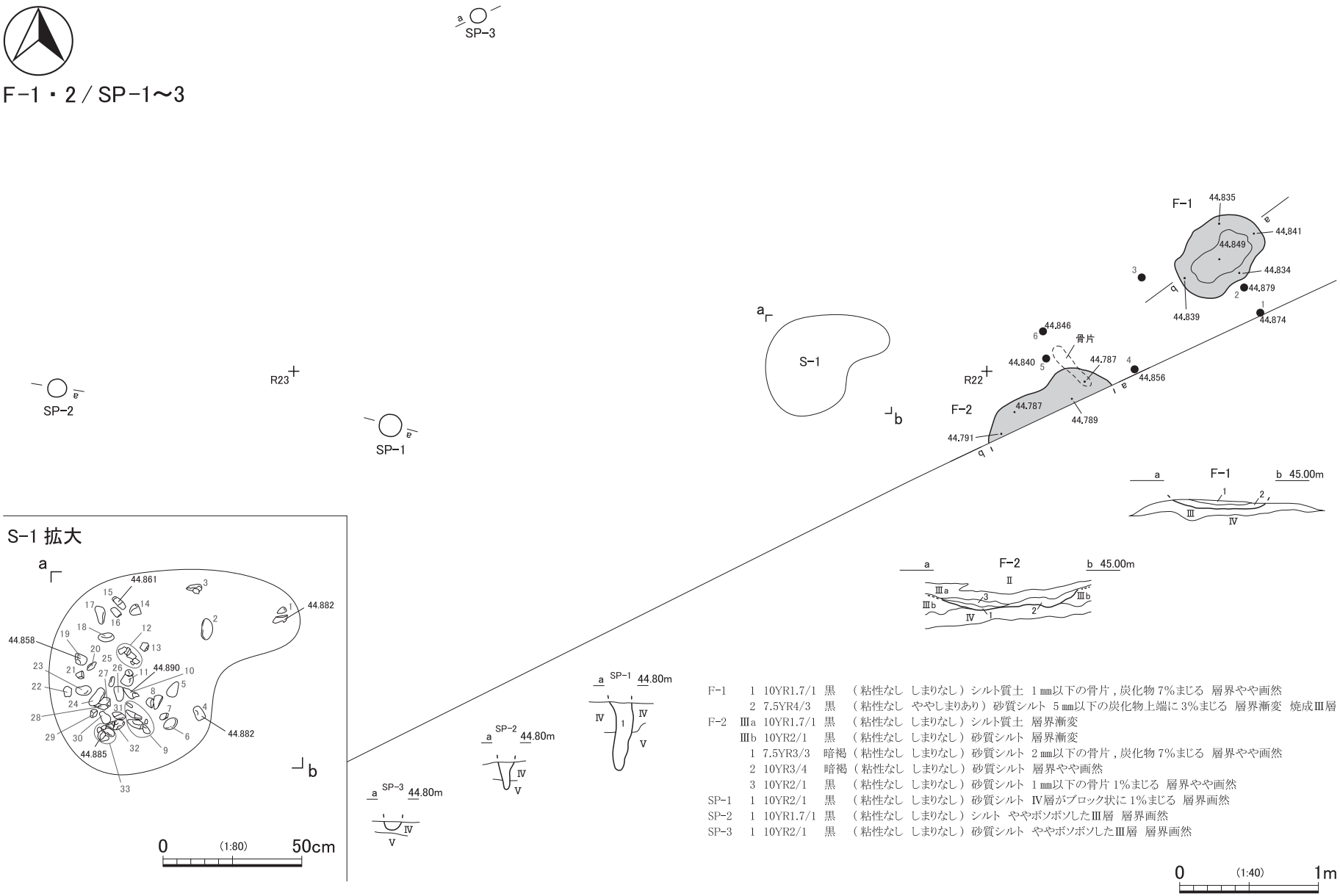
位　　置　S24区　　**規　　模**　(0.32)×0.30／0.3m

確認・調査　調査区中央部の平坦面に位置する。土器集中６の調査終了後、直下で確認したものである。フローテーション試料を採取した後半截して明瞭な断面を確認し調査を終了した。フローテーションの結果から、Ⅵ群ｃ類土器の小片５点、フレイク７点、礫７点、骨片78.2ｇ、ブドウ種子１点


Ⅲ層
凡例
：F
：SP
S
：集中域
：土器
50m
0
F-1
F-2
F-3
F-4
F-5
F-6
F-7
SP-1
SP-2
SP-3
S-1
S-2
S-3
S-4
S-5：土器6
土器5
土器2
土器1
P
Q
R
S
T
U
V
W
20
25
30
35
40
45
F
M
W

図Ⅳ－８　Ⅲ層遺構位置図

F−1・2／SP−1〜3



F−1	1	10YR1.7/1	黒	（粘性なし しまりなし）シルト質土 1㎜以下の骨片，炭化物7%まじる 層界やや画然	
	2	7.5YR4/3	黒	（粘性なし ややしまりあり）砂質シルト 5㎜以下の炭化物上端に3%まじる 層界漸変 焼成Ⅲ層	
F−2	Ⅲa	10YR1.7/1	黒	（粘性なし しまりなし）シルト質土 層界漸変	
	Ⅲb	10YR2/1	黒	（粘性なし しまりなし）砂質シルト 層界漸変	
	1	7.5YR3/3	暗褐	（粘性なし しまりなし）砂質シルト 2㎜以下の骨片，炭化物7%まじる 層界やや画然	
	2	10YR3/4	暗褐	（粘性なし しまりなし）砂質シルト 層界やや画然	
	3	10YR2/1	黒	（粘性なし しまりなし）砂質シルト 1㎜以下の骨片1%まじる 層界やや画然	
SP−1	1	10YR2/1	黒	（粘性なし しまりなし）砂質シルト Ⅳ層がブロック状に1%まじる 層界画然	
SP−2	1	10YR1.7/1	黒	（粘性なし しまりなし）シルト ややボソボソしたⅢ層 層界画然	
SP−3	1	10YR2/1	黒	（粘性なし しまりなし）砂質シルト ややボソボソしたⅢ層 層界画然	

図Ⅳ−9　F−1・2／SP−1〜3

等が得られた。

時　　期　Ⅵ群c類の土器集中域直下で確認していることから、北大Ⅰ式期直前ごろとみられる。

Ｆ－４（図Ⅳ－10、11、14、表Ⅳ－１、２、７、13、図版７）

位　　置　Ｓ25区　　**規　　模**　(0.61)×0.48／0.4m

確認・調査　調査区中央部の平坦面に位置する。調査区の南側境においてⅢ層を掘り下げていたところ、炭化材がややまとまって出土する部分を確認した。周囲を精査すると鉄製品を含む遺物の集中と、焼土を確認した。耕作や根跡の攪乱が激しく北側を失っており全容は不明である。点線部は調査時に誤って掘り下げた部分を壁面に残った痕跡から推定したものである。残存部分で土層断面を記録した後フローテーションサンプルを採取して調査を終了した。出土した炭化材を放射性炭素年代測定した結果、補正年代で1,450±20yrBP.の結果が得られた。フローテーションの結果、Ⅵ群土器２点、フレイク14点等が得られた。

時　　期　調査区境の壁面に残った土層断面からは、Ⅲ層中位の層位であり、炭素年代と調和的である。鉄製品はアイヌ文化期の特長を示しており、混入の可能性が高い。

掲載遺物　８点の出土地点を記録した。図Ⅳ－14－１は孔式鉄斧の破片とみられる鉄製品。先端はつぶれて変形している。図Ⅳ－10－２は３点が接合した砥石片である。表面に擦痕が認められる。このほか図示していないが、直径５cmほどの円盤状の円礫が１点、泥岩、チャートの礫が各１点、有意の礫としたメノウの礫１点がある。

Ｆ－５（図Ⅳ－10、表Ⅳ－１、２、図版７）

位　　置　V43区　　**規　　模**　0.46×0.40／0.06m

確認・調査　調査区西側の平坦面で検出された。Ⅲ層上面を精査していたところ、焼土を確認した。長軸に合わせて半截し、フローテーション試料を採取して土層断面を確認した。フローテーションの結果、礫２点、骨片17.8ｇ、クルミかとみられる破片0.2ｇ等が得られた。

時　　期　不明であるが、周囲で多く出土している擦文文化後期のものである可能性がある。

Ｆ－６（図Ⅳ－５、表Ⅳ－１、２、図版７）

位　　置　T32区　　**規　　模**　－×－／0.04m

確認・調査　Ⅲ層調査時に検出できなかったが、メインセクション作成時に土層断面を確認した焼土である。断面図は図Ⅳ－５に図示した。B-Tmの下位約２㎝の位置に形成されており、骨片、炭化物、焼成した砂岩礫を伴っている。壁面から土壌サンプルを少量採取してフローテーション作業を行った。その結果。フレイク２点、不明種子１点、骨片1.8g等が得られている。また、放射性炭素年代測定の結果、補正炭素年代で1,570±20yrBP.である。

時　　期　B-Tm下位であること、また周囲で出土している遺物から、続縄文時代北大Ⅰ式期である可能性があり、炭素年代とも合致している。

Ｆ－７（図Ⅳ－６、表Ⅳ－１、２、図版７）

位　　置　S27区　　**規　　模**　－×－／0.13m

確認・調査　Ⅲ層調査時に検出できなかったが、メインセクション作成時に土層断面を確認した焼土である。調査区中央沢部東側に位置する。断面図は図Ⅳ－６に示した。Ⅳ層（Ta-c）に接して形成されている。

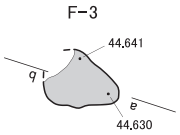
時　　期　検出層位から、縄文時代晩期後葉（Ta-c降下後）に形成されたとみられる。

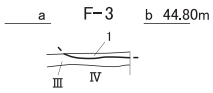
（２）土器以外の遺物集中

Ｓ－１については、Ｆ－１、２とともに平地住居を構成している可能性があるため、前節で扱った。

S25

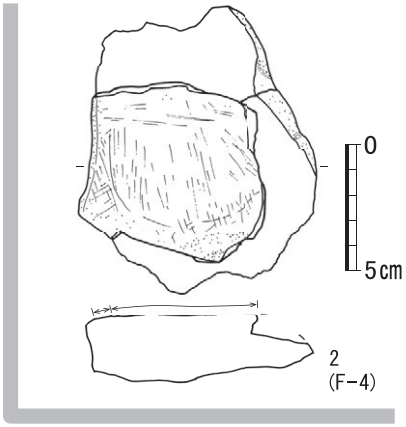
F−3



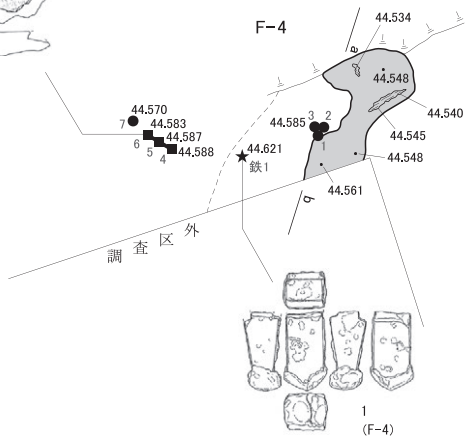


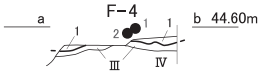
F-3　1　7.5YR4/4 褐（粘性なし しまりなし）シルト 層界漸変

F−4



S26

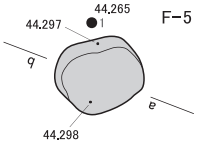


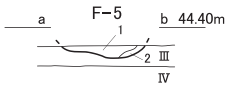


F-4　1　5YR2/4 極暗赤褐（粘性なし しまりなし）砂質土 焼成Ⅲ層 層界漸変

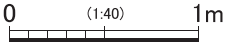
F−5

V43





F-5　1　7.5YR2/3 極暗褐（粘性なし しまりなし）焼成Ⅲ層
　　1　7.5YR4/4 褐　　（粘性なし しまりなし）焼成Ⅲ層



図Ⅳ−10　F−３・４・５

Ｓ－２・３（図Ⅳ－11、14、表Ⅳ－１、２、９、図版８、23）

位　　置　S24区　　**規　　模**（S－２）　2.36×1.24m

規　　模（S－３）　2.12×1.18m

確 認・調 査　調査区中央部の南側突出部平坦面に位置する。Ⅲ層を掘り下げていたところ、礫が集中して出土する部分を確認した。集中は伐採未了の樹木下に大きく広がるようであった。この除去作業のため、検出作業は二回に分けて行った。写真図版は一回目のもので、図は二回の作業を合成している。遺物内容の違いから二か所に分けS－２、３としたが、一連のものである可能性がある。

S－２は東に位置する。有意な遺物と思われた93点の出土位置を記録した。円礫・棒状礫83点、被熱した砂岩礫１点、礫・礫片15点、Ⅵ群土器１点からなる。

S－３は西に位置する。刀の切先１点、不明鉄製品１点、棒状礫16点、礫、礫片が13点からなる。

時　　期　検出層位が樽前bテフラの直下であることから、アイヌ文化期である可能性がある。

掲 載 遺 物　２は刀の切先である。３は不明鉄製品。ねじれた細板状を呈する。Ｓ－４から出土した４と類似しており、同一製品の可能性がある。

Ｓ－４（図Ⅳ－11、12、14、表Ⅳ－１、２、９、13、図版８、23）

位　　置　S25区　　**規　　模**　2.44×(1.15) m

確 認・調 査　調査区中央部の南側突出部で検出された。地形は概ね平坦である。Ⅵ群土器６点、フレイク１点、針金状の鉄製品１点、棒状の円礫９点、礫・礫片４点からなる遺物集中である。

時　　期　不明であるが、擦文文化後期、もしくは続縄文時代北大Ⅰ式期のものである可能性もある。

掲 載 遺 物　４は不明鉄製品。ややねじれた細板状である。Ｓ－３出土の３と類似する。

Ｓ－５（図Ⅳ－12、表Ⅳ－１、２、図版８）

位　　置　S24区　　**規　　模**　1.02×(0.90) m

確 認・調 査　調査区中央部の南側突出部に位置する。Ⅲ層を掘り下げていたところ、礫が集中する部分が検出された。周囲を精査して土器片を含む径約１mの南側調査区外に広がる集中であることがわかった。礫片17点のほか、砥石片が１点出土している。

時　　期　同一層位から続縄文時代北大Ⅰ式期の土器がまとまって出土しているため、続縄文時代のものである可能性が高い。

掲 載 遺 物　なし。

（３）土器

土器集中１・２（図Ⅳ－13、15、表Ⅳ－１、２、３、図版９、24）

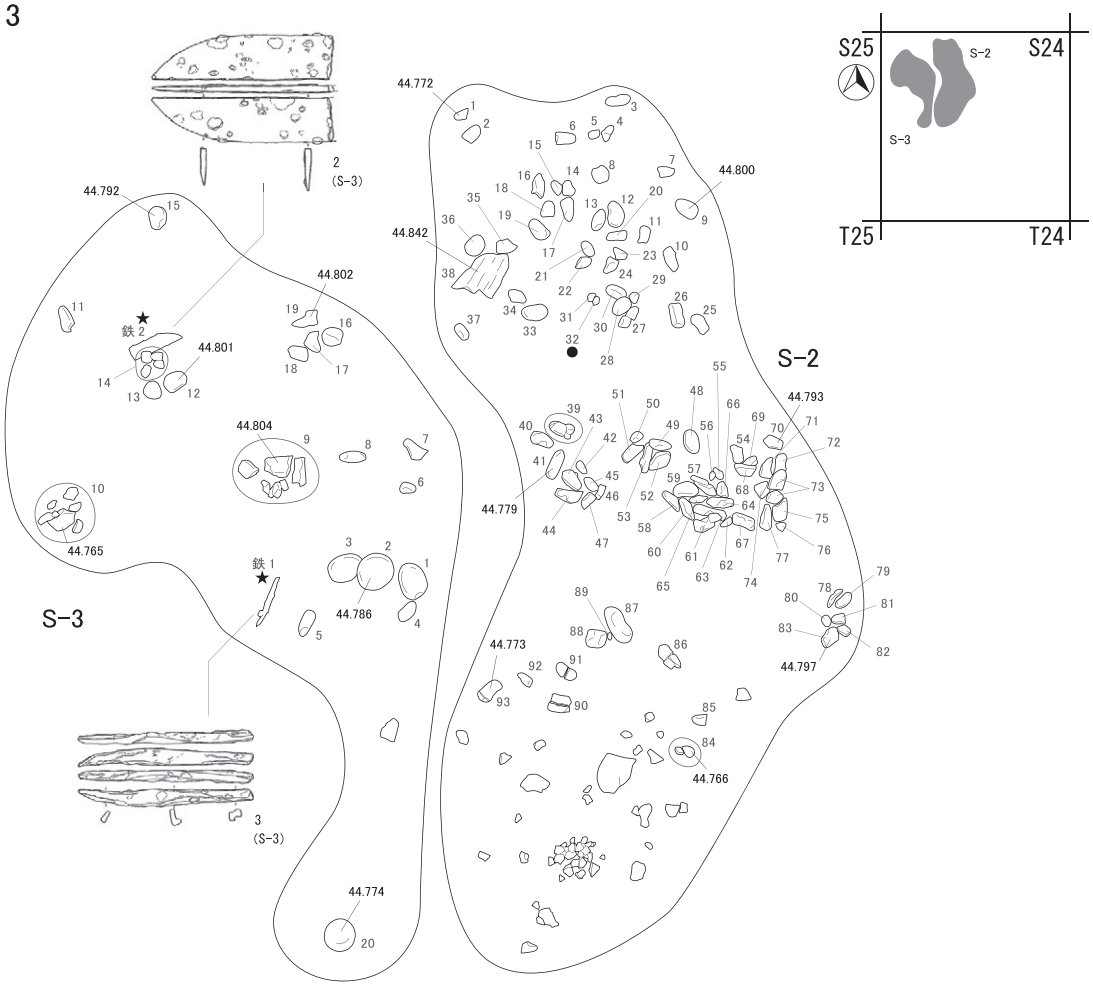
位　　置　W44区　　**規　　模（土器集中１）**　0.92×0.76m

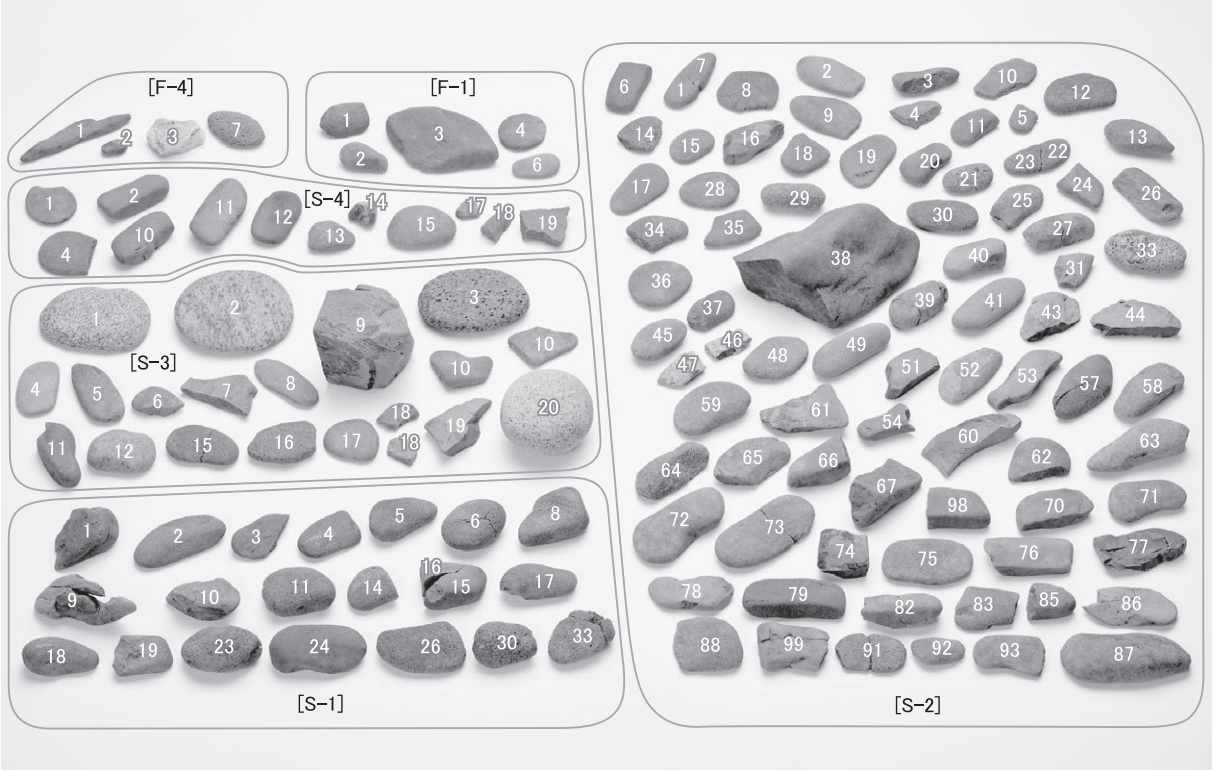
規　　模（土器集中２）　1.10×0.98m

確 認・調 査　調査区西端の平坦面に位置する。Ⅲ層を掘り下げていたところ、Ⅶ群土器のやや大きな破片が出土した。周囲を精査すると、土器片がまとまっていることがわかった。土器片は大きく２か所の集中があり、北西―南東方向に広がっていた。２か所はそれぞれ別個体と判断されたため、北に位置するものを土器集中１、南に位置するものを土器集中２として記録を行うことにした。出土状況の記録の際に周囲を精査して遺構の有無を確認したが、伴う層位の変化を認識することができなかった。メインセクション作成時、W44区南壁においてB－Tm上位に成因不明の再堆積層を確認した。本遺構検出位置の東側壁面にも続いているが、関係は不明である。

時　　期　出土遺物より、擦文文化後期、11世紀後半とした。

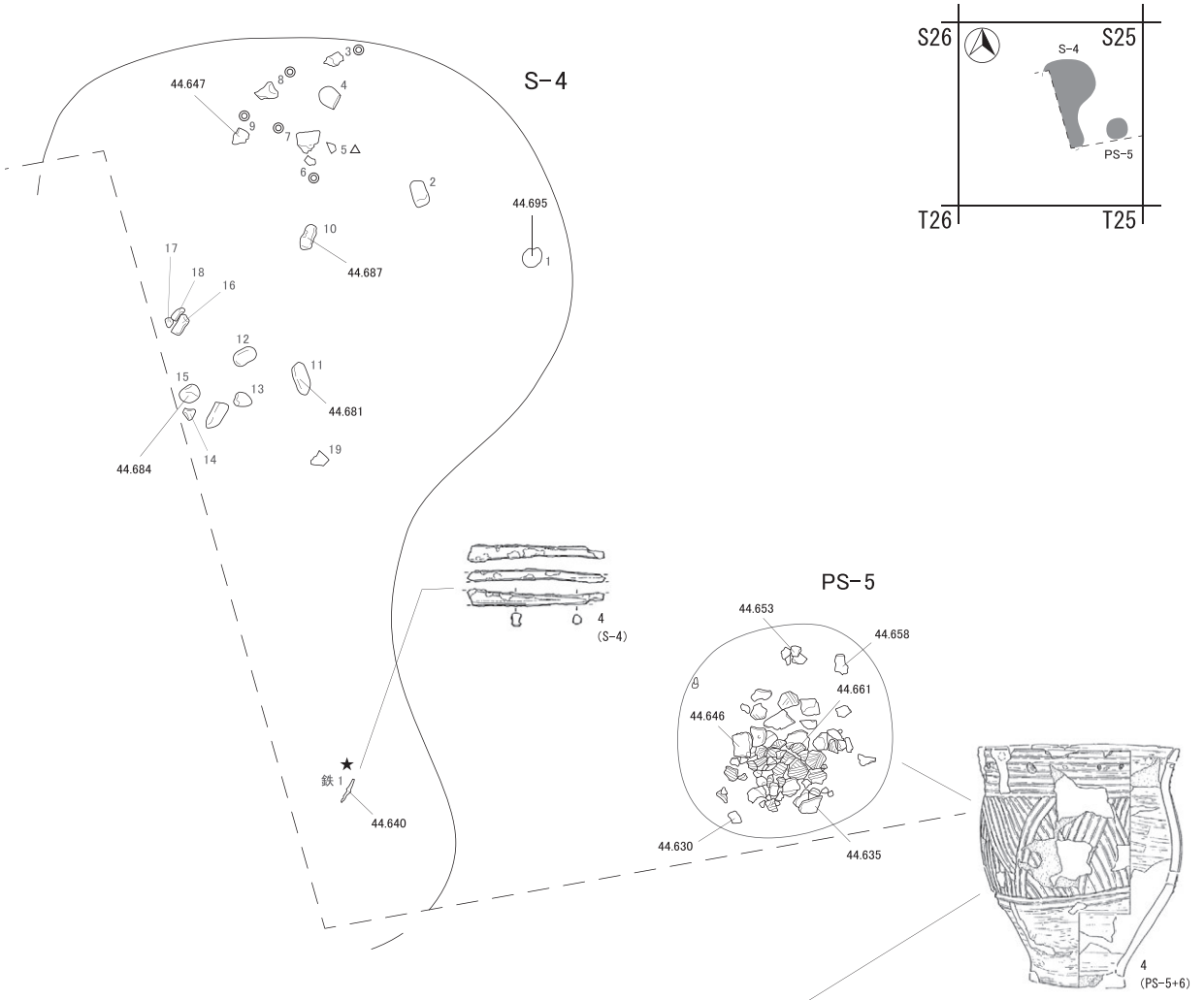
S−2・3


S25
S24
T25
T24
S−2
S−3
S−2
S−3
鉄 1
鉄 2
44.772
44.800
44.842
44.792
44.802
44.801
44.804
44.765
44.786
44.779
44.793
44.773
44.797
44.766
44.774
2
(S−3)
3
(S−3)

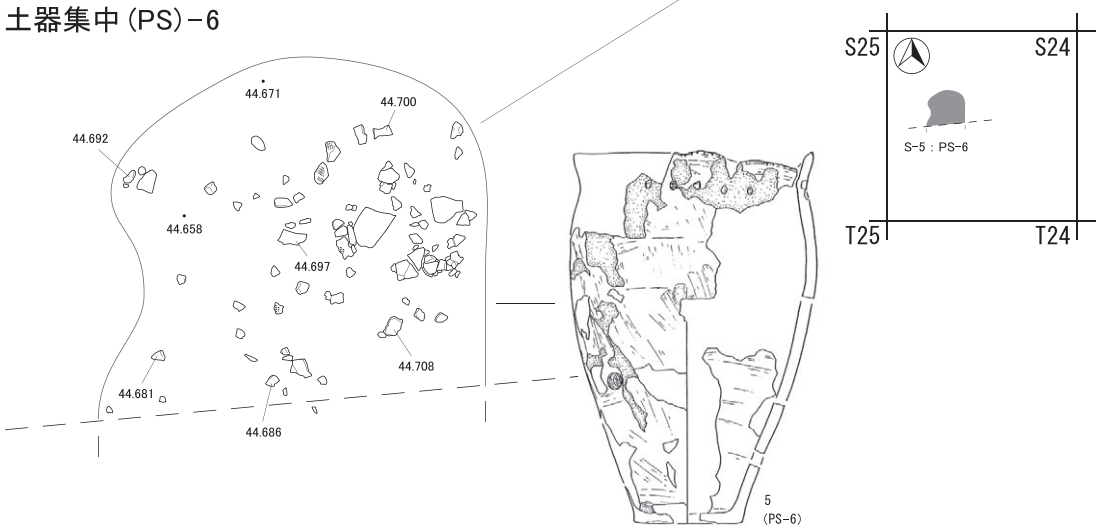

[F−4]
[F−1]
[S−4]
[S−3]
[S−1]
[S−2]

図Ⅳ−11　S−２・３

S-4 / 土器集中(PS)-5



S-5/ 土器集中(PS)-6



図Ⅳ－12　S－４・５／土器集中５・６

掲 載 遺 物　両集中から深鉢３個体が復元できた１、２は集中２から出土した文様帯を持つ深鉢。ともに胴部上半の文様帯中に「ハ」の字状、もしくは山形文を基調とした沈線文が描かれている。１は胴部上半が直立し、口縁部は一端外反して口唇は直立している。胴部文様は２条の横走沈線により区画され、沈線間に３本単位の山形文、綾杉状の短刻線が充填される。明瞭な３段の段差がついた口縁部には、各段に斜位の短刻線がつけられている、短刻線は各段で方向を違えており、全体として綾杉状を呈している。外面は極めて丁寧にナデ調整され、刷毛目の痕跡を残さない。内面はミガキ調整の後黒色処理されている。底面には砂粒が顕著につく。２は小形のもの。文様帯は胴部上位に限られ、貼付囲繞帯により区画されている。囲繞帯上には馬蹄形の文様が連続して施文される。文様帯は２条の横走沈線により区画され、２本一組の「ハ」の字の沈線が描かれている。口縁部は２段となるほかは１と同じ手順により綾杉状の短刻線がつけられる。貼付帯が剥落している部分の観察によると、貼付帯→刷毛目調整→横走沈線→「ハ」の字文の順に施文されている。３は集中１と２の破片が接合している。刷毛目調整のみの深鉢。口縁はナデ調整され３段の段差を作出する意図が見えるが全周しない。

土器集中５（図Ⅳ－12、15、表Ⅳ－１、２、３、図版８、24）

位　　置　S25区　　**規　　模**　0.63×0.60m

確 認・調 査　調査区中央部の南側突出部に位置する。Ⅲ層を掘り下げていたところ、土器片の集中を検出した。周囲を精査したところ、径0.6mほどの範囲にまとまる集中であることがわかった。記録を作成して取り上げ、調査を終了した。

時　　期　続縄文時代、北大Ⅰ式期である。

掲 載 遺 物　４は集中５が大部分と６の破片少数が接合したもの。Ⅵ群ｃ類の深鉢。胴部がやや膨らみ、頸部は少し外反する。胴部３分の２に微隆起線文による文様が描かれる。微隆起線文は口頸部に６条横走する。下端を１条の横位線により区画された胴部文は、斜行する10条単位の文様が方向を違えて斜格子状に描かれる。口縁下３段目の微隆起線に沿って土器表面から円形刺突文がつけられ、内面に張り出している。外面は丁寧にナデ調整されるが、胴部文様帯の一部にLR斜行縄文が残る部分がある。内面胴部は刷毛目の調整が残る。胎土は粗く、３mm以下のチャート、泥岩等の円磨礫、石英、長石の鉱物粒が混じる。

土器集中６（図Ⅳ－12、15、表Ⅳ－１、２、３、図版８）

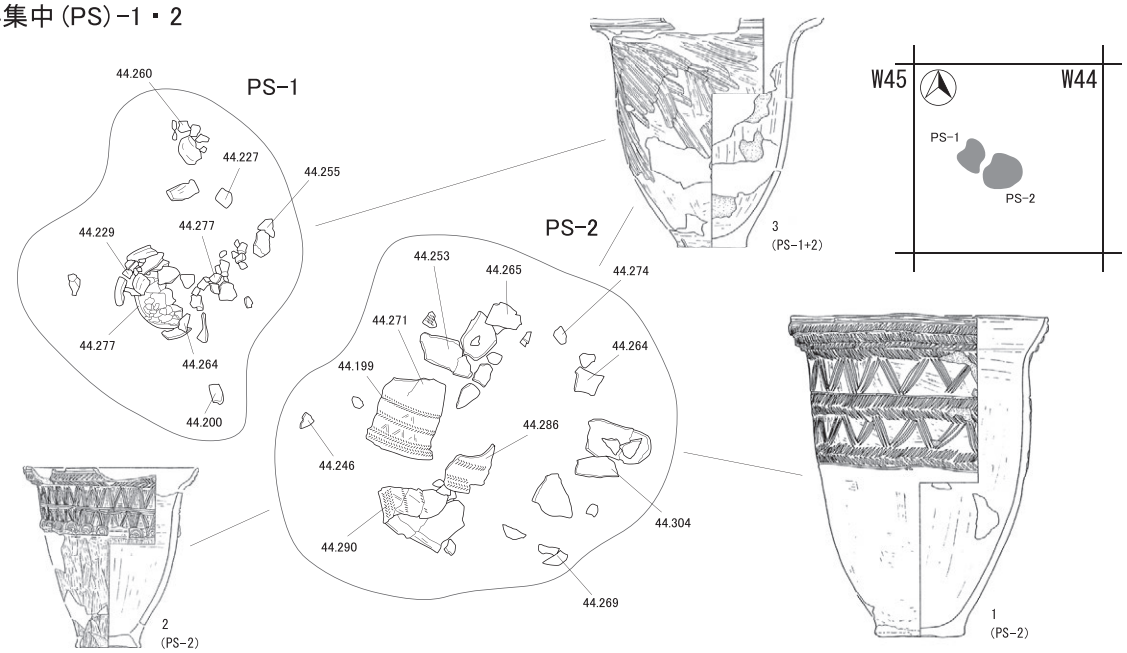
位　　置　S24区　　**規　　模**　1.02×（0.90）m

確 認・調 査　調査区中央部の南側に張り出す部分に位置する。遺物集中S－５の調査中、土器については土器集中６として取り上げを行った。土器片193点が出土している。

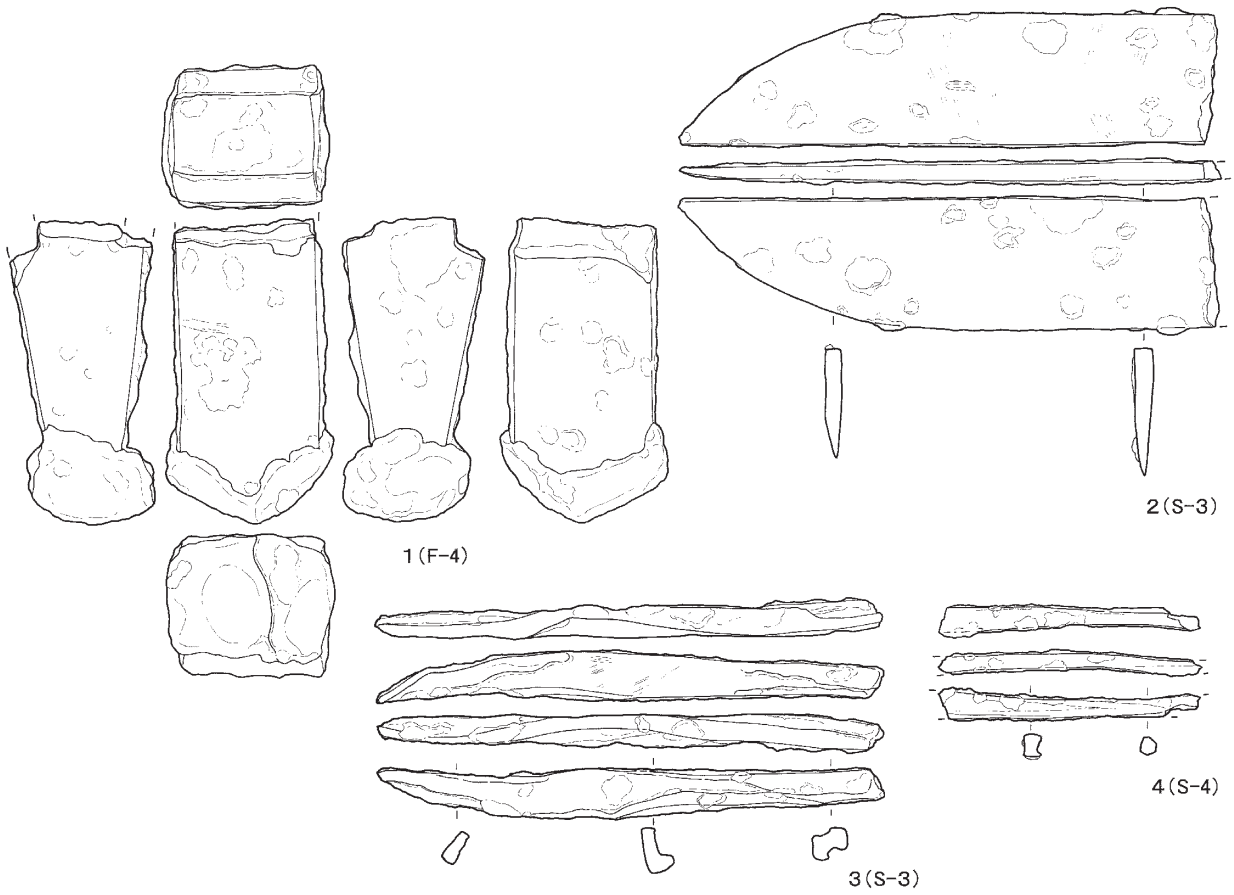
時　　期　出土遺物から、続縄文時代北大Ⅰ式期である。

掲 載 遺 物　５はⅥ群ｃ類の深鉢。口縁から底部まで接合している。頸部が短く、口縁は軽く外反する。胴部上半にやや膨らみを持つ。器面が平滑に調整され無文であるが、口頸部に円形刺突文、切出状を呈する口縁の端部に刻みが施されている。胴部下半に補修孔がある。

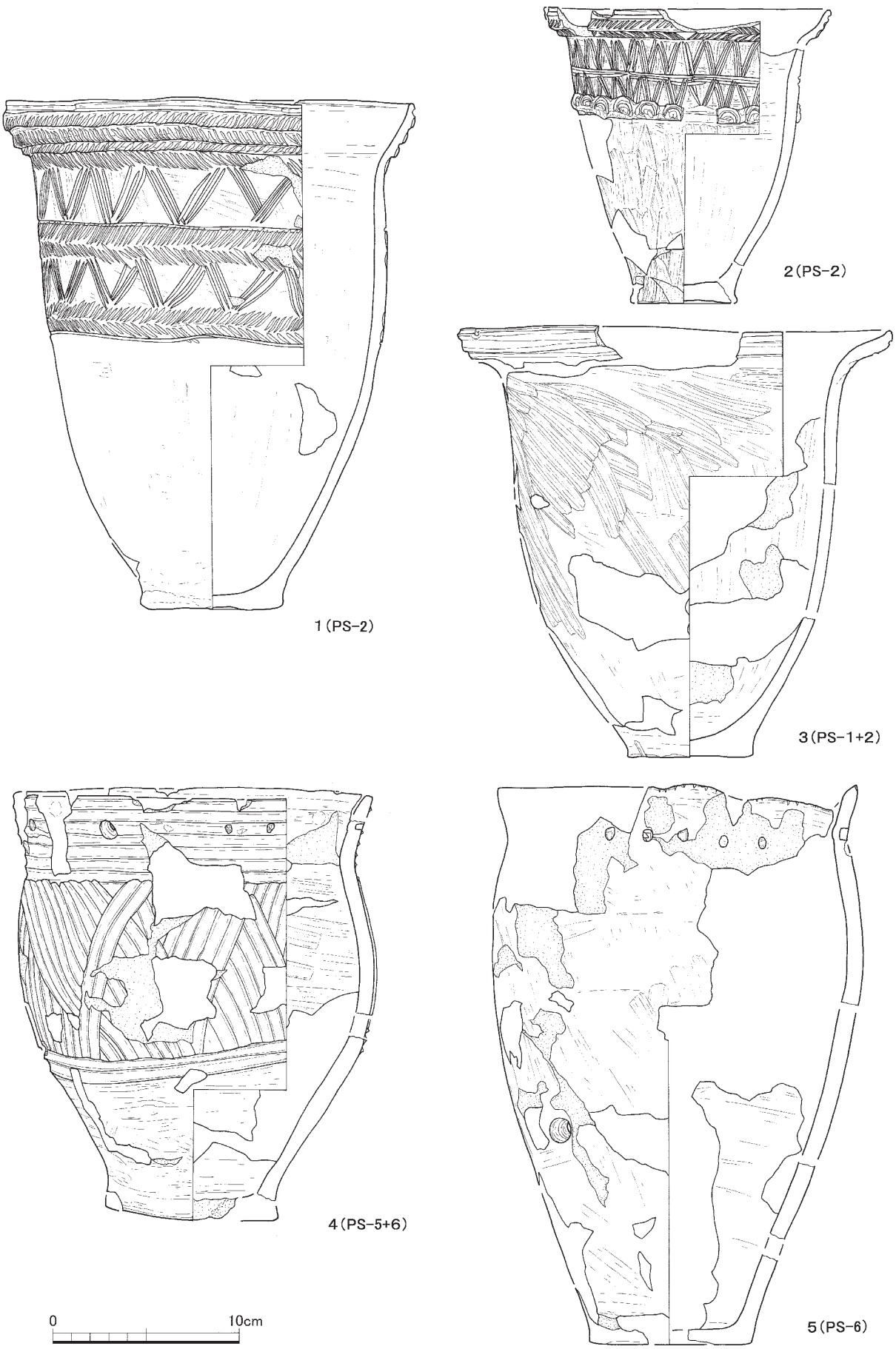
土器集中(PS)-1・2



図Ⅳ－13　土器集中１・２



図Ⅳ－14　鉄製品



図Ⅳ－15　土器集中の出土遺物

７　Ⅲ層出土の土器

（１）土器（図Ⅲ－６、表Ⅲ－２　図版25）

Ⅲ層から出土した土器は、総点数で536点であるが、縄文時代晩期以前の混入とみられるものを除くと、晩期後葉28点、続縄文時代393点、擦文文化期57点である。

Ⅴ群c類土器（図Ⅳ－16－１、表Ⅳ－４、図版25）

１は、浅鉢もしくは鉢とみられる。口縁部約２分の１が復元できた。RL斜行縄文を地文とし、太い横走沈線が器面全体にめぐらされている。沈線の３条目に一対の穿孔がなされ、５条目に等間隔に突起がつけられている。７～９条の間には波状の沈線が加えられており、工字文風の文様に仕上げてある。沈線文の一部に僅かに赤彩が残る部分がある。胎土は緻密である。微細な軽石様の白色岩片と石英、輝石粒子を少量混じる。

Ⅵ群b類土器（図Ⅳ－16－２、表Ⅳ－４、図版25）

２は鉢の口縁部。端部に向かい軽く外反する、倒鐘形を呈するとみられるものである。口唇端部には浅い刻みが、口縁部には三角形の点列文、横位の帯状縄文、菱形の沈線文が認められる。後北A式とみられる。

Ⅵ群c類土器（図Ⅳ－16－３～15、表Ⅳ－４、図版25）

３～５は、体部に帯状縄文がつくもの。３、４は胴部片。RL０段多条縄文による帯状縄文が描かれ、細い刺突文により区画されている。５は口縁部。頸部は短く口唇の断面は角形を呈している。口頸部には横走する微隆起線を６条めぐらせている。２条目には円形刺突文が外面から内面に向かってつけられ、内面に張り出す。体部にはRL０段多条の帯状縄文がつけられる。施文は帯状縄文→微隆起線文の順と観察される。口唇内面には沈線が不連続に横走しているが、文様として意図したものかは不明である。

６～10は微隆起線文を主とするもの。６a、bは同一個体。径が異なるため、上面観が円形とならない浅鉢である。口唇部に４条の微隆起線が巡り、１、４段目に「D」字状の刺突文、２段目には円形刺突文がめぐらされている。口唇断面は角形を呈し、頂部は細かく刻まれている。７は小形の浅鉢とみられる。突起部分は「M」字状で口唇に刻みが施される。微隆起線文は突起にそって縦位に、そのほかは横位につけられている。微隆起線文間には円形刺突文が施される。８、９は微隆起線文と円形刺突文のみ。胴部は無文とみられる。８は微隆起線文、刺突文が不規則で粗雑。一部剥落しており貼付されていることが明瞭である。９は頸部の幅が広く、大きく外反するもの。微隆起線と刺突は整然とつけられる。

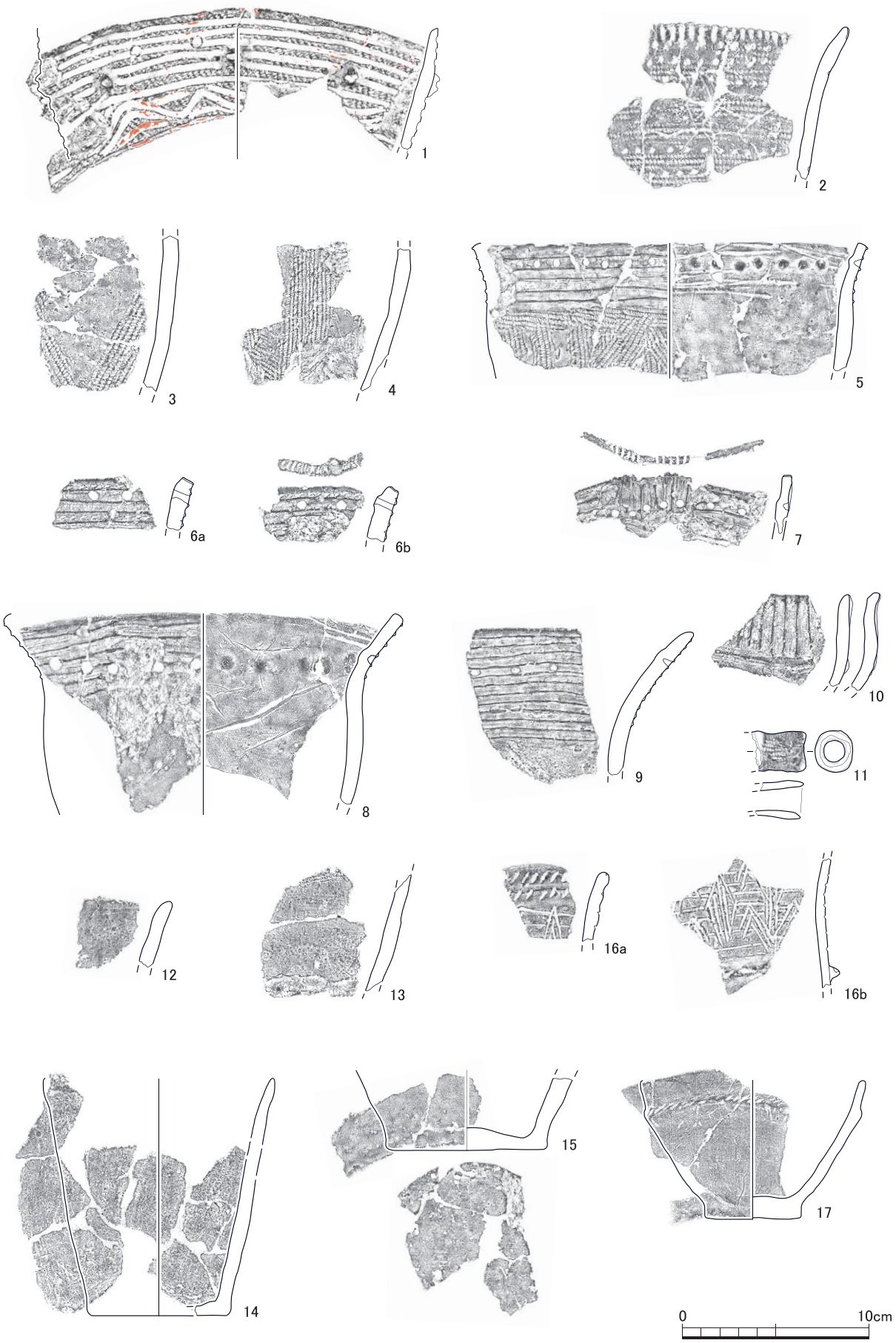
10、11は片口もしくは注口。10は微隆起線文、11は縄文がつけられる。

12～14は無文。12～14は小形の鉢とみられる。12は口縁部。13の一部に縄文が残る。14は口縁に肥厚帯状のふくらみがある。15は底部。丁寧な調整で無文に仕上げられる。底面は厚手で中央がやや肥厚する。胎土の類似から本類としたが、Ⅶ群の可能性もある。

なお、図Ⅳ－47－99に掲載した土製品は、Ⅲ層出土のものである。胎土と色調から、本類に伴うものである可能性が高い。

Ⅶ群土器（図Ⅳ－16－16、17、表Ⅳ－４、図版25）

16a、bは同一個体の深鉢。16aは有段の口縁部分。刻みがつけられている。16bは文様帯部分。横走沈線の上に垂下する沈線を基調とし、斜位の沈線で文様が描かれる。明瞭な貼付帯上には斜位の太い刻みが施される。17は杯である。器形がほぼ復元できたものである。口縁下に僅かな隆起帯があり、縁どるように斜位の刻みが施される。



図Ⅳ－16　Ⅲ層出土の土器

８　Ｖ層検出の遺構とその出土遺物

Ｖ層で検出された遺構は、竪穴住居跡４軒、Ｔピットを含む土坑32基、焼土２か所、小柱穴９基、土器集中域２か所である。遺構は21ラインを境に東西に分かれており、西側に密な分布状況となる。東側には２か所の焼土と小柱穴９基が、西側の地域にはそれ以外の遺構が分布している。

（１）竪穴住居跡

Ｈ－１（図Ⅳ－18、21、表Ⅳ－１、２、５、７、図版10、25、26）

位　　置　U34、T・U35区

規　　模　(4.18)×(2.02)／(3.27)×(1.74)／0.60m

平面形態　不明

確認・調査　調査区西側平坦面に位置する。Ⅵ層上面を精査していたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みは半円状を呈し､南側は調査区外に延長していた。落ち込みが明瞭であったため、調査区境界に沿ってトレンチを設定しⅦ層まで掘り下げた。結果明瞭な壁、床を確認できたことにより住居であることがわかった。床面はほぼ平坦であるが、北東壁際に自然攪乱による層位の乱れが認められる。柱穴は３基検出した。いずれも小規模で壁際に位置するものである。西側に狭い部分で硬化する面を確認している。覆土から出土した炭化木片に対し放射性炭素年代測定を行った。結果、補正炭素年代で4,050±20yrBP.の年代が得られた。

遺物出土状況　床面からⅢ群b類土器９点、石鏃２点、つまみ付きナイフ１点、Rフレイク１点、フレイク２点、礫１点が出土している。覆土からは土器が、Ⅱ群a類１点、Ⅲ群a類１点、Ⅲ群b類４点、Ⅳ群a類２点の計８点、石器等は石鏃２点、石槍１点、スクレイパー１点、石斧２点、たたき石１点、石皿１点、フレイク15点、礫・礫片44点が出土している。

覆　　土　３層に分層した。最上位の１層は黒色土でTa-dパミスが混じる他遺構の堀上土とみられる薄層、２層は床面まで堆積する炭化物が混じるＶ層相当の堆積である。３層は西壁際にのみ堆積する汚れたⅦ層である。掘り込み面はＶ層中位である。

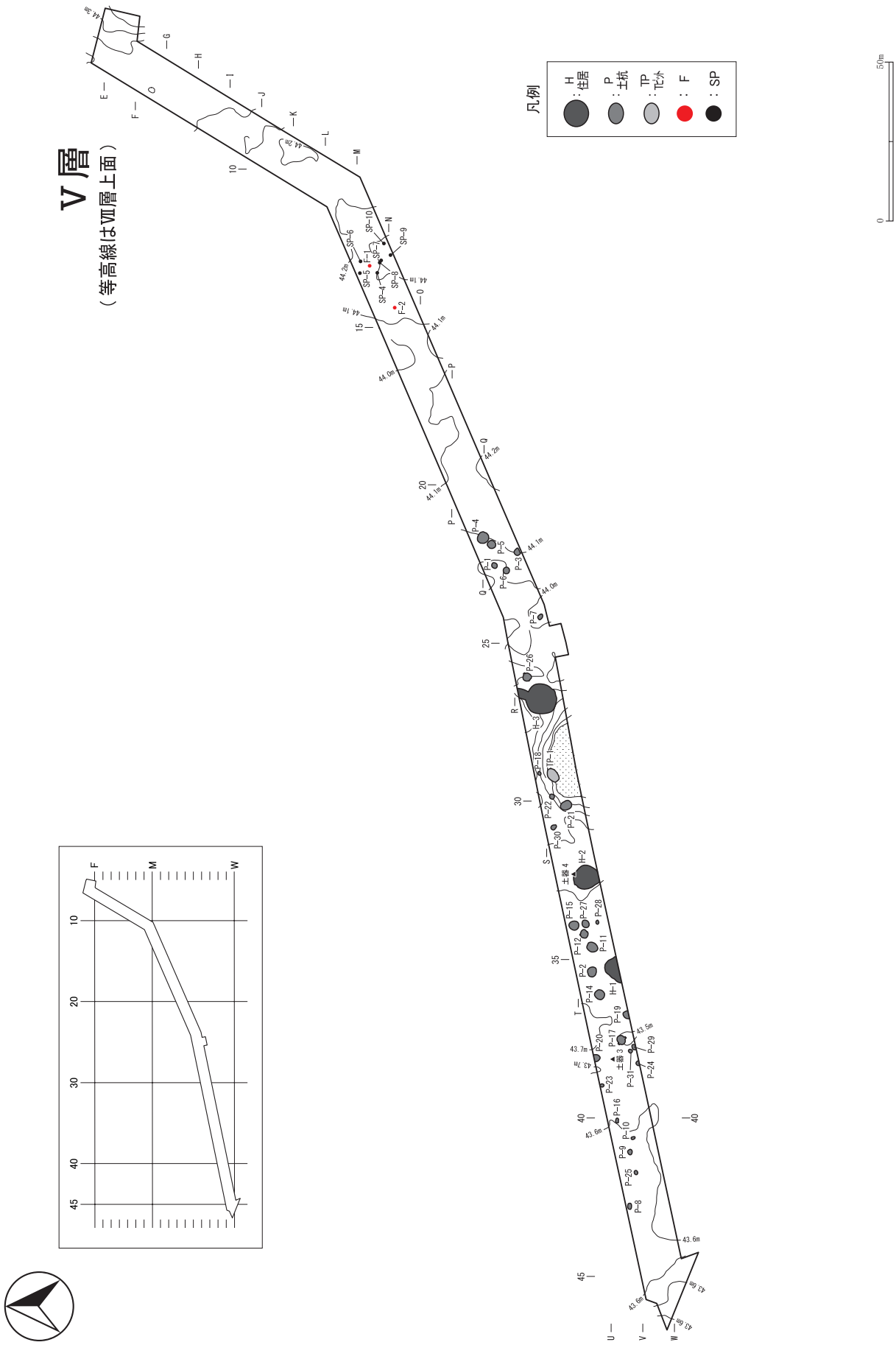
時　　期　床面から出土した土器、および炭素年代から縄文時代中期後半のものとみられる。

掲載遺物　１a、bは同一個体。貼付帯と沈線による文様が描かれるもの。１aは貼付文に沿って刺突がつけられる。１bは横走する２本一組の沈線が描かれる。地文はLR斜行縄文。０段多縄とみられる。１aは覆土から、１bは周辺の包含層から出土している。２a、bも同一個体。２aは口縁部。幅の広い肥厚帯を持つ。端部には平坦面が作出される。２bは貼付帯のある胴部片。地文はLR斜行縄文。２aはP－２から出土した破片が接合している。３は複節RLRの斜行縄文が施文される胴部片。４はやや太い原体のLR斜行縄文。２、３は床面から出土している。１はⅢ群a類、３、４はⅢ群b類、２はⅣ群a類土器である。３、４は床面から出土した破片が接合している。そのほかは覆土から出土している。

５～８は石鏃。５は三角形を呈し基部がやや抉れる。６～８は茎を持つもの。６は先端を欠損し被熱している。７、８はやや茎が太く、かえしは明瞭に作出されている。９は有茎の石槍。両面に入念な細部調整がなされるが、腹面は周縁のみ細部調整され素材剥片の腹面が残る。10はつまみ付きナイフ。素材剥片の右側縁と端部に急角度の刃部が作出される。11は原石面の残る剝片の腹面側に弧状の刃部が作出されるもの。石材は10が頁岩､11はメノウ､そのほかは黒曜石製である。出土層位は７、８、10が床、そのほかは覆土からの出土である。

Ｈ－２（図Ⅳ－19、22、表Ⅳ－１、２、５、７、図版10、11、25、26）

位　　置　S・T32区　　**規　　模**　4.03×3.65／2.34.×2.09／0.96m



図Ⅳ－17　V層遺構位置図

平 面 形 態　不整円形

確 認・調 査　調査区西側、沢状地形西側の平坦面に位置する。Ⅶ層上面を精査していたところ、Ⅴ層の落ち込みを確認した。落ち込みはほぼ円形を呈していたため、住居を想定して長短軸に合わせトレンチを設定してⅦ層まで掘り下げた。結果明瞭な壁、床を確認したため住居とした。平面形は検出面、坑底ともにいびつな円形。南側がわずかに調査区外に延長している。床はほぼ平坦。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況　床面から黒曜石の縦長剝片が１点出土している。くぼみに堆積したⅤ層も含む覆土からは土器12点、Ⅰ群b類５点、Ⅱ群a類６点、Ⅳ群a類１点、石器等は、石鏃が破片を含め３点、石錐１点、つまみ付きナイフ４点、スクレイパー２点、Rフレイク２点、フレイク62点、石斧片１点、たたき石２点、加工痕ある礫１点、石皿片３点、メノウ礫４点等が出土している。

覆　　土　自然堆積のⅤ層以下を６層に分層した。上位の１、２、４層はⅤ層を基調とするもので、Ta-dパミスを７～15％混じる黒褐色～暗褐色土である。３層はほぼTa-dパミスで構成される堆積で、他遺構から供給されたものと想定される。５層は成因不明の砂であり、淘汰が良くラミナを呈し極めて硬くしまっている。スコップを足で踏みこんでもなかなか掘削できないほどであった。６層は埋め戻されたとみられるⅦ層を起源とする堆積である。掘り込み面はⅥ層とみられる。

時　　期　床面から出土したフレイクの特徴や、覆土の色調等から、縄文時代早期後半のものである可能性が高いが、前期前半である可能性もある。

掲 載 遺 物　１はⅡ群a類、２はⅢ群a類土器の胴部片。LR斜行縄文が施文される。３は貼付帯のつく胴部片。Ⅳ群a類土器である。１～３は覆土からの出土である。４は黒曜石製の石鏃。三角形で基部がやや抉れている。

Ｈ－３（図Ⅳ－20、22、表Ⅳ－１、２、５、７、図版12、26）

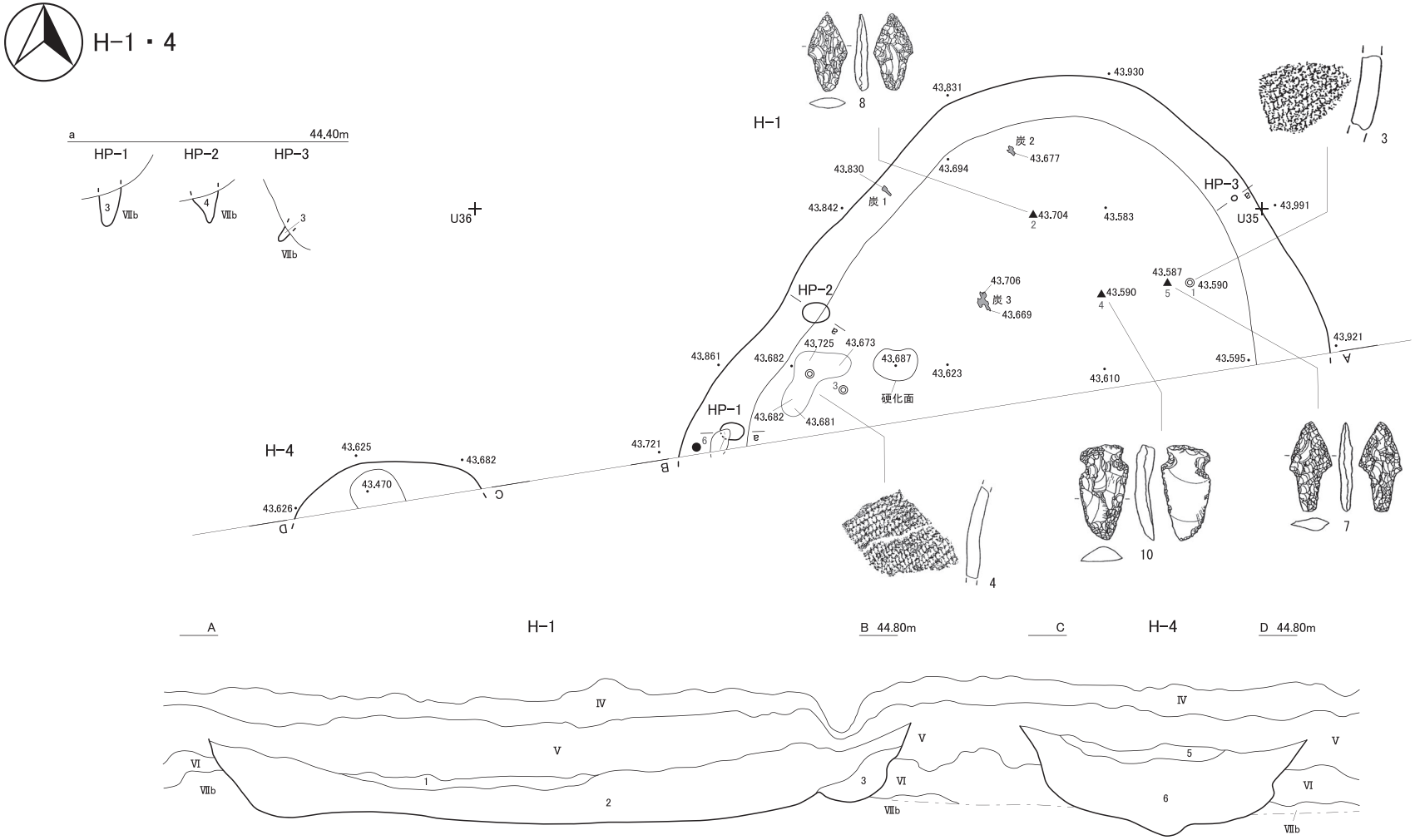
位　　置　R・S24・25区　**規　　模**　(5.90)×4.26／3.68×3.41／0.35m

平 面 形 態　柄鏡形

確 認・調 査　調査区中央部、沢状地形の東側平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認の精査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの形状は突起のある円形で柄鏡のような形状であった。重複する遺構を想定し、張り出しから落ち込み中心を通るようにトレンチを十字に設定してⅦ層まで掘り下げた。その結果、明瞭な壁、床が確認でき、舌状の張り出しを持つ一連の遺構と判断した。柱穴は小さなものも含め14基検出した。位置のみ記録したものは番号を付していない。北西壁に位置するＨＰ－１は最も規模が大きく、長軸1.58mの楕円形を呈する。坑底は平坦である。切り合う別遺構の可能性があるが、柱穴とした。ＨＰ－８、９は舌状部分と対応する位置にあるため、張り出しに関係するものとみられる。そのほかはやや小規模なものが多く、壁から一定の距離に離れた床面に一部連続して検出されている。覆土から炭化物が出土しており、ＨＰ－４付近に比較的大きなものを図化している。この炭化物について、放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代で4,050±20yrBP.の値が得られた。

遺物出土状況　床面からⅢ群ａ類土器９点、Ｒフレイク１点、同一個体とみられる石皿の破片９点、礫１点が出土している。覆土からはⅢ群ａ類土器15点、Ⅲ群ｂ類土器２点、石錐１点、石槍１点、スクレイパー３点、たたき石２点、フレイク33点、礫・礫片15点が出土している。

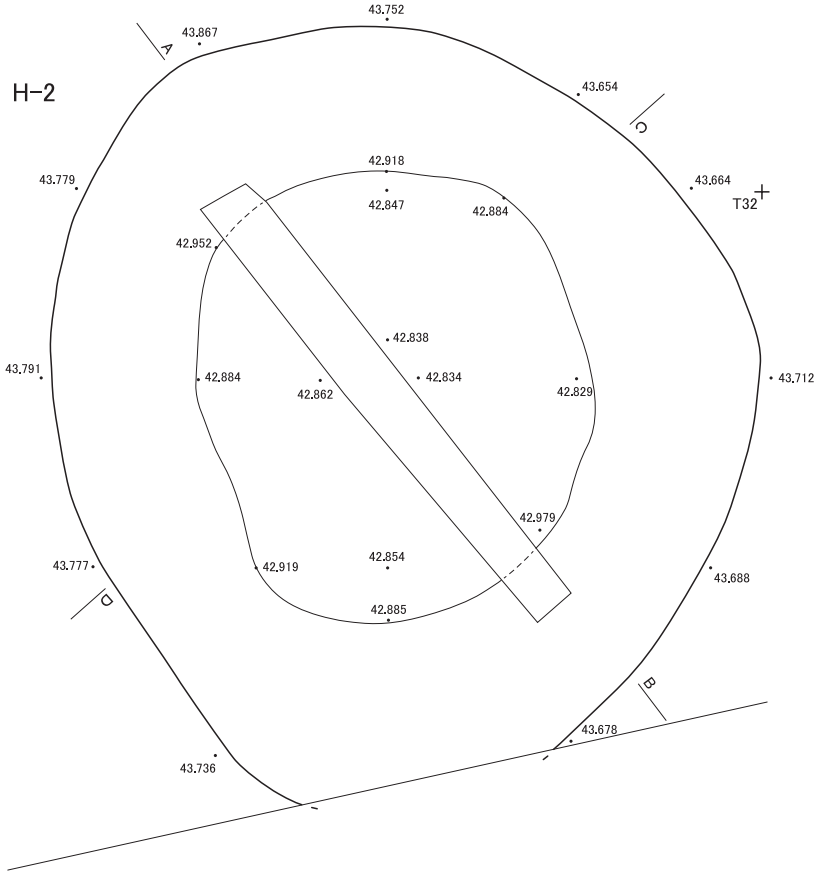
覆　　土　５層に区分した。全ての層位がTa-dパミス、炭化物を混じる再堆積とみられる層位である。１、２層とした層は、堆積後の掘り込みの可能性があるが、明確ではなかったため層位を記録するにとどめた。掘り込み面はⅤ層中と想定される。

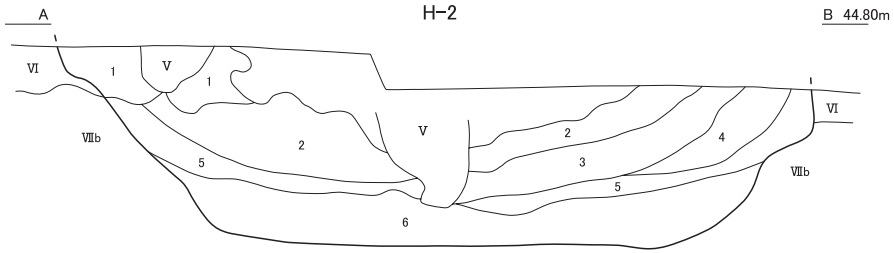


H-1　1　7.5YR2/1　黒　（やや粘性あり　ややしまりあり）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 20%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR1.7/1　黒　（粘性あり　ややしまりあり）砂混土　10㎜以下の Ta-d1・2 パミス 10%、炭化物わずかにまじる　層界画然
　　3　5YR3/2　暗赤褐（やや粘性あり　ややしまりあり）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 20%まじる　層界不明瞭
　　4　5YR2/1　黒褐　（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 20%まじる　層界やや画然
H-4　5　7.5YR2/2　黒褐　（粘性あり　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 10%まじる　層界やや画然
　　6　7.5YR1.7/1　黒　（粘性あり　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 15%まじる　層界やや画然

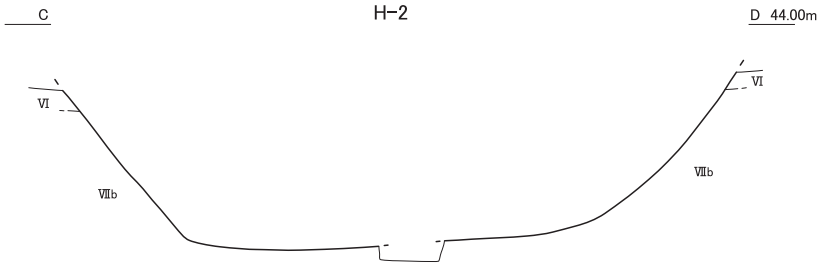
0　(1:40)　1m

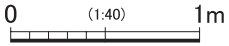
図Ⅳ－18　H－１・４



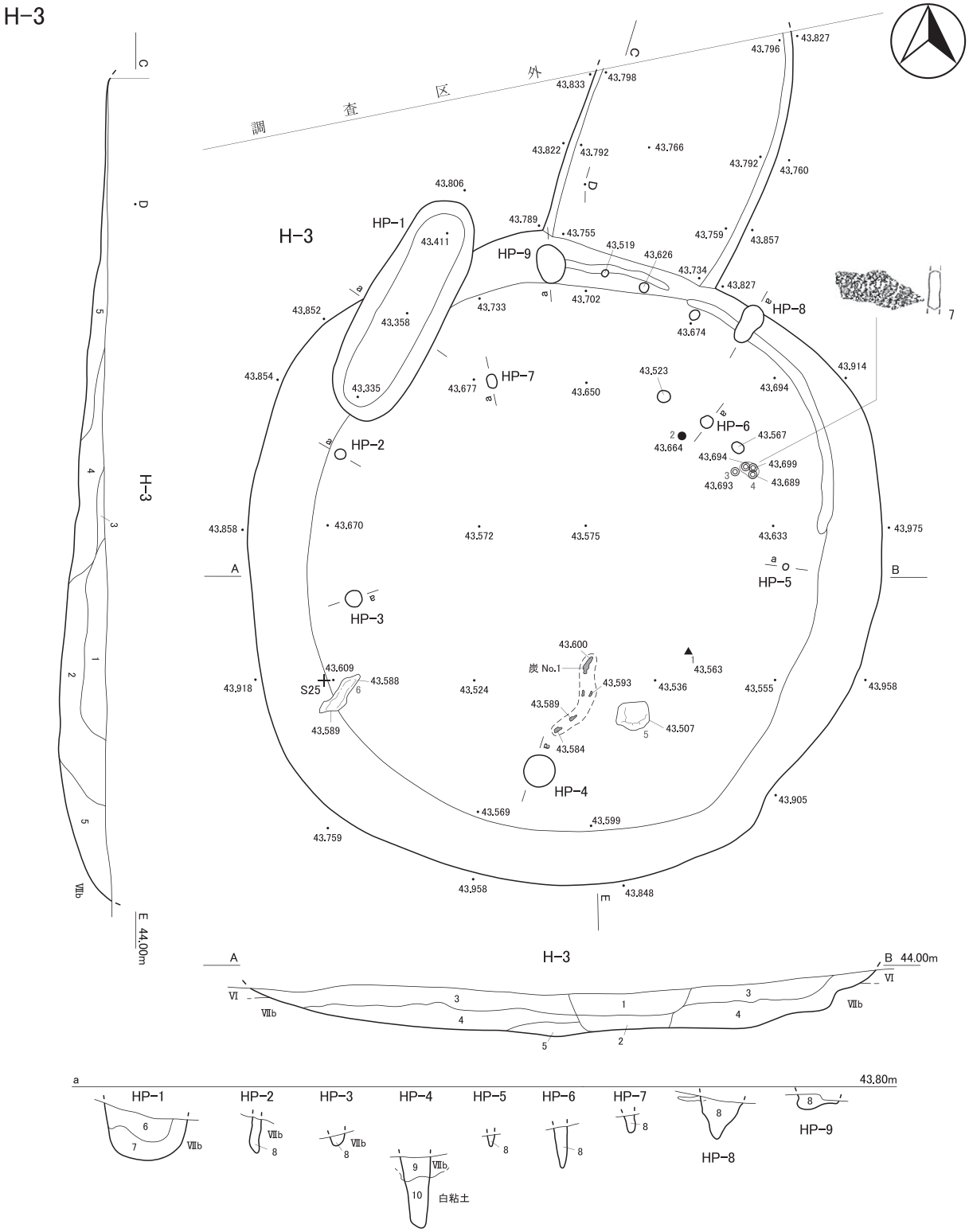


1　10YR2/3　黒褐　（やや粘性あり　ややしまりあり）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 7%まじる　層界やや画然
2　10YR2/2　黒褐　（やや粘性あり　ややしまりあり）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 15%まじる　層界やや画然
3　7.5YR2/3　極暗褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　50㎜以下の Ta-d2 パミスで構成される　炭化物微量まじる　層界画然
4　10YR2/2　黒褐　（粘性なし　しまりなし）砂混土　50㎜以下の Ta-d2 パミス 7%まじる　炭化物微量まじる　層界漸変
5　7.5YR3/2　黒褐　（粘性なし　しまり強・硬い）砂　10㎜以下の砂礫で構成される　Ta-d2 パミスまじる　ラミナ状　層界漸変
6　7.5YR3/4　暗褐　（粘性あり　しまり強・硬い）30㎜以下の Ta-d2 パミスで構成される　上位で硬い





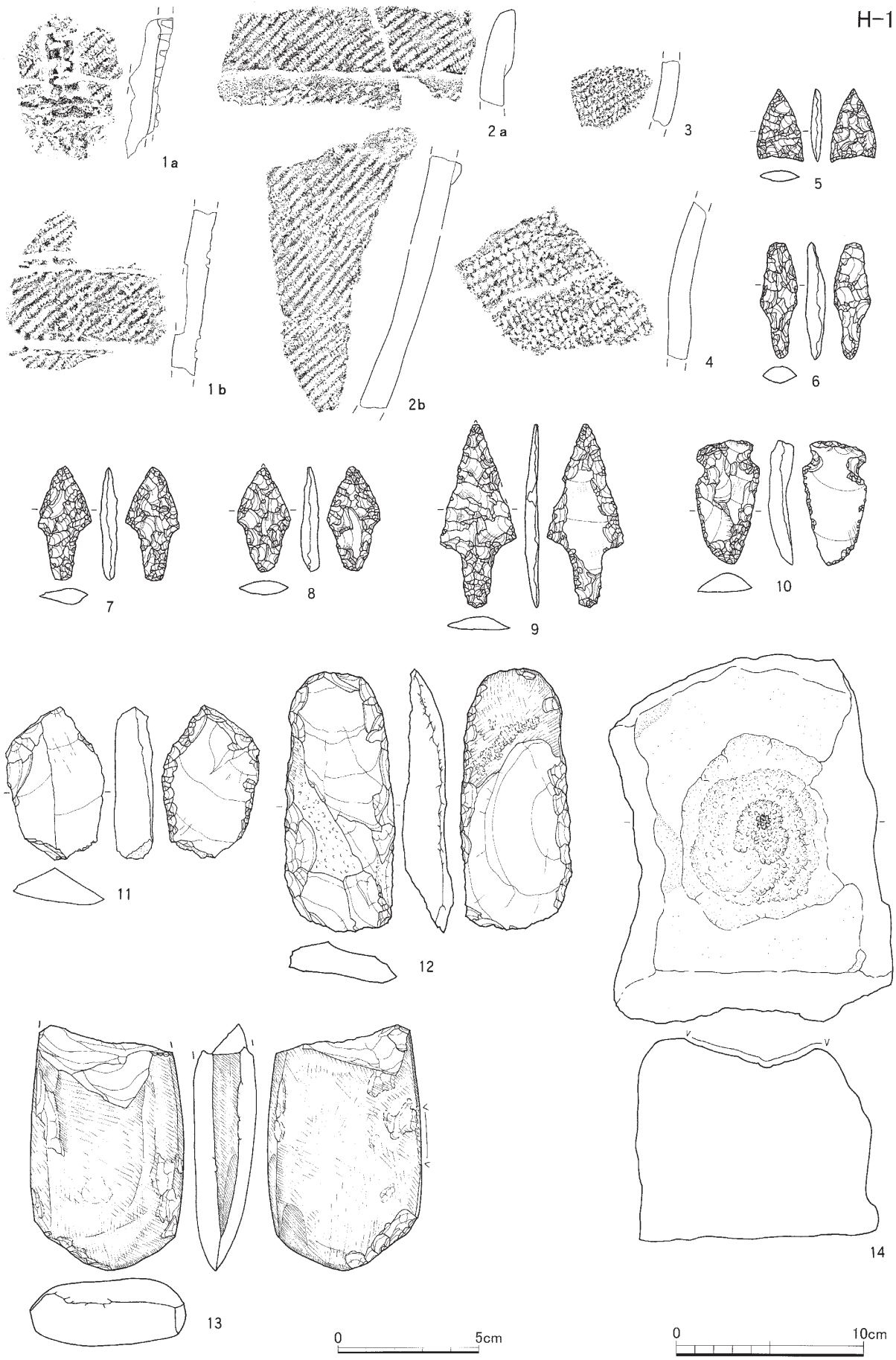
図Ⅳ－19　H－2



1　7.5YR2/1　黒　（やや粘性あり　ややしまりあり）砂混土　10 ㎜以下の Ta-d1・2 パミス 30%まじる　炭化物目立つ　層界画然
2　7.5YR1.7/2　黒　（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta-d2・1 パミス 30%まじる　炭化物目立つ　層界画然
3　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta-d1・2 パミス 20%まじる　層界明瞭
4　7.5YR3/1　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta-d1・2 パミス 30%まじる　層界画然
5　7.5YR1.7/1　黒　（粘性なし　しまりなし）砂混土　30 ㎜以下の Ta-d1・2 パミス 30%まじる　層界画然
6　10YR1.7/1　黒　（粘性あり　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta-d2・1 パミス 10%まじる　炭化物まじる　層界画然
7　10YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta-d2・1 パミス 20%まじる　層界明瞭
8　7.5YR1.7/1　黒　（粘性あり　しまりなし）砂混土　10 ㎜以下の Ta-d2 パミス 10%まじる　層界画然
9　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂礫　20 ㎜以下の黒色化した Ta-d パミスで構成される　層界不明瞭
10　2.5Y5/3　黄褐（粘性あり　しまりなし）粘土　層界不明瞭

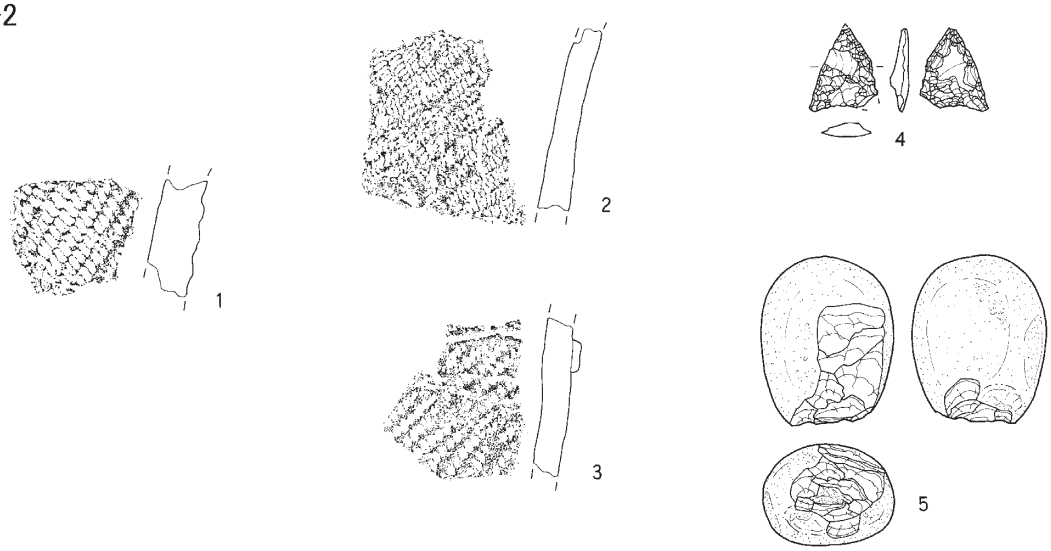
0　(1:40)　1m

図Ⅳ－20　H－３

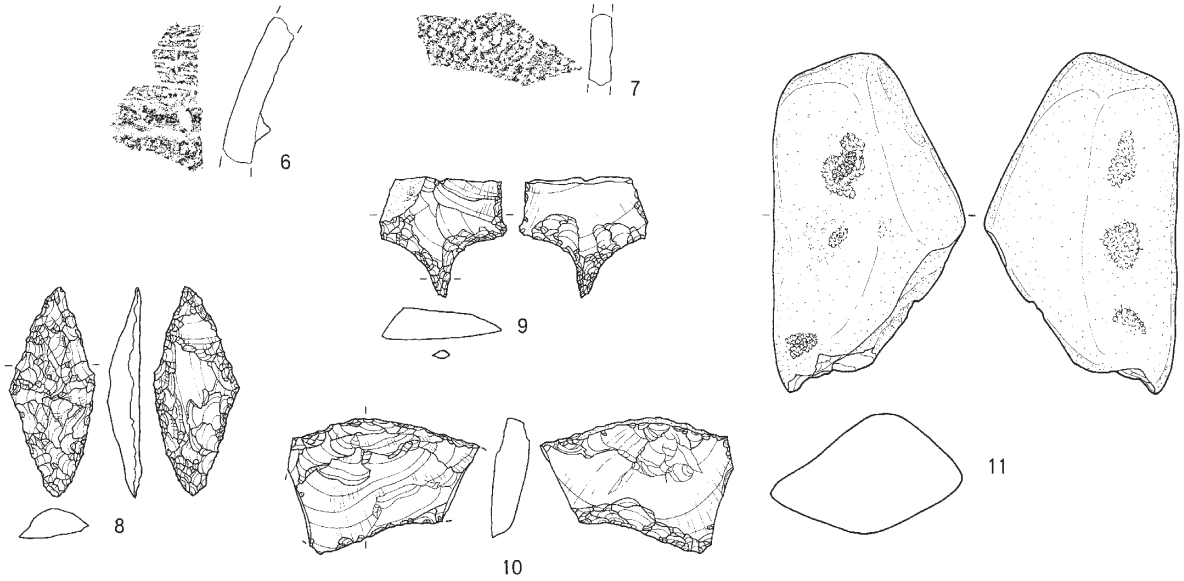


図Ⅳ－21　H－１出土遺物

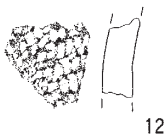
H-2

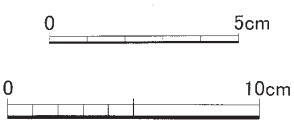


H-3



H-4





図Ⅳ－22　H－２～４出土遺物

時　　期　床面から出土した土器から、縄文時代中期前半萩ヶ岡１式のものとみられる。

掲載遺物　６は貼付帯のつく文様帯部分。貼付帯は刻みが加えられ、文様帯には沈線が数条認められる。７は結束第１種斜行縄文を地文とする胴部。６は覆土、７は床面出土でともにⅢ群a類土器である。８は石槍。入念な細部調整により菱形に加工されるが、腹面には素材剥片面を残す。９は石錐。原石面の残る剥片の一部に刺突部が作られるもの。10はスクレイパー、原石面の残る素材剥片の腹面側に刃部が作出される。８～10は全て黒曜石製で覆土から出土している。

Ｈ－４（図Ⅳ－18、22、表Ⅳ－１、２、５）

位　　置　U35、36区　　**規　　模**　(1.19)×(0.27)／(0.31)×(0.23)／0.66m

平面形態　不明

確認・調査　調査区西側平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認を行っていたところ、調査区外に延長している半月形の落ち込みを確認した。壁面を精査すると、Ｈ－１に類似する堆積を呈するものであることがわかった。確認できた範囲は小さいが掘り込み面や堆積が同じであることから住居とした。

遺物出土状況　覆土から、Ⅰ群b類土器１点、Ⅲ群b類土器５点、Ｒフレイク１点、フレイク１点、礫・礫片１点が出土している。

覆　　土　Ta-dパミスの混じる黒～黒褐色土である。掘り込み面はⅤ層中位である。

時　　期　不明であるが、Ｈ－１と掘り込み面が近いため、縄文時代中期後半ごろとみられる。

掲載遺物　12は覆土から出土したⅢ群b類土器。地文はLR斜行縄文。

（２）土坑

Ｐ－１（図Ⅳ－23、33、表Ⅳ－１、２、６、図版13、27）

位　　置　Q22区　　**規　　模**　0.93×0.83／0.80×0.73／0.47m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区中央部の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認を行っていたところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは明瞭な楕円形を呈していたため、半截してⅦ層まで掘り下げた。その結果、壁、坑底を確認し、土坑であることがわかった。平面形は坑口、坑底ともに楕円形、坑底は平坦で壁はほぼ直角に立ち上がる。

遺物出土状況　覆土からⅠ群b類土器１点、Ⅱ群ａ類土器１点等が出土している。また本遺構から0.5m南に板状の礫が３点まとまって出土している。本遺構か、Ｐ－６に関わるものの可能性がある。

覆　　土　Ta-dパミスを15～20％混じる黒色土の堆積である。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、周囲で検出される遺構から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

掲載遺物　１は覆土から出土したⅡ群a類土器。太いRL斜行縄文を地文とする。

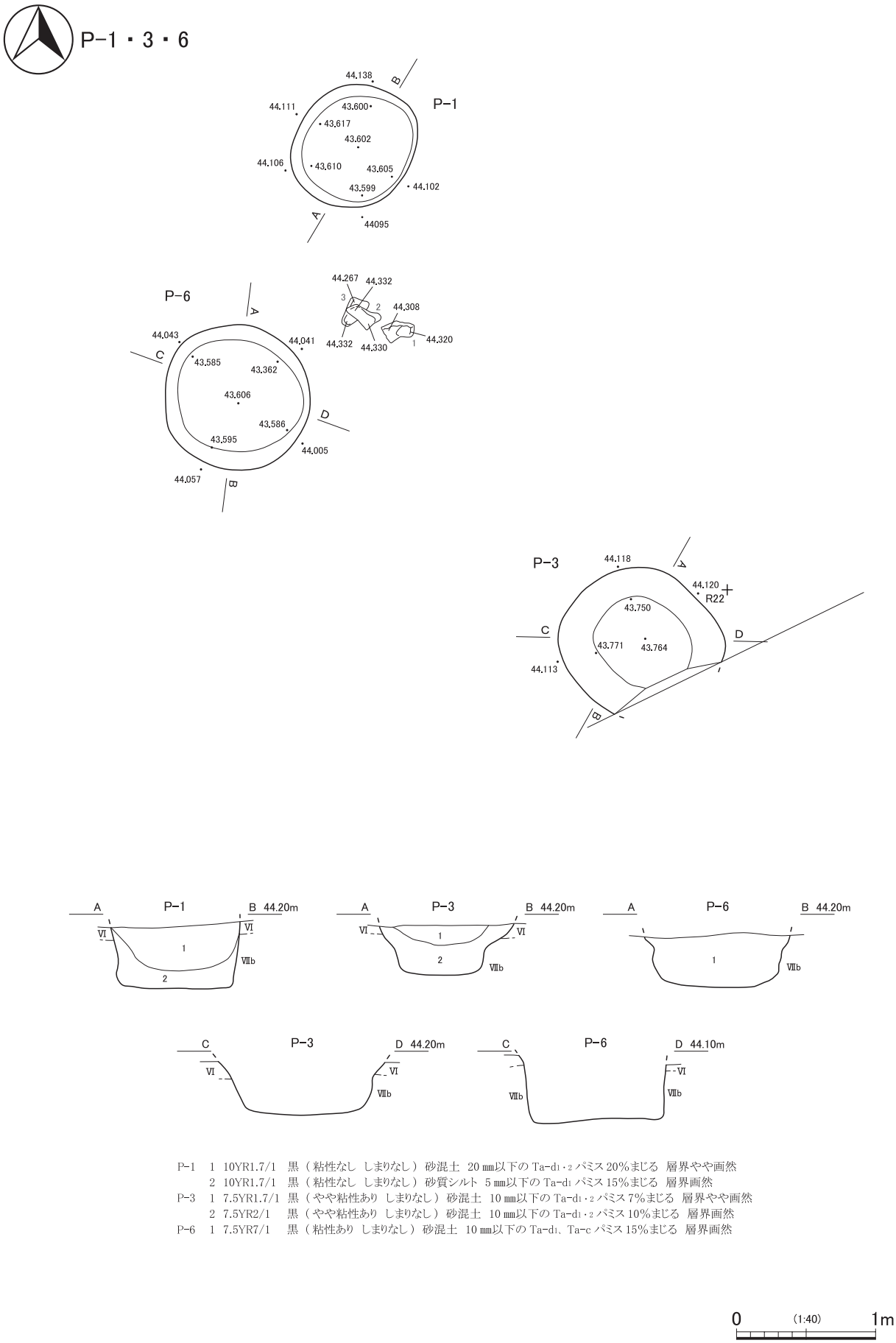
Ｐ－２（図Ⅳ－24、表Ⅳ－１、２、図版13）

位　　置　T35区　　**規　　模**　1.28×1.14／0.98×0.84／0.49m

平面形態　楕円形

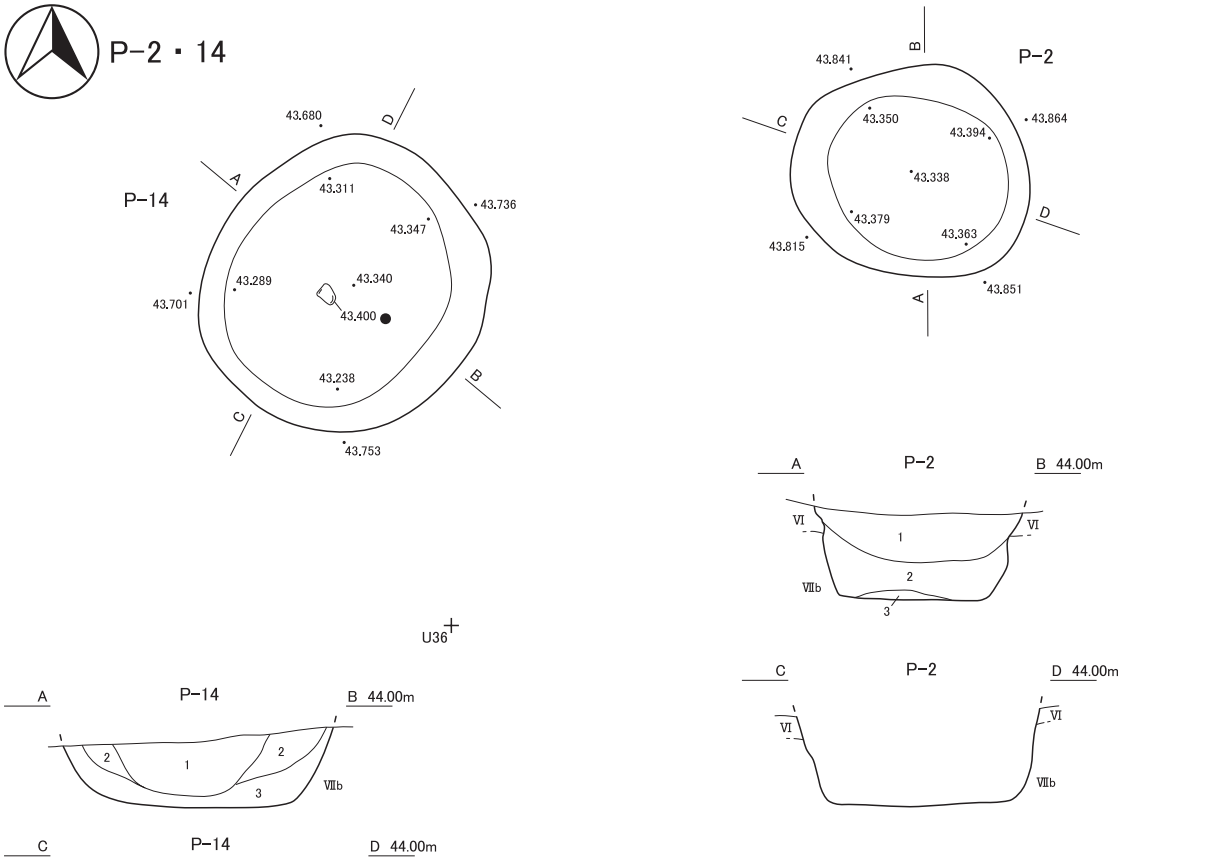
確認・調査　調査区西側の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認を行っていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは比較的明瞭な楕円形を呈していたので、西側を半截してⅦ層まで掘り下げた。坑底を確認できたため土坑とした。平面形は坑口、坑底ともに楕円形。坑底は平坦で壁は急である。

遺物出土状況　覆土からⅡ群a類土器が３点、Ⅳ群a類土器３点、Ｒフレイク３点、フレイク４点。礫・礫片12点が出土している。図示していない。

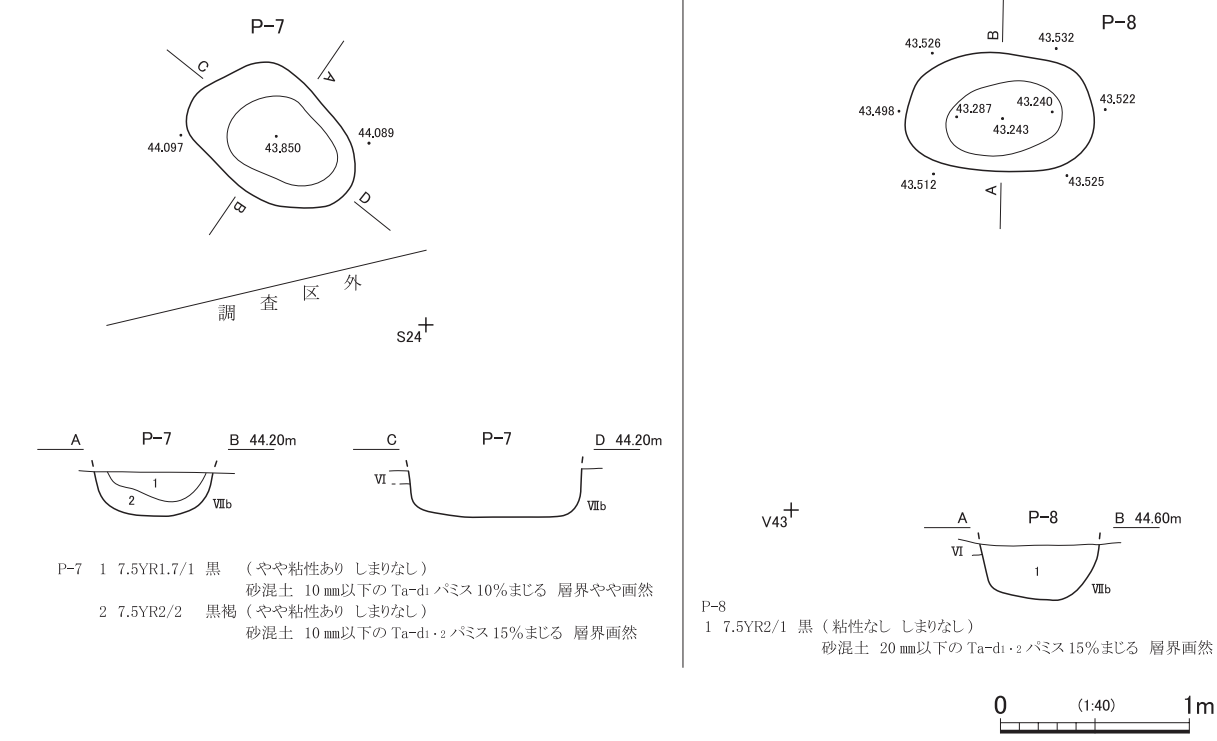


P-1　1　10YR1.7/1　黒（粘性なし　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d1・2 パミス 20%まじる　層界やや画然
　　2　10YR1.7/1　黒（粘性なし　しまりなし）砂質シルト　5㎜以下の Ta-d1 パミス 15%まじる　層界画然
P-3　1　7.5YR1.7/1　黒（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　10㎜以下の Ta-d1・2 パミス 7%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR2/1　黒（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　10㎜以下の Ta-d1・2 パミス 10%まじる　層界画然
P-6　1　7.5YR7/1　黒（粘性あり　しまりなし）砂混土　10㎜以下の Ta-d1、Ta-c パミス 15%まじる　層界画然

図Ⅳ－23　P－１・３・６



P−2　1　10YR1.7/1　黒　（粘性なし　しまりなし）シルト質土　30 ㎜以下の Ta−d2 パミス 20%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta−d2 パミス 50 ～ 60%まじる　層界やや画然
　　3　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta−d2 パミス 70 ～ 80%まじる　層界画然
P−14　1　7.5YR1.7/1　黒　（粘性なし　しまりなし）シルト質土　20 ㎜以下の Ta−d2 パミス 20%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR2/1　黒褐（粘性なし　しまりなし）シルト質土　20 ㎜以下の Ta−d2 パミス 7%まじる　層界やや画然
　　3　7.5YR2/1　黒褐（粘性なし　しまりなし）シルト質土　20 ㎜以下の Ta−d2 パミス 20%まじる　層界画然



P−7　1　7.5YR1.7/1　黒　（やや粘性あり　しまりなし）
　　砂混土　10 ㎜以下の Ta−d1 パミス 10%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR2/2　黒褐（やや粘性あり　しまりなし）
　　砂混土　10 ㎜以下の Ta−d1・2 パミス 15%まじる　層界画然

P−8
1　7.5YR2/1　黒（粘性なし　しまりなし）
　　砂混土　20 ㎜以下の Ta−d1・2 パミス 15%まじる　層界画然

図Ⅳ−24　P−２・７・８・14

覆　　土　３層に分層した。上位の１層はレンズ状に堆積する黒色土。中位の２層、坑底付近の３層は黒褐色土でTa-dパミスを50％以上混じる。３層とも埋戻しとみられる。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、周囲の遺構検出状況、覆土の色調から縄文時代晩期のものである可能性がある。

Ｐ－３（図Ⅳ－23、33、表Ⅳ－１、２、６、図版13、14、27）

位　　置　Q・R22区　　**規　　模**　1.04×(0.94)／0.60×(0.65)／0.38m

平面形態　不整円形

確認・調査　調査区東側の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認を行っていたとところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは一部南東側調査区外に延長していたが明瞭であったため、北西側を半截した。その結果、明瞭な壁と坑底を確認し土坑とした。平面形は坑口がいびつな円形で坑底は楕円形である。坑底はやや平坦で、壁は急であるが、坑口付近で緩やかとなる。

遺物出土状況　覆土からⅡ群a類土器１点、Ⅲ群a類土器１点等が出土している。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスが混じる黒色土である。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、周囲で検出される遺構、土層の色調から、縄文時代晩期のものとみられる。

掲載遺物　２は覆土から出土したⅡ群a類土器。太いRL斜行縄文を地文とする。

Ｐ－４（図Ⅳ－25、34、表Ⅳ－１、２、７、図版13、14、26）

位　　置　P・Q21区　　**規　　模**　1.89×1.78／1.42×1.46／0.50m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認を行っていたところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは明瞭であったため、西側を半截してⅦ層まで掘り下げた。結果坑底と壁を確認し土坑とした。平面形は坑口、坑底ともにほぼ円形、坑底はほぼ平坦であるが、中心部がややくぼんでいる。壁は急である。P－５と南西0.15mの位置に接している。

遺物出土状況　覆土からⅠ群b類土器２点、たたき石３点、礫・礫片13点が出土している。たたき石は図化した１点以外は小片である。

覆　　土　４層に区分した。上位の１層はくぼみに堆積するⅤ層に相当する自然堆積。２、３層はTa-dパミスが15％以上混じる黒褐色土。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、覆土の色調とややまとまって検出される類似した円形土坑の検出状況から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

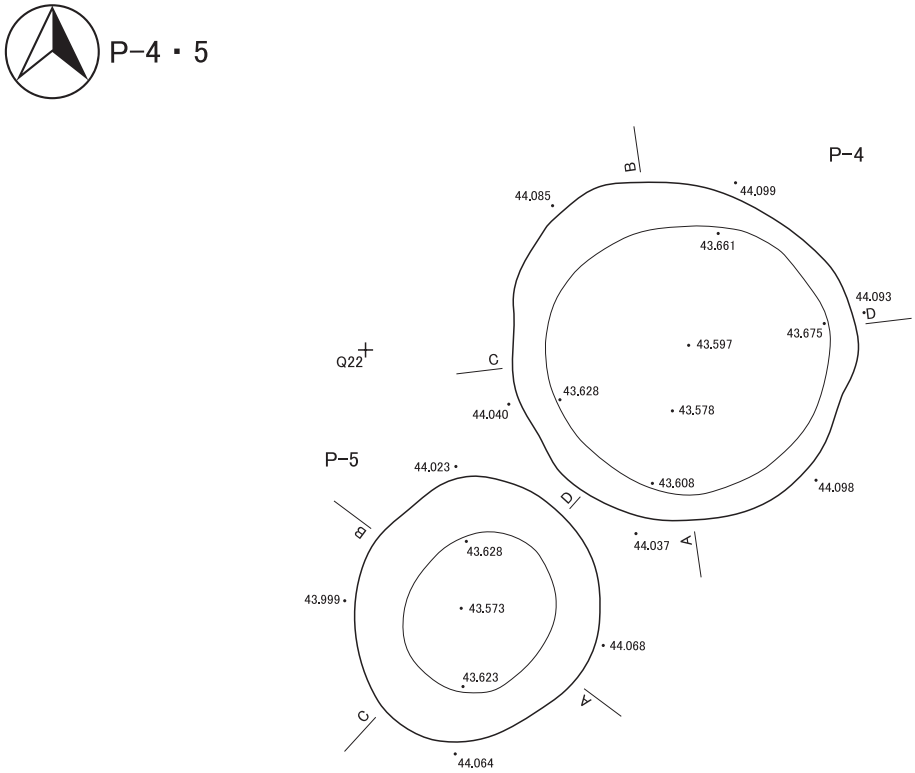
掲載遺物　１はたたき石。細長い扁平礫の表裏面に敲打痕があるもの。敲打痕は明瞭にくぼんでいる。砂岩製。

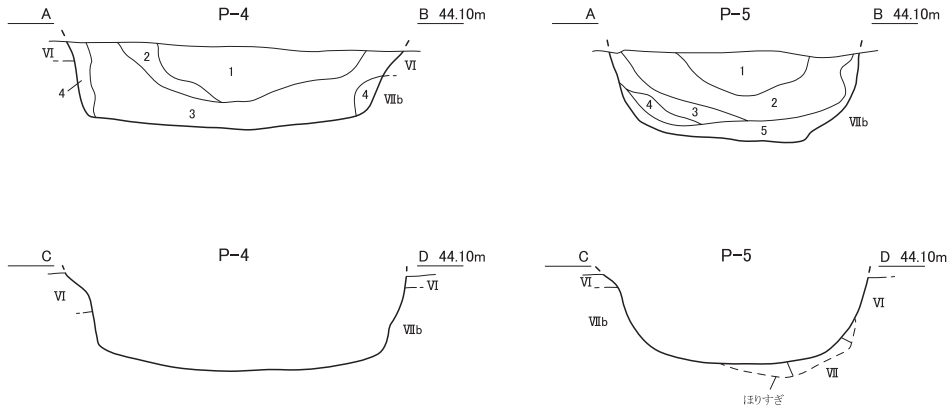
Ｐ－５（図Ⅳ－25、表Ⅳ－１、２、図版13、14）

位　　置　Q21、22区　　**規　　模**　1.41×1.30／0.84×0.80／0.47m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認を行っていたところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは極めて明瞭に把握できたので、南西側を半截してⅦ層まで掘り下げた。結果坑底と壁を検出し、土坑であることがわかった。平面形は坑口、坑底ともに円形、坑底は平坦面が少なく、碗状を呈する。壁は急激に立ち上がり、坑口付近ではほぼ垂直である。北東0.15mに接してP－１が位置する。





P−4　1　7.5YR2/1　黒　（やや粘性あり しまりなし）砂混土　15㎜以下の Ta−d1・2 パミス 7%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta−d2 パミス 70%まじる　層界画然
　　3　7.5YR2/1　黒　（粘性なし しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta−d1・2 パミス 15%まじる　層界画然
　　4　7.5YR4/2　灰褐（粘性なし しまりなし）砂質土　20㎜以下の Ta−d2 パミス 10%まじる　層界漸変
P−5　1　7.5YR1.7/1　黒　（粘性なし しまりなし）シルト質土　20㎜以下の Ta−d1・2 パミス 10%まじる　層界画然
　　2　7.5YR1.7/1　黒　（粘性なし しまりなし）砂混シルト　Ta−c 砂 80%以上　10㎜以下の Ta−d2 パミス 3%まじる　層界画然
　　3　7.5YR2/1　黒　（粘性なし しまりなし）砂質土　Ta−c 砂 30%以上　10㎜以下の Ta−d2 パミス 3%まじる　層界画然
　　4　2.5Y6/2　灰黄（粘性なし しまりなし）砂　Ta−c 砂 90%以上からなる　層界画然
　　5　2.5YR1.7/1　黒　（粘性なし しまりなし）砂質土　20㎜以下の Ta−d2 パミス 10%まじる　層界画然

0　(1:40)　1m

図Ⅳ−25　P−４・５

遺物出土状況　覆土からⅠ群b類土器１点、礫・礫片６点が出土している。

覆　　土　５層に分層した。覆土の中～下位を占める２～４層は、Ta-c起源とみられる灰色砂で構成されるか多量に混じる堆積である。掘り込み面はⅢ層である。

時　　期　遺構の形状、周囲の遺構検出状況、土層の状況から、縄文時代晩期後葉Ta-c降下後に掘削されたものと判断される。

Ｐ－６（図Ⅳ－23、33、表Ⅳ－１、２、５、図版13、14、27）

位　　置　Q22区　　**規　　模**　1.08×1.06／0.86×0.86／0.48m

平面形態　不整円形

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みは明瞭であったので、西側を半截してⅦ層まで掘り下げた。結果坑底と壁を検出し、土坑であることがわかった。平面形は坑口、坑底ともに不整な円形を呈する。坑底は概ね平坦で壁はやや緩やかである。北東約１mにP－１が位置する。

遺物出土状況　覆土からⅠ群b類土器１点、Ⅲ群b類土器２点、礫・礫片５点が出土している。

覆　　土　Ta-c,dパミスの混じる黒褐色土の単層である。掘り込み面はⅢ層である。

時　　期　遺構の形状、周囲の検出状況、土層の状況から、縄文時代晩期後葉Ta-c降下後に掘削されたものと判断される。

掲載遺物　３、４は覆土から出土したⅢ群b類土器。３は口縁部。口唇に沿って貼付帯がつけられ、縄線と縄線による刻みが施される。口頸部には縄文地に沈線がつけられている。

Ｐ－７（図Ⅳ－24、表Ⅳ－１、２、図版14）

位　　置　R24区　　**規　　模**　0.95×0.65／0.60×0.42／0.25m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区中央部の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面において遺構確認調査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの短軸に合わせて北西側を半截すると明瞭な壁と坑底を確認できたため、土坑と判断した。平面形は坑口、坑底ともにいびつな楕円形。坑底は長軸方向にやや平坦で短軸では碗状を呈する。壁は急で坑口付近は直立する。

遺物出土状況　覆土からⅠ群b類土器１点、メノウの礫１点、礫片１点が出土している。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスの混じる黒～黒褐色土で埋戻し様であるが、上位のレンズ状に堆積する１層は自然堆積の可能性がある。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　土坑の形状、周囲の土坑の状況、覆土の色調から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

Ｐ－８（図Ⅳ－24、表Ⅳ－１、２、図版14）

位　　置　T42区　　**規　　模**　1.00×0.62／0.60×0.38／0.28m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区西端の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認作業を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの短軸に合わせて西側を半截すると、明瞭な坑底と壁が確認できたため土坑であることがわかった。平面形は坑口、坑底ともに楕円形、坑底の平坦面は狭く、断面形はやや碗状である。

遺物出土状況　覆土から礫１点が出土している。

覆　　土　Ta-dパミスを混じる黒色土の単層である。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、形状と周囲の遺構検出状況から、縄文時代晩期である可能性が高い。

Ｐ－９（図Ⅳ－26、表Ⅳ－１、２、図版14）

位　　置　U40、41区　　**規　　模**　0.82×064／0.24×0.20／0.19m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東側平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの短軸西側を半截した結果、明瞭な坑底と壁を確認したため土坑と判断した。平面形は坑口、坑底ともに楕円形。坑底の平坦面は小さく、断面形は碗状を呈する。約１m東にP－10が位置する。

遺物出土状況　覆土から黒曜石のフレイク１点、礫片２点が出土している。

覆　　土　Ta-dパミスが混じる黒色土の単層である。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、形状と周囲の遺構検出状況から、縄文時代晩期である可能性が高い。

Ｐ－10（図Ⅳ－26、表Ⅳ－１、２、図版14）

位　　置　U40区　　**規　　模**　0.66×0.45／0.40×0.29／0.16m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東側平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの短軸北側を半截した結果、明瞭な坑底と壁が確認できたため土坑と判断した。平面形は坑口、坑底ともに楕円形。坑底の平坦面は小さく、断面形は碗状を呈する。約１m西にP－９が位置する。

遺物出土状況　覆土から黒曜石のフレイクが２点出土している。

覆　　土　Ta-dパミスが混じる黒色土の単層である。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、形状と周囲の遺構検出状況から、縄文時代晩期である可能性が高い。

Ｐ－11（図Ⅳ－28、表Ⅳ－１、２、図版15）

位　　置　T34区　　**規　　模**　1.81×1.50／0.80×0.81／0.70m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東側の平坦面に位置する。Ⅶ層上面を精査していたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの形状が不明瞭であったため、落ち込みの中心を通るトレンチを設定して10cm掘り下げた。結果落ち込みの輪郭をとらえることができたので、トレンチの南西側を半截した。Ⅶ層まで掘り下げると壁、坑底を明瞭に検出したので、土坑と判断した。平面形は坑口で楕円形、坑底は円形を呈する。坑底は平坦であるが、壁はやや急である。北東側１mの距離にP－12が位置する。

遺物出土状況　覆土から礫１点が出土している。

覆　　土　３層に区分した。Ⅵ層とⅥ層にTa-dパミスが混じる堆積である。埋め戻されていると推定される。堆積状況はP－12に類似する。掘り込み面はⅥ層とみられる。

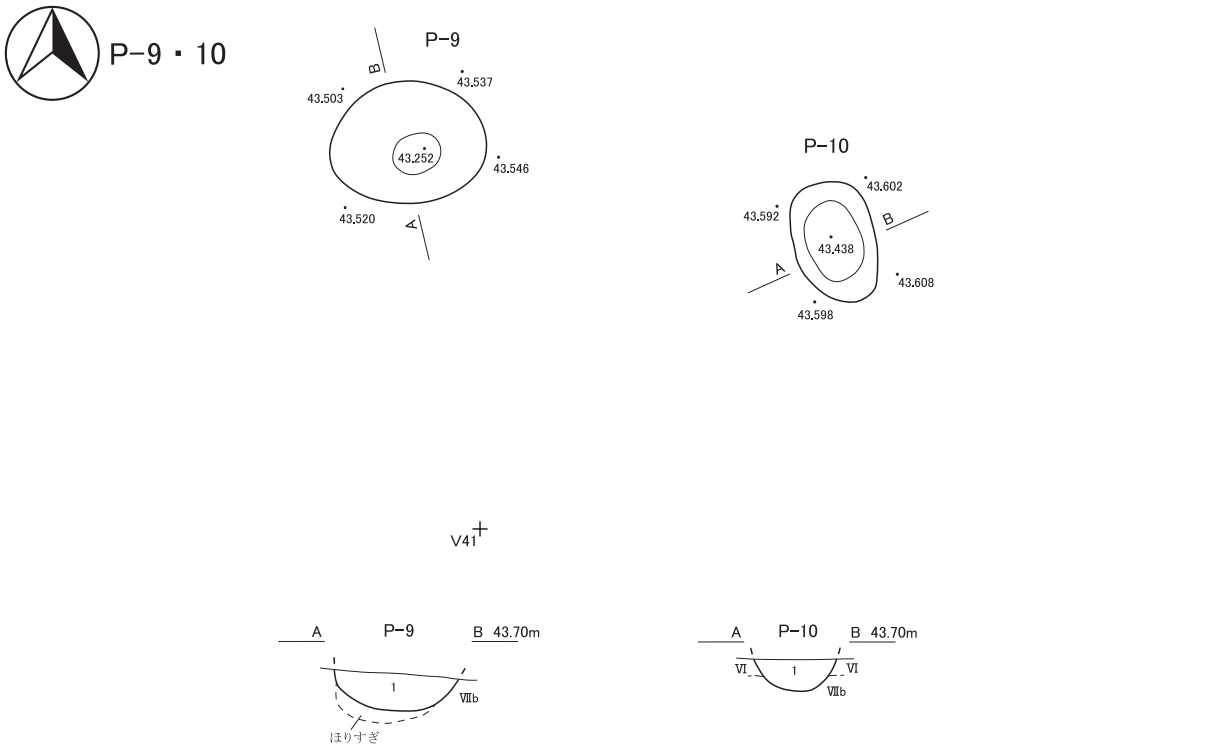
時　　期　覆土の色調と周囲の遺構検出状況から、縄文時代早期後半～前期前半のものと推察される。

Ｐ－12（図Ⅳ－28、表Ⅳ－１、２、図版15）

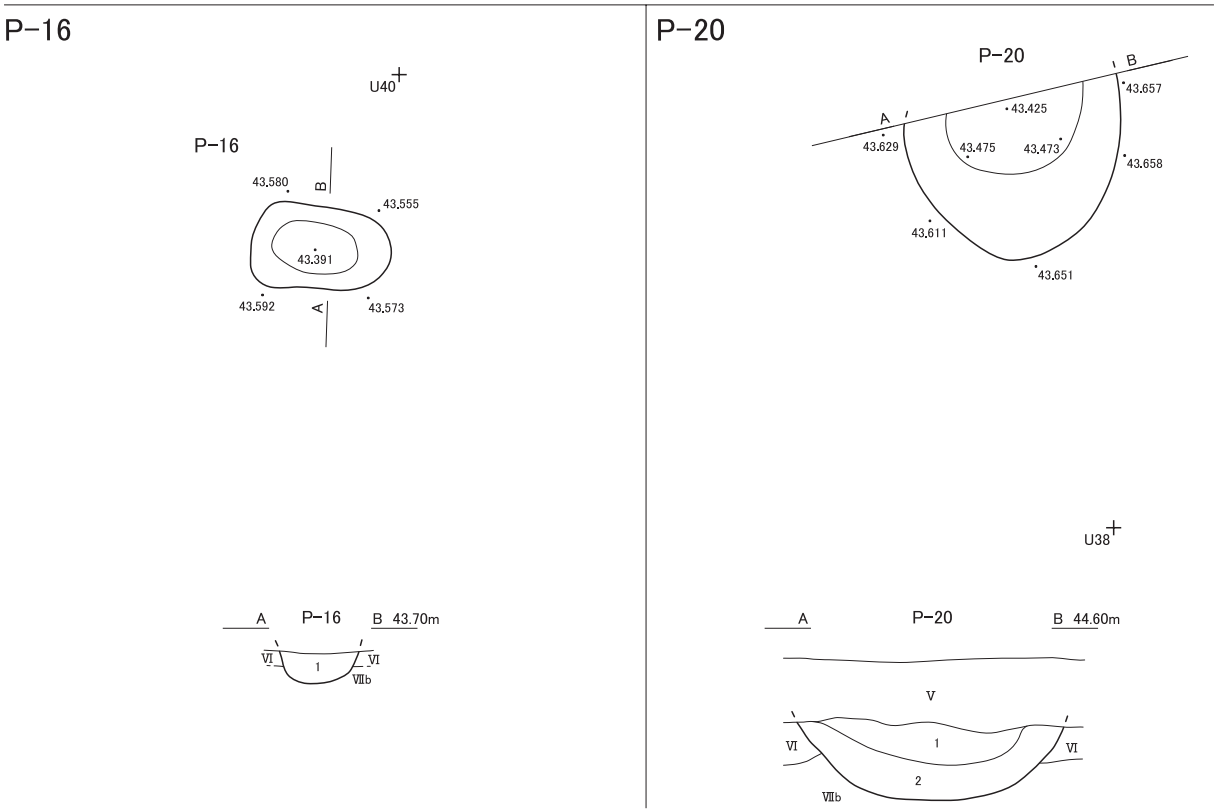
位　　置　T34区　　**規　　模**　1.38×1.14／0.90×0.78／0.44m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東側の平坦面に位置する。Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは不明瞭であったので、短軸方向にトレンチを設定して10cm掘り下げた。結果明瞭な輪郭を検出することができた。トレンチに合わせて北東側を半截したところ、坑底と壁を検出できたので土坑とした。平面形は坑口、坑底ともに楕円形。坑底は平坦で壁は急であ



P−8,9　1　7.5YR2/1　黒（粘性なし　しまりあり）砂混土　20 ㎜以下の Ta−d1・2 パミス 15％まじる　層界画然



P−16　1　7.5YR2/1　黒　（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta−d2 パミス 10％まじる　層界やや画然
P−20　1　10YR2/1　黒　（粘性なし　しまりなし）砂混シルト　5 ㎜以下の Ta−d1・2 パミス 10％まじる　層界やや画然
　　2　10YR2/2　黒褐（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta−d2・1 パミス 10％まじる　層界画然

0　(1:40)　1m

図Ⅳ−26　P−９・10・16・20

る。南西約１mにP－11が位置し、北東にP－15が、東にP－27が１m以内に近接する。覆土の色調が類似するため、同時期の遺構の可能性がある。遺物は出土していない。

覆　　土　３層に分層した。Ta-dパミスの混じる黒褐色～暗褐色土である。掘り込み面はⅥ層とみられる。

時　　期　周囲の遺構検出状況、堆積状況の類似から、縄文時代早期後半～前期前半のものとみられる。

Ｐ－13（欠番）

位　　置　T36区　　**規　　模**　-

平 面 形 態　-

確 認・調 査　T36区に位置するものであるが、調査終了後、坑底がしまりのない粘土で構成されており、根跡に類する自然の痕跡と判断し、欠番扱いとした。

Ｐ－14（図Ⅳ－24、33、表Ⅳ－１、２、６、図版16、27）

位　　置　T35、36区　　**規　　模**　1.56×1.44／1.29×1.09／0.38m

平 面 形 態　楕円形

確 認・調 査　調査区西側平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは極めて明瞭であったので、南西側を半截した。その結果坑底と壁を明瞭に検出できたので、土坑であることがわかった。平面形は坑口、坑底ともに楕円形。坑底は平坦で壁は急である。1.5m東にP－２が位置する。

遺物出土状況　坑底の中心付近から砂岩の礫１点が出土している。覆土からはⅠ群b類土器４点、Ⅲ群b類土器１点、黒曜石のフレイク11点、礫・礫片15点が出土している。覆土の状況から土坑墓の可能性があり、礫は副葬されたものであるかもしれない。

覆　　土　３層に分層した。Ta-dパミスが混じる埋戻しとみられる堆積である。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

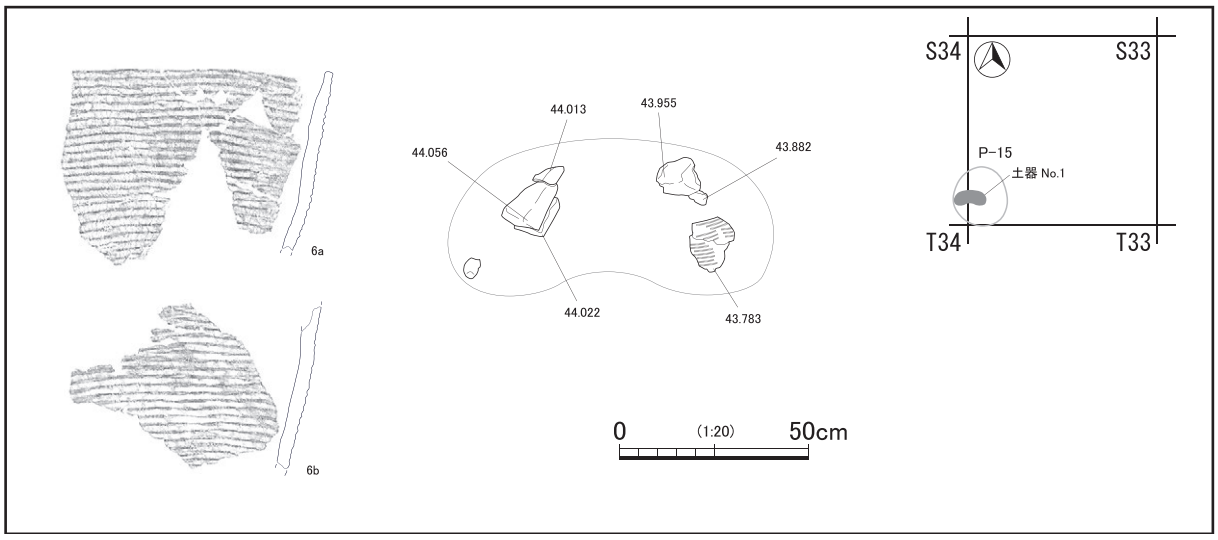
時　　期　土坑の形状、付近の遺構検出状況から、縄文時代晩期のものとみられる。

掲 載 遺 物　５は覆土から出土したⅢ群b類土器。RL斜行縄文を地文とする。

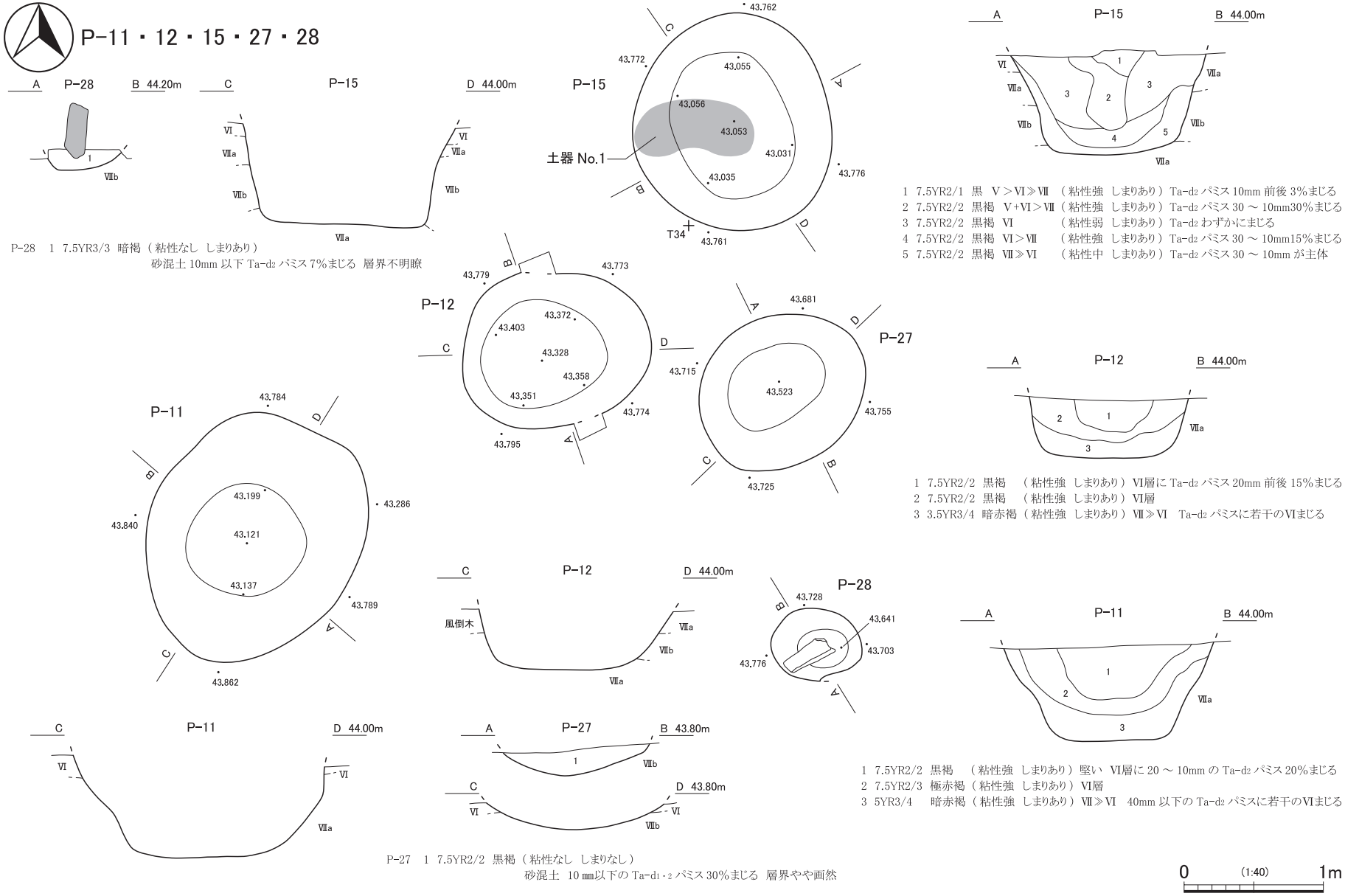
Ｐ－15（図Ⅳ－27、28、33、表Ⅳ－１、２、６、図版16、27）

位　　置　S33、34区　　**規　　模**　1.54×1.42／1.05×0.82／0.72m

平 面 形 態　楕円形



図Ⅳ－27　Ｐ－15検出面遺物出土状況



P-28　1　7.5YR3/3　暗褐（粘性なし　しまりあり）
砂混土 10mm 以下 Ta-d2 パミス 7%まじる　層界不明瞭

1　7.5YR2/1　黒　Ⅴ＞Ⅵ≫Ⅶ　（粘性強　しまりあり）Ta-d2 パミス 10mm 前後 3%まじる
2　7.5YR2/2　黒褐　Ⅴ+Ⅵ＞Ⅶ（粘性強　しまりあり）Ta-d2 パミス 30 ～ 10mm30%まじる
3　7.5YR2/2　黒褐　Ⅵ　（粘性弱　しまりあり）Ta-d2 わずかにまじる
4　7.5YR2/2　黒褐　Ⅵ＞Ⅶ　（粘性強　しまりあり）Ta-d2 パミス 30 ～ 10mm15%まじる
5　7.5YR2/2　黒褐　Ⅶ≫Ⅵ　（粘性中　しまりあり）Ta-d2 パミス 30 ～ 10mm が主体

1　7.5YR2/2　黒褐　（粘性強　しまりあり）Ⅵ層に Ta-d2 パミス 20mm 前後 15%まじる
2　7.5YR2/2　黒褐　（粘性強　しまりあり）Ⅵ層
3　3.5YR3/4　暗赤褐（粘性強　しまりあり）Ⅶ≫Ⅵ　Ta-d2 パミスに若干のⅥまじる

1　7.5YR2/2　黒褐　（粘性強　しまりあり）堅い　Ⅵ層に 20 ～ 10mm の Ta-d2 パミス 20%まじる
2　7.5YR2/3　極赤褐（粘性強　しまりあり）Ⅵ層
3　5YR3/4　暗赤褐（粘性強　しまりあり）Ⅶ≫Ⅵ　40mm 以下の Ta-d2 パミスに若干のⅥまじる

P-27　1　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）
砂混土　10 mm以下の Ta-d1・2 パミス 30%まじる　層界やや画然

図Ⅳ－28　P－11・12・15・27・28

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅴ～Ⅵ層を調査していたところ、Ⅱ群a類土器の比較的大きな破片と砂岩礫片が出土した。伴う遺構を想定して周囲を精査したが、落ち込みなどは検出できなかった。念のため遺物を残してⅦ層まで掘り下げると、土器片を中心とした暗褐色土の落ち込みが検出された。落ち込みは比較的明瞭であったため、北西側を半截した。結果明瞭な坑底と壁を検出できたので、土坑と判断した。平面形は坑口がほぼ円形、坑底は楕円形である。坑底はほぼ平坦で壁は急である。南側にP－27、南西にP－12が、１m以内の距離で接している。

遺物出土状況　検出面でⅡ群a類土器５点、覆土から黒曜石フレイク３点等が出土している。

覆　　土　５層に分層した。Ta-dパミスが混じる黒～黒褐色土の堆積である。埋戻しとみられる。掘り込み面はⅥ層とみられる。

時　　期　不明であるが、検出面の土器、覆土の色調から、縄文時代早期後半もしくは前期前葉の可能性が高い。遺物が少ないこともその裏付けとなる。

掲載遺物　６a、bは検出面で出土したⅡ群a類土器。条が横走気味となるよう太い原体によるRL斜行縄文が施文され、施文後に条に沿ってナデ調整されている。内面は平滑に調整され、口縁の頂部は平坦面がある。

Ｐ－16（図Ⅳ－26、表Ⅳ－１、２、図版16）

位　　置　U40　　**規　　模**　0.74×0.44／0.46×0.27／0.17m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みは明瞭であったので、西側を半截した。坑底を明瞭に検出したため、土坑と判断した。平面形は坑口が不整楕円形、坑底が楕円形である。坑底の平坦面は少なく断面は碗状を呈する。遺物は出土していない。

覆　　土　Ta-dパミスの混じる黒色土の単層である。掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、形状と周囲の遺構検出状況から、縄文時代晩期のものの可能性がある。

Ｐ－17（図Ⅳ－29、表Ⅳ－１、２、図版16）

位　　置　U37区　　**規　　模**　1.29×1.05／(0.30)×0.40／0.36m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは不明瞭であったため、短軸上にトレンチを設定してⅦ層まで掘り下げた。結果明瞭な断面を確認できたため、土坑と判断した。トレンチから南西部分を半截したが、坑底を掘り下げすぎてしまい坑口の輪郭以外は図化していない。平面形は楕円形。浅い土坑であるが、中位に段があり坑底は碗状を呈する。

覆　　土　２層に分層した。いずれもTa-dパミスの混じる黒褐色土である。掘り込み面はⅥ層とみられる。

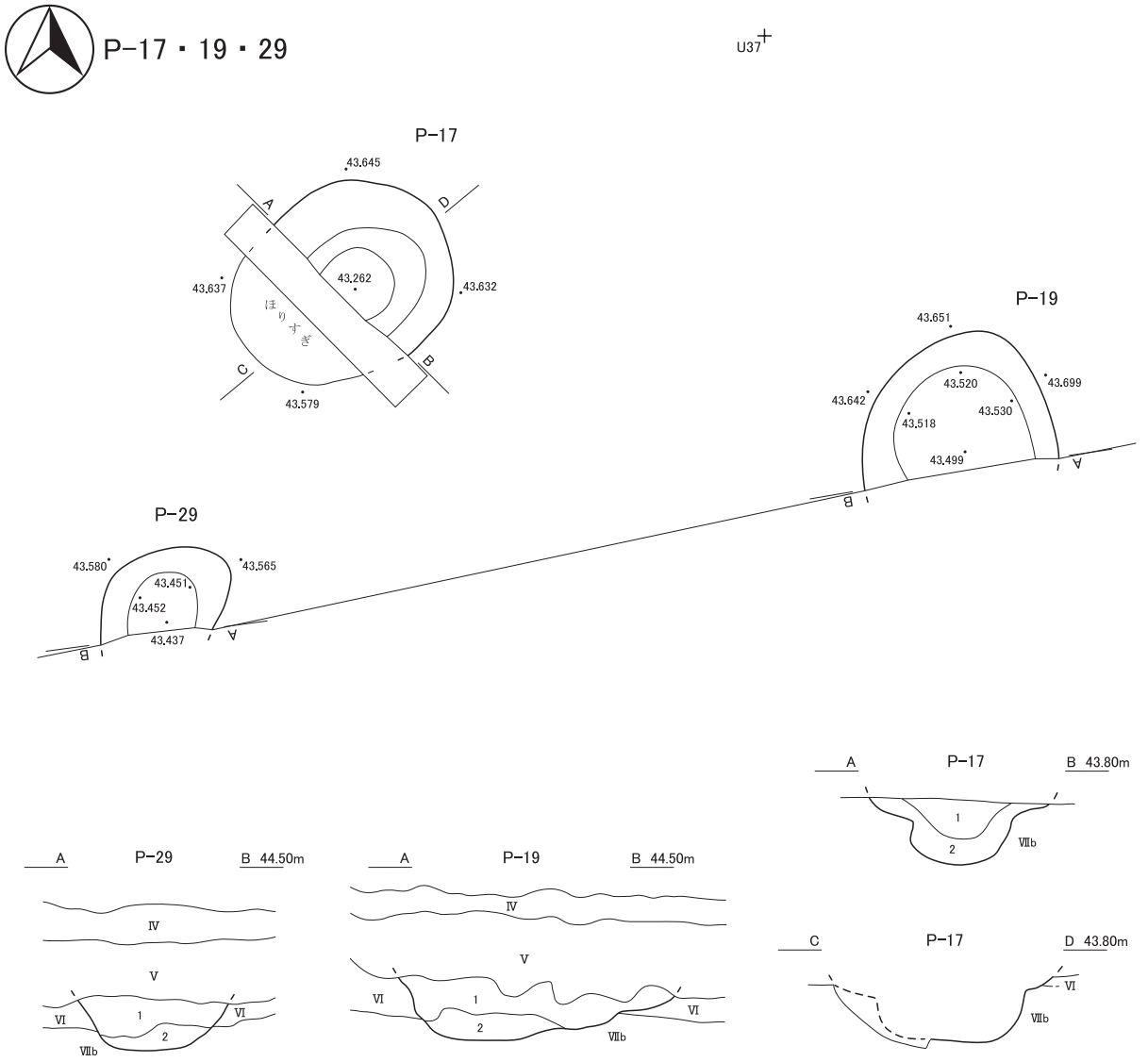
時　　期　不明であるが、覆土の色調から、縄文時代早期後半か前期前半の可能性が高い。

Ｐ－18（図Ⅳ－32、表Ⅳ－１、２、図版17）

位　　置　R29区　　**規　　模**　0.62×0.46／0.36×0.30／0.46m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区中央部、沢地形の北側斜面に位置する。Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの輪郭が明瞭であったので、西側を半截した。結果、明瞭な坑底と壁を確認できたので、土坑と判断した。平面形は坑口、坑底ともに楕円形。坑底の平坦



P-17　1　10YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりあり）砂混土　10 ㎜以下の Ta-d_2 パミス 7%まじる　層界やや画然
　　2　10YR3/2　黒褐（粘性なし　しまりあり）砂混土　20 ㎜以下の Ta-$d_{1\cdot2}$ パミス 10%まじる　層界画然
P-19　1　10YR2/3　黒褐（粘性なし　ややしまりあり）砂混土　20 ㎜以下の Ta-$d_{2\cdot1}$ パミス 10%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR3/3　暗褐（粘性なし　しまりあり）砂混土　30 ㎜以下の Ta-d_2 パミス 40%まじる　層界やや画然
P-29　1　10YR2/3　黒褐（粘性なし　ややしまりあり）砂混土　30 ㎜以下の Ta-d_2 パミス 15%まじる　層界やや画然
　　2　10YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20 ㎜以下の Ta-$d_{2\cdot1}$ パミス 10%まじる　層界画然

0　(1:40)　1m

図Ⅳ−29　P−17・19・29

面は小さく断面は「U」字状を呈する。遺物は出土していない。

覆　　土　３層に分層した。Ta-dパミスの混じる黒色土であるが、下位にTa-dパミスで構成される層位を挟んでいる。掘り込み面はⅤ層中であるとみられる。

時　　期　不明であるが、覆土の色調から、縄文時代中期以降、晩期Ta-c降下以前と推定される。

Ｐ－19（図Ⅳ－29、表Ⅳ－１、２、図版17）

位　　置　U36区　　**規　　模**　1.10×(0.76)／0.75×(0.56)／0.32m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは比較的明瞭であったが南側調査外に延びていた。調査区境を土層断面として掘り下げると、明瞭な坑底を確認できたので、土坑と判断した。平面形は確認できた部分では楕円形、坑底は平坦で壁は緩やかである。遺物は出土していない。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスが混じる黒褐色～暗褐色土である。掘り込み面はⅥ層下部からⅦ層上面である。

時　　期　掘り込み面から、縄文時代早期後半ないし前期前半である。

Ｐ－20（図Ⅳ－26、表Ⅳ－１、２、図版17）

位　　置　T37、38区　　**規　　模**　1.15×(0.84)／0.73×(0.40)／0.39m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅶ層上面において遺構確認の精査を行っていたところ、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは北側調査区外に延びていたため、調査区境界で土層断面図を作成することにし落ち込みを掘削した。結果坑底を明瞭に確認できたので、土坑であると判断した。平面形は検出できた部分では円形を呈する。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかである。遺物は出土していない。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスが混じる黒～黒褐色土である。掘り込み面はⅥ層である。

時　　期　掘り込み面から、縄文時代中期～後期とみられる。

Ｐ－21（図Ⅳ－30、表Ⅳ－１、２、図版17）

位　　置　S30区　　**規　　模**　1.87×1.36／(0.60)×0.87／0.15m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区中央部の沢状地形西側斜面に位置する。Ⅶ層上面を精査していたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの輪郭が明瞭であったため、南東側を半截した。結果浅い坑底を検出したが不明瞭でありさらに掘り下げた。しかし、断面に明瞭な坑底を確認できたため、半截分の坑底を掘りぬいたことを認識した。断面形は明瞭であったため、土坑と判断した。平面形は楕円形である。浅い皿状で坑底と壁は極めて緩やかに連続している。1.2m北東にＰ－22が位置する。

遺物出土状況　覆土から黒曜石のフレイクが２点出土している。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスを混じる黒色～黒褐色土の堆積である。

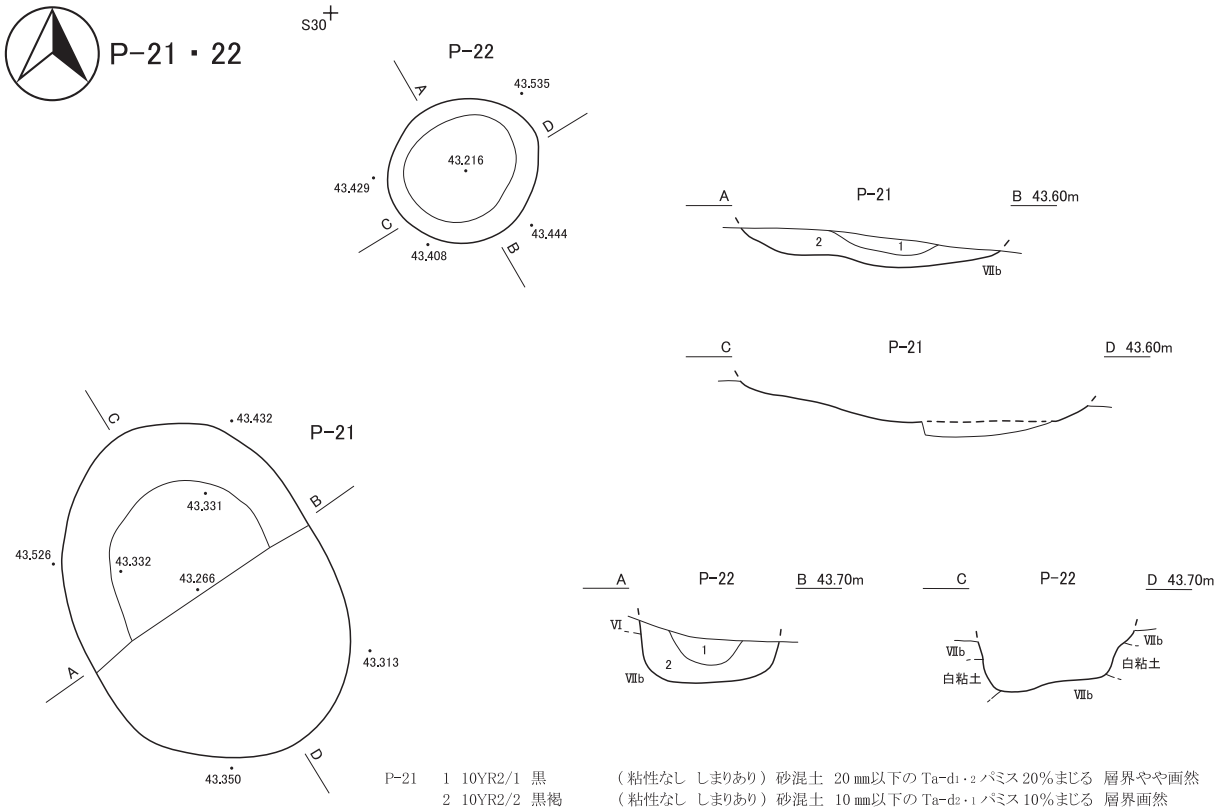
時　　期　覆土の色調から、縄文時代早期後半～前期前半のものとみられる。

Ｐ－22（図Ⅳ－30、表Ⅳ－１、２、図版17）

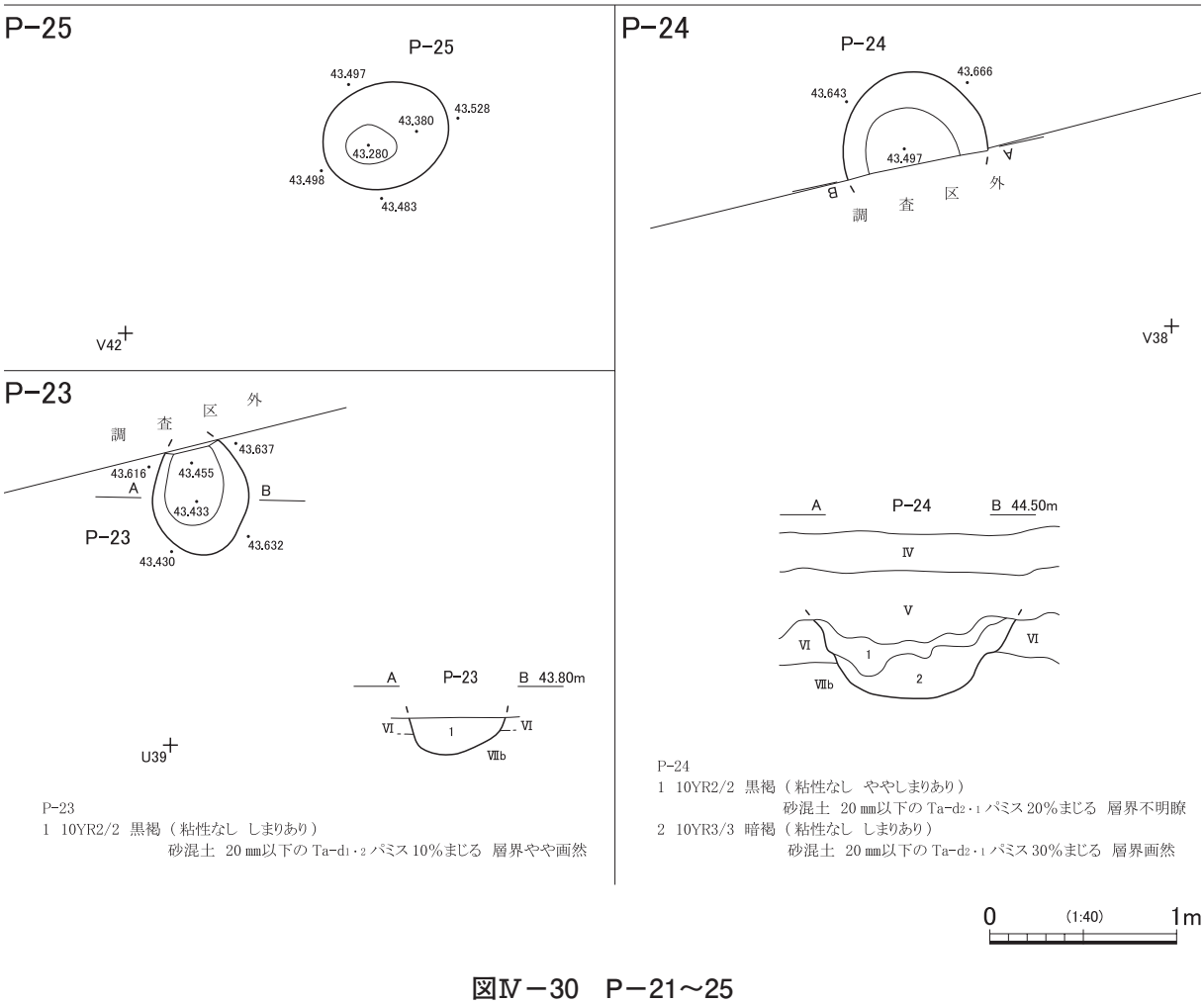
位　　置　S29区　　**規　　模**　0.84×0.76／0.60×0.53／0.29m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区中央部の沢状地形西側斜面に位置する。Ⅶ層上面を精査していたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの輪郭が明瞭であったため、南西側を半截した。結果明瞭な断



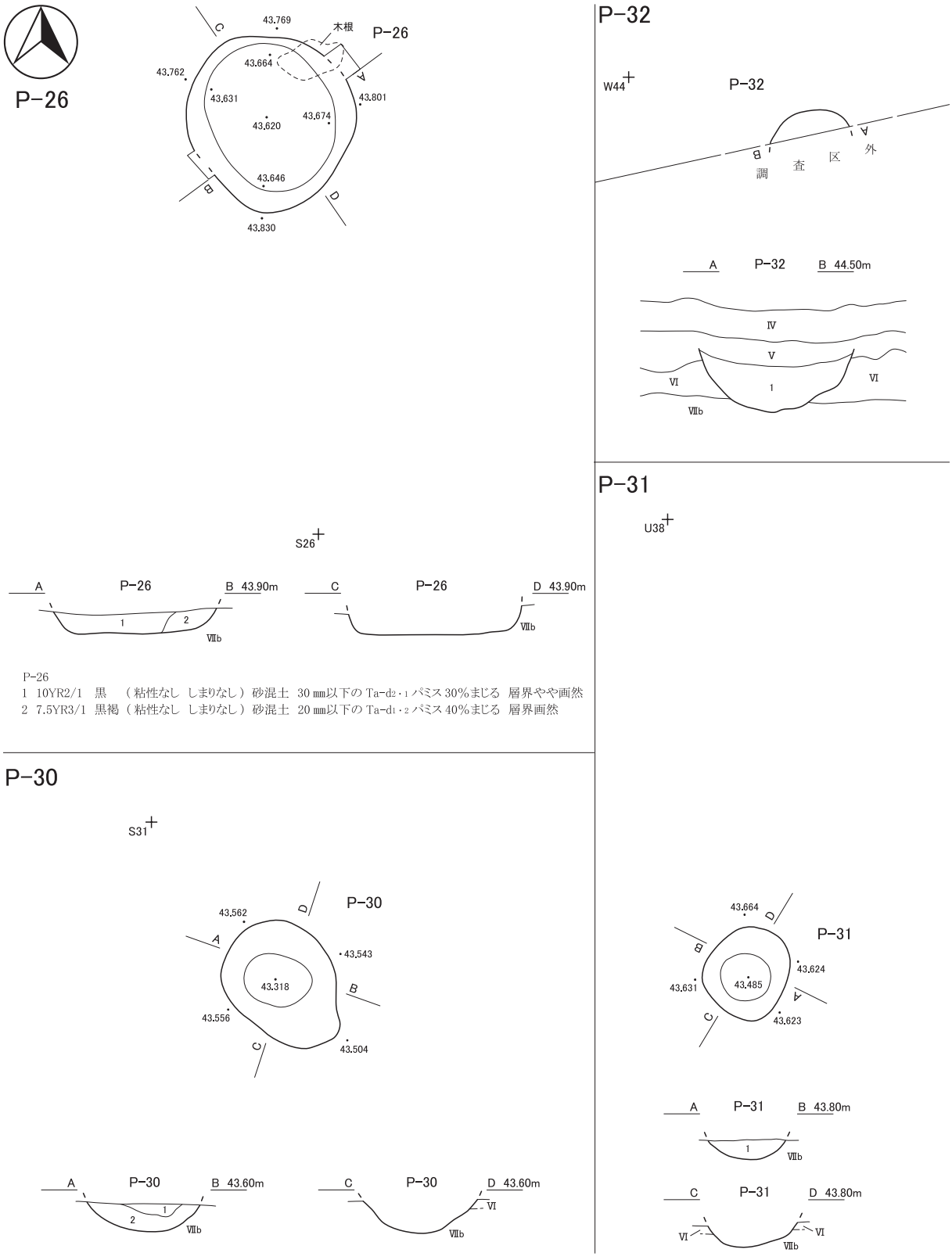
P−21　1　10YR2/1　黒　（粘性なし　しまりあり）砂混土　20㎜以下の Ta-d1・2 パミス 20%まじる　層界やや画然
　　2　10YR2/2　黒褐　（粘性なし　しまりあり）砂混土　10㎜以下の Ta-d2・1 パミス 10%まじる　層界画然
P−22　1　10YR3/4　暗褐　（粘性なし　しまりあり）砂　5㎜以下の Ta-d1・2 パミス 10%まじる　層界やや画然
　　2　10YR4/3　にぶい黄褐（やや粘性あり　しまりあり）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 20%まじる　層界やや画然



P−23
1　10YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりあり）
　　砂混土　20㎜以下の Ta-d1・2 パミス 10%まじる　層界やや画然

P−24
1　10YR2/2　黒褐（粘性なし　ややしまりあり）
　　砂混土　20㎜以下の Ta-d2・1 パミス 20%まじる　層界不明瞭
2　10YR3/3　暗褐（粘性なし　しまりあり）
　　砂混土　20㎜以下の Ta-d2・1 パミス 30%まじる　層界画然

図Ⅳ−30　P−21〜25



P−26
1　10YR2/1　黒　（粘性なし　しまりなし）砂混土　30㎜以下の Ta-d2・1 パミス 30%まじる　層界やや画然
2　7.5YR3/1　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d1・2 パミス 40%まじる　層界画然

P−30　1　10YR2/1　黒　（粘性なし　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d2・1 パミス 7%まじる　層界やや画然
　　2　10YR2/3　黒褐（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d2・1 パミス 7%まじる　層界画然
P−31　1　7.5YR3/1　黒褐（粘性なし　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta-d2 パミス 7%まじる　層界やや画然
P−32　1　10YR2/1　黒　（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　5㎜以下の Ta-d1・2 パミス 7%まじる　層界やや画然

0　(1:40)　1m

図Ⅳ−31　P−26・30〜32

面形を確認したので土坑と判断した。平面形はほぼ円形。坑底は平坦であるが北西側に傾斜している。壁は急である。1.2m南西にＰ－21が位置する。

遺物出土状況　覆土からⅠ群b類土器が１点、礫１点が出土している。

覆　　土　２層に分層した。上位にレンズ状に堆積するTa-dパミスの混じる黒褐色土と、下位の黄褐色土である。埋戻しとみられる。掘り込み面はⅥ層とみられる。

時　　期　不明であるが、覆土の色調から縄文時代中期～後期のものとみられる。

Ｐ－23（図Ⅳ－30、表Ⅳ－１、２、図版17）

位　　置　T38区　　**規　　模**　(0.58)×0.52／(0.39)×0.30／0.20m

平 面 形 態　楕円形

確 認・調 査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは明瞭であったので、短軸の南側を半截した。結果明瞭な坑底を確認できたので、土坑と判断した。北側の一部が調査区外に出るものの、平面形は坑口、坑底ともに楕円形を呈する。坑底の平坦面は小さく、断面形は碗状を呈する。

遺物出土状況　覆土からⅠ群ｂ類土器１点、黒曜石のフレイクが３点等出土している。

覆　　土　Ta-dパミスの混じる黒褐色土の単層である。掘り込み面はⅤ層下部かⅥ層とみられる。

時　　期　不明であるが、縄文時代晩期後半（Ta-c降下以前）のものとみられる。

Ｐ－24（図Ⅳ－30、表Ⅳ－１、２、図版18）

位　　置　U38区　　**規　　模**　0.78×(0.50)／0.49×(0.30)／0.41m

平 面 形 態　楕円形

確 認・調 査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは南側の調査区外に延びていたので、土層断面図を調査区境で作成することにし確認部分を掘り下げた。結果明瞭な坑底を確認できたので、土坑と判断した。確認できた部分では、平面形はほぼ円形。壁は緩やかである。遺物は出土していない。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスの混じる黒褐色～暗褐色土である。掘り込み面はⅥ層である。

時　　期　掘り込み面から、縄文時代中期～後期ごろとみられる。

Ｐ－25（図Ⅳ－30、表Ⅳ－１、２、図版18）

位　　置　U41区　　**規　　模**　0.69×0.56／0.25×0.21／－　m

平 面 形 態　楕円形

確 認・調 査　調査区東側の平坦面に位置する。調査終了後、自然攪乱と判断した黒褐色土を掘り下げていたところ、明瞭に坑底を確認できるものがあった。周囲で検出される縄文時代晩期の土坑と形状が類似しているため、本遺構を土坑とした。よって平面図以外の記録は作成しておらず、遺物も出土していない。

時　　期　不明であるが、周囲の類似の遺構から、縄文時代晩期のものである可能性が高い。

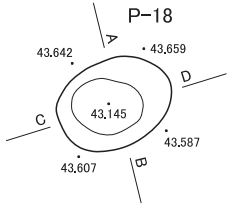
Ｐ－26（図Ⅳ－31、表Ⅳ－１、２、図版18）

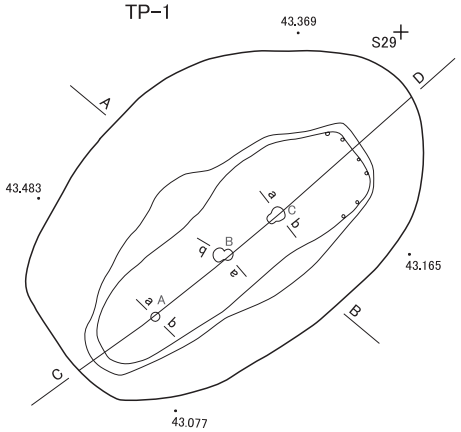
位　　置　R24、25区　　**規　　模**　1.16×1.09／0.99×0.81／0.17m

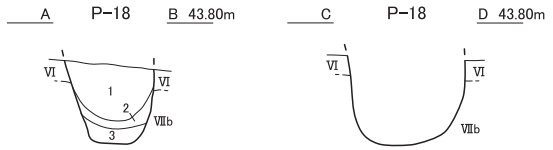
平 面 形 態　楕円形

確 認・調 査　調査区中央部の沢部北東の平坦面に位置する。Ⅶ層上面での遺構確認中に検出した。落ち込みの輪郭がやや不明瞭であったので、中心を通るトレンチを設定してⅦ層まで掘り下げた。結果比較的明瞭な断面を確認できたため、土坑とした。平面形は坑口、坑底ともに円形。坑底は平坦で

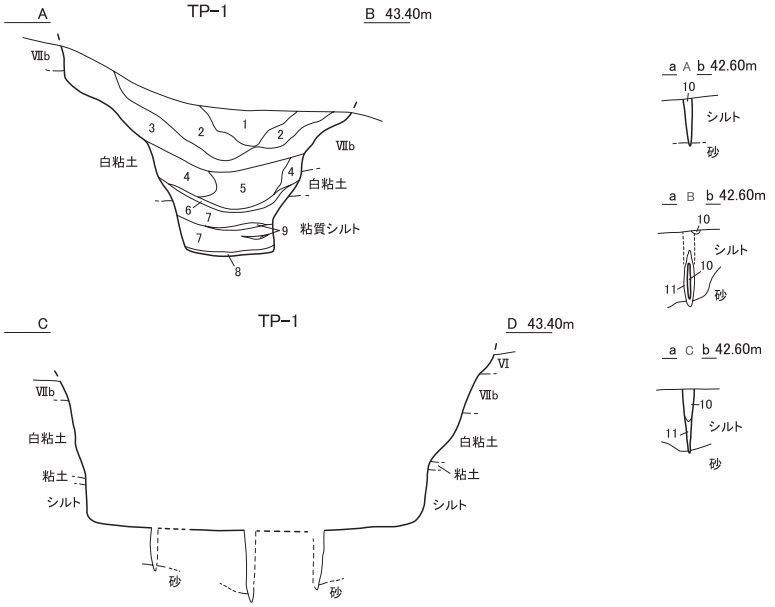
P−18・TP−1







P−18　1　7.5YR1.7/1　黒　（粘性なし　しまりなし）砂混土　10㎜以下の Ta−$d_{1・2}$ パミス 7%まじる　層界漸変
　　2　7.5YR3/4　暗褐（粘性なし　しまりなし）礫混砂　30㎜以下の Ta−d_2 パミスで構成される　層界画然
　　3　7.5YR1.7/1　黒　（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta−d_2 パミス 10%まじる　層界画然



TP−1　1　7.5YR1.7/1　黒　（粘性なし　しまりあり）砂混土　20㎜以下の Ta−d_2 パミス 20%まじる　層界やや画然
　　2　7.5YR1.7/1　黒　（やや粘性あり　しまりなし）砂質シルト　20㎜以下の Ta−$d_{2・1}$ パミス 7%まじる　層界やや画然
　　3　7.5YR3/1　黒褐（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta−$d_{1・2}$ パミス 10%まじる　層界画然
　　4　7.5YR4/4　褐　（粘性なし　しまりなし）砂礫　30㎜以下の Ta−d_2 パミスで構成される崩落Ⅶb 層　層界画然
　　5　7.5YR2/2　黒褐（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　30㎜以下の Ta−d_2 パミス 30%まじる　層界やや画然
　　6　7.5YR2/2　黒褐（やや粘性あり　しまりなし）砂混土　20㎜以下の Ta−d_2 パミス 10%まじる　層界画然
　　7　7.5YR4/4　褐　（粘性なし　しまりなし）礫　20㎜以下の Ta−d_2 パミス 3 で構成される崩落Ⅶb 層界画然
　　8　7.5YR1.7/1　黒　（粘性あり　しまりなし）シルト質粘土　10㎜以下の Ta−d_1 パミス 10%まじる　層界画然
　　9　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）シルト質粘土　10㎜以下の Ta−d_1 パミス 10%まじる　層界画然
　　10　7.5YR2/2　黒褐（粘性なし　しまりなし）シルト質粘土　10㎜以下の Ta−d_1 パミス 10%まじる　層界画然
　　11　7.5YR4/6　褐　（やや粘性あり　しまりなし）シルト　層界やや画然

白粘土　10YR8/4　浅黄橙（粘性強　しまりなし）シルト　30㎜以下の亜角礫をまじる
粘土　10YR4/2　灰黄褐（粘性あり　ややしまりあり）粘土
シルト　10YR4/4　褐（粘性あり　ややしまりあり）シルト　30㎜以下の亜角礫をまじる
砂　10GY2/1　○黒（粘性なし　しまりあり）砂　分級のよい 5㎜以下の砂粒からなる

0　(1:40)　1m

図Ⅳ−32　P−18、TP−1

壁は急である。遺物は出土していない。１m南西にＨ－３が位置する。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスを混じる黒～黒褐色土である。掘り込み面はＶ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、覆土の色調、および周囲の遺構から、縄文時代中期前半のものの可能性がある。

Ｐ－27（図Ⅳ－28、表Ⅳ－１、２、図版18）

位　　置　T33区　　**規　　模**　1.27×1.08／0.75×0.54／0.19m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東側の平坦面に位置する。Ⅶ層上面を精査していたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの形状が比較的明瞭であったので、南西側を半截して掘り下げた。結果坑底を検出したため、土坑と判断した。平面形は楕円形。壁と坑底は緩やかに連続し、浅い皿状を呈する。遺物は出土していない。北にP－15、西にP－12が１m以内に位置している。

覆　　土　Ta-dパミスが混じる黒褐色土の単層である。掘り込み面はⅥ層とみられる。

時　　期　不明であるが、覆土の色調、周囲で検出される遺構の時期を考慮すると、縄文時代早期後半ないし前期前半の可能性が高い。

Ｐ－28（図Ⅳ－28、34、表Ⅳ－１、２、７、図版18、26）

位　　置　T33区　　**規　　模**　0.66×0.52／0.36×0.27／0.10m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東側平坦面に位置する。Ｖ層調査中に電話帳サイズの板状礫が出土した。礫は不自然に立った状態であったので、遺構に伴う遺物であることを想定し取り上げずに周囲をⅦ層まで掘り下げた。その結果、この礫を設置した掘り込みとみられる落ち込みを確認したので、土坑として調査を行った。平面形は不整な楕円形で、坑底に平坦面はほとんどなく浅い皿状の土坑である。

遺物出土状況　楕円形の掘り込みの中央にほぼ直立して石皿が出土している。石皿の長軸は南西―北東方向で、使用面を北西に向けて設置されている。

覆　　土　Ta-dパミスの混じる暗褐色土である。色調から掘り込み面はⅥ層とみられる。

時　　期　縄文時代早期後半か、前期前半と想定される。

掲載遺物　１は石皿。板状の砂岩礫を用いて表面を使用している。使用面は表面のみで平滑である。

Ｐ－29（図Ⅳ－29、表Ⅳ－１、２、図版19）

位　　置　U37区　　**規　　模**　0.67×(0.47)／0.35×(0.31)／0.28m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区東側の平坦面に位置する。Ⅵ～Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの南側は調査区外に延長していたので、土層断面を調査区境界で作成することにして掘り下げた。結果明瞭な坑底と断面を確認したので、土坑と判断した。平面形は確認できた部分では楕円形を呈する。坑底は平坦で壁は緩やかである。

遺物出土状況　覆土からフレイク１点、礫１点が出土している。

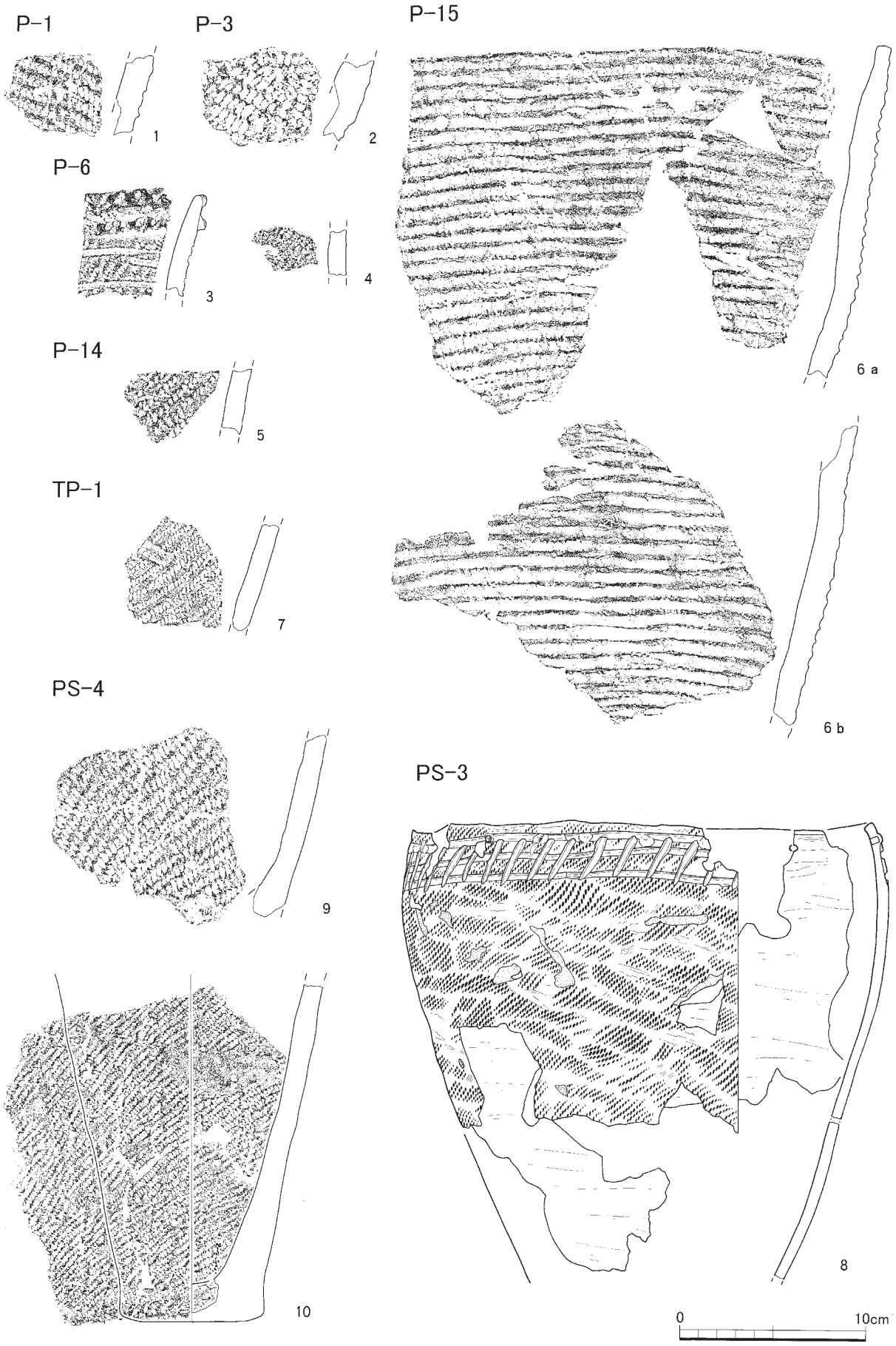
覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスの混じる黒褐色土の堆積である。掘り込み面はⅥ層である。

時　　期　掘り込み面から、縄文時代中期～前期ごろとみられる。

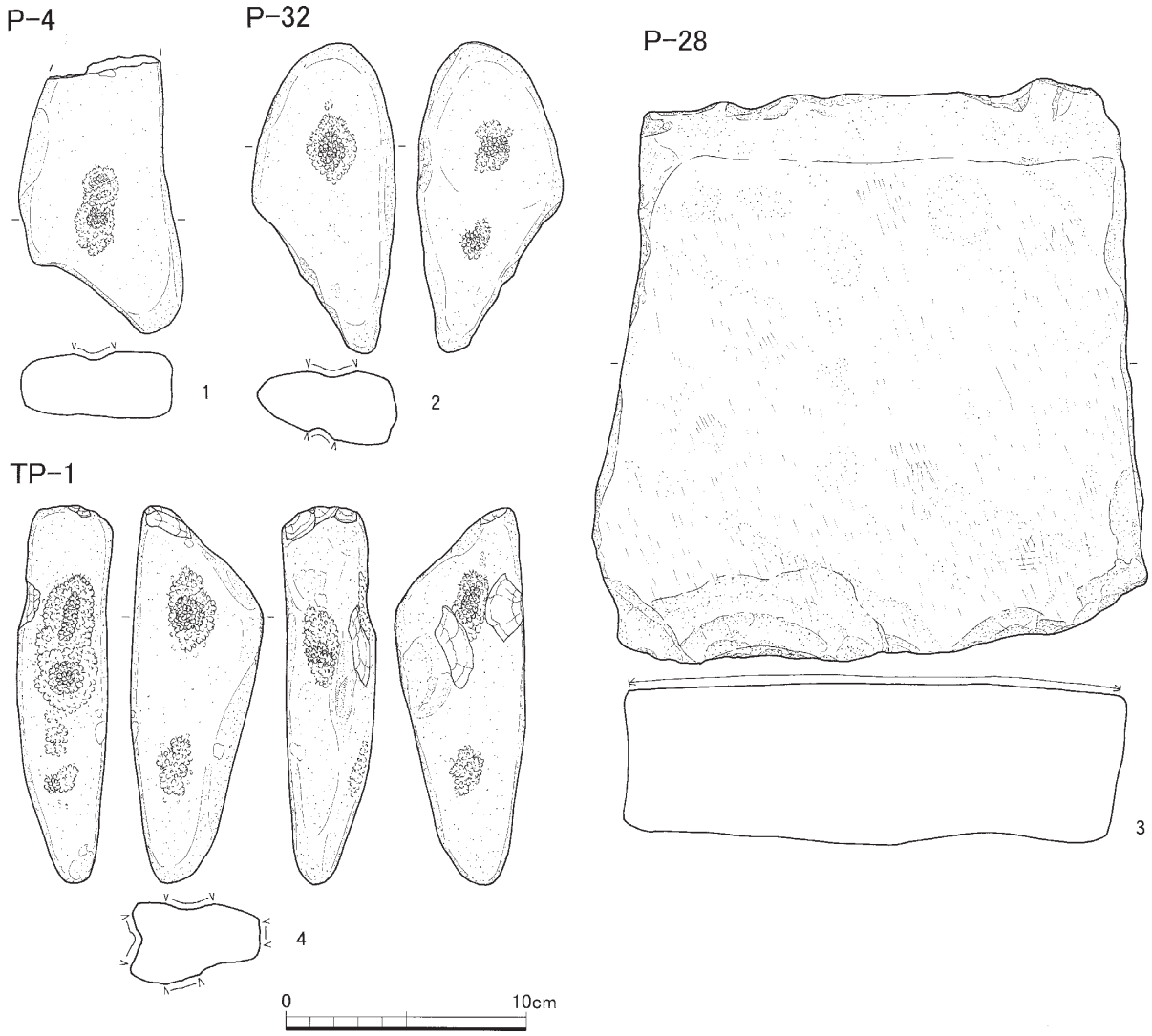
Ｐ－30（図Ⅳ－31、表Ⅳ－１、２、図版19）

位　　置　S30区　　**規　　模**　0.93×0.71／0.43×0.36／0.22m

平面形態　楕円形



図Ⅳ−33　土坑、ＰＳ−３・４出土の土器



図Ⅳ−34　土坑出土の石器

確 認・調 査　調査区中央部、沢状地形の西側平坦面に位置する。Ⅶ層上面で遺構確認調査を行っていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの南側を半截すると、比較的明瞭に坑底を確認できたので、土坑と判断した。平面形は不整な楕円形。坑底と壁は緩やかに連続し、碗状を呈する。遺物は、覆土から礫１点が出土している。

覆　　土　２層に分層した。Ta-dパミスが混じる黒〜黒褐色土の堆積である。色調から掘り込み面はⅤ層中とみられる。

時　　期　不明であるが、縄文時代中期〜晩期後葉（Ta-c降下以前）とみられる。

Ｐ−31（図Ⅳ−31、表Ⅳ−１、２、図版19）

位　　置　U37区　　**規　　模**　0.62×0.56／0.33×0.34／0.14m

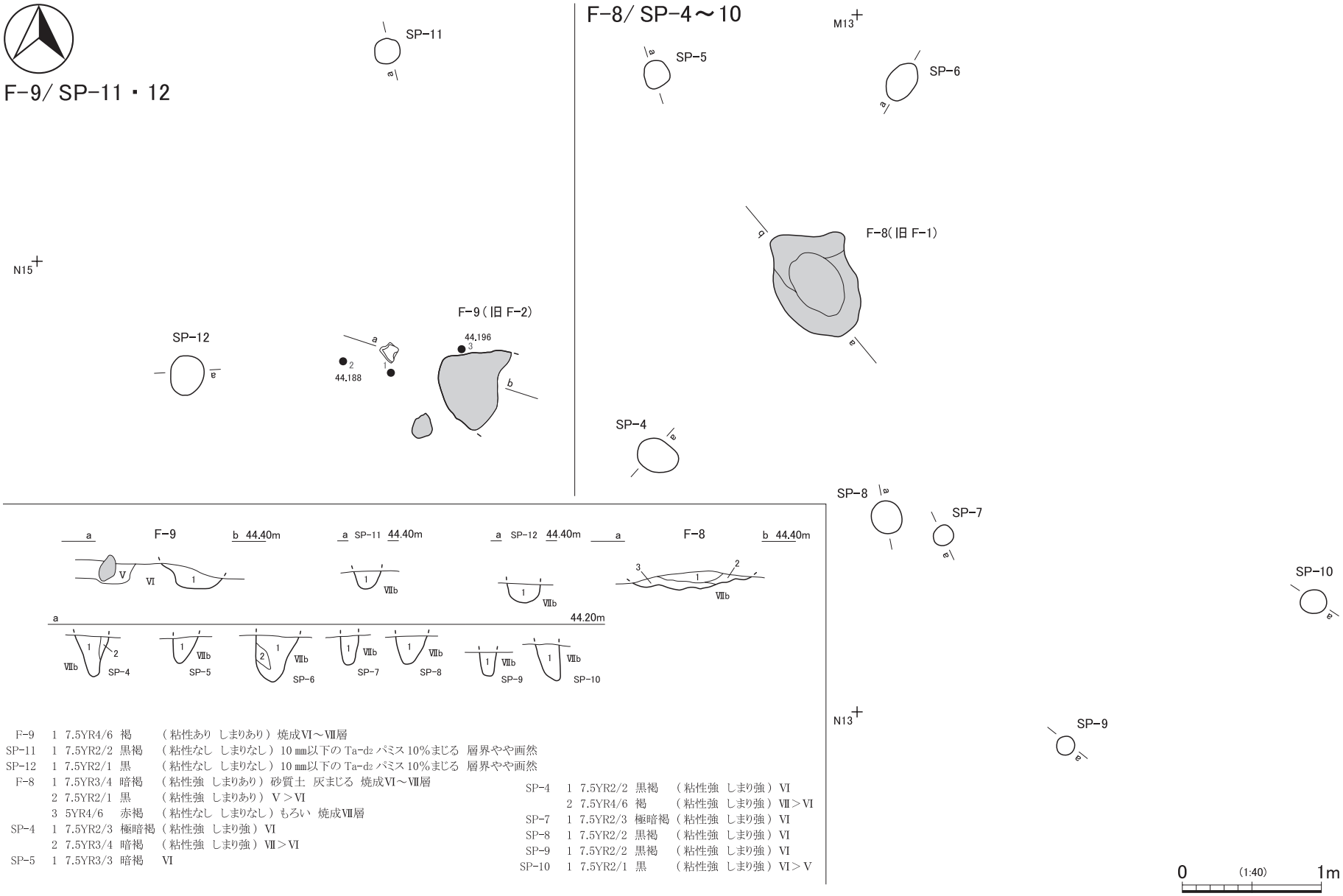
平 面 形 態　楕円形

確 認・調 査　調査区東部の平坦面に位置する。Ⅶ層上面を精査していたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは比較的明瞭な形状であったので、南西側を半截した。結果明瞭な坑底が確認できたため、土坑と判断した。平面形はややいびつな楕円形。坑底と壁は緩やかに連続する浅い皿状の土坑である。遺物は出土していない。

覆　　土　Ta-dパミスの混じる黒褐色土の単層である。掘り込み面はⅥ層とみられる。
時　　期　縄文時代早期後半か前期前半の可能性がある。
Ｐ－32（図Ⅳ－31、34、表Ⅳ－１、２、７、図版19、26）
位　　置　W43区　　**規　　模**　(0.55)×(0.17)／－×－／0.42m
平面形態　楕円形
確認・調査　調査区東側の平坦面に位置する。メインセクションを作成中に、Ｖ層から掘り込む土坑を確認した。断面が調査区境の壁面に現れ、北側の調査区内にはわずかに輪郭が確認できるのみであった。全体の形状は不明である。
遺物出土状況　壁面の覆土中位にたたき石が露出していたので回収した。出土遺物はこれのみである。
覆　　土　Ta-dパミスの混じる黒色土の単層である。掘り込み面はＶ層下部である。
時　　期　掘り込み面から、縄文時代中期～後期と推定される。
掲載遺物　２はたたき石。棒状の扁平礫の背腹に敲打痕があるもの。敲打痕は表面に１か所、裏面に２か所で、中心を避けた器軸上に位置する。
TP－１（図Ⅳ－32～34、表Ⅳ－１、２、６、７、図版19、20、26、27）
位　　置　S28、29区　　**規　　模**　2.28×1.51／1.70×0.52／0.90m
平面形態　楕円形
確認・調査　調査区中央部、沢状地形の北側斜面に位置する。Ⅶ層上面を精査すると、黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みは明瞭であったので、短軸の南西側を半截すると、Ｙ字状の断面と坑底を検出し、土坑と判断した。平面形は坑口で小判形。坑底は隅丸方形である。坑底は平坦で壁はほぼ直立するが中位で大きく緩やかに変化する。坑底では杭跡を検出している。杭跡は壁を巡らせるものと長軸に等間隔に設置されるものがある。前者は北東側先端付近にのみ顕著で、６基の位置を確認したが、ごく小さなもので断面等の記録ができなかった。後者は土坑の中心から0.4～0.5mの間隔で配置されており、断面は坑底から深く0.3～0.45mに及ぶ。先端が尖り、垂直に設置されるのを特徴とする。
遺物出土状況　覆土から、土器はⅠ群b類、Ⅱ群a類、Ⅲ群a類が各１点ずつ出土し、石器等は石鏃１点、フレイク４点、たたき石１点、有孔自然石１点、礫・礫片40点が出土している。
覆　　土　11層に分層した。１～３層はＶ層相当の自然堆積層である。４～７層は壁面が崩落したことによるⅦ層と、間に形成される黒色土の互層となっている。８は開口時の堆積とみられる。10、11は杭の痕跡である。
時　　期　これまでの調査知見から縄文時代後期前後のものである可能性がある。
掲載遺物　７は覆土から出土したⅡ群a類土器。地文は条の間隔のあいたLR斜行縄文。４はたたき石。細長の礫を用いる。断面形が概ね四角で四面を持つ。敲打痕はすべての面に認められ、都合８か所でそのうち５か所は明瞭にくぼむ。

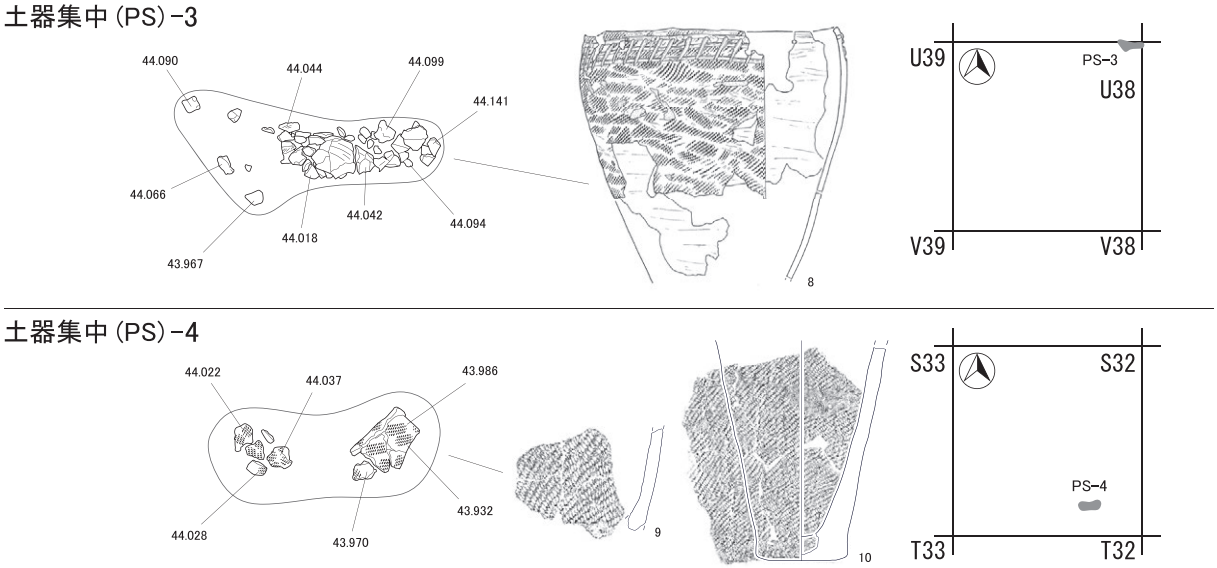
（３）焼土・小柱穴・土器集中

Ｆ－８（図Ⅳ－35、表Ⅳ－１、２、図版21）
位　　置　M13区　　**規　　模**　0.86×0.63／0.07m
平面形態　楕円形
確認・調査　調査区西側の平坦面に位置する。Ⅶ層上面の遺構確認調査で検出した比較的明瞭な焼土である。形成層位がⅦ層であることから、上位の層位から掘り込まれた住居の炉を想定して周囲を精査し柱穴を探索した。結果SP－４～10の７基を検出したが、配列が明らかでないため、焼土とし



F-9	1	7.5YR4/6	褐	（粘性あり しまりあり）焼成Ⅵ～Ⅶ層
SP-11	1	7.5YR2/2	黒褐	（粘性なし しまりなし）10 ㎜以下の Ta-d2 パミス 10％まじる 層界やや画然
SP-12	1	7.5YR2/1	黒	（粘性なし しまりなし）10 ㎜以下の Ta-d2 パミス 10％まじる 層界やや画然
F-8	1	7.5YR3/4	暗褐	（粘性強 しまりあり）砂質土 灰まじる 焼成Ⅵ～Ⅶ層
	2	7.5YR2/1	黒	（粘性強 しまりあり）Ⅴ＞Ⅵ
	3	5YR4/6	赤褐	（粘性なし しまりなし）もろい 焼成Ⅶ層
SP-4	1	7.5YR2/3	極暗褐	（粘性強 しまり強）Ⅵ
	2	7.5YR3/4	暗褐	（粘性強 しまり強）Ⅶ＞Ⅵ
SP-5	1	7.5YR3/3	暗褐	Ⅵ
SP-4	1	7.5YR2/2	黒褐	（粘性強 しまり強）Ⅵ
	2	7.5YR4/6	褐	（粘性強 しまり強）Ⅶ＞Ⅵ
SP-7	1	7.5YR2/3	極暗褐	（粘性強 しまり強）Ⅵ
SP-8	1	7.5YR2/2	黒褐	（粘性強 しまり強）Ⅵ
SP-9	1	7.5YR2/2	黒褐	（粘性強 しまり強）Ⅵ
SP-10	1	7.5YR2/1	黒	（粘性強 しまり強）Ⅵ＞Ⅴ

図Ⅳ－35　F－８・９／SP－４～12



図Ⅳ－36　土器集中３・４

て報告する。SPの規格は表Ⅳ－１のとおりである。上面で黒曜石のフレイクが出土している。焼土のフローテーションの結果も含め、微細な黒曜石フレイク330点等が得られている。

時　　期　不明であるが、縄文時代のものと推定される。

Ｆ－９（図Ⅳ－35、表Ⅳ－１、２、図版21）

位　　置　N14区　　**規　　模**　0.56×0.49／0.15m

平面形態　楕円形

確認・調査　調査区西側の平坦面に位置する。Ⅶ層上面での遺構確認調査で検出した比較的明瞭な焼土である。形成層位がⅦ層であることから、上位の層位から掘り込まれた住居の炉を想定して周囲を精査し柱穴を探索した。結果SP－11、12の２基を検出したが、配列が明らかでないため、焼土として報告する。SPの規格は表Ⅳ－１のとおりである。検出面で被熱した砂岩礫が３点出土している。石組炉の痕跡の可能性がある。焼土中からは頁岩と黒曜石のフレイクが各１点の計２点出土している。またフローテーションの結果から、微細な黒曜石フレイク10点等が得られている。

時　　期　不明であるが、縄文時代のものと推定される。

土器集中３（図Ⅳ－33、36、表Ⅳ－１～３、図版22）

位　　置　T・U38区　　**規　　模**　0.72×0.32m

確認・調査　調査区東側の平坦面に位置する。Ⅴ層を掘り下げていたところ、土器片のまとまりが出土した。周囲を精査して範囲を明らかにした後、写真を撮影して図化した。周囲に伴う遺構が確認できなかったため、土器集中として報告する。Ⅳ群c類土器118点の集中である。

時　　期　縄文時代後期後葉Ⅳ群c類土器の時期である。

掲載遺物　８はⅣ群c類土器。底部を欠く深鉢である。残存部分は全体の約２分の１で、器形を復元することができた。胴部の最大径が口縁直下となり口縁は切出状でやや内彎する。薄手である。地文はLR斜行縄文。口縁部に沈線が３条巡り、斜位の沈線が加えられている。口唇直下には内側からの突瘤文がつけられている。

土器集中４（図Ⅳ－33、36、表Ⅳ－１～３、６、図版22）

位　　置　S32区　　**規　　模**　0.62×0.28m

確認・調査　調査区西側平坦面に位置する。Ⅴ層の調査中、土器片のまとまりを検出した。周囲を精査したが伴う遺構を確認できなかったので、土器集中として報告する。Ⅲ群b類土器22点の集中である。

時　　期　縄文時代中期後半Ⅲ群b類土器の時期である。

掲 載 遺 物　９、10はいずれもⅢ群b類土器である。９はLR斜行縄文を地文とする底部付近の破片。10はLRとRLの２種の原体を用い、前者を横位、後者を縦位に施文し、条の方向をそろえている。やや厚手である。

９　Ⅴ層出土の遺物

（１）土器（図Ⅳ－37～39、48～51、表Ⅳ－８、図版28、29）

Ⅴ層から出土した土器は、総点数で2,005点である。前節で述べた重機により取り上げた土からの出土遺物は、本来攪乱ないしⅠ層出土とするべきであるが、Ⅲ層から出土することが明らかなⅥ、Ⅶ群土器を除き便宜上Ⅴ層に含めた。

Ⅰ群b類土器（図Ⅳ－37－１～38、図版28）

１～８は縄線、組紐、絡条体、比較的大きな短縄文による文様が認められるもの。１～５は組紐圧痕がつけられる。１a、bは貼付帯のつく同一個体。２もそうかもしれない。圧痕は横位につけられ、貼付帯上には縄線による刻みが施されている。３は圧痕のみの胴部片。４、５は短縄文と組み合わせて文様が描かれる。６は縄文地に、７は無文面上に縄線が横位につけられる。６は貼付帯上に横位の縄線と縦位の刻みが施されている。８は絡条体による文様が描かれる胴部片。

９～17は微隆起線がつけられるもの。９から14は比較的太く明瞭である。微隆起線間には９が絡条体圧痕、11～13が短縄文、14はRL斜行縄文が施文される。15～17の微隆起線は細く不明瞭。線間には15、16が短縄文。17が細い撚糸文とみられるものがつけられている。

18～20はやや特殊な文様を一括した。18は刺突を加えた偽結束羽状縄文。19は魚骨文。20は無節の斜行縄文がつく。細片のため、時期の詳細は明らかにしがたいが、１～13をコッタロ式、14～17を中茶路式、18～20はそのどちらかに伴うものとしておく。

21～37は東釧路Ⅳ式に相当するものを一括した。21～25は文様帯をもつ口縁部付近の破片。21は絡条体、22は縄線、23は短縄文が施文される。26～36は撚糸文が施文されるもの。28、29は口縁部。26、27、30～36は胴部片。37は当分類に相当するとみられる底部である。やや丸底で短縄文がつく。

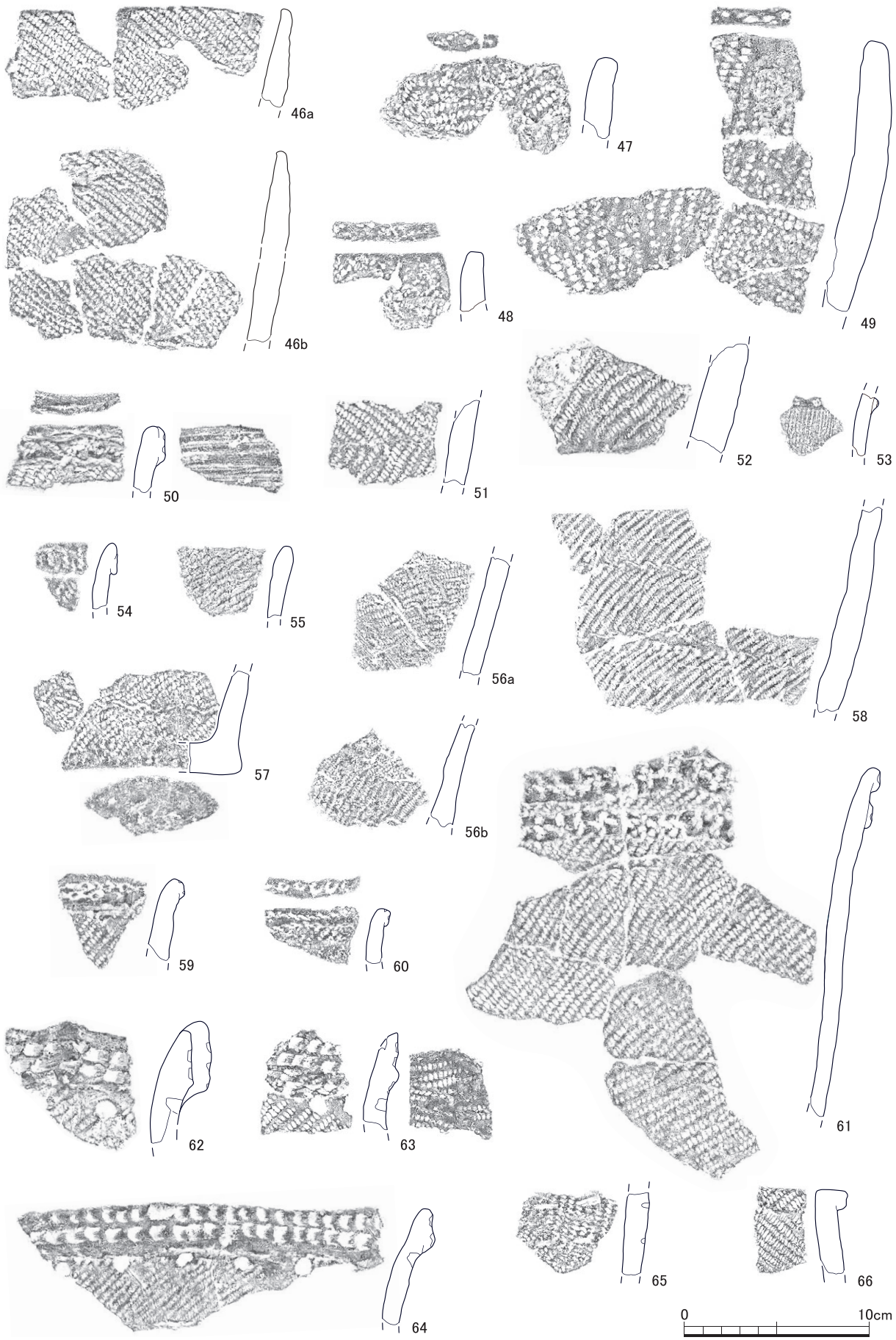
Ⅱ群a類土器（図Ⅳ－37－38～46、図版28）

本類は全て胎土に繊維を含む。45は繊維に加え、滑石ないし蛇紋岩とみられる岩片を含む。38～40は条が横走気味となるもの。41は縄文地に押引による弧状の文様がつけられる。口唇は角形に整形され、内面は平滑である。42～45は比較的太い縄文がつけられ条が斜行するもの。44は底部付近。45は口縁部付近の破片である。軽く、形状はゆがんでいる。46a、bは同一個体。口唇は角形。LR斜行縄文が器面全体に整然と施文され、内面は平滑である。38～40は綱文式、41は春日町式、42～45は静内中野式、46は加茂川式に相当するものとした。

Ⅱ群b類土器（図Ⅳ－37－47～53、図版28）

47～53を本類とした。47～49は口縁部。厚手で端部はわずかに平坦に整形される。47、48はLR、49はRLの粗い斜行縄文を地文とする。縄文はいずれも口縁端部まで施文されるが、内面は無文である。焼成は良好で、49は口縁下部に刺突文とみられるくぼみが認められる。外観はⅣ群a類に近似するが、断面の中心は黒色を呈し、胎土中の砂粒も多くないので本類とした。50は貼付帯のつく口縁部。貼付帯上には縄線がつけられる。内面には条痕が認められる。51は撚りの異なる原体による羽状縄文。52はLR斜行縄文が施される底部付近の破片。胎土の類似から本類とした。53は貼付帯部分。細かい撚糸文と貼付帯上には円形の刺突文が施文される。50は石狩市上花畔遺跡Ⅱ群、53は円筒下層cないし

図Ⅳ－37　Ⅴ層出土の土器（１）



図Ⅳ－38　Ⅴ層出土の土器（２）

d式とみられる。47～49、51、52の型式は不明であるが、植苗式の古手かそれ以前に相当するものとしておく。

Ⅲ群a類土器（図Ⅳ－37－54～58、図版29）

54、55は口縁部。54は断面がやや切出状に尖る。55はやや外反する口縁部。地文のLR斜行縄文が施文される。56～58は結束第２種斜行縄文が施文される胴部～底部片。内面は黒色で器表面は赤褐色を呈する。56a、bは同一個体。57もその可能性がある。型式判断を行う要素に乏しく不明である。

Ⅲ群b類土器（図Ⅳ－37、38－59～65、図版29）

59、60は口唇に半截竹管状工具による刺突文がつく口縁部。60には縄線もつけられる。61は２条の貼付帯がつく。口縁は波状を呈し、貼付帯には縄線と縄線による刻みがつけられる。体部にはLR斜行縄文が整然とつけられている。62～64は口縁下に円形刺突文､口縁に２列の押引文が囲繞するもの。62は突起がつき、63は内面にも縄文がつけられる。65は胴部に点列文が施文される。59、60は天神山式、61は柏木川式、62～64はトコロ６類、65は煉瓦台式と判断した。

Ⅳ群a類土器（図Ⅳ－38－66～71、図版29）

66は折り返し状の口縁部。肥厚帯上と体部に方向を変えてRL縄文が施文される。67、68は断面形が丸みを帯び、円形刺突文がつく。69は口縁に棒状工具による刻みがつけられる。70、71は縄文のみの底部片。66は余市式、67～69はタプコプ式とみられる。

Ⅳ群b・c類土器（図Ⅳ－38－72～76、図版29）

72、73はb類土器。72は補修孔のある波状口縁。口縁部は磨り消され平滑である。地文と口縁部は沈線で区切られている。73は２段の沈線に刻みが添えられる。地文は撚りの異なる原体を使用した羽状縄文である。74～76はc類土器。突瘤が施される深鉢。異なる原体を用いた羽状縄文が施文される。75、76の口縁は切出状に尖る。76は口縁に沈線が３条加えられている。72は手稲式、73は鮏澗式、74～76は堂林式の古い段階のものとみられる。

Ⅴ群土器（図Ⅳ－38－77～80、図版29）

77は磨消縄文と沈線による三叉文が描かれる注口土器。78は緻密なLR斜行縄文が施文される胴部。79は浅鉢の底部。地文はLR斜行縄文。80は鉢。条が縦走気味のLR縄文。口縁部に３条の沈線がめぐらせてある。77はa類。78はb類、79、80はc類とした。

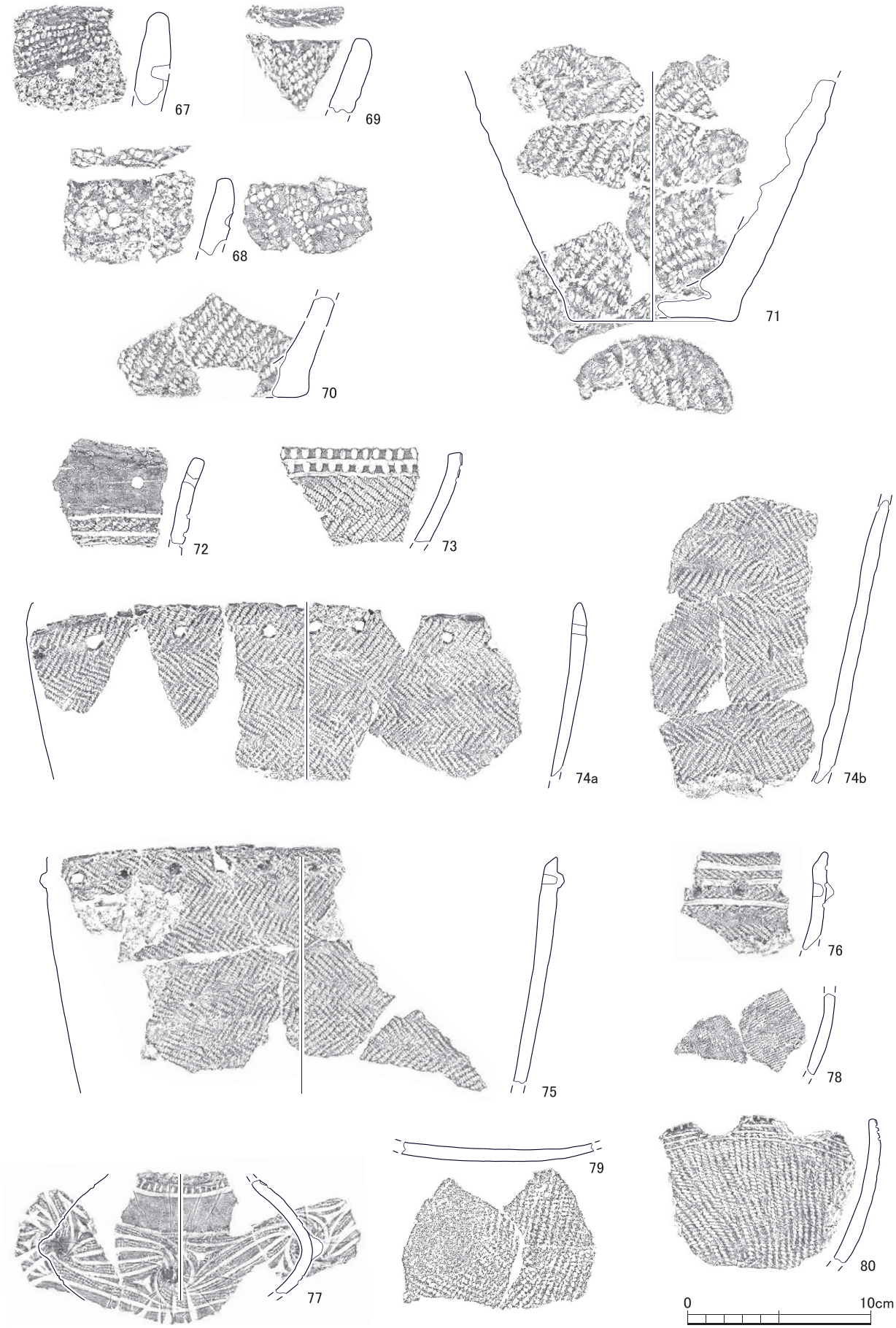
（２）石器等（図Ⅳ－40～47、52～54、表Ⅳ－10、図版30～34）

石器等の総点数は1950点、そのうち剝片石器の内訳は石鏃80点、石槍35点、スクレイパー43点、つまみ付きナイフ44点等となっている。石斧類は石のみを含む石斧が11点、破片15点、石斧加工品が１点、礫石器はたたき石が282点、すり石28点、砥石48点、石皿９点等である。

出土している土器からは、本遺跡は縄文時代早期後半以降のほぼ全期間存続していることとなる。剥片石器の器種は偏りなく出土しており、妥当な傾向といえる。それに対して礫石器には顕著な偏りがある。砥石や石皿は破片として若干数の出土にとどまるが、たたき石の出土量は群を抜き多い。おそらく極めて日常化した作業の道具とみられ、本遺跡の特徴といえるものである。このことに関してⅧ章でも触れることとする。

石鏃（図Ⅳ－40－１～15、図版30）

破片も含め80点出土している。15点図示した。１は木葉形のもの。入念な細部調整がなされ、極めて薄手に仕上げられている。２～10は概ね三角形を呈する。２～５、７、８は基部が抉れるもの。６、９、10は平坦なものである。11～15は有茎。11、12はやや太い茎を持つ。13～15は小形のもの。全て黒曜石製。



図Ⅳ－39　Ⅴ層出土の土器（３）

石槍（図Ⅳ－40－16～20、図版30）

35点出土している。うち25点が２分の１以上残存するものである。５点図示した。16は有茎。茎部は太く器体の半分以上を占める。かえしは明瞭でない。17～20は木葉形もしくは菱形のもの。17は比較的大形で、入念な細部調整により尖頭部が作出される。最大幅が基部側にやや寄る。18～20は両面にわたり細部調整されるものの加工が粗雑で明瞭な尖頭部が作られていない。21はほぼ腹面側のみ調整されるもの。全て黒曜石製。

石錐（図Ⅳ－40－22～25、図版30）

20点出土している。４点図示した。22、23は剥片の一部に刺突部が作出されるもの。22はやや横長の剝片を用いて薄手で鋭い刺突部が作出される。つまみ部分も加工され概ね円形に整形される。23は先端を欠損する。24、25は棒状を呈するもの。24は縦長の剝片を用いて主として背面側に細部調整され刺突部が作出されている。25は両面全面調整で棒状に仕上げられている。24のみ白色の珪化岩製。ほかは黒曜石。

つまみ付きナイフ（図Ⅳ－40－26～33、図版30）

破片も含め44点が出土している。８点図示した。26、27は背面側全面に深い細部調整がなされる。26は腹面右側縁に一部加工されている。28～30は簡便な調整でつまみ部が作出され、周縁加工により刃部が作出されるもの。31～33はやや特殊な形状のもの。31、32は両面に細部調整が及ぶ。34はほとんど加工されないもの。石材は26、27、29が頁岩、33はメノウ、そのほかは黒曜石。

スクレイパー（図Ⅳ－41－34～43、図版30）

43点出土している。11点図示した。34～36は縦長剝片を用いるもの。34は両側縁に直線状の刃部が作出される。35は被熱している。つまみ付きナイフの刃部かもしれない。36は右側縁に刃部が作られている。37、38は横長気味の剝片を用いる。37は端部背面に、38は端部の背腹両面に細部調整され、刃部が作出される。39～41は拇指状のもの。39は背面側、40は腹面側、41は両面が細部調整される。42は二辺に刃部がつくられている。43は両面調整されるもの。調整が粗く左右対称ではないため、ここに含めた。石材は34、40、41、43が黒曜石、36、37はメノウ、38はチャート、39は珪化岩、42は玄武岩である。

両面調整石器（図Ⅳ－41－44、図版30）

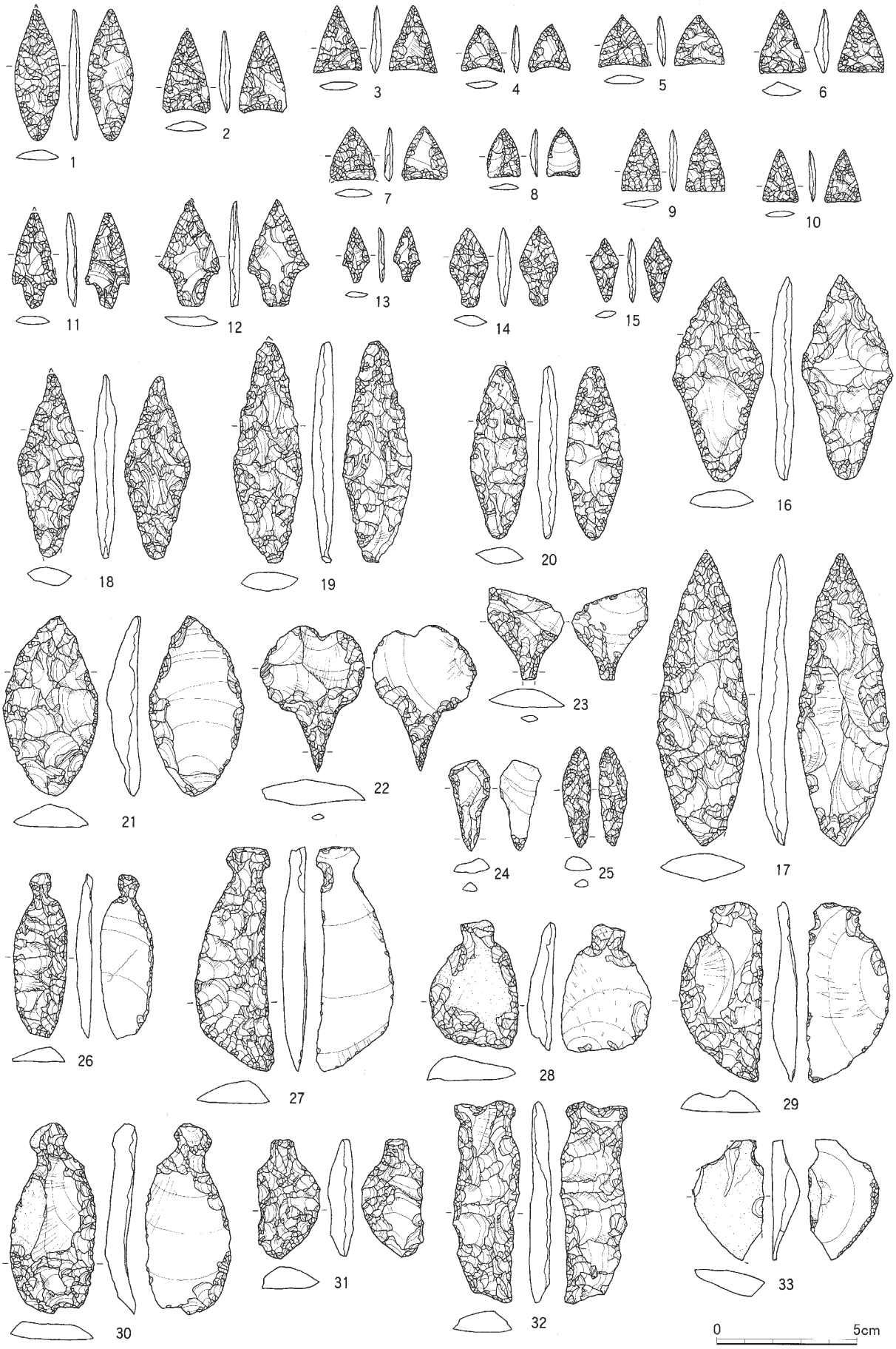
図示した１点のみ出土している。やや粗い調整が両面になされている。一部原石面と素材剥片の面を残している。黒曜石製。

石斧類（図Ⅳ－41・42－45～51、図版31）

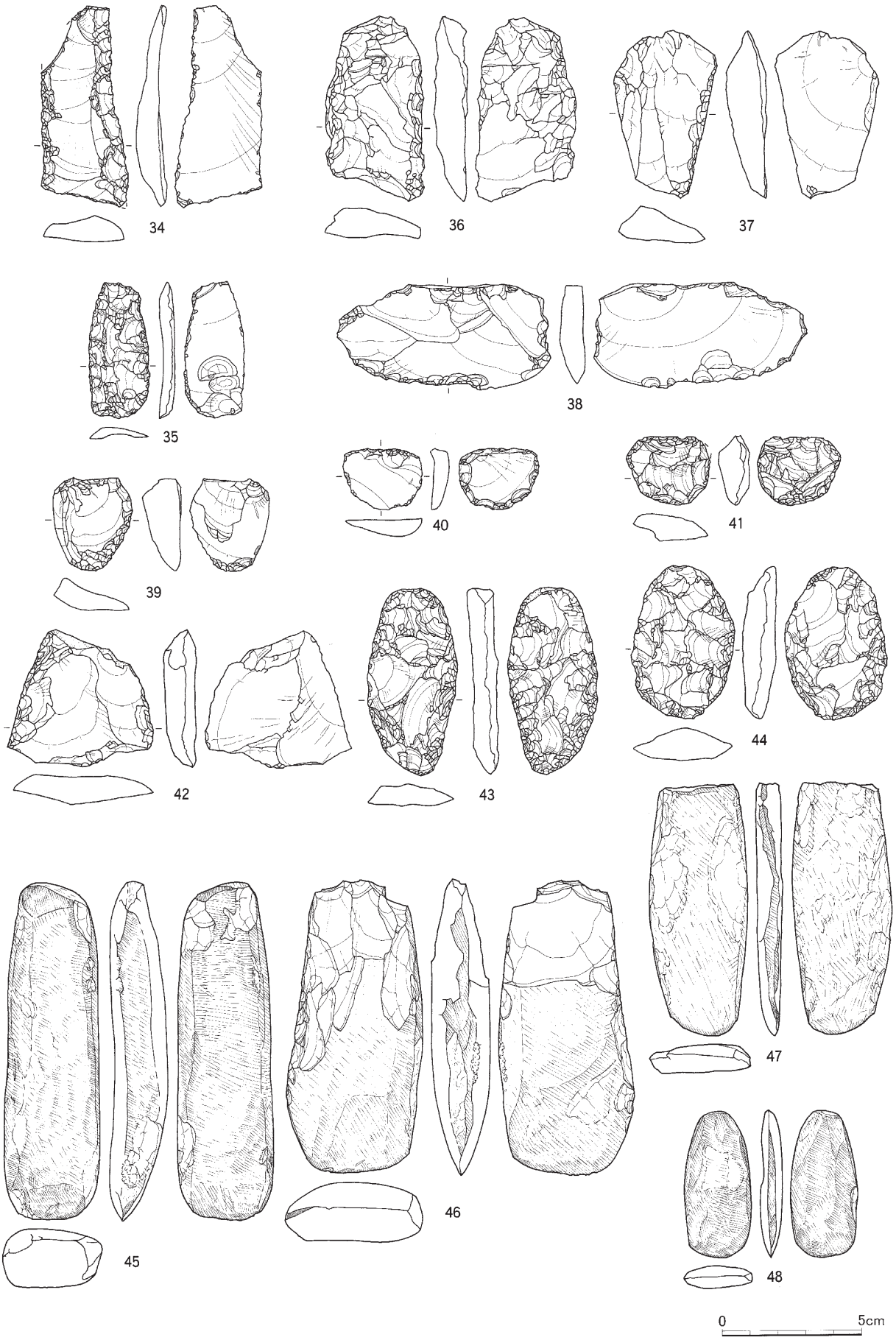
35点出土している。石斧、石のみ11点、石斧片、破片15点、未製品である、石斧加工品が１点、石斧に再加工した、石斧再加工品が１点、原石、または大きく形を変えない加工が見られる原石、石斧原材が７点となっている。

45～47は石斧、48は石のみである。全て片刃で、47以外はやや円刃に近い直刃、47は偏刃。45は全面が研磨されるが、右側縁に敲打の痕跡が残る。全体に丸みを帯びており、原石の状態を大きく変えていないものとみられる。46は刃部の研ぎ出しが明瞭で、鎬も観察できる。両側縁と基部に、剥離加工の痕跡を大きく残している。47は薄手。刃面の研ぎ出しは顕著ではない。48は全面研磨により整形される。円刃を呈し、刃部の研ぎ出しは顕著ではない。47のみ藍閃石片岩、他は緑色片岩製。

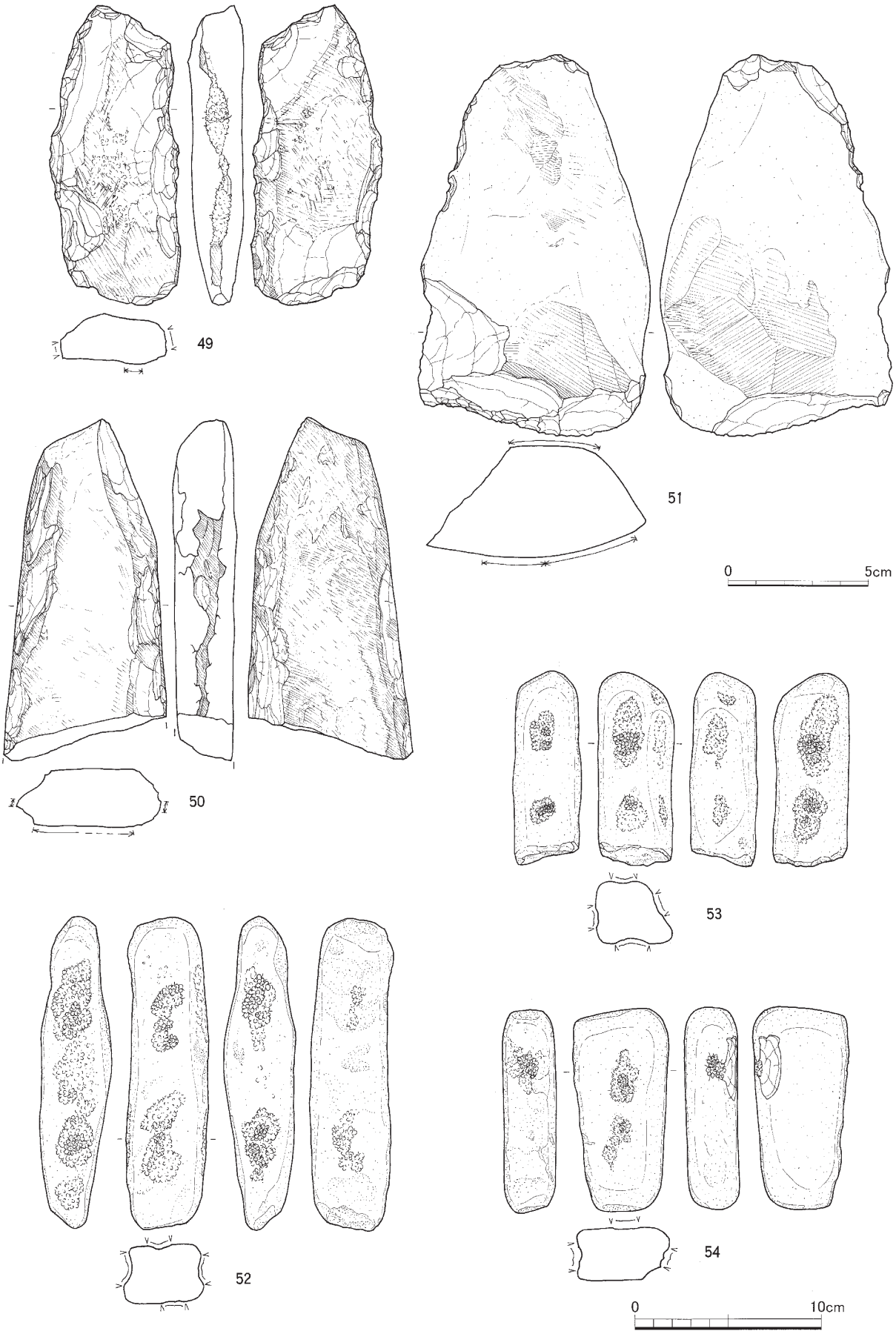
49は石斧加工品としたもの。敲打と打ち欠き、研磨により整形途中の個体である。50は石斧片としたもの。やや大型で、全面が研磨されるが、打ち欠きと敲打の痕跡が認められる。51は石斧原材である。扁平な礫の一部に研磨の痕跡があるもの。被熱し赤変する。51のみロジン岩、そのほかは緑色片岩製である。



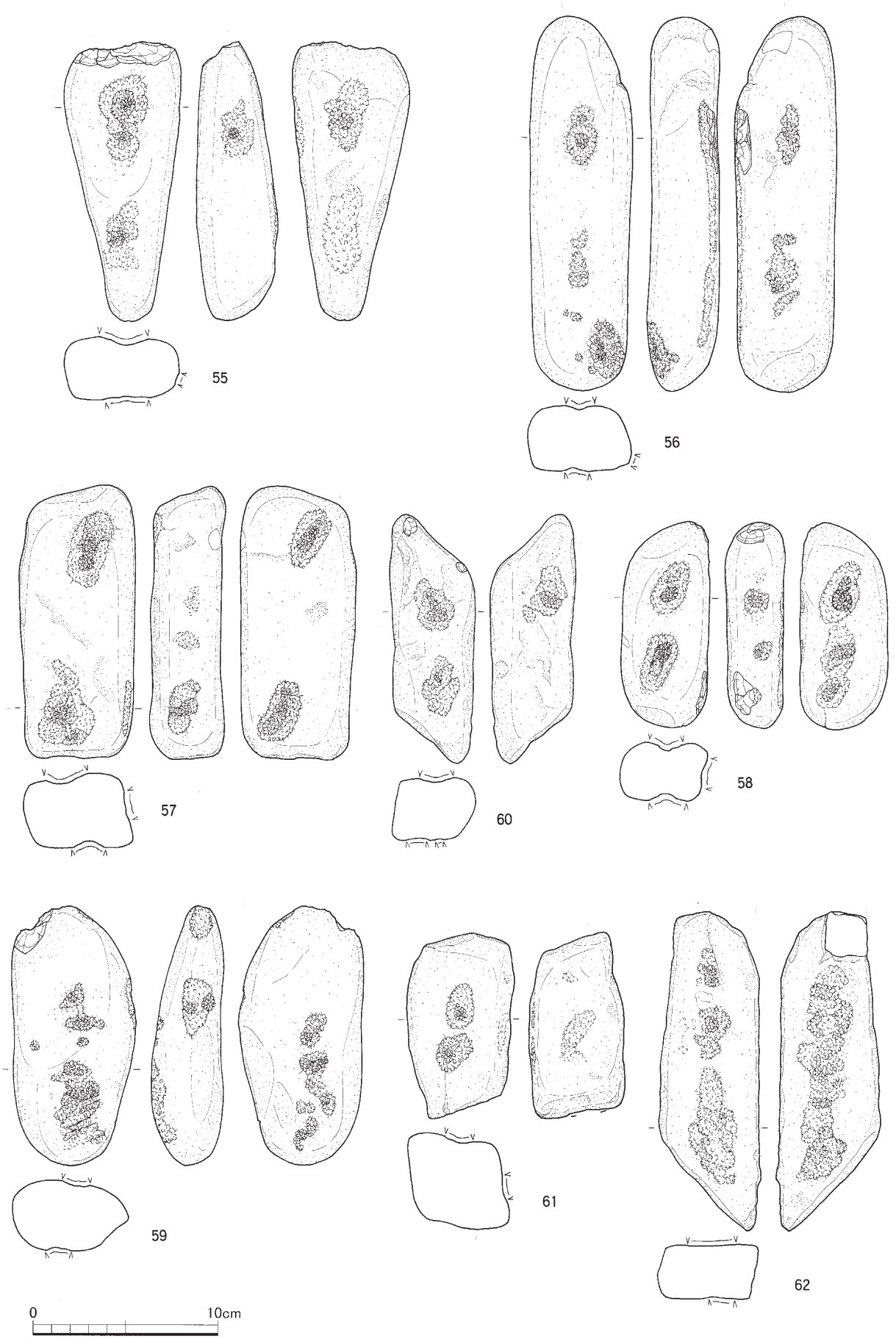
図Ⅳ－40　包含層出土の剥片石器（１）



図Ⅳ－41　包含層出土の剥片石器（２）・磨製石斧（１）

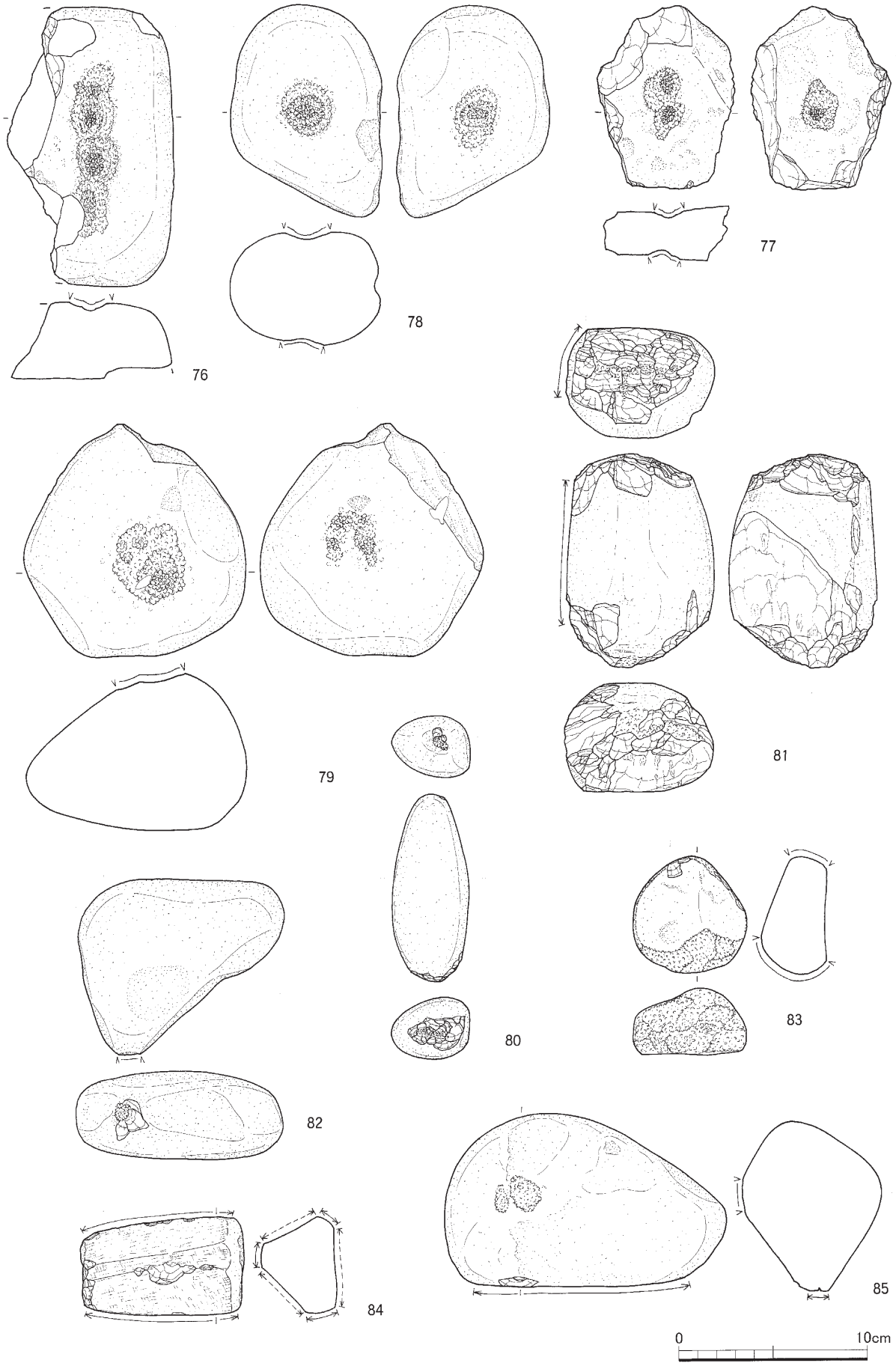


図Ⅳ－42　包含層出土の磨製石斧（２）・礫石器（１）



図Ⅳ－43　包含層出土の礫石器（２）

図Ⅳ－44　包含層出土の礫石器（３）



図Ⅳ－45　包含層出土の礫石器（４）

たたき石（図Ⅳ－42～45－52～83、図版31、32）

破片も含め282点出土している。内２分の１以上の個体は170点である。170点の内、57点は欠損するもので、約60％は破片もしくは欠けているものということになる。多く出土しているため、形態細分を試みた。なお全体の内43点が被熱して変色している。

52～79は、素材礫の表裏面、中央付近の長軸線上に、くぼみ状に集中して敲打痕があるもの。全て砂岩製である。この形態は208点出土しており、たたき石全体の74％を占める。52～67は棒状の礫を素材としているもの。52～54は４面、55～59は３面、60～63は２面、64～67は単体の面を使用する。68～76は比較的扁平で幅広の礫を素材とする。68は３面、70、71は両面、72～76は単一の面に敲打痕がある。72は礫の端部にも敲打痕が認められる。77～79は上記２種類以外の不定な形状のものである。

80～82は素材礫の端部もしくは周縁に敲打痕があるもの。80、81は礫の両端に、82は「L」字に屈曲した礫の端面を敲打する。81はすり石と複合している。83はほぼ全周に敲打痕がある。81は硬質砂岩、83が斑糲岩、そのほかは砂岩製である。

すり石（図Ⅳ－45－84～88、図版33）

28点が出土している。84、85は断面が概ね三角形を呈し、稜線を使用面とする。23点出土し２点を図示した。84は稜線全てが平滑に使用される。平坦面も使用によるとみられる痕跡が認められる。多面砥石とするべきかもしれない。85もたたき石と複合する。一稜を使用し、素材礫の頂部に弱い敲打痕が認められる。86、87は扁平礫の側縁を使用するもの。２点全て図化した。87は使用面に打ち欠き加工がなされる。扁平打製石器かもしれない。88は礫の表面が平滑に磨かれるもの。１点のみ出土している。石材は84、88が安山岩、85、87が硬質砂岩、86は砂岩である。

砥石（図Ⅳ－46－89～94、図版33）

平滑に磨かれる面を持つ遺物のうち、大きさが片手で持てる程度（20cm以下）か、厚みが３cm以下のものを砥石とした。48点出土するうち、39点は砂岩の破片で全体の形状がわからないものである。10点（接合して６点となる）について図示した。

89、90は平板で薄手の礫に、溝状の使用痕が残る。91は厚手の礫の一面を平滑にする。92は扁平礫の中央部分が使用される。93、94は多数のすり面を持つもの。隣り合う複数の面をすることにより、明瞭な稜線が認められる。

加工痕ある礫（図Ⅳ－46－95、96、図版33）

13点出土している。意図の不明瞭な打ち欠きを有する礫片がほぼ全てである。２点を図示した。95は断面が三角形の礫の稜線が打ち欠かれる。97は扁平礫の一側縁が打ち欠かれる。扁平打製石器かもしれない。

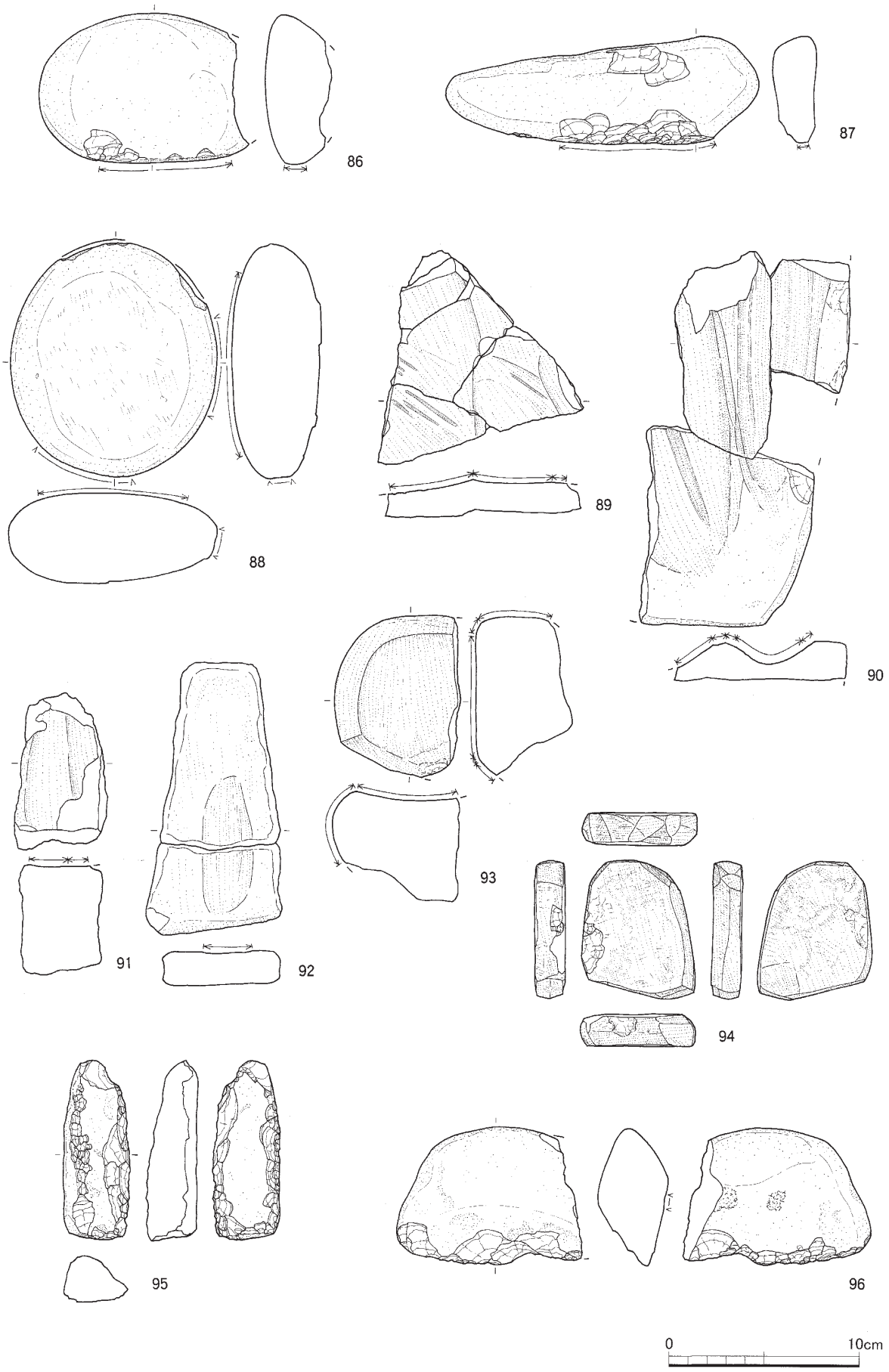
石皿（図Ⅳ－47－97、98、図版33）

平滑に磨かれる面を持つ遺物のうち、大きさが20cm以上か、厚みが３cm以上のものを石皿とした。９点出土している。うち３点（接合して２点となる）について図示した。97は板状礫の一面を使用面とするもの。平滑に磨かれ、一部くぼむ。98は節理面を使用する。被熱している。

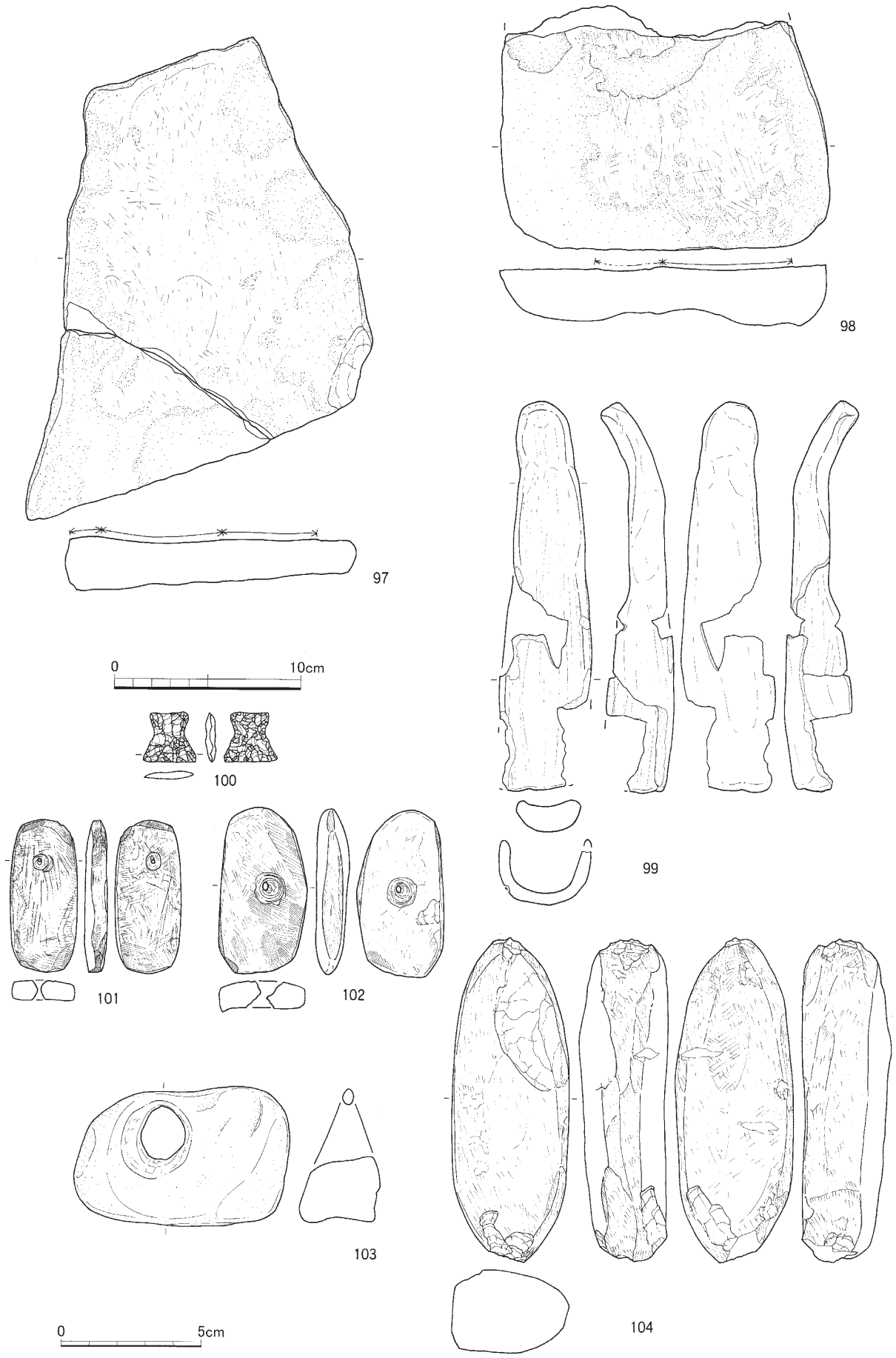
土・石製品（図Ⅳ－47－99～104、図版34）

99は土製品とした。１点のみ出土している。匙状に整形され、一端は肥厚する柄、一端は樋状につくられる。表面は平滑に調整される。胎土から、続縄文時代北大Ⅰ式に伴うものの可能性が高い。

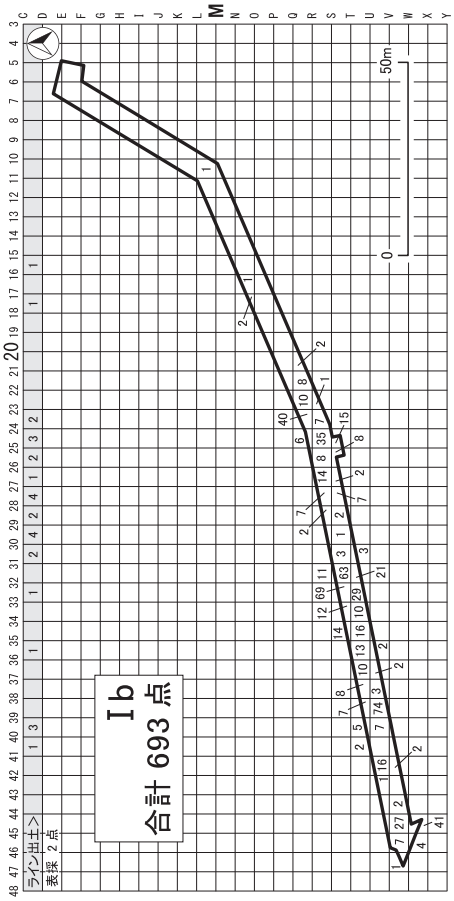
100～104は石製品である。100は「X」字状を呈する黒曜石製剥片石器。薄手で入念な加工がなされる。101、102は垂飾。101は蛇紋岩、102は凝灰岩製。103は有孔自然石。104は鰹節状に整形される凝灰岩。砥石かもしれない。（立田）

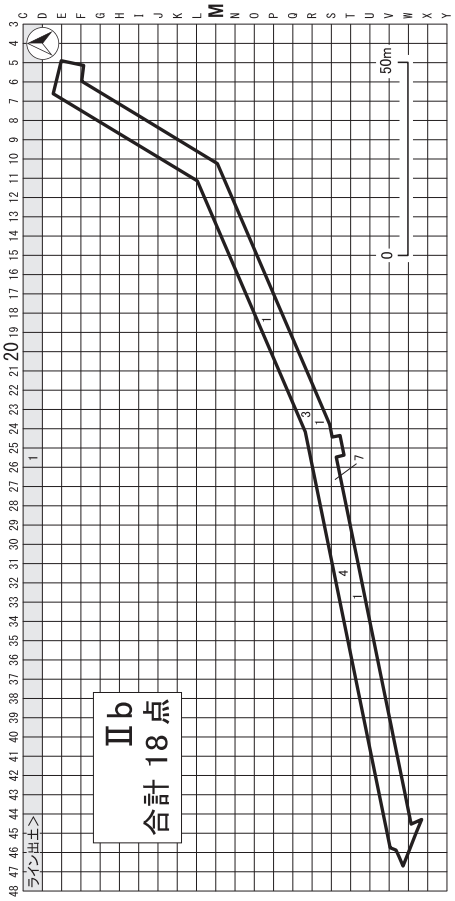


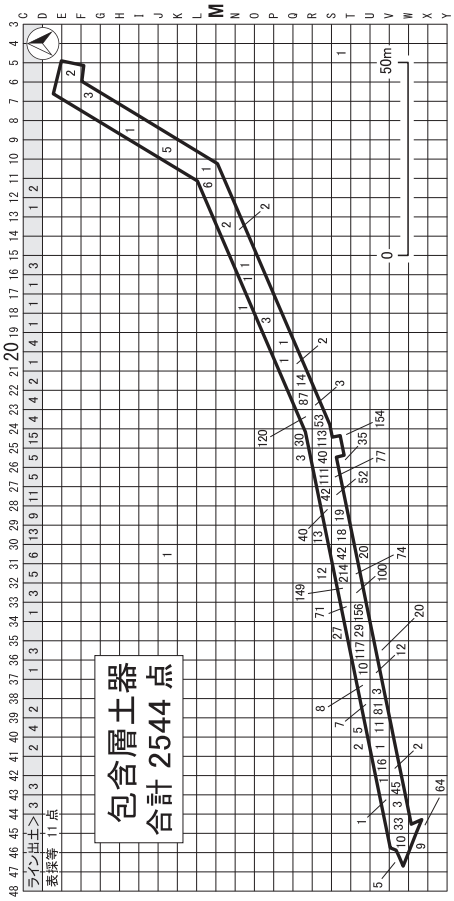
図Ⅳ－46　包含層出土の礫石器（５）

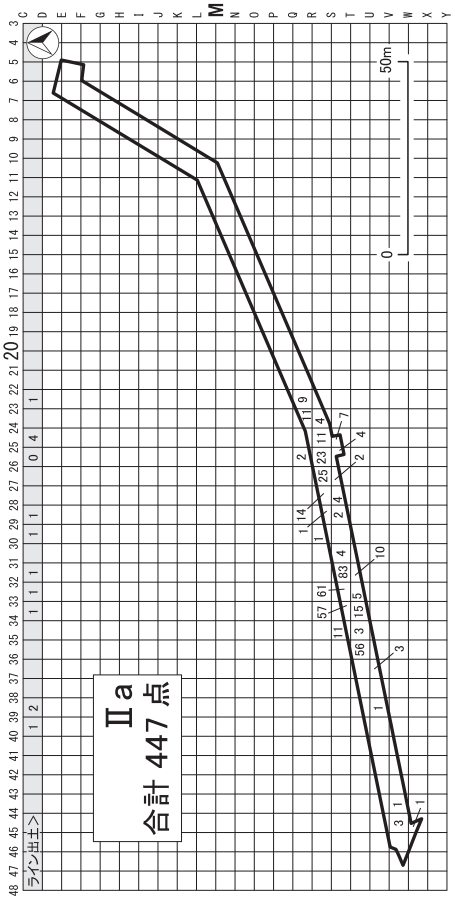


図Ⅳ－47　包含層出土の礫石器（６）・土製品・石製品

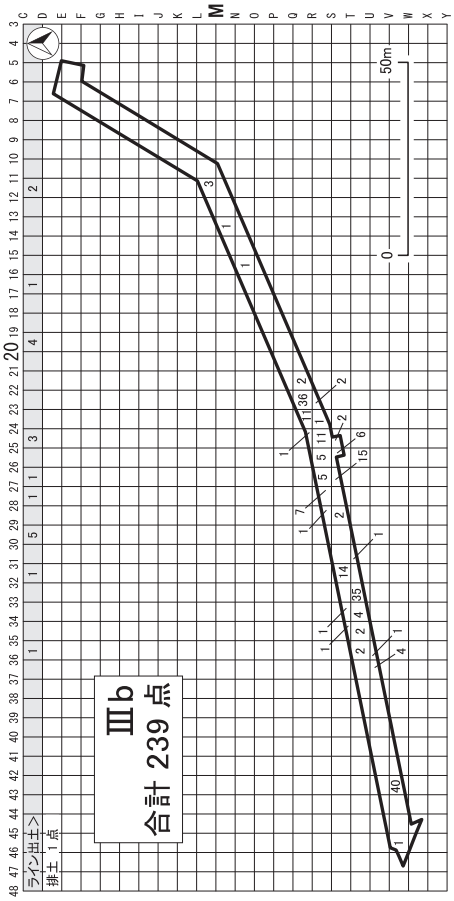


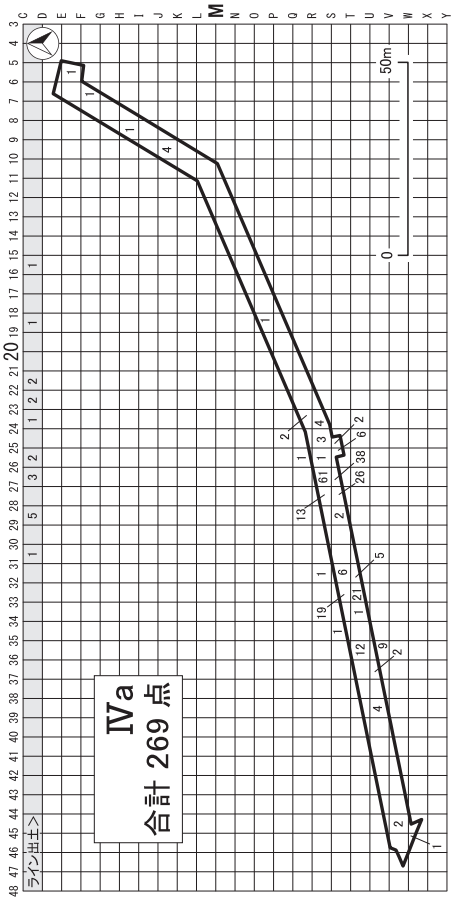


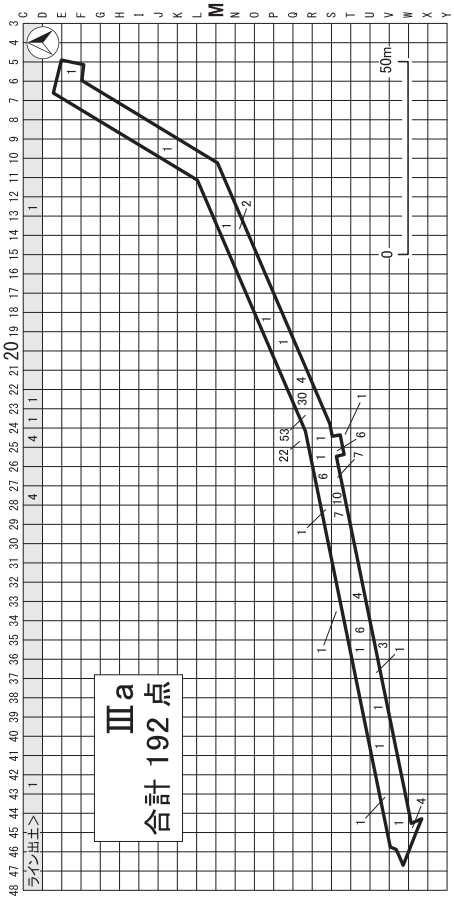


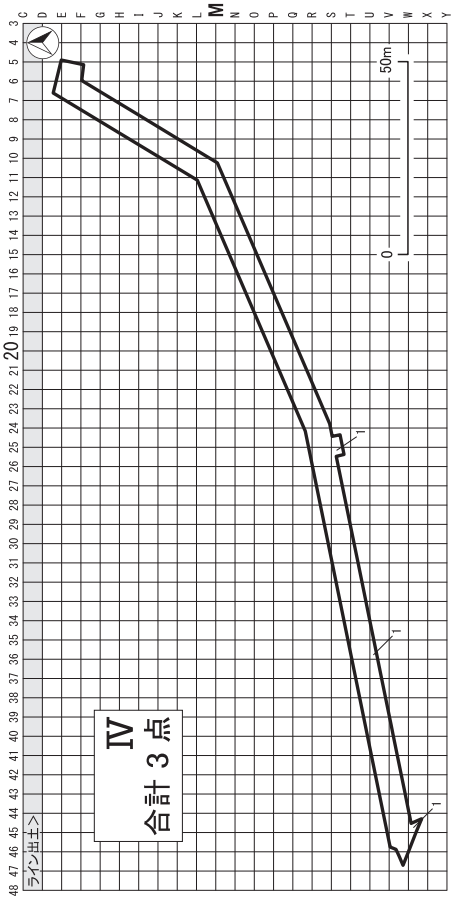


図Ⅳ－48　グリッド別点数（１）

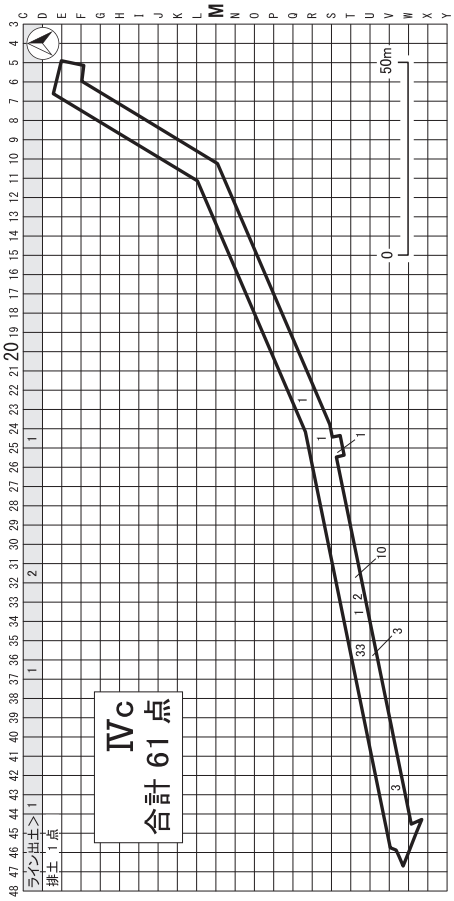


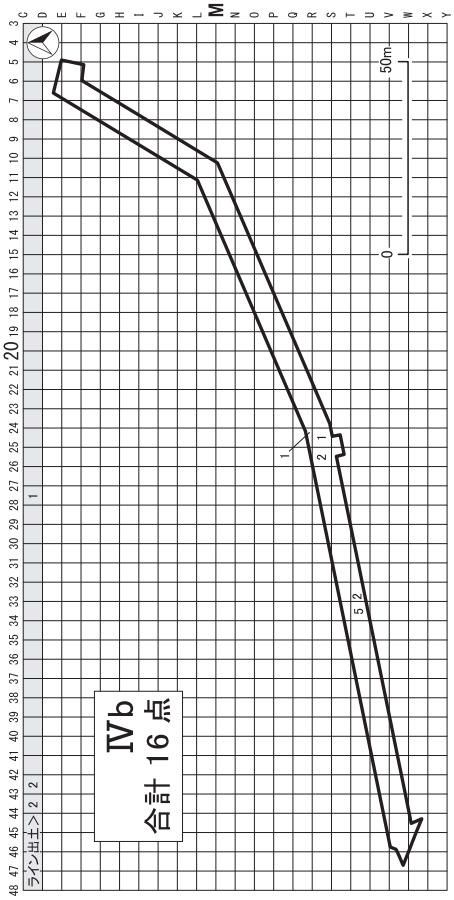


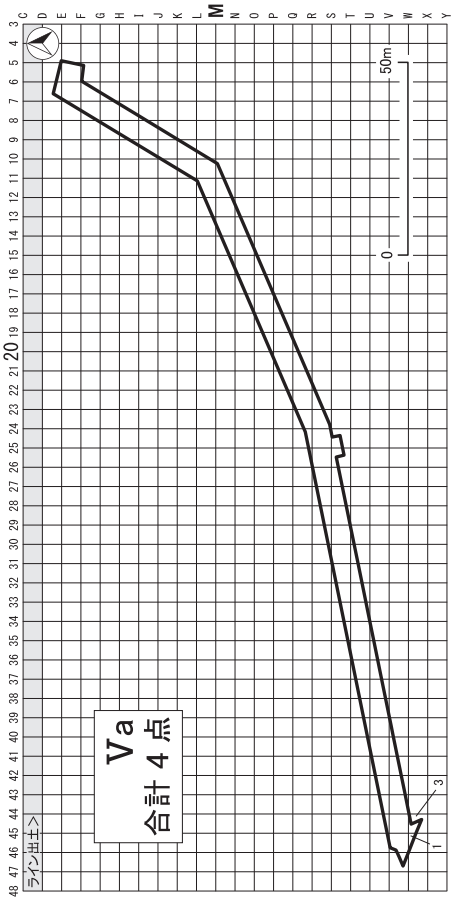


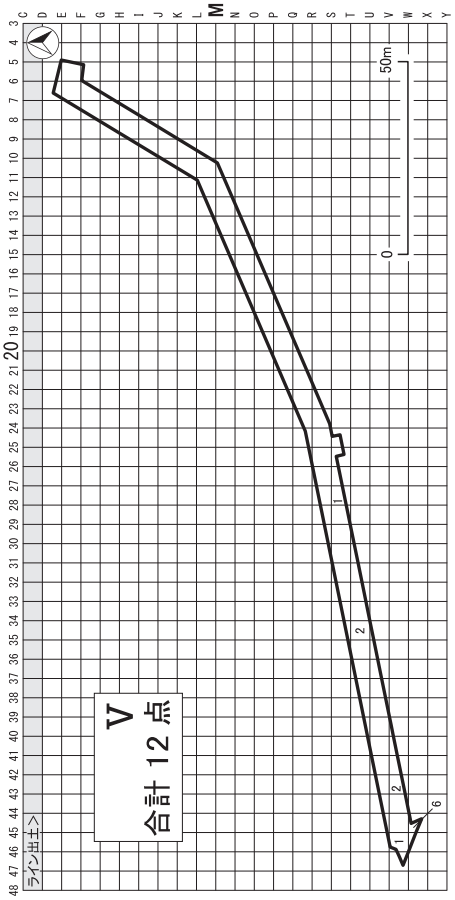


図Ⅳ－49　グリッド別点数（２）

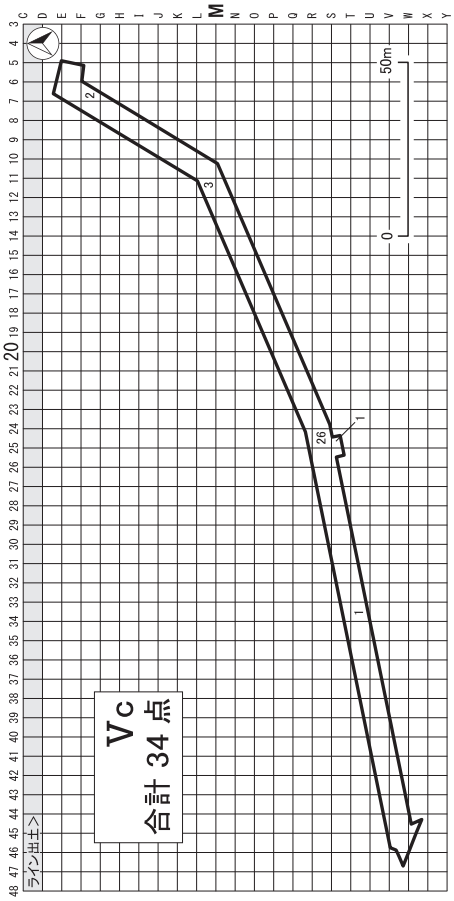


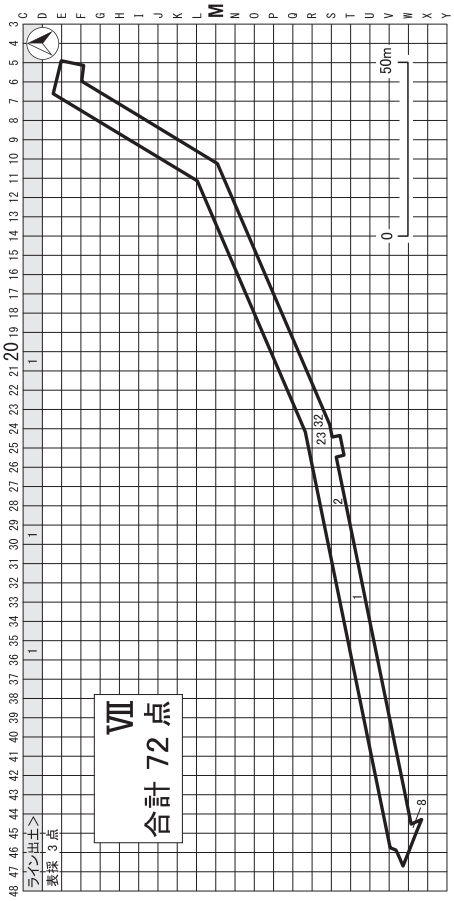


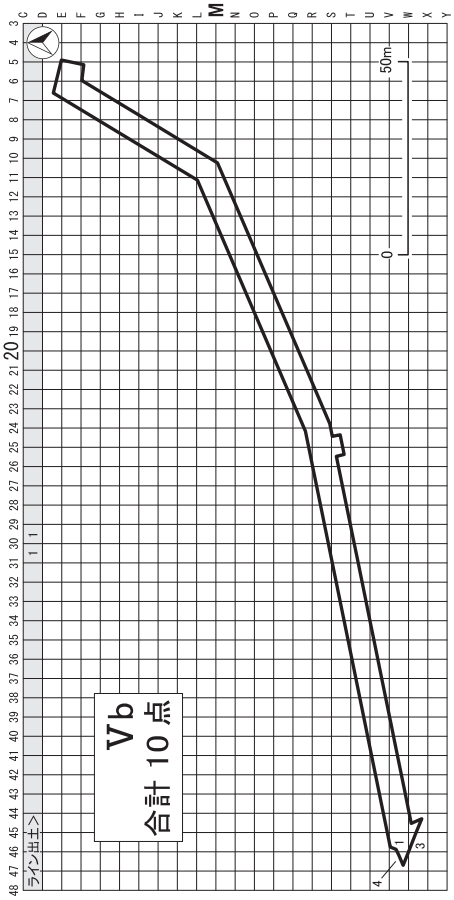


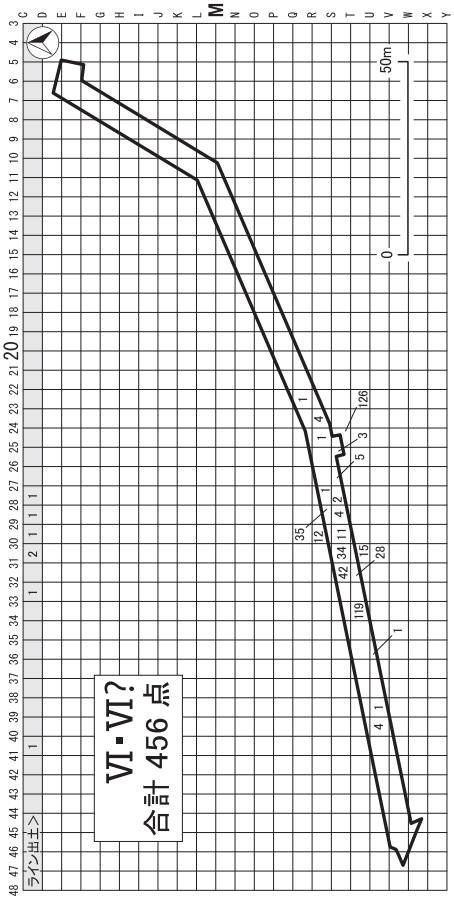


図Ⅳ－50　グリッド別点数（３）

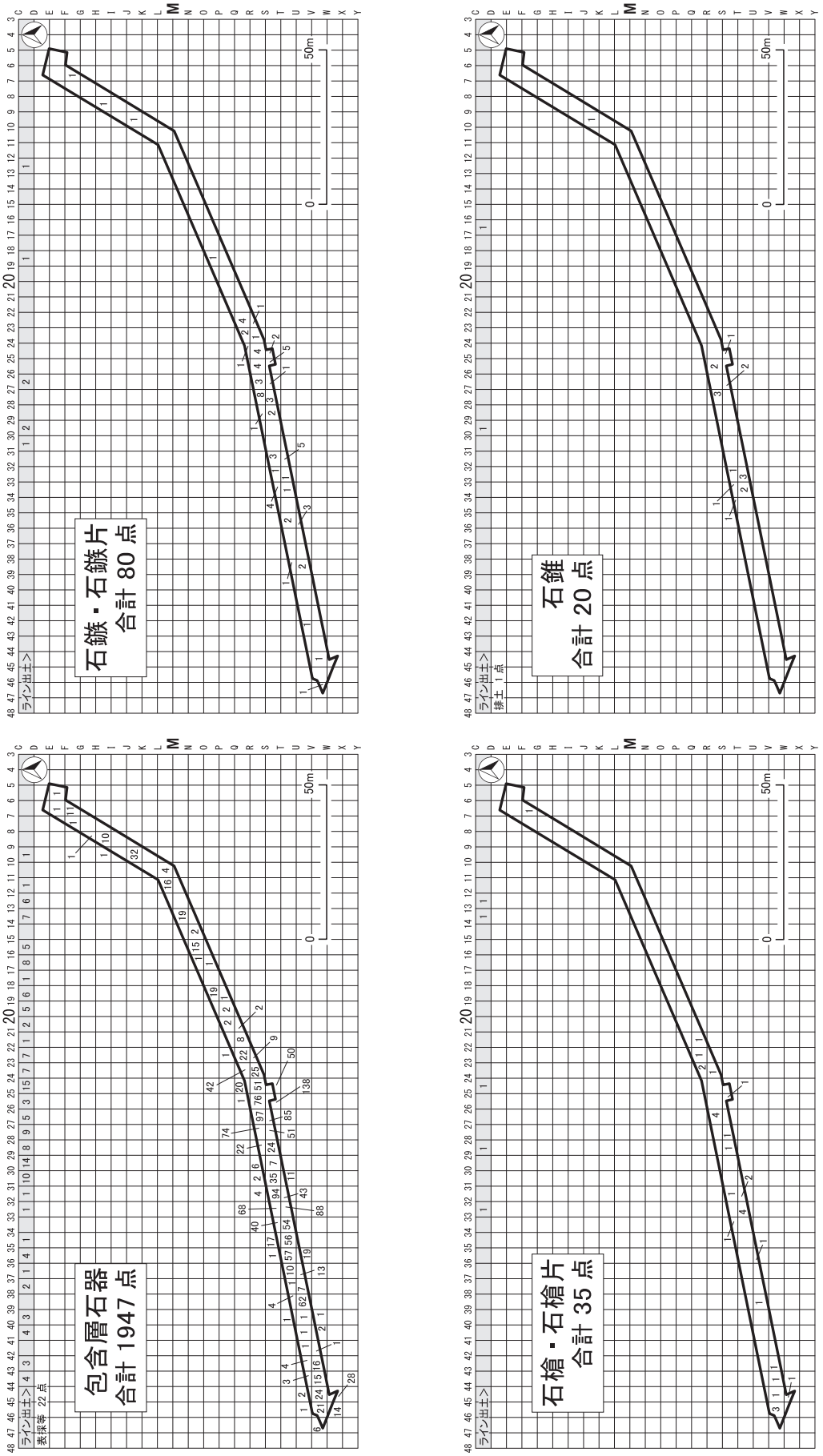




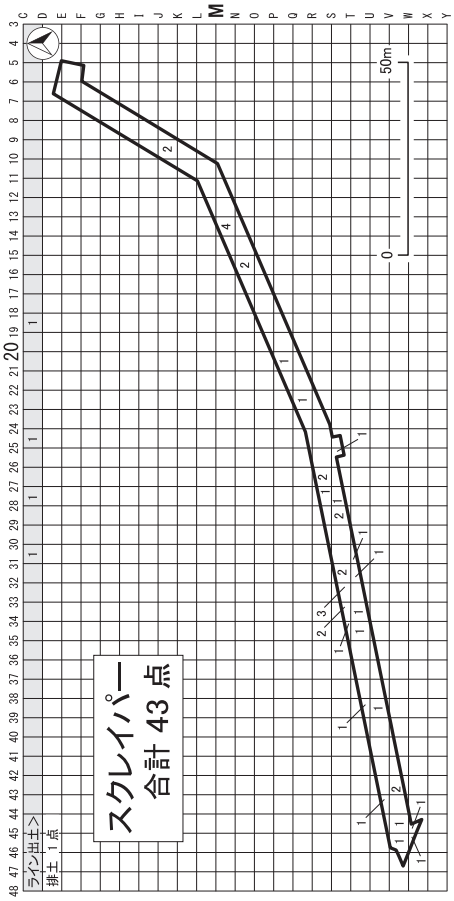


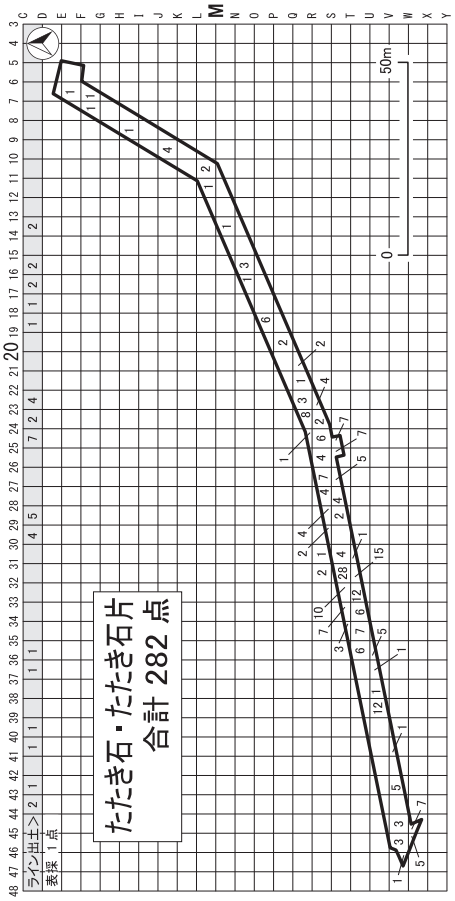


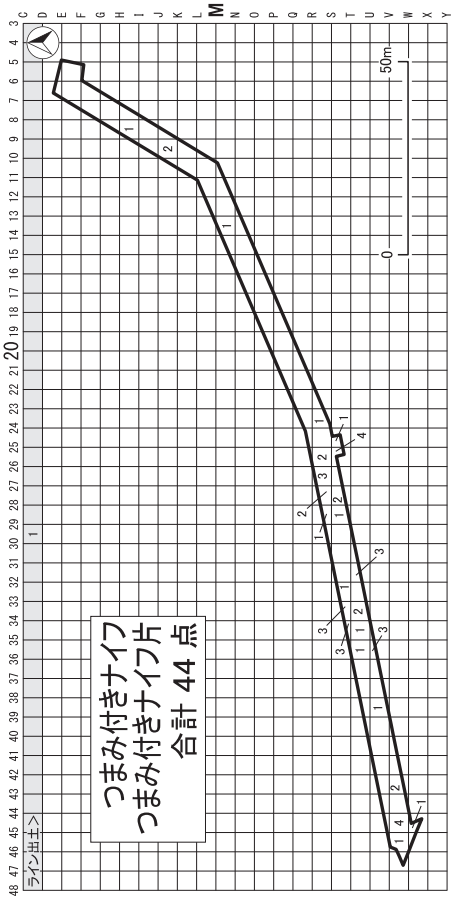
図Ⅳ－51　グリッド別点数（４）

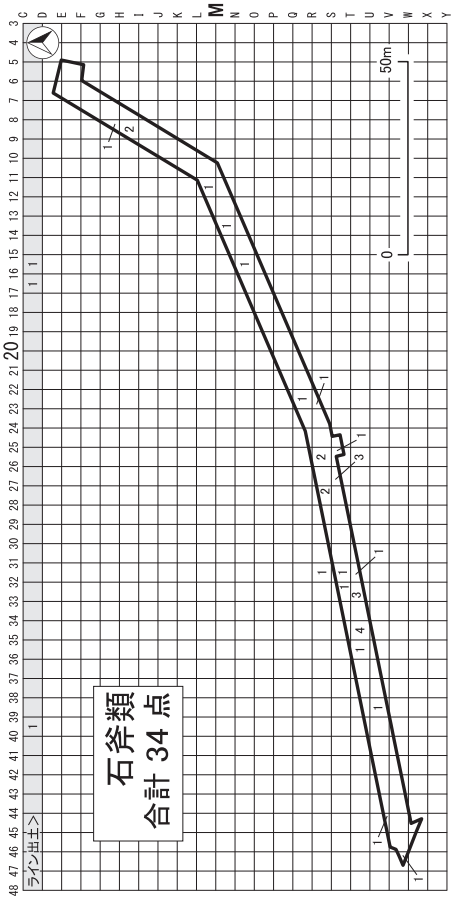


図Ⅳ－52　グリッド別点数（５）

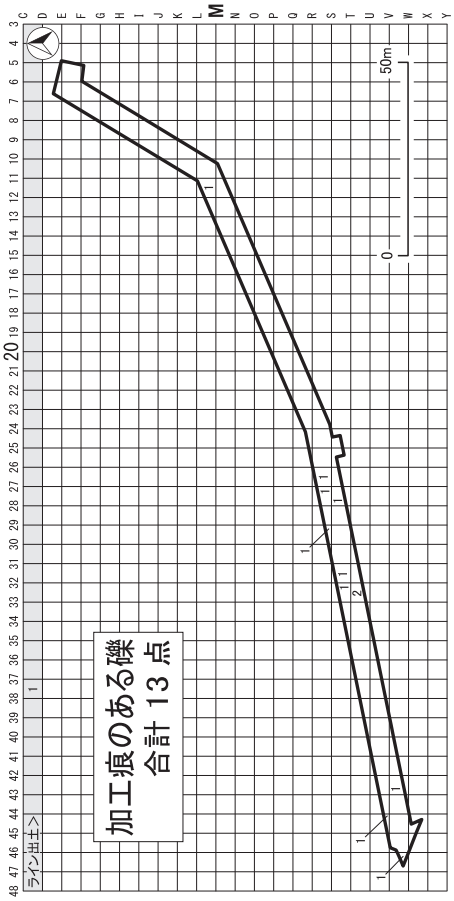


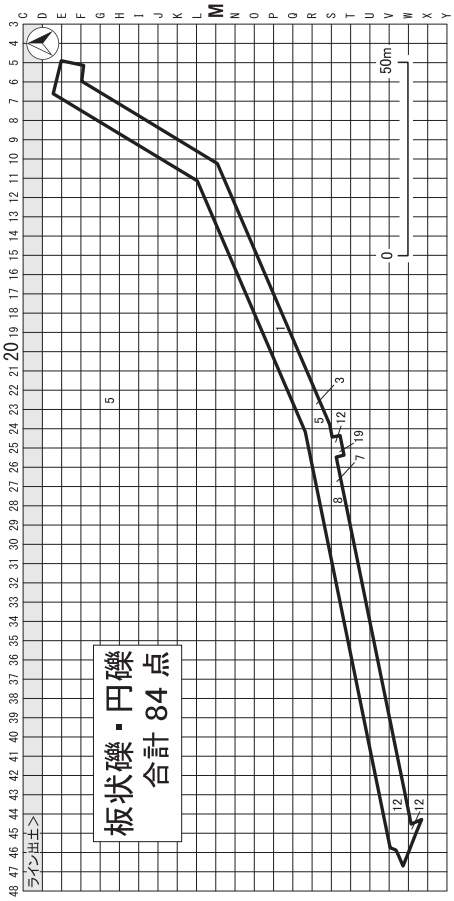


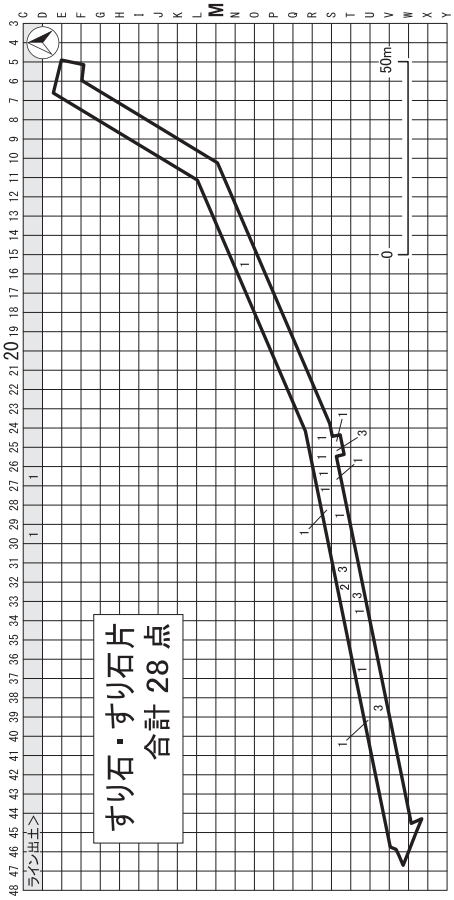


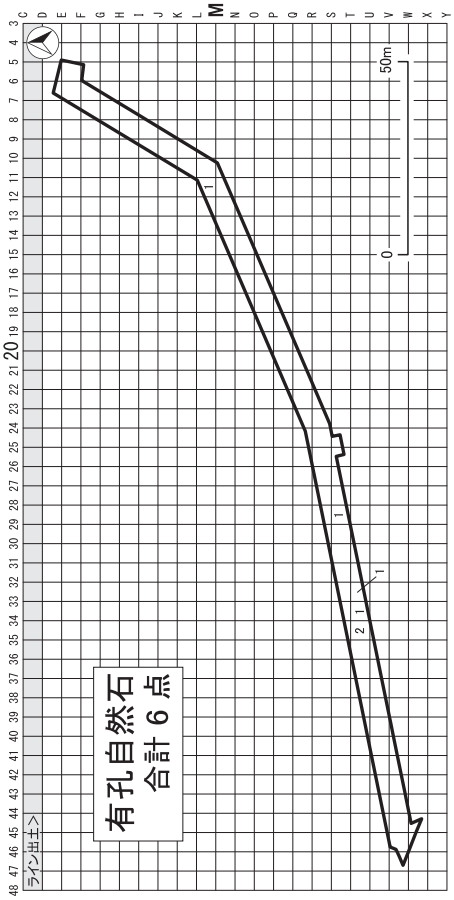


図Ⅳ－53　グリッド別点数（6）









図Ⅳ－54　グリッド別点数（７）

表Ⅳ－１　遺構一覧

遺構名	調査区	規模(m)		深さ	確認面	時期	調査担当	備考
		確認面の長径×短径	床・底面の長径×短径					
F－1	Q21	0.68×0.48		0.05	Ⅲ	擦文後期?	立田	平地住居を構成か
F－2	Q21・R21	(0.98)×(0.25)		0.11	Ⅲ	擦文後期?	立田	平地住居を構成か
F－3	S24	(0.32)×0.30		0.03	Ⅲ	北大Ⅰ式	立田	
F－4	S25	(0.61)×0.48		0.04	Ⅲ	北大Ⅰ式	立田	炭素年代測定
F－5	V43	0.46×0.40		0.06	Ⅲ	擦文後期	新家	
F－6	T32	—×—			Ⅲ	北大Ⅰ式	立田	壁面で検出
F－7	S27	—×—			Ⅲ	縄文晩期	立田	壁面で検出
S－1	Q・R22	0.92×0.68			Ⅲ	擦文後期	立田	平地住居を構成か
S－2	S24	2.36×1.24			Ⅲ	アイヌ文化期	立田	
S－3	S24	2.12×1.18			Ⅲ	アイヌ文化期	立田	
S－4	S25	2.44×(1.15)			Ⅲ	アイヌ文化期	立田	
土器集中1	W44	1.10×0.98			Ⅲ	擦文後期(11世紀)	立田	
土器集中2	W44	0.92×0.76			Ⅲ	擦文後期(11世紀)	立田	
土器集中5	S25	0.63×0.60			Ⅲ	北大Ⅰ式	立田	
土器集中6	S24	1.02×(0.90)			Ⅲ	北大Ⅰ式	立田	
SP－1	R22	0.16×0.16		0.50		擦文後期	立田	平地住居を構成か
SP－2	R23	0.14×0.14		0.20		擦文後期	立田	平地住居を構成か
SP－3	Q22	0.12×0.10		0.06		擦文後期	立田	平地住居を構成か
H－1	U34、T・U35	(4.18)×(2.02)	(3.27)×(1.74)	0.60	Ⅴ	縄文中期後半	立田	炭素年代測定
H－2	S・T32	4.03×3.65	2.34×2.09	0.96	Ⅴ	縄文早期後半	立田	
H－3	R・S24・25	(5.90)×4.26	3.68×3.41	0.35	Ⅴ	縄文中期前半	立田	炭素年代測定
H－4	U35、36	(1.19)×(0.27)	(0.31)×(0.23)	0.66	Ⅴ	縄文中期後半	立田	
P－1	Q22	0.93×0.83	0.80×0.73	0.47	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－2	T35	1.28×1.14	0.98×0.84	0.49	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－3	Q・R22	1.04×(0.94)	0.60×(0.65)	0.38	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－4	P・Q21	1.89×1.78	1.42×1.46	0.50	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－5	Q21、22	1.41×1.30	0.84×0.80	0.47	Ⅴ	縄文晩期(Ta-c以降)	立田	
P－6	Q22	1.08×1.06	0.86×0.86	0.48	Ⅴ	縄文晩期(Ta-c以降)	立田	
P－7	R24	0.95×0.65	0.60×0.42	0.25	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－8	T42	1.00×0.62	0.60×0.38	0.28	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－9	U40、41	0.82×0.64	0.24×0.20	0.19	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－10	U40	0.66×0.45	0.40×0.29	0.16	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－11	T34	1.81×1.50	0.80×0.81	0.70	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－12	T34	1.38×1.14	0.90×0.78	0.44	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－13	欠番				Ⅴ		立田	
P－14	T35、36	1.56×1.44	1.29×1.09	0.38	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－15	S33、34	1.54×1.42	1.05×0.82	0.72	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	炭素年代測定
P－16	U40	0.74×0.44	0.46×0.27	0.17	Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－17	U37	1.29×1.05	(0.30)×0.40	0.36	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－18	R29	0.62×0.46	0.36×0.30	0.46	Ⅴ	縄文中期～晩期(Ta-c以前)	立田	
P－19	U36	1.10×(0.76)	0.75×(0.56)	0.32	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－20	T37、38	1.15×(0.84)	0.73×(0.40)	0.39	Ⅴ	縄文中期～後期	立田	
P－21	S30	1.87×1.36	(0.60)×0.87	0.15	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－22	S29	0.84×0.76	0.60×0.53	0.29	Ⅴ	縄文中期～後期	立田	
P－23	T38	(0.58)×0.52	(0.39)×0.30	0.20	Ⅴ	縄文晩期(Ta-c以前)	立田	
P－24	U38	0.78×(0.50)	0.49×(0.30)	0.41	Ⅴ	縄文中期～後期	立田	
P－25	U41	0.69×0.56	0.25×0.21		Ⅴ	縄文晩期	立田	
P－26	R24、25	1.16×1.09	0.99×0.81	0.17	Ⅴ	縄文中期前半	立田	
P－27	T33	1.27×1.08	0.75×0.54	0.19	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－28	T33	0.66×0.52	0.36×0.27	0.10	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－29	U37	0.67×(0.47)	0.35×(0.31)	0.28	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－30	S30	0.93×0.71	0.43×0.36	0.22	Ⅴ	縄文中期～晩期(Ta-c以前)	立田	
P－31	U37	0.62×0.56	0.33×0.34	0.14	Ⅴ	縄文早期後半・前期前半	立田	
P－32	W43	(0.55)×(0.17)		0.42	Ⅴ	縄文中期～後期	立田	
TP－1	S28、29	2.28×1.51	1.70×0.52	0.90	Ⅴ	縄文後期	立田	杭跡検出
F－8	M13	0.86×0.63		0.07	Ⅴ	縄文	新家	
F－9	N14	0.56×0.49		0.15	Ⅴ	縄文	新家	
SP－4	M13	0.30×0.23		0.28	Ⅴ	縄文	新家	
SP－5	M13	0.21×0.19		0.18	Ⅴ	縄文	新家	
SP－6	M12	0.29×0.20		0.33	Ⅴ	縄文	新家	
SP－7	M12	0.15×0.15		0.21	Ⅴ	縄文	新家	
SP－8	M12	0.24×0.21		0.20	Ⅴ	縄文	新家	
SP－9	N12	0.14×0.13		0.17	Ⅴ	縄文	新家	
SP－10	M12	0.18×0.18		0.26	Ⅴ	縄文	新家	
SP－11	M14	0.20×0.18		0.12	Ⅴ	縄文	新家	
SP－12	N14	0.28×0.24		0.13	Ⅴ	縄文	立田	
土器集中3	T・U38	0.72×0.32			Ⅲ	縄文後期後葉	立田	
土器集中4	S32	0.62×0.28			Ⅲ	縄文中期後半	立田	

表Ⅳ－２　遺構別出土遺物一覧

遺構	層位	Ⅰ群b類	Ⅱ群a類	Ⅱ群b類	Ⅲ群a類	Ⅲ群b類	Ⅳ群a類	Ⅳ群b類	Ⅳ群c類	Ⅴ群a類	Ⅴ群b類	Ⅴ群c類	Ⅵ群	Ⅶ群	石鏃	石槍	石錐	両面調整石器	つまみ付きナイフ	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	石斧・石斧関連遺物	たたき石	すり石	砥石(片)	石皿(片)	加工痕ある礫	円礫・棒状礫	板状礫	有意の礫	礫・礫片	地山礫	鉄製品	合計
F－1																																	9			9
F－2																																				
F－3													5										7										7			19
F－4													2										14				3			1		1	4		1	26
F－5																																	3			3
F－6																							2													2
F－7																																	1			1
S－1																							1							19			29			49
S－2													1																	83		1	15			100
S－3																														16			13		2	31
S－4													6										1							9			3	1	1	21
S－5																											1						17			18
土器集中1														89																						89
土器集中2		1												55																						56
土器集中5													102																							102
土器集中6													184																							184
SP－1																																				
SP－2																																				
SP－3																																				
H－1	覆土		1		1	4	2								2	1				1			15	2	1			1					19	25		75
	床					9									2				1		1		2										1			16
H－2	覆土	5	5		1		1								3		1		4	2	2		62	1	2			3	1			4	35	28		160
	床																						1													1
H－3	覆土				14	2										1	1			3			32		1								10	5		69
HP－1	覆土				1																		1		1								1	3		7
	床				9																1							9						1		20
H－4	覆土	1				5															1		1										1			9
	床																																			
P－1		1	1																												3		1			6
P－2			3				3														3		4										4	8		25
P－3			1		1																												1			3
P－4		2																							3								5	8		18
P－5		1																															6			7
P－6		1			2																												3	2		8
P－7		1																														1	1			3
P－8																																		1		1
P－9																							1										2			3
P－10																							2													2
P－11																																	1			1
P－12																																				
P－14		4				1																	11									1	9	6		32
P－15			5																				3										9			17
P－16																																				
P－17																							2											1		3
P－18																																				
P－19																																				
P－20																																				
P－21																							2													2
P－22		1																																1		2
P－23		1																					3											1		5
P－24																																				
P－25																																				
P－26																																				
P－27																																				
P－28		2																																		2
P－29																							1											1		2
P－30																																	1			1
P－31																																				
P－32																									1											1
TP－1		1		1	1										1								4		1								27	13		49
F－8																							330										4			334
F－9																							12										4			16
土器集中4						22	1																													23
土器集中3									118																											118
SP－4																																				
SP－5																																				
SP－6																																				
SP－7																																				
SP－8																																				
SP－9																																				
SP－10																																				
SP－11																																				
SP－12																																				
不明																							1													
合計		22	16	1	30	43	7	0	118	0	0	0	300	144	8	2	2	0	5	6	8	0	515	3	10	0	4	13	1	128	3	8	246	105	4	1752

表Ⅳ－３　復元土器一覧

掲載図番号		復元番号	接合・未接合	遺構・発掘区	層位	分類	遺物番号	点数	口径	器高	底径	特徴・焼成・色調	胎土混入物
図Ⅳ-15	1	119	接合	PS－2		Ⅶ		36	21.6	27.3	7.7	深鉢、三段口縁、山形文、綾杉状短刻線、底部砂粒不着・良好・にぶい黄褐色～黒褐色	細粒砂(Cha、石英、自形輝石)底面の砂粒も同様
			接合	W44	Ⅳ	Ⅶ		1					
	2	120	接合	PS－2		Ⅶ		17	(15.5)	15.7	5.5	小型深鉢、馬蹄形圧痕の囲繞帯、「ハ」の字状沈線・良好・にぶい褐色～灰褐色	細粒砂(自形輝石、Cha、石英)
	3	121	接合	PS－1		Ⅶ		43	(22.0)	23.0	6.8	刷毛目調整のみの無紋深鉢。三段口縁か・良好・灰黄褐色～にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石、Cha)
			接合	PS－2		Ⅶ		2					
			接合	W44	Ⅳ	Ⅶ		2					
			接合	W44	Ⅴ	Ⅶ		2					
			未接合	PS－1		Ⅶ		48					
			未接合	W44	Ⅴ	Ⅶ		2					
			未接合	PS－2		Ⅶ		1					
	4	116	接合	PS－5		Ⅵd		62	(19.3)	(23.1)	(9.0)	深鉢。斜格子状の微隆起線文。OI円形刺突文・良好・にぶい黄褐色(下半)～黒褐色(上半)	細粒砂(石英、Cha)
			接合	PS－6		Ⅵd		3					
			接合	S24	Ⅲ	Ⅵd		26					
			接合	S25	Ⅲ	Ⅵd		2					
			未接合	PS－5		Ⅵd		24					
			未接合	S24	Ⅲ	Ⅵd		4					
			未注記	PS－5	Ⅲ	Ⅵd		17					
	5	122	接合	PS－6		Ⅵd		60	(19.0)	29.8	8.6	無紋深鉢。OI円形刺突文、切出状口縁には刻み・良好・にぶい橙色(下半)～黒色(上半)	細粒砂(自形輝石、Cha)
			接合	S24	Ⅲ	Ⅵd		23					
			未接合	PS－6	Ⅲ	Ⅵd		64					
			未接合	S－4	Ⅲ	Ⅵd	7	1					
			未接合	S24	Ⅲ	Ⅵd		26					
			未接合	S26	Ⅲ	Ⅵd		1					
			未接合	T31	Ⅲ	Ⅵd		2					
			未注記			Ⅵd		75					
図Ⅳ-33	8	97	接合	PS－3	Ⅴ	Ⅳc		77	(25.0)	(26.0)	—	深鉢、底部欠損、IO突瘤文、沈線文・良好・にぶい黄褐色～黒褐色	細粒砂(Cha、石英、白色岩片)
			同一個体未接合	PS－3	Ⅴ	Ⅳc		19					
			未注記			Ⅳc		22					

表Ⅳ－４　Ⅲ層出土拓本土器一覧

掲載図番号		復元番号	接合・未接合	遺構・発掘区	層位	分類	遺物番号	点数	特徴・焼成・色調	胎土混入物
図Ⅳ-16	1	100	接合	R24	Ⅲ	Ⅴc		7	鉢、工字文風沈線、一部赤彩・良好・にぶい黄褐色	精製粘土か、極細粒砂(長石、Cha)
			接合	S24	Ⅲ	Ⅴc		1		
			同一個体未接合	R24	Ⅲ	Ⅴc		14		
			同一個体未接合	31ライン	Ⅴ重機	Ⅴc		1		
	2	104	接合	R28	Ⅲ	Ⅵc		11	菱形沈線文、点列文、帯状縄文・良好・明黄褐色	極細粒砂(自形輝石、自形長石)
			同一個体未接合	R28	Ⅲ	Ⅵc		3		
			同一個体未接合	R29	Ⅲ	Ⅵc		2		
			同一個体未接合	S28	Ⅲ	Ⅵc		1		
	3	101	接合	R28	Ⅲ	Ⅵd		6	帯状縄文+刺突・良好・褐色	細粒砂(Cha、石英、白色岩片)
			同一個体未接合	R28	Ⅲ	Ⅵd		4		
	4	107	接合	S31	Ⅲカクラン	Ⅵd		3	帯状縄文+刺突・良好・灰黄褐色	細粒砂(自形輝石)
			同一個体未接合	S31	Ⅲカクラン	Ⅵd		5		
			同一個体未接合	S31	Ⅴ	Ⅵd		1		
			同一個体未接合	30ライン	Ⅴ重機	Ⅵd		1		
	5	109-a	接合	T31	Ⅲ	Ⅵd		7	微隆起線文、円形刺突文・良好・黒褐色	砂粒(白色岩片)
			未接合	T31	Ⅲ	Ⅵd		10		
			未接合	U39	Ⅲ	Ⅵd		1		
	6a	112	接合	T30	Ⅲ	Ⅵd		2	浅鉢、微隆起線文・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(Cha、自形輝石)
	6b	113		T30	Ⅲ	Ⅵd		1		
	7	103	接合	S31	Ⅲカクラン	Ⅵd		2	小形浅鉢、微隆起線文・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石)
				32ライン	Ⅴ重機	Ⅵd		1		
			同一個体未接合	S31	Ⅲカクラン	Ⅵd		15		
	8	111		U38	Ⅲ	Ⅵd		1	微隆起線文+円形刺突文・良好・にぶい黄褐色	精製粘土?わずかに自形輝石
			接合	U39	Ⅲ	Ⅵd		2		
	9	110	接合	S27	Ⅲ	Ⅵd		2	微隆起線文+円形刺突文・良好・黒褐色	細粒砂(石英、Cha)
			未接合	R28	Ⅲ	Ⅵd		2		
	10	114		T31	Ⅲ	Ⅵd		1	片口or注口・良好・褐灰色	細粒砂(自形輝石、Cha)
	11	115		T31	Ⅲ	Ⅵd		1	注口部分・良好・明黄褐色	細粒砂(自形輝石、Cha)
	12	106-a		T33	Ⅲ	Ⅵd		1	口縁部・良好・明黄褐色	砂粒(Ms)
	13	106-b	接合	S31	Ⅲカクラン	Ⅵd		2	小形鉢、一部縄文・良好・明黄褐色	細粒砂(自形輝石)
			同一個体未接合	S24	Ⅲ	Ⅵd		1		
			同一個体未接合	S31	Ⅲカクラン	Ⅵd		2		
			同一個体未接合	T31	Ⅲ	Ⅵd		3		
			同一個体未接合	T33	Ⅲ	Ⅵd		5		
	14	108	接合	R29	Ⅲ	Ⅵd		7	小形鉢、口縁に肥厚帯あり・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石)
			接合	S29	Ⅲ	Ⅵd		6		
			接合	S30	Ⅲ	Ⅵd		1		
			同一個体未接合	Q22	Ⅵ	Ⅵd		1		
			同一個体未接合	R29	Ⅲ	Ⅵd		1		
			同一個体未接合	S25	Ⅲ	Ⅵd		1		
			同一個体未接合	S29	Ⅲ	Ⅵd		2		
			同一個体未接合	S30	Ⅲ	Ⅵd		2		
			同一個体未接合	T33	Ⅲ	Ⅵd		1		
	15	102	接合	S30	Ⅲ	Ⅵd		2	底部、Ⅶ群の可能性あり・良好・にぶい褐色	砂粒(白色岩片、自形輝石)
			接合	T30	Ⅲ	Ⅵd		4		
			同一個体未接合	S30	Ⅲ	Ⅵd		2		
	16a	117-a		表採	Ⅲ	Ⅶ		1	有段口縁、沈線文・良好・にぶい黄褐色	極細粒砂(長石)
	16b	117-b		S27	Ⅴ	Ⅶ		1		
	17	118	接合	R23	Ⅲ	Ⅶ		11	杯、肥厚帯に刻み・良好・明黄褐色	極細粒砂(自形輝石)

表Ⅳ－５　Ⅴ層検出住居出土拓本土器一覧

掲載図番号		復元番号	接合・未接合	遺構・発掘区	層位	分類	遺物番号	点数	特徴・焼成・色調	胎土混入物
図Ⅳ-21	1a	61-a	接合	H-1	覆土	Ⅲa		1	貼付帯に刺突、沈線文・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石、白色岩片、Cha)
			接合	T35	Ⅴ	Ⅲa		1		
	1b	61-b		T34	Ⅴ	Ⅲa		4		
	2a	89-a	接合	P-2	覆土	Ⅳa		1	口縁に幅広の肥厚帯。LR縄文・良好・黒褐色	細粒砂(自形輝石、火山ガラス、石英、長石)
			接合	U35	Ⅴ	Ⅳa		1		
	2b	89-b	接合	H-1	覆土	Ⅳa		1		
			接合	T35	カクラン	Ⅳa		1		
	2	89	同一個体未接合	H-1	覆土	Ⅳa		1		
			同一個体未接合	T35	カクラン	Ⅳa		1		
	3	73		H-1	床	Ⅲb	1	2	LRL複節・良好・暗褐色	細粒砂(石英、Cha)
	4	72	接合	H-1	覆土	Ⅲb		1	胴部・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(石英、Cha、長石)
			接合	H-1	床	Ⅲb	3	1		
図Ⅳ-22	1	40		H-2	覆土	Ⅱa		1	胴部・良好・明黄褐色	繊維・極細粒砂(極少)
	2	42		H-2	覆土	Ⅲa		1	胴部・良好・にぶい黄褐色	繊維・極細粒砂(Cha、少)
	3	90		H-2	覆土	1 Ⅳa		1	貼付帯部・良好・黒褐色	砂粒(自形輝石、長石、白色岩片)
	6	67	接合	H-3	覆土	Ⅲa		1	貼付帯・良好・黒褐色	繊維少・細粒砂(白色岩片)
			接合	H-3/HP-1	覆土	Ⅲa		1		
	7	75	接合	H-3	床	Ⅲa	4	3	結束第1種斜行・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(白色岩片、Cha)
			同一個体未接合	H-3	床	Ⅲa	3	6		
	12	77		H-4	覆土	Ⅲb		1	LR斜行・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(Cha、Tu)

表Ⅳ－６　Ⅴ層検出土坑出土拓本土器一覧

掲載図番号		復元番号	接合・未接合	遺構・発掘区	層位	分類	遺物番号	点数	特徴・焼成・色調	胎土混入物
図Ⅳ-33	1	41		P-1	覆土	Ⅱa		1	太いRL・良好・明黄褐色	繊維・細粒砂(石英、Cha、白色岩片)
	2	44		P-3	覆土	Ⅱa		1	太いRL・良好・にぶい黄褐色	繊維・細粒砂(An、自形輝石)
	3	76	接合	P-6	覆土	Ⅲa		1	刻みのある口縁部・良好・にぶい黄褐色	繊維少・細粒砂(Cha、石英、自形輝石)
			同一個体未接合	Q24	Ⅴ	Ⅲa		1		
	4	78		P-6	覆土	Ⅲa		1	胴部・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(Cha、石英)
	5	66		P-14	覆土	Ⅲb		1	胴部RL・良好・明褐色	細粒砂(Tu、石英)
	6	46	接合	P-15	検出面	Ⅱa	1	5	太いRL斜行縄文、施文後にナデ・良好・黄褐色	繊維・砂粒少(白色岩片Tu?)
			接合	S33	Ⅵ	Ⅱa		15		
			未接合	S33	Ⅵ	Ⅱa		8		
			未接合	S25	Ⅴ	Ⅱa		1		
	7	45		TP-1	覆土	Ⅱb		1	条の間隔が広い縄文・良好・明褐色	繊維少・細粒砂(石英、Cha)
	9	43	接合	PS-4	Ⅴ	Ⅲb		4	底部付近・良好・にぶい褐色	細粒砂(石英、長石、自形輝石、白色岩片)
	10	79	接合	PS-4	Ⅴ	Ⅲb		17	二種の原体・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石、自形長石、Pu)

表Ⅳ－７　遺構出土掲載石器一覧

掲載図番号		遺構名	層位	遺物番号	取り上げ日	遺物名	石材	長さ	厚さ	幅	重さ(g)	備考	実測番号
図Ⅳ-10	1	F　4	Ⅲ	4+5+6	2016/9/14	砥石	Sa	(11.30)	(9.30)	(2.70)	(253.10)		
図Ⅳ-21	5	H　1	覆土		2016/9/14	石鏃	Obs	2.60	1.60	0.40	1.10		48
	6	H　1	覆土		2016/9/14	石鏃	Obs	4.10	1.30	0.70	2.60		49
	7	H　1	床	5	2016/9/20	石鏃	Obs	4.00	1.90	0.60	2.70		47
	8	H　1	床	2	2016/9/20	石鏃	Obs	(3.70)	1.90	0.60	(3.00)		46
	9	H　1	覆土		2016/9/14	石槍	Obs	(6.50)	2.70	0.50	(5.30)		51
	10	H　1	床	4	2016/9/20	つまみ付きナイフ	Obs	4.40	2.30	0.80	7.40		54
	11	H　1	覆土		2016/9/14	スクレイパー	Ag	5.40	3.50	1.40	21.80		56
	12	H　1	覆土		2016/9/16	石斧	Ms	9.30	3.90	1.70	73.00		
	13	H　1	覆土		2016/9/16	石斧	Grs	(8.70)	5.50	2.30	(172.00)		
	14	H　1	覆土		2016/9/16	石皿	Sa	19.60	15.10	10.70	4330.00		59
図Ⅳ-22	4	H　2	覆土		2016/9/26	石鏃	Obs	(2.20)	(1.80)	0.50	(1.00)		50
	5	H　2	覆土		2016/9/14	たたき石	Sa	6.60	5.20	4.00	161.40		4
	8	H　3	覆土		2016/9/20	石槍	Obs	5.50	2.30	0.80	6.80		52
	9	H　3	覆土		2016/9/20	石錐	Obs	3.20	3.40	0.80	6.40		53
	10	H　3	覆土		2016/9/20	スクレイパー	Obs	3.60	(5.10)	0.90	(14.80)		55
	11	H　3	覆土		2016/9/20	たたき石	Sa	13.40	7.60	4.80	507.10		5
図Ⅳ-34	1	P　4	覆土		2016/9/26	たたき石	Sa	(11.50)	6.80	2.70	(305.20)		1
	2	P　32	覆土		2016/10/25	たたき石	Sa	12.80	6.10	3.00	286.90		2
	3	P　28	覆土		2016/10/7	石皿	Sa	40.40	38.70	11.20	25800.00		60
	4	TP　1	覆土		2016/9/5	たたき石	Sa	15.50	5.40	3.90	322.10		3

表Ⅳ－８　Ⅴ層出土拓本土器一覧

掲載図番号		復元番号	接合・未接合	遺構・発掘区	層位	分類	遺物番号	点数	特徴・焼成・色調	胎土混入物
図Ⅳ-37	1a	9-a		S32	V	Ⅰb		1	貼付帯、良好・にぶい褐色	細粒砂(自形輝石、Cha、Sa等)
	1b	9-b		S32	V	Ⅰb		1		
	1	9	同一個体未接合	T35	V	Ⅰb		1		
	2	6	接合	S32	V	Ⅰb		1	1に同じ	1に同じ
	3	21	接合	T32	V	Ⅰb		1	組紐圧痕・良好・橙色	細粒砂(自形輝石or角閃石、石英、長石、Pu)
			接合	T33	V	Ⅰb		1		
			接合	T33	Ⅵ	Ⅰb		1		
	4	3		Q23	V	Ⅰb		1	組紐圧痕+短縄文・良好・赤褐色	細粒砂(自形角閃石、石英)
	5	16		R23	Ⅵ	Ⅰb		1	組紐圧痕+短縄文・良好・明黄褐色	極細粒砂(自形輝石、長石、石英)
	6	8		U35	V	Ⅰb		1	貼付帯上に刻み・良好・明黄褐色	極細粒砂(石英、長石)
	7	18	接合	S26	V	Ⅰb		2	縦位縄線・良好・明黄褐色	細粒砂(白色岩片、輝石、長石)
	8	29		V44	V	Ⅰb		1	絡条体文・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(Cha、自形輝石)
	9	19		T35	Ⅵ	Ⅰb		1	微隆起線・良好・にぶい黄橙色	細粒砂(自形輝石、Cha、Ser)
	10	1		Q22	V	Ⅰb		1	微隆起線・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石、An)
	11	5		R23	Ⅵ	Ⅰb		1	微隆起線・良好・明黄褐色	細粒砂(Cha、自形輝石)
	12	4		28ライン	Ⅴ重機	Ⅰb		1	微隆起線・良好・にぶい褐色	砂粒多い(白色岩片、自形輝石、Cha)
	13	34		V44	V	Ⅰb		1	微隆起線・良好・にぶい黄橙色	細粒砂(自形斜長石)
	14	39		26ライン	Ⅴ重機	Ⅰb		1	微隆起線・良好・にぶい黄橙色	細粒砂(Cha、自形輝石)
	15	35		V45	V	Ⅰb		1	細微隆起線・良好・にぶい褐色	細粒砂(自形輝石、長石)
	16	2	接合	Q23	V	Ⅰb		2	細微隆起線・良好・橙色	細粒砂(自形輝石、石英、長石、白色岩片)
	17	13		S31	V	Ⅰb		1	細微隆起線・良好・黒褐色	細粒砂(自形輝石、Cha)
			同一個体未接合	S31	V	Ⅰb		1		
	18	10		W45	V	Ⅰb		1	偽結束羽状文・良好・灰黄褐色	細粒砂(白色岩片、Cha)
	19	20		V45	V	Ⅰb		1	魚骨文・良好・にぶい黄橙色	細粒砂(自形輝石、Cha)
	20	38		T31	V	Ⅰb		1	無節・良好・明黄褐色	極細粒砂(Ms、自形輝石、長石、白色岩片)
	21	11		S33	Ⅵ	Ⅰb		1	口縁部、絡条体・良好・黒褐色	極細粒砂(自形輝石、長石、白色岩片)
	22	15		S31	V	Ⅰb		1	口縁部、縄線・良好・黒褐色	極細粒砂(自形輝石、石英、白色岩片)
	23	12		Q23	V	Ⅰb		1	口縁、短縄文・良好・黒褐色	極細粒砂(自形輝石、白色岩片)
			同一個体未接合	Q23	V	Ⅰb		2		
	24	23	接合	T40	Ⅵ	Ⅰb		2	口縁、撚糸文・良好・黒褐色	細粒砂(Ms、自形輝石)
	25	27		T35	Ⅵ	Ⅰb		1	口縁、撚糸文・良好・黒褐色	細粒砂(石英、自形輝石、白色岩片)
	26	24		Q23	V	Ⅰb		1	撚糸文・やや良・黒褐～黄褐色	細粒砂(自形輝石)
	27	7		T39	Ⅵ	Ⅰb		1	撚糸文・やや良・黒褐～黄褐色	繊維・細粒砂(Ms、自形輝石)
	28	28		W44	V	Ⅰb		1	口縁、撚糸文・良好・黒褐～黄褐色	細粒砂多い(自形輝石、白色岩片、長石)
			同一個体未接合	W44	V	Ⅰb		1		
	29	26		W44	V	Ⅰb		1	口縁、撚糸文良好・黒褐色	細粒砂多い(自形高温石英、長石)
	30	14		S34	Ⅵ	Ⅰb		1	撚糸文・良好・黒褐～暗褐色	細粒砂多い(Cha、石英、自形輝石)
	31	36		29ライン	Ⅴ重機	Ⅰb		1	撚糸文・良好・明黄褐色	極細粒砂(自形輝石、自形長石)
	32	33		Q23	V	Ⅰb		1	撚糸文・良好・明黄褐色	極細粒砂(自形輝石、石英、長石)
			同一個体未接合	T32	V	Ⅰb		1		
	33	37	接合	U38	V	Ⅰb		4	撚糸文・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(Cha)
	34	32	接合	S32	V	Ⅰb		2	撚糸文・良好・明黄褐色	極細粒砂(自形輝石、石英、長石)
	35	25		T34	V	Ⅰb		1	撚糸文・良好・明黄褐色	細粒砂(Cha)
	36	71		Q23	V	Ⅰb		1	撚糸文・やや良・黒褐～にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石、長石)
	37	22		U41	V	Ⅰb		1	底部・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(Cha)
	38	49	接合	S34	Ⅵ	Ⅱa		1	良・にぶい黄褐色	繊維・細粒砂(白色岩片)
			接合	T34	V	Ⅱa		1		
	39	59-a	接合	S32	V	Ⅱa		4	条横走・良・明褐色	繊維・細粒砂(Cha)
	40	59-b	接合	S32	V	Ⅱa		7	条横走・良・黄褐色	繊維・細粒砂(Cha)
		59	同一個体未接合	S27	Ⅲ	Ⅱa		1		
			同一個体未接合	S31	V	Ⅱa		3		
			同一個体未接合	S32	V	Ⅱa		46		
			同一個体未接合	S32	Ⅵ	Ⅱa		1		
			同一個体未接合	S33	Ⅵ	Ⅱa		2		
	41	17	接合	S27	V	Ⅱa		2	押引文・良・にぶい黄褐色	繊維・細粒砂(長石、白色岩片)
	42	50	接合	S33	Ⅵ	Ⅱa		4	太い斜行縄文・良・にぶい黄褐色黄橙色	繊維・細粒砂(Cha)
	43	53		S33	V	Ⅱa		1	太い斜行縄文・良・明黄褐色	繊維・極細粒砂(自形輝石、Cha)
	44	51	接合	R26	V	Ⅱa		4	太い斜行縄文・良・明黄褐色	極細粒砂(自形輝石、白色岩片)
	45	47	接合	T35	Ⅴカクラン	Ⅱa		3	軽い、形状ゆがむ、滑石、蛇紋岩含む・不良・黒褐色	繊維・細粒砂(Ser)
			接合	T35	Ⅵ	Ⅱa		2		
			同一個体未接合	T32	V	Ⅱa		1		
			同一個体未接合	T35	V	Ⅱa		6		
			同一個体未接合	T35	Ⅴカクラン	Ⅱa		23		
			同一個体未接合	T35	Ⅵ	Ⅱa		17		
図Ⅳ-38	46a	57-a	接合	S31	V	Ⅱa		4	口唇角形。LR斜行縄文・やや良・赤橙色	繊維・細粒砂(白色岩片)
	46b	57-b	接合	S31	V	Ⅱa		5		
	46	57	同一個体未接合	S31	V	Ⅱa		18		

図Ⅳ-38	47	56	接合	S31	V	Ⅱb		2	粗い斜行縄文・良好・浅黄褐色	細粒砂(Sa、自形輝石)
	48	55	接合	S31	V	Ⅱb		2	粗い斜行縄文・良好・浅黄褐色	細粒砂(自形輝石)
	49	91	接合	S26	V	Ⅱb		5	粗い斜行縄文・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(Ms、Sa、自形輝石)
			同一個体未接合	S26	V	Ⅱb		2		
	50	84		O18	V	Ⅱb		1	口縁貼付帯・良好・にぶい黄褐色	繊維・極細粒砂(自形輝石、自形長石)
	51	30		25ライン	V重機	Ⅱb		1	羽状縄文・良好・浅褐色	繊維・細粒砂(石英、Cha、白色岩片)
	52	52		R23	V	Ⅱb		1	LR斜行縄文・良好・浅黄褐色	細粒砂(Sa、自形輝石)
	53	60		T32	V	Ⅱb		1	細かい撚糸文・良好・暗褐色	繊維・細粒砂(自形輝石、MS、海綿骨針)
	54	68		Q22	V	Ⅲa		1	切出状口縁・良好・にぶい黄褐色	繊維・極細粒砂(長石、自形輝石、
	55	70	接合	Q24	V	Ⅲa		1	口縁・良好・黒褐色	細粒砂(石英、白色岩片)
	56a	63-a	接合	S28	Vトレンチ	Ⅲa		2	結束第二種斜行縄文・良好・にぶい橙色	細粒砂(自形輝石、白色岩片)
	56b	63-b	接合	S28	Vトレンチ	Ⅲa		1		
	56	63	同一個体未接合	S28	Vトレンチ	Ⅲa		2		
	57	88	接合	T32	V	Ⅲa		1	底部、結束第二種斜行縄文・良好・褐色	繊維少・細粒砂(白色岩片、石英、雲母)
			未接合	T32	V	Ⅲa		3		
			未接合	S33	V	Ⅲa		1		
	58	69	接合	S26	V	Ⅲa		4	結束第二種斜行縄文・良好・にぶい黄褐色	砂粒(石英、長石、輝石、Cha)
	59	80		Q23	V	Ⅲb		1	刺突文、口縁部・良好・黒褐色	細粒砂(石英、長石、Cha、白色岩片)
	60	83		T32	V	Ⅲb		1	縄線、刺突文口縁部・良好・にぶい黄褐色	繊維少・極細粒砂(白色岩片)
	61	87	接合	V42	V	Ⅲb		9	波状口縁、二条の貼付帯・良好・にぶい黄褐色	繊維少・細粒砂(自形輝石、長石、白色岩片)
			未接合	V42	V	Ⅲb		2		
	62	81		R24	V	Ⅲb		1	押引、円形刺突・良好・浅黄橙色	砂粒多(石英、長石、自形長石、白色岩片)
	63	82	接合	R24	V	Ⅲb		2	押引、円形刺突・良好・灰黄褐色	繊維少・砂粒(自形輝石、軽石Ena)
図Ⅳ-38	64	85	接合	S26	V	Ⅲb		2	押引、円形刺突・良好・黒色	砂粒(自形輝石、自形長石、白色岩片)
	65	86		T33	V	Ⅲb		1	点列文・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(白色岩片、自形輝石)
	66	92		S24	V	Ⅳa		1	折り返し状口縁・良好・灰黄褐色	極細粒砂(自形輝石多量)
図Ⅳ-39	67	93		S32	Vカクラン	Ⅳa		1	刺突文・やや良・にぶい黄褐色	砂粒多(Sa、自形輝石、白色岩片)
	68	48	接合	T31	V	Ⅳa		2	刺突文・良・灰黄褐色	砂粒(Tu、自形輝石)
	69	54		S31	V	Ⅳa		1	棒状刻み・良好・明黄褐色	細粒砂(自形輝石)
	70	94	接合	S32	Vカクラン	Ⅳa		3	底部・良好・にぶい褐色	細粒砂(自形輝石、長石、白色岩片)
			同一個体未接合	T32	Vカクラン	Ⅳa		1		
	71	58	接合	R26	V	Ⅳa		11	底面に縄文・良好・明黄褐色	砂粒(角閃石?、Ms、白色岩片)
			未接合	R26	V	Ⅳa		14		
	72	95		T33	V	Ⅳb		1	波状口縁、補修孔・良好・黒褐色	砂粒(自形輝石、Cha、白色岩片)
	73	65	接合	42ライン	V重機	Ⅳb		2	口縁、沈線刻み・良好・にぶい黄褐色	細粒砂(自形輝石、Cha)
	74a	96-b	接合	T35	V	Ⅳc		3	突瘤文、羽状縄文・良好・にぶい黄橙色	極細粒砂(自形輝石、長石、白色岩片)
			接合	U35	V	Ⅳc		1		
	74b	96-c	接合	T35	V	Ⅳc		4		
	74	96	未接合	T35	V	Ⅳc		5		
			未接合	36ライン	V重機	Ⅳc		1		
	75	96-a	接合	T35	V	Ⅳc		6	突瘤文、羽状縄文・良好・橙色	極細粒砂(自形輝石、石英、長石)
	76	64		T32	Vカクラン	Ⅳc		1	突瘤文、羽状縄文、沈線・良好・褐色	極細粒砂(自形輝石、白色岩片)
	77	98	接合	W44	V	Va		3	注口、三叉文・良好・橙色	極細粒砂(自形輝石多、Ms)
			接合	W45	Ⅲ	Va		1		
	78	99	接合	V45	V	Vb		1	緻密LR・良好・灰黄褐色	極細粒砂(自形輝石、Cha)
			接合	W45	V	Vb		1		
	79	31	接合	V46	V	Vb		4	浅鉢底部・良好・黒褐色	極細粒砂(自形高温石英、
	80	123		L11	V	Vc		1	口縁に沈線三条・良好・黒褐色	極細粒砂(自形輝石、石英、長石)

胎土混入物とは、土器胎土の生地以外にどのような混入物があるかを実体顕微鏡を用いて観察したものである。表面上で2点以上確認できたものを目についた順に記した。
白色岩片とは、安山岩～流紋岩質の火成岩か、凝灰岩、または石英質の石で、細粒のため細分できなかったものである。したがって必ずしも同じものを指すわけではないが、比較的角礫に近い状態で他と異なるものである。

表Ⅳ－９　鉄製品一覧

図番号		遺構	層位	遺物番号	取上げ日	遺物名	分類	法量(cm、g)			
								長さ	幅	厚さ	重さ(g)
図Ⅳ-14	1	F－4	Ⅲ	1	2016/9/14	孔式鉄斧	鉄製品	(8.0)	(4.5)	(3.8)	(538.8)
	2	S－3	Ⅲ	2	2016/9/13	切先	鉄製品	(14.3)	3.7	0.7	(105.4)
	3	S－3	Ⅲ	1	2016/9/13	不明鉄製品	鉄製品	13.4	1.4	1.1	29.7
	4	S－4	Ⅲ	1	2016/9/15	不明鉄製品	鉄製品	(6.9)	0.9	0.7	(7.3)

表Ⅳ－10　包含層出土掲載石器一覧

掲載図番号		発掘区		層位	遺物番号	取り上げ日	遺物名	石材	長さ	厚さ	幅	重さ	備考	実測番号
図Ⅳ-40	1	S	33	V		2016/9/12	石鏃	Obs	(4.70)	0.40	1.60	(2.20)		11
	2	R	27	V		2016/9/15	石鏃	Obs	(2.90)	0.40	(1.70)	(1.20)		4
	3	R	28	Ⅲ		2016/9/16	石鏃	Obs	2.40	0.30	1.70	0.80		14
	4	S	25	V		2016/9/16	石鏃	Obs	1.70	0.30	(1.50)	(0.40)		13
	5	29ライン		V重機		2016/10/19	石鏃	Obs	(1.80)	0.30	(1.80)	(0.70)		8
	6	U	42	Ⅵ		2016/9/28	石鏃	Obs	2.30	0.50	1.70	1.00		6
	7	S	31	V		2016/9/20	石鏃	Obs	(1.90)	0.30	(1.60)	(0.70)		10
	8	R	26	V		2016/9/12	石鏃	Obs	1.80	0.20	1.20	0.30		5
	9	S	28	Vトレンチ		2016/9/5	石鏃	Obs	2.20	0.30	1.40	0.60		9
	10	12ライン		V重機		2016/10/13	石鏃	Obs	1.90	0.20	1.30	0.30		15
	11	H	8	V		2016/8/30	石鏃	Obs	(3.40)	0.40	1.60	(1.30)		1
	12	Q	22	V		2016/9/7	石鏃	Obs	(3.80)	0.40	2.20	(2.20)		2
	13	O	18	Vカクラン		2016/9/2	石鏃	Obs	2.00	0.20	1.00	0.30		3
	14	S	28	Vトレンチ		2016/9/5	石鏃	Obs	2.80	0.50	1.40	1.00		12
	15	T	31	V		2016/9/15	石鏃	Obs	2.30	0.30	1.00	0.30		7
	16	12ライン		V重機		2016/10/13	石槍	Obs	7.30	0.80	3.20	13.90		20
	17	T	32	V		2016/9/5	石槍	Obs	(10.40)	1.00	3.30	(29.50)		16
	18	S	33	V		2016/9/12	石槍	Obs	(6.60)	0.70	2.40	(8.70)		17
	19	S	31	V		2016/9/16	石槍	Obs	(7.90)	0.70	2.50	(12.60)		18
	20	Q	21	Ⅵ		2016/9/26	石槍	Obs	(6.20)	0.70	2.00	(7.30)		21
	21	V	45	V		2016/9/13	石槍	Obs	6.40	1.10	3.40	18.10		19
	22	T	32	V		2016/9/5	石錐	Obs	5.20	0.90	3.70	10.30		25
	23	R	27	V		2016/9/15	石錐	Obs	(3.30)	0.70	2.70	(4.10)		22
	24	J	9	Vカクラン		2016/9/2	石錐	Ag	3.20	0.50	1.50	2.00		23
	25	S	24	V		2016/9/20	石錐	Obs	3.60	0.50	1.00	1.70		24
	26	S	34	Ⅵ		2016/9/26	つまみ付きナイフ	Sh	5.90	0.60	1.90	5.00		33
	27	H	8	V		2016/8/30	つまみ付きナイフ	Sh	8.00	0.90	2.80	17.50		32
	28	T	33	木の根・カクラン		2016/9/26	つまみ付きナイフ	Obs	4.60	0.90	3.20	10.70		26

図Ⅳ-40	29	U	35	V		2016/10/7	つまみ付きナイフ	Sh	6.40	0.90	3.00	14.10		30
	30	S	27	V		2016/9/15	つまみ付きナイフ	Obs	6.80	0.80	3.10	16.00		28
	31	w	44	V		2016/9/13	つまみ付きナイフ	Obs	4.20	0.90	2.20	7.00		29
	32	S	27	V		2016/9/15	つまみ付きナイフ	Obs	7.20	0.80	2.40	13.20		27
	33	J	9	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	つまみ付きナイフ	Ag	(4.30)	1.00	(2.50)	(7.20)		31
図Ⅳ-41	34	T	34	V		2016/9/13	スクレイパー	Obs	(7.20)	0.90	3.10	(16.50)		37
	35	S	34	Ⅵ		2016/9/13	スクレイパー	Sh	4.90	0.50	2.20	5.80		40
	36	J	9	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	スクレイパー	Ag	6.60	1.20	3.60	28.70		42
	37	N	15	Vｶｸﾗﾝ		2016/8/31	スクレイパー	Ag	6.00	1.40	3.70	22.50		36
	38	排土				2016/9/22	スクレイパー	Cha	3.80	0.90	7.70	33.40		43
	39	M	13	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	スクレイパー	St	3.30	1.40	2.90	9.70		41
	40	T	33	Ⅲ		2016/9/9	スクレイパー	Obs	2.20	0.70	2.90	4.60		39
	41	T	30	Ⅲ		2016/9/14	スクレイパー	Obs	2.50	1.10	(3.00)	(7.20)		38
	42	30ﾗｲﾝ		V重機		2016/10/19	スクレイパー	Ba	4.90	1.20	5.30	30.40		44
	43	W	45	V		2016/9/26	スクレイパー	Obs	6.70	1.00	3.30	21.20		35
	44	R	27	V		2016/9/16	両面調整石器	Obs	5.50	1.20	3.70	23.00		45
	45	T	34	Ⅵ		2016/9/13	石斧	Grs	12.10	2.10	3.50	147.20		52
	46	15ﾗｲﾝ		V重機		2016/10/19	石斧	Grs	10.60	2.10	4.90	151.00		49
	47	S	26	自然ｶｸﾗﾝ		2016/10/5	石斧	Gls	9.00	1.00	3.60	50.40		46
	48	T	34	V		2016/9/13	石のみ	Grs	5.20	0.80	2.40	15.30		51
図Ⅳ-42	49	R	25	Vｶｸﾗﾝ		2016/10/12	石斧加工品	Grs	10.70	2.00	4.70	136.40		48
	50	S	26	V		2016/9/12	石斧	Grs	(12.10)	2.30	5.80	(245.00)		50
	51	M	13	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	石斧原材	ロジン岩	13.60	4.00	8.30	532.90	被熱	47
	52	S	25	Ⅲ		2016/9/14	たたき石(Ia-d)	sa	16.60	3.80	4.40	379.70		7
	53	16ﾗｲﾝ		V重機		2016/10/21	たたき石(Ib-d)	sa	10.30	3.70	4.10	228.70		9
	54	R	28	V		2016/9/2	たたき石(Ib-a)	sa	10.80	2.90	5.10	261.70	トレンチ	20
図Ⅳ-43	55	N	15	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	たたき石(Ia-d)	sa	15.00	4.40	6.40	445.90		11
	56	R	29	Ⅵ		2016/9/28	たたき石(1+3b-d)	sa	20.10	3.90	5.50	703.10		21
	57	T	31	V		2016/9/15	たたき石(Ia-d)	sa	14.70	4.00	6.30	599.70		27
	58	V	45	V		2016/9/13	たたき石(Ia-d)	sa	11.10	3.30	4.80	250.00	被熱	34
	59	S	32	V		2016/9/15	たたき石(1+3a-b)	sa	13.90	3.90	6.70	400.90		26
	60	Q	22	Ⅵ			たたき石(Ia-d)	sa	13.30	3.40	4.60	304.00		35
	61	S	30			2016/9/8	たたき石(Ib-d)	sa	9.90	5.10	5.80	(395.10)		6
	62	S	28	V		2016/9/5	たたき石(Ib-d)	sa	17.10	2.90	5.60	(422.20)	トレンチ	24
図Ⅳ-44	63	R	23	Ⅵ		2016/10/4	たたき石(Ia-b)	sa	10.90	2.00	4.60	133.00		37
	64	J	9	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	たたき石(Ia-d)	sa	13.70	4.00	6.50	411.30	被熱	10
	65	S	31	V		2016/9/20	たたき石(Ia-d)	sa	(12.10)	4.20	6.80	(420.00)	欠け	25
	66	R	22	Ⅵ		2016/9/26	たたき石(Ib-b)	sa	13.10	2.30	4.70	209.30	被熱	36
	67	R	26	V		2016/9/12	たたき石(Ib-d)	sa	21.40	5.70	8.10	1250.00		18
	68	T	35	V		2016/9/7	たたき石(5a-d)	sa	10.50	4.70	8.80	594.10		32
	69	Q	23	V		2016/9/20	たたき石(2b-d)	sa	9.80	4.20	7.30	343.40		16
	70	T	31	V		2016/9/15	たたき石(2a-b)	sa	8.90	2.40	7.00	180.20		28
	71	S	24	V		2016/9/29	たたき石(2a-b)	sa	13.60	2.50	7.00	268.80		22
	72	F	7	V		2016/9/30	たたき石(2+3-c)	Ga	(14.80)	4.10	7.60	(668.50)		13
	73	O	18	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	たたき石(2+3-d)	sa	13.30	(5.50)	8.80	(857.40)		12
	74	Q	20	V		2016/9/28	たたき石(2a-d)	sa	9.70	3.60	(7.89	(290.60)		14
	75	R	27	V		2016/9/15	たたき石(2b-b)	sa	10.00	1.70	8.30	244.10		19
図Ⅳ-45	76	T	32	V		2016/9/5	たたき石(2a-b)	sa	14.70	(4.00)	(8.80)	(636.30)	欠け	29
	77	U	38	V		2016/9/7	たたき石(5a-d)	sa	9.70	3.00	7.40	221.00		33
	78	T	32	Ⅲ		2016/9/2	たたき石(5a-a)	sa	11.20	5.90	8.00	686.60		8
	79	Q	23	V		2016/9/16	たたき石(5)	sa	12.30	8.30	11.70	141.00		15
	80	S	25	V		2016/9/16	たたき石(3b-a)	sa	9.80	3.30	4.10	163.20		23
	81	R	24	V		2016/9/20	たたき石(4a-a)	sa	11.30	5.80	7.90	658.60		17
	82	T	34	V		2016/9/13	たたき石(5b-b)	sa	9.30	4.70	10.90	534.70		31
	83	T	32	V		2016/9/5	たたき石(4b-d)	Ga	6.10	3.50	6.00	189.60		30
	84	U	38	V		2016/9/7	すり石1	An	5.20	4.10	8.70	285.60		42
	85	S	31	V		2016/9/20	すり石1	sa	9.10	7.30	14.80	1270.00		40
図Ⅳ-46	86	S	25	V		2016/9/16	すり石	sa	7.80	(3.50)	(11.00)	(373.80)		39
	87	S	28	Ⅲ		2016/9/16	すり石2	sa	5.60	2.30	16.30	287.20		38
	88	S	32	V		2016/9/14	すり石3	An	(12.20)	4.70	10.80	(935.60)	被熱	41
	89	R	23	Ⅵ		2016/9/26	砥石片1	sa	(11.10)	(2.00)	(10.80)	(231.70)		47
	90	15ﾗｲﾝ M13		V重機カクラン			砥石1	sa	(19.50)	(2.10)	(10.90)	(547.70)		45
	91	N	15	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/2	砥石3	sa	(8.20)	(5.70)	(4.90)	(256.00)		46
	92	T	34	Ⅲ		2016/9/9	砥石	sa	14.20	1.80	7.10	269.30		43
	93	T	32	V		2016/9/5	砥石片	sa	(8.40)	(5.70)	(6.60)	(336.20)		50
	94	S	28	Vｶｸﾗﾝ		2016/9/5	砥石4	sa	7.20	1.70	6.00	100.70		49
	95	T	32	V		2016/9/5	加工痕ある礫	Tu	9.40	2.70	3.50	100.00		56
	96	R	29	V		2016/9/27	加工痕ある礫	sa	7.10	3.70	(9.70)	(264.80)		55
図Ⅳ-47	97	F	6	V		2016/8/31	石皿	sa	25.80	2.90	18.50	1430.00		57
	98	S	31	V		2016/9/20	石皿片	sa	(13.00)	3.30	17.60	(1046.00)	被熱	58
	99	S	29	Ⅲ			土製品		13.90	(3.30)	(2.60)	38.00		
	100	U	35	V		2016/9/5	つまみ付きナイフ片？	Obs	1.80	0.40	1.90	0.90		34
	101	N	15	Vｶｸﾗﾝ		2016/8/31	石製品	ser	5.40	0.80	2.40	19.60		51
	102	T	38	Ⅵ		2016/9/29	石製品	Tu	5.90	1.20	3.10	25.30		54
	103	S	28	V		2016/9/29	有孔自然石	Ms	5.00	2.90	7.80	120.80		53
	104	R	25	V		2016/9/13	石製品	Tu	11.50	3.20	4.20	211.40		52

表Ⅳ－11　フローテーション結果一覧

サンプル番号	遺構/発掘区	層位	採取年月日	乾燥重量・堆積		作業後の重量			遺物確認								分析・同定
						残渣	浮遊物①	浮遊物②	残渣選別	浮遊物選別	土器	石器	礫	骨片	炭化物・種子	その他	
ﾄﾐ1－1	F－1	土サンプル	2016/9/13	4,500g	4,220ml	52.2g	2.0g	3.1g	11月15日	11月15日				0.2g	炭化材0.1g　種子0.0g		種子4点＝同定なし
ﾄﾐ1－2	F－1	土サンプル	2016/9/12	7,000g	7,440ml	110g	2.4g	7.6g	11月15日	11月15日				0.1g	炭化物1.2g　種子0.0g	1点	種子1点＝同定なし
ﾄﾐ1－3	F－2	土サンプル	2016/9/12	16,500g	16,100ml	163.6g	8.0g	20.6g	11月17日	11月17日				骨5点 骨片44.9g	炭化材4.0g　種子0.0g		種子8点＝ ブドウ×1のみ
ﾄﾐ1－4	F－5	焼土サンプル	2016/9/14	1,500g	2,300ml	70g	2.8g	4.5g	11月16日	11月16日			2点	17.8g	炭化物2.3g　種子0.0g　クルミ片0.2g		
ﾄﾐ1－5	F－4	土サンプル	2016/9/14	3,000g	3,520ml	120g	12.5g	15.6g	11月17日	11月17日		フレイクチップ8点	2点	15.9g	炭化物12.8g　種子0.0g		種子6点＝同定なし
ﾄﾐ1－6	F－4	土サンプル	2016/9/15	4,500g	6,440ml	104g	148.4g	20.5g	11月18日	11月22日	Ⅵ2点	フレイクチップ6点			炭化材144.8g　種子0.1g		炭素年代　2016TM1-4 種子3点＝同定なし
ﾄﾐ1－7	F－3	土サンプル	2016/9/28	2,000g	2,500ml	90g	1.0g	2.0g	11月18日	11月18日	V?5点	フレイクチップ4点	7点	77.6g	炭化物1.5g　種子0.0g		種子1点＝ブドウ×1
ﾄﾐ1－8	F－8	サンプル	2016/9/27	2,500g	3,220ml	410g	2.4g	2.5g	11月18日	11月18日		フレイクチップ139点		0.0g	炭化物0.1g		
ﾄﾐ1－9	F－8	焼土サンプル	2016/9/28	6,000g	6,940ml	1100g	11.4g	19.9g	11月18日	11月21日		フレイクチップ190点	4点	0.0g	炭化物0.4g　種子0.0g		
ﾄﾐ1－10	F－9	焼土サンプル	2016/9/28	1,300g	1,000ml	270g	0.3g	0.0g	11月21日	11月21日		フレイクチップ10点			炭化物0.0g		
ﾄﾐ1－11	F－3	土サンプル	2016/9/29	1,880g	2,000ml	10g	0.1g	0.4g	11月21日	11月21日		フレイクチップ3点		0.6g	炭化物0.2g　種子0.0g		
ﾄﾐ1－12	F－6	土サンプル	2016/10/25	58.3g	200ml	5g	0.0g	0.7g	11月21日	11月21日		フレイクチップ2点		1.8g	炭化物0.1g　種子0.0g		種子1点＝不明×1

Ⅴ章　豊沢10遺跡

1　遺跡の地形と環境

遺跡は、厚真川支流の当麻内川へ注ぐ小河川、平井の沢の左岸、標高約16～18mの緩斜面に立地している。調査前の現況は、雑木の生える荒地だが以前は畑地として利用されていた。畑地は緩斜面を切土と盛土で造成されているが、Ｔａ－ｂ火山灰が厚く堆積しているため、遺物包含層は削平されていなかった（図Ⅴ－２）。

平井の沢は､河川の大きさに比べて広い沖積低地を持つ。遺跡の上流には｢厚真町開基百年記念公園｣や新興住宅地の「ルーラルビレッジ」などがある。最上流部で分水界を超えると宇隆地区で、道道59号平取厚真線へ出ることができる。河川沿いには当遺跡も含め５か所の遺跡が登載されている。いずれも縄文時代の遺跡である（図Ⅴ－１）。

平井の沢上流部の様子

遺跡名の「豊沢」の以前の字名は「当麻内」であった。陸地測量部５万分の１地形図『早来』（大正８年測図）には「當麻内」とある。国土地理院５万分の１地形図『早来』（大正８年測図、昭和28年修正）から「当麻内」の表記となっている。河川名の「当麻内川」は、国土地理院５万分の１地形図『早来』（大正８年測図、昭和55年編集、昭和59年修正）には「イトマナイ川」と記されている。厚眞村史（厚眞村　1956）には「トー・オマ・ナィ」（to-oma-nay　沼が・そこにある・沢）の義とある。この「トー」は現在の富野地区にある「龍神沼」や「清水沼」かその周辺にあった沼のことと推定されている（池田・亀井　1976）。

遺跡付近の様子は、開拓期頃のもので、「かつては、沢地には葦荻生い茂り、山地は鬱蒼たる大森林であった。」（厚眞村　1956）と記載がある。

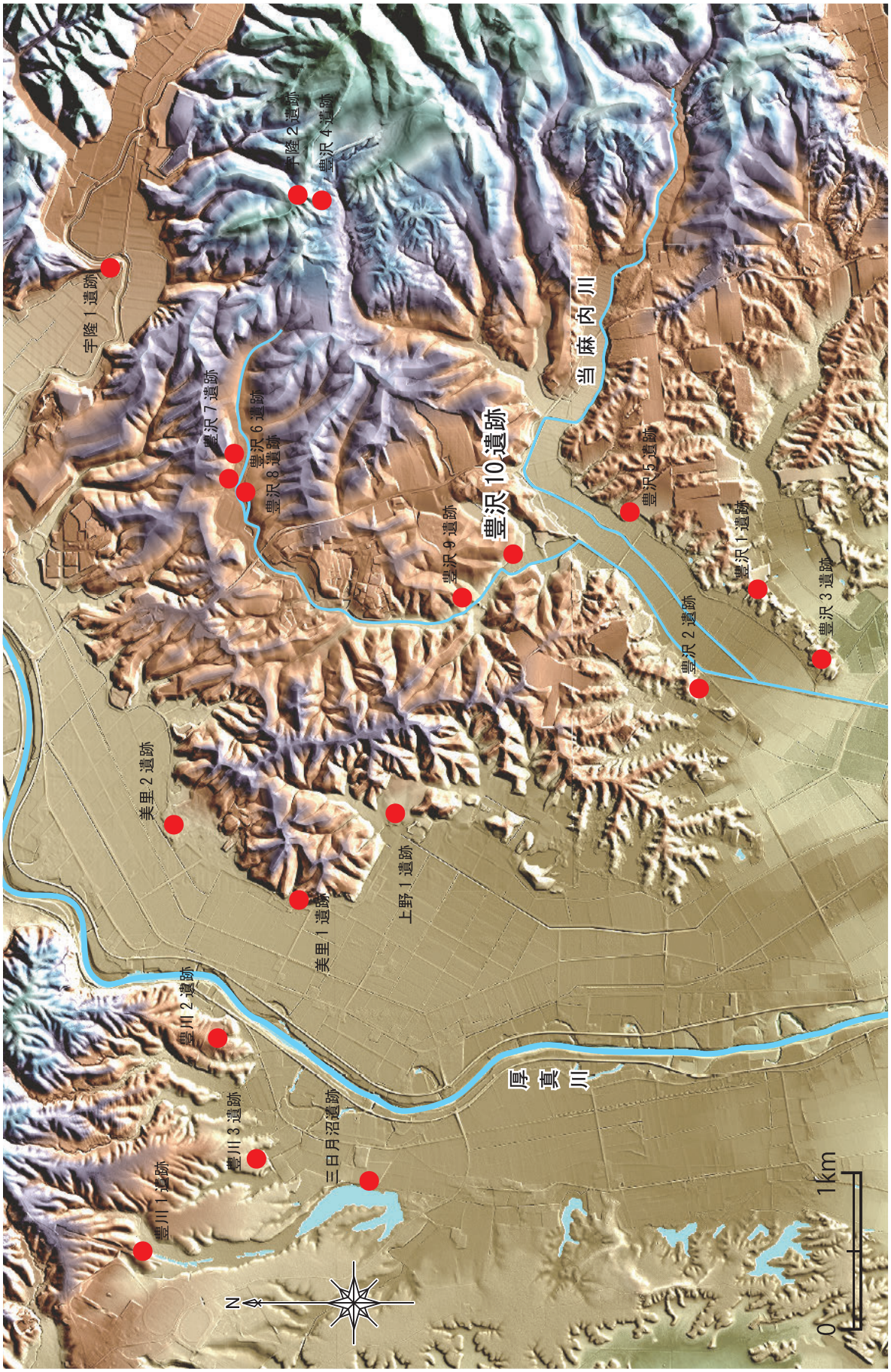
2　発掘区の設定

現地調査の基本図は、北海道開発局室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所作成「施工平面図1,000分の１」を使用した（図Ⅴ－３）。

発掘区の基線は、世界測地系（平面直角座標ＸⅡ系）を使用した。X座標＝－145,200とY座標＝－29,800の交点を起点とし、５ｍ幅の平行する線を設定した。発掘区の呼称を付す際に記載間違いがあり､起点から北へ５ｍの点をZとしアルファベットの降順で設定した｡X座標に関しては起点を０とし、アラビア数字の昇順で設定した。準備工作業が進行中であり、調査に支障もないことからこの設定のまま使用することとした。北東側の杭を個々の発掘区の呼称とし、アルファベットとアラビア数字の組み合わせによった。

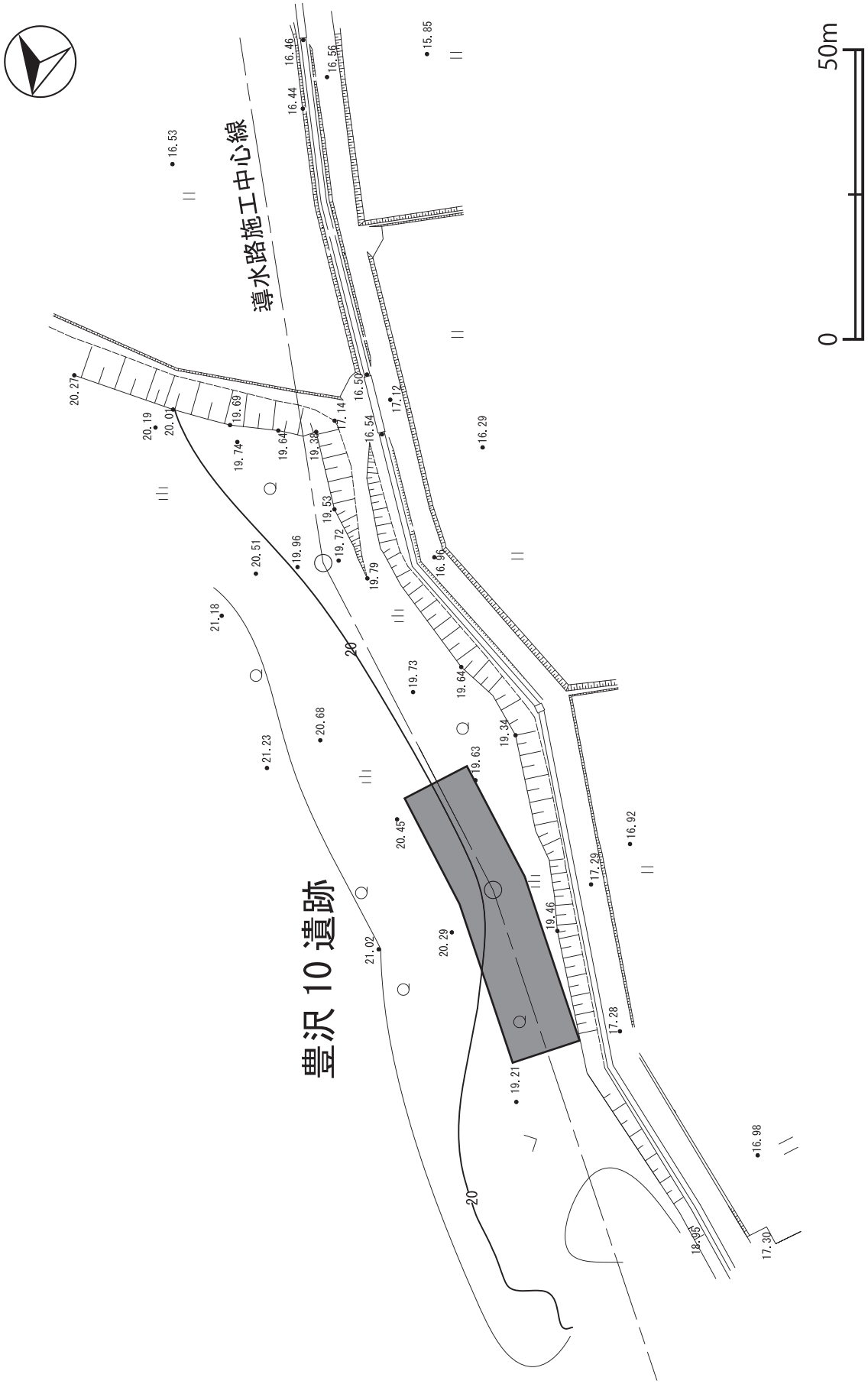
水準測量は発掘区付近に所在する、北海道開発局室蘭開発建設部設置の「仮BM　№.１」を用いて各測量に使用した。

平成28（2016）年11月設置　仮BM　№.１　　Ｈ＝17.231ｍ



図Ⅴ－１　遺跡周辺の地形（１）

国土地理院基盤地図情報からカシミール３Ｄで作成したものに加筆



室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所作成「施工平面図」を加工、加筆

図Ⅴ－２　遺跡周辺の地形（２）

３　発掘調査の方法

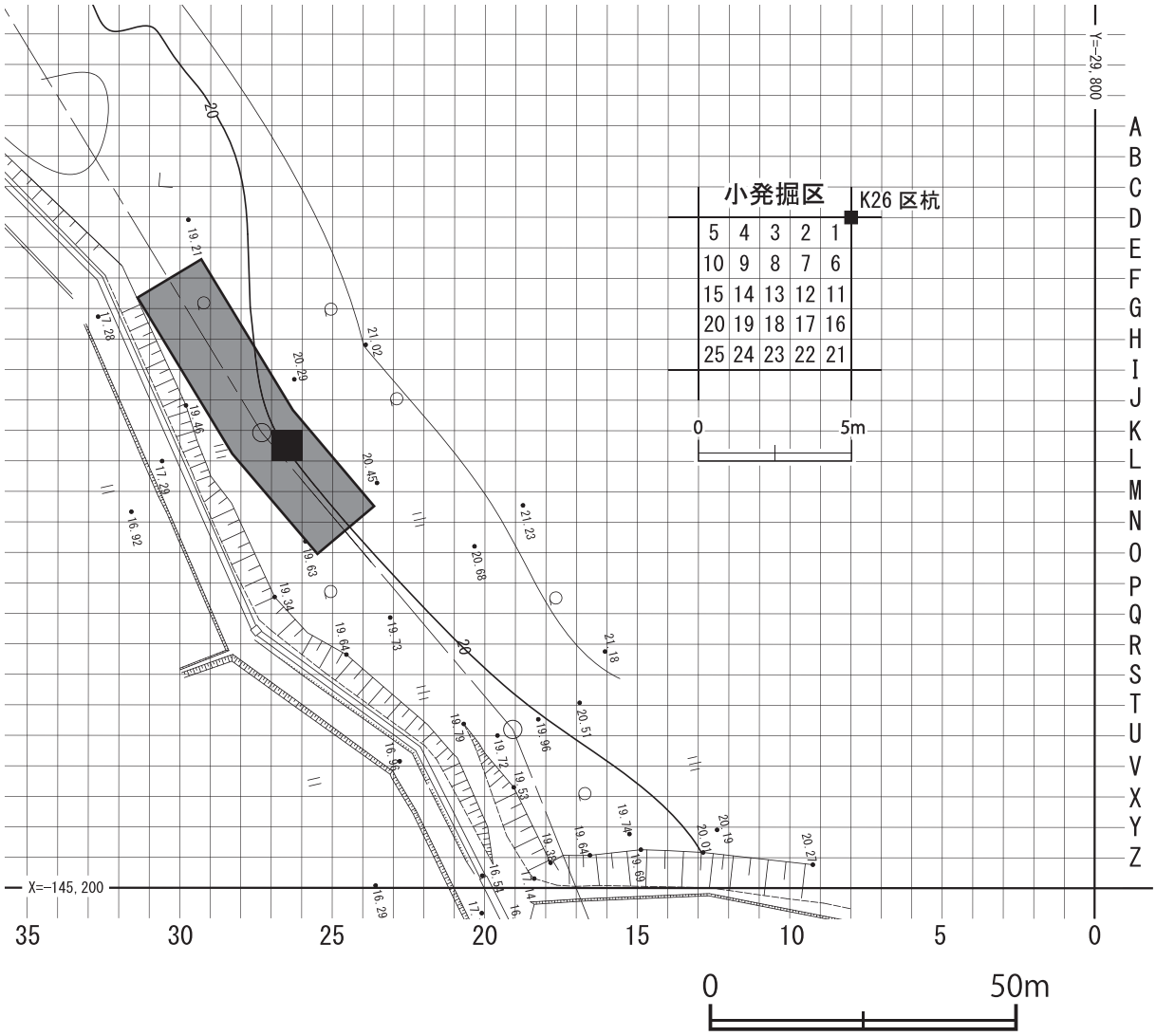
調査範囲は、重機により伐木、抜根作業を行った。その後、表土（Ⅰ層）からＴａ－ｂ火山灰層（Ⅱ層）までを重機により除去した。上位の黒色土層（Ⅲ層）は調査対象外であったがこの段階で、遺物や遺構の有無を確認した。遺物が出土しなかったので、Ⅲ層およびＴａ－ｃ火山灰層（Ⅳ層）を重機で除去した。Ⅴ層上面の検出は人力でジョレンやスコップを使用して行った。

Ⅴ層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いて人力による手掘り作業により掘り下げた。検出した遺構は、平面図、断面図、遺物出土状況図、写真撮影などで記録した。

包含層出土の遺物は、発掘区および層単位での取上げとした。出土状況に応じて、小発掘区（発掘区を１×１ｍの25区に分割）による取り上げ、写真や出土状況図の作成などで記録した。

焼土に伴う、灰、焼骨片、フレイク・チップの集中域（FC）は、すべて土壌ごと取り上げ土壌水洗作業を行った。

現地調査での撮影機材は、Mamiya　RZ67PROⅡ、Nikon　D5600、Olympus　TG－４を状況に応じて使用した。



図Ⅴ－３　発掘区設定図

4　整理作業の方法

（1）一次整理

並行して現地調査を実施していた、厚幌２遺跡で当初想定を上回る遺物が出土した。現地の発掘調査を優先したため、一次整理作業は遺物水洗と分類作業のみを実施し、遺物注記や台帳作業などは現地調査終了後に江別市の当センター整理作業棟で実施した。

遺物の注記は、以下のように行った。

遺構出土の遺物は、焼土のみの検出のため、「遺跡名」･「遺構名」を記入した。

＊例　トヨ10・F－1

包含層出土の遺物は、「遺跡名」･「発掘区」･「層位」を記入した。

＊例　トヨ10・K26・Ⅴ

（2）二次整理

江別市の当センター整理作業棟で行った。土器は、接合･復元作業を行い、実測、拓本、図版作成、一覧表作成、写真撮影を行った。石器は、報告書掲載用石器の選び出しを行い、実測、トレース、図版作成、一覧表作成、写真撮影を行った。遺構図面の作成、表作成、原稿執筆を行い、報告書編集作業を行った。

整理作業後の遺物は「報告書掲載遺物」と「非掲載遺物」に区分してダンボール箱やコンテナに収納し、「遺物収納台帳」に記載した。報告書刊行後、北海道教育委員会の指示により厚真町へ移管予定である。写真・図面等の記録類は、北海道立埋蔵文化財センターで保管される。

5　遺物の分類

（1）土器等

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群。

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群。

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群。

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群。

　a類：余市式・タプコプ式・涌元式・トリサキ式などに相当するもの。・・・少量出土している。

　b類：ウサクマイC式・手稲式・鮏澗式に相当するもの。

　c類：堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当するもの。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群。

　a類：大洞B・BC式に相当・併行するもの。東三川Ⅰ式など・・・・・遺跡の主体となる土器群。

　b類：大洞C１・C２式に相当・併行するもの。美々３式、ママチⅠ・Ⅱ群など。

　c類：大洞A・A´式に相当・併行するもの。ママチⅢ・Ⅳ・Ⅴ群など。

Ⅵ群　続縄文時代に属する土器群。

Ⅶ群　擦文文化期に属する土器群。

土製品

焼成粘土塊

（2）石器等

分類に使用している器種の名称、および掲載順は以下のとおりである。

剥片石器群:石鏃（長軸４ｃｍ未満)、石槍･ナイフ（長軸４ｃｍ以上)、両面調整石器、スクレイパー、Ｒフレイク（二次加工のある剥片)、フレイク
礫石器群：石斧、たたき石、礫・礫片

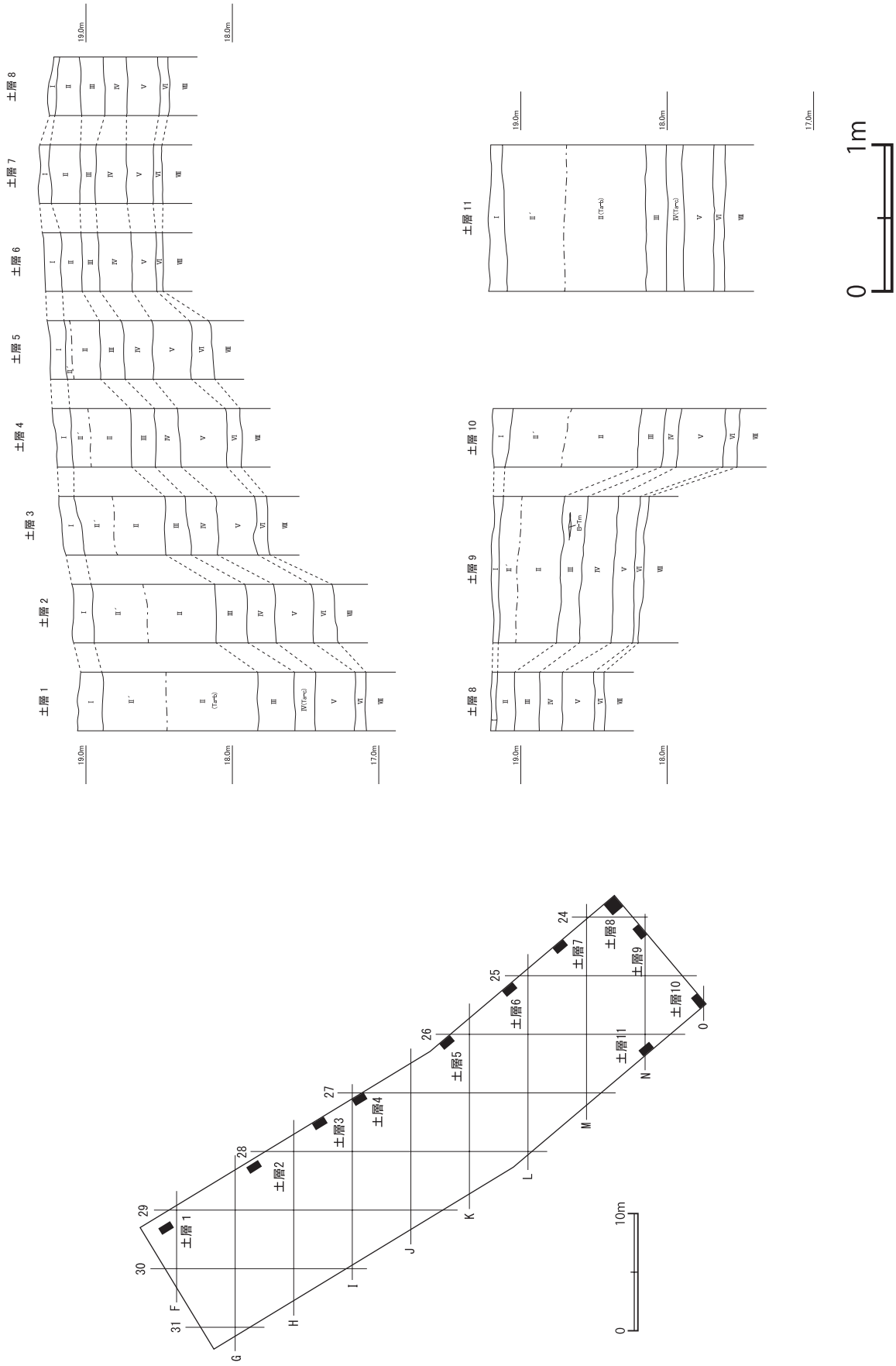
（３）その他の遺物（自然遺物）

焼土から炭化種実（クルミ)、焼骨片（シカ）が出土している。

６　基本土層

層名は、これまでの厚真町教育委員会の調査に準じている。Ⅱ’層を追加した。Ⅶ層は欠落する。調査区境の壁面11か所で土層柱状図を作成した（図Ｖ－４)。

Ⅰ層：表土・耕作土など
Ⅱ’層：畑地造成で盛土されたＴａ－ｂや試掘調査報告書にある水成二次堆積のＴａ－ｂなどを一括した層
Ⅱ層：Ｔａ－ｂ　樽前ｂテフラ　1667年降下　暗灰黄色（2.5YR5/2）層厚50～70ｃｍ
Ⅲ層：黒色土（10YR2/1）粘性あり。粒子細かい。
　Ｂ－Ｔｍ：白頭山－苫小牧火山灰　10世紀前半降下　にぶい黄褐色土（10YR6/4）Ⅲ層上部に部分的に堆積する。
Ⅳ層：Ｔａ－ｃ　樽前ｃテフラ　約2,500年前降下　黄褐色（10YR5/6）層厚15～20ｃｍ。
Ⅴ層：黒褐色土（10YR3/2）縄文時代の遺物包含層　Ⅷ層の粒子が少量混じる　層厚20～25ｃｍ。
Ⅵ層：暗褐色土（10YR3/3）漸移層。
Ⅶ層：Ｔａ－ｄ　樽前ｄテフラ主体の再堆積層（本遺跡では欠落)。
Ⅷ層：Ｔａ－ｄ　樽前ｄテフラ　約8,000年前降下　赤褐色土（5YR5/8）一部粘質。
　＊Ⅷ層以下の層で、径５ｃｍ程度の亜円礫を含む河川堆積物が見られる。


土層1
土層2
土層3
土層4
土層5
土層6
土層7
土層8
土層9
土層10
土層11
19.0m
18.0m
17.0m
1m
0
10m
24
25
26
27
28
29
30
31
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O

図Ⅴ－４　土層柱状図

７　遺構と出土遺物

（１）概要

検出した遺構は、焼土（Ｆ）４か所である。標高18～18.2mの比較的平坦な面で見つかった。すべてＶ層の上位で検出した。焼骨片、炭化物、灰やフレイク・チップの集中域（ＦＣ）を伴うものもある。周辺から縄文時代晩期初頭の土器が出土していることから、この時期のものと考えられる。

出土した遺物は、土器は大半がＶ群a類で焼土の周辺からまとまって出土している。Ⅳ群a類土器が北側と南側の斜面部から少量出土している。そのほかに、棒状で貫通孔を持つ土製品が１点、焼土から焼成粘土塊が７点出土している。石器は、石鏃と石錐が多く見られる。焼土周辺から出土した土器とともに、チャート製や玉髄製の円礫・亜円礫が出土している。剥片石器やフレイク・チップにこれらの石材が見られることから、石器原材として持ち込まれたものであろう。

なお、焼骨片やフレイク･チップの集中域には個別の遺構番号を付けず、焼土に伴うものとして扱っている。またＦ－３は検出状況から、焼土群として現地調査を行ったため、個々の事実記載は枝番号を付して記している。

表Ｖ－１　遺構一覧

種　別	数	備　　考
焼土(F)	4	灰・炭化物、フレイク・チップの集中、焼骨片をともなうものあり

表Ｖ－２　出土遺物一覧

	土器等	石器等	礫	計
遺構	172	2859	0	3031
包含層	916	439	183	1538
計	1088	3298	183	4569

＊焼骨片・炭化物等は含まず

（２）焼土

Ｆ－１（図Ｖ－７　図版36）

位置：K26区　標高18.3m付近の平坦面　　**規模**：0.76×0.31/0.08m　　**平面形**：不整形

確認・調査：Ｔａ－ｃ火山灰除去作業後にＶ層上面で検出した。上位は焼骨片、灰、炭化物を含む層、下位は焼成土である。土壌水洗作業で焼骨片13.8ｇが得られた。シカの四肢骨と思われる。

出土遺物：Ｖ群a類の土器片と黒曜石製のフレイクが出土している。

時期：出土遺物から縄文時代晩期初頭のものである。

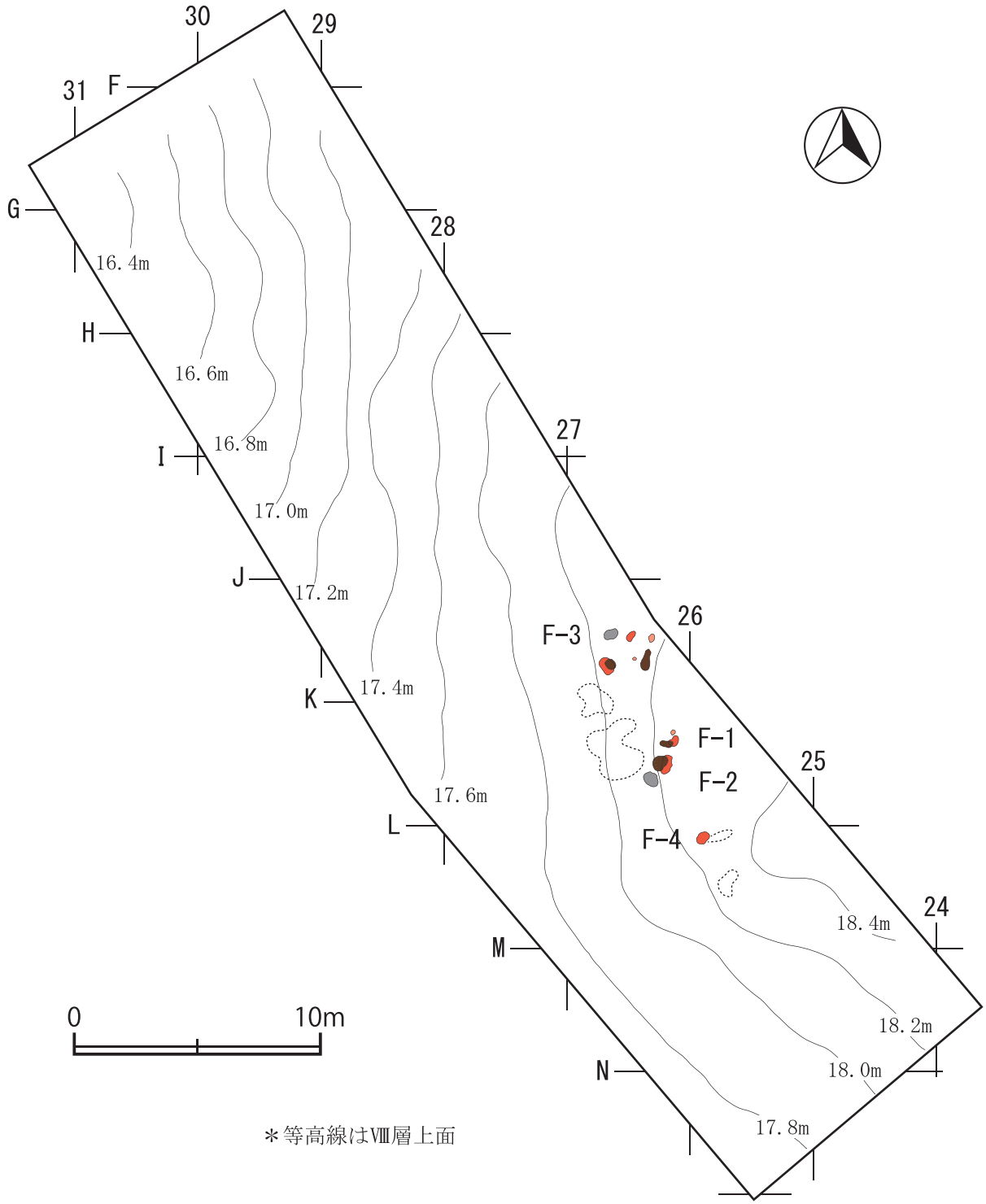
Ｆ－２（図Ｖ－７　図版36）

位置：K26区　標高18.3m付近の平坦面　　**規模**：0.78×0.75/0.06m　　**平面形**：不整形

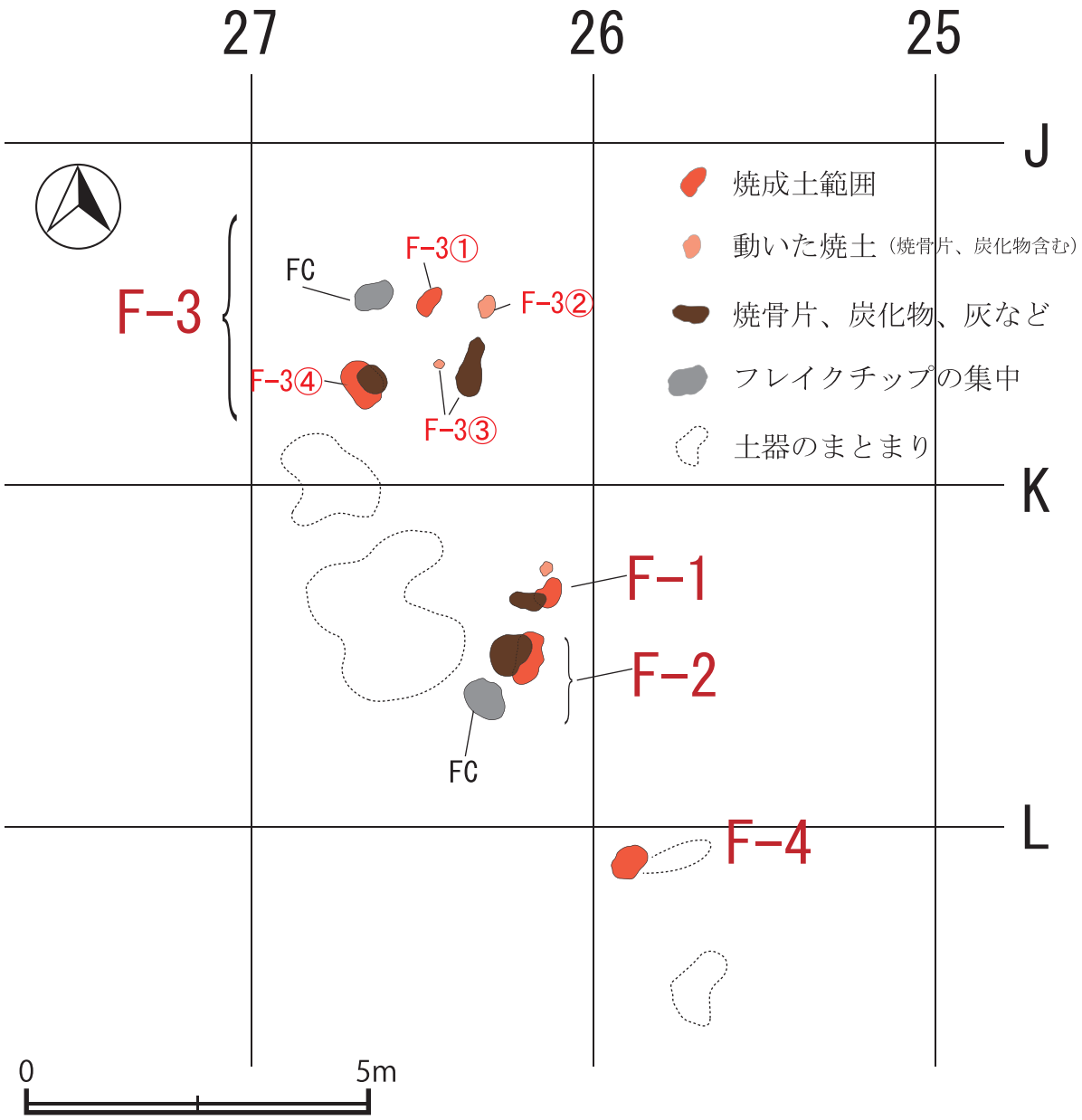
確認・調査：Ｔａ－ｃ火山灰除去作業後にＶ層上面で検出した。上位は焼骨片、灰、炭化物を含む層、下位は焼成土である。南西側に隣接してフレイク・チップの集中域（FC）を伴う。土壌水洗作業で焼骨片102.8ｇが得られた。シカの四肢骨と思われる。また､炭化したクルミの種子片が出土している。

出土遺物：Ｖ群a類土器、焼成粘土塊、石槍、石錐、Ｒフレイク、フレイクが出土した。フレイクは大半が黒曜石製であるが、赤色を呈するチャート製、玉髄製、安山岩製のものも見られる。

時期：出土遺物から縄文時代晩期初頭のものである。


30
29
31
F
G
28
H
27
I
26
J
K
25
L
24
M
N
16.4m
16.6m
16.8m
17.0m
17.2m
17.4m
17.6m
17.8m
18.0m
18.2m
18.4m
F-1
F-2
F-3
F-4
0
10m
＊等高線はⅧ層上面

図Ⅴ－５　遺構位置図



図Ⅴ－６　遺構位置図（拡大）

Ｆ－３（図Ⅴ－７　図版37・38）

焼土群として調査を行った。Ⅴ層の焼成土、焼骨片などのまとまり、動かされた焼土、ＦＣからなる。Ⅴ層の焼成土の範囲は２か所である。

Ｆ－３①

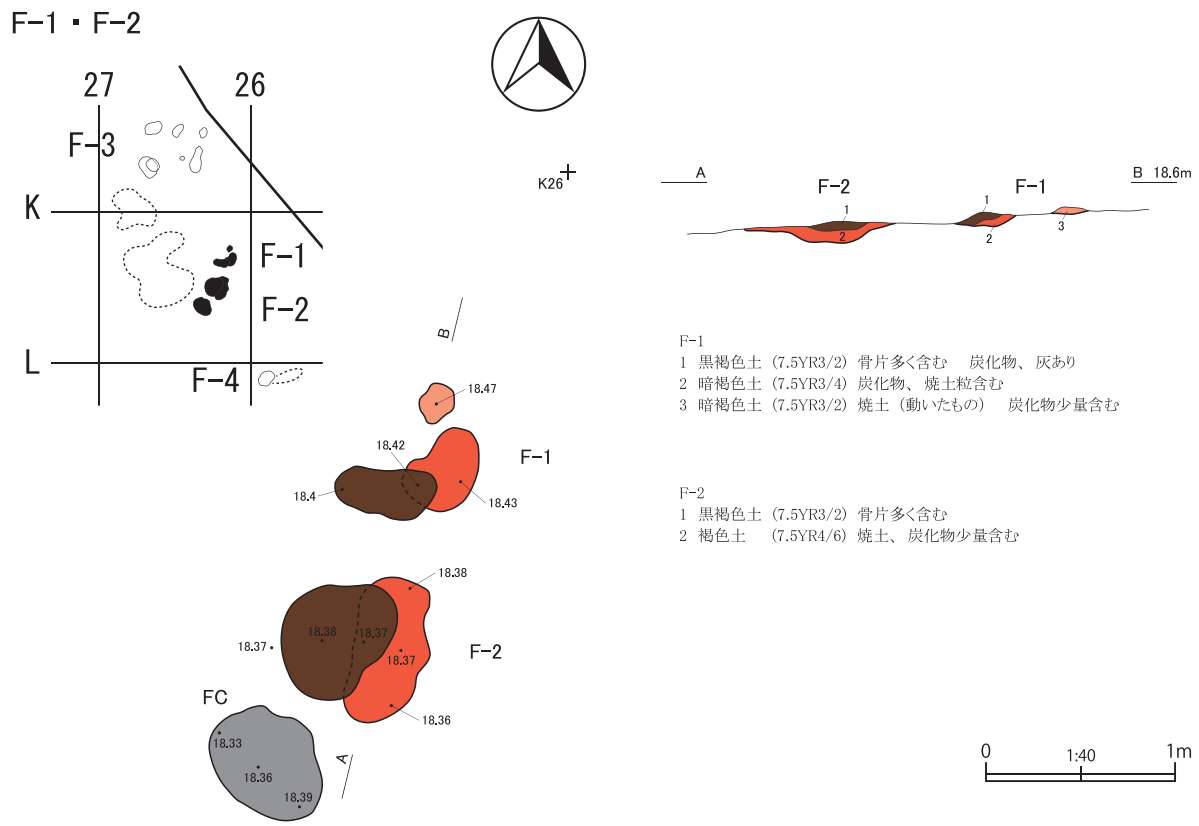
位置：J26区　標高18.3m付近の平坦面　　**規模**：0.47×0.26/0.03m　　**平面形**：楕円形

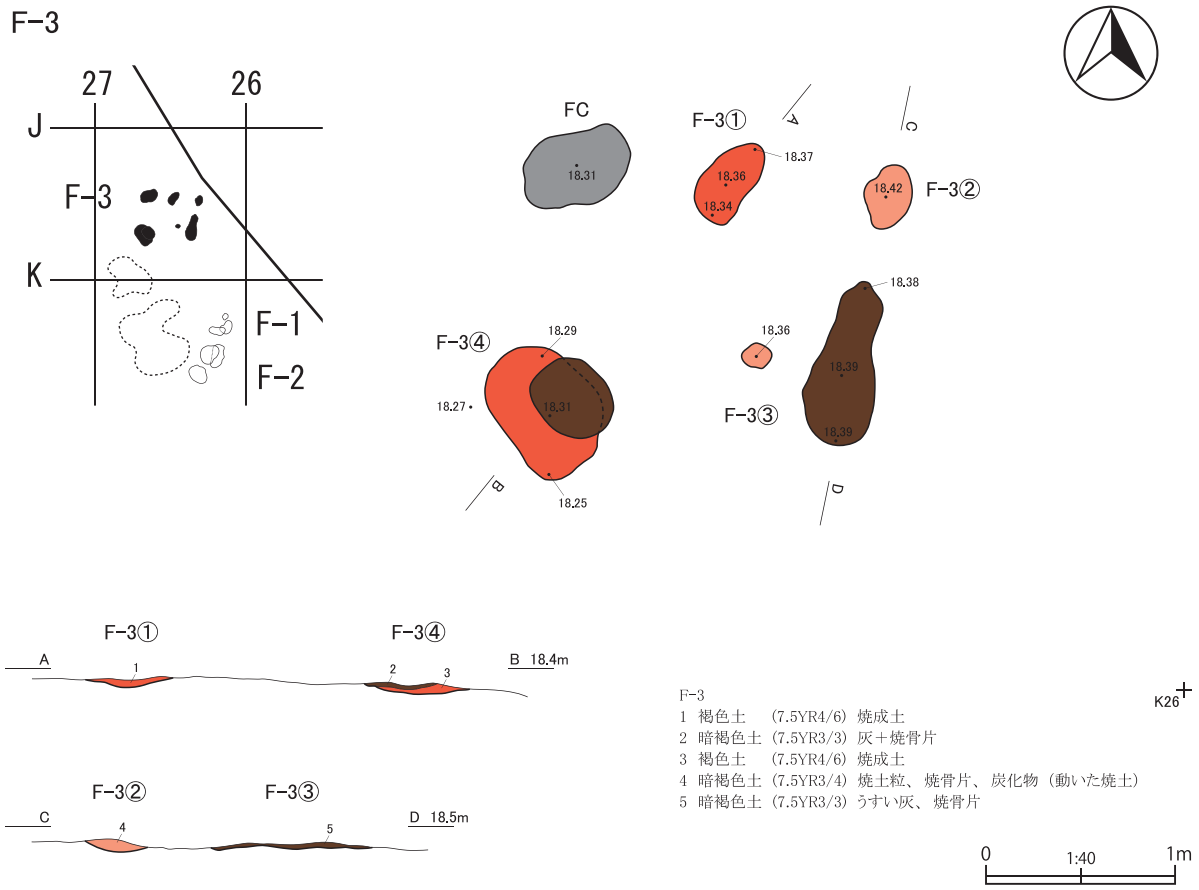
確認・調査：Ｔａ－ｃ火山灰除去作業後にⅤ層上面で検出した。Ⅴ層の焼成土の範囲である。西側にＦＣがある。

出土遺物：ＦＣから石鏃11点のほか石錐、スクレイパーなどの剥片石器が出土した。

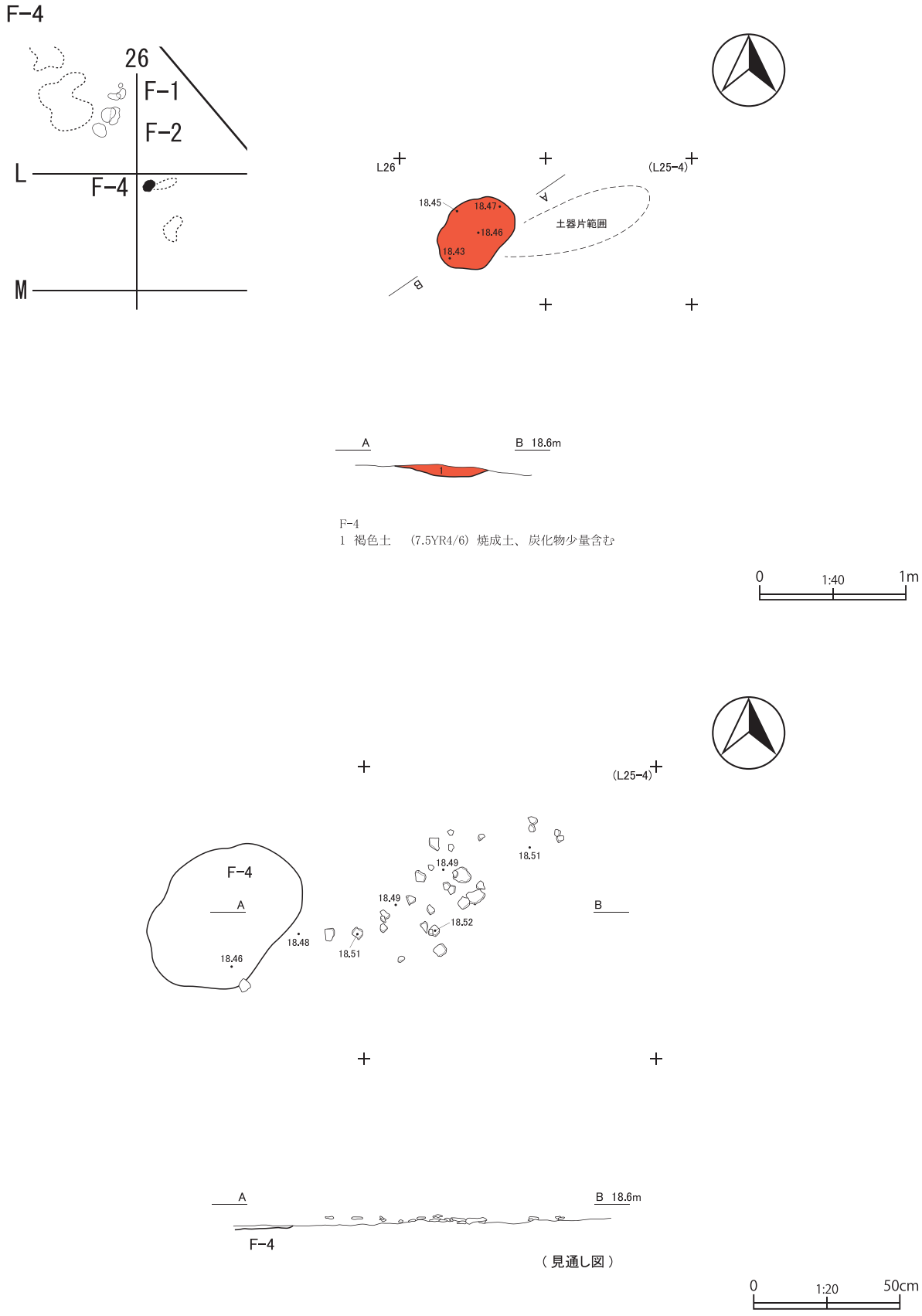
Ｆ－３②

位置：J26区　標高18.3m付近の平坦面　　**規模**：0.35×0.25/0.04m　　**平面形**：不整形

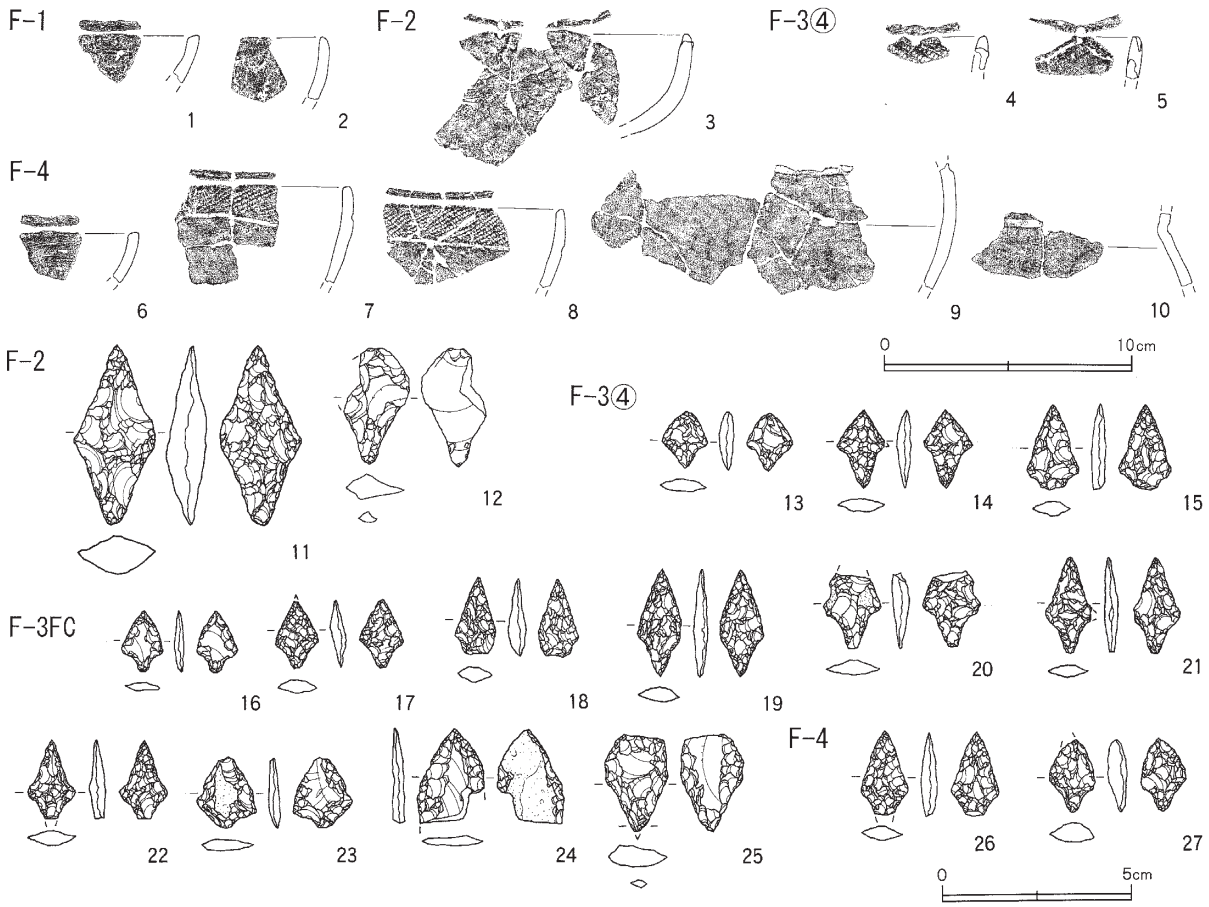

F−1・F−2
27
26
F−3
K
L
F−1
F−2
F−4
K26
A
B
B 18.6m
F−2
F−1
1
2
3
18.47
18.42
18.4
18.43
18.38
18.37
18.36
FC
18.33
18.39
F−1
1 黒褐色土（7.5YR3/2）骨片多く含む　炭化物、灰あり
2 暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物、焼土粒含む
3 暗褐色土（7.5YR3/2）焼土（動いたもの）　炭化物少量含む
F−2
1 黒褐色土（7.5YR3/2）骨片多く含む
2 褐色土　（7.5YR4/6）焼土、炭化物少量含む
0
1:40
1m


F−3
27
26
J
K
F−3
F−1
F−2
FC
18.31
F−3①
18.37
18.36
18.34
F−3②
18.42
F−3④
18.29
18.27
18.31
18.25
18.38
18.36
18.39
F−3③
A
B
C
D
F−3①
F−3④
A
B 18.4m
1
2
3
F−3②
F−3③
C
D 18.5m
4
5
K26
F−3
1 褐色土　（7.5YR4/6）焼成土
2 暗褐色土（7.5YR3/3）灰＋焼骨片
3 褐色土　（7.5YR4/6）焼成土
4 暗褐色土（7.5YR3/4）焼土粒、焼骨片、炭化物（動いた焼土）
5 暗褐色土（7.5YR3/3）うすい灰、焼骨片
0
1:40
1m

図Ⅴ−7　F−1・2・3


F−4
26
F−1
F−2
L
F−4
M
L26
(L25−4)
18.45
18.47
18.46
18.43
土器片範囲
A
B
A
B 18.6m
1
F−4
1 褐色土　(7.5YR4/6) 焼成土、炭化物少量含む
0
1:40
1m
(L25−4)
F−4
A
18.48
18.46
18.51
18.49
18.49
18.52
18.51
B
A
B 18.6m
F−4
（見通し図）
0
1:20
50cm

図Ⅴ－８　Ｆ－４



図Ⅴ－９　焼土出土の遺物

確認・調査：Ｔａ－ｃ火山灰除去作業後にⅤ層上面で検出した。動かされた焼成土の範囲である。土壌水洗作業で焼骨片7.5ｇが得られた。シカの四肢骨と思われる。

出土遺物：フレイクが13点出土している。フレイクは黒曜石製、チャート製、玉髄製がある。

Ｆ－３③

位置：J26区　標高18.3m付近の平坦面　　**規模**：0.88×0.38/0.03m　　**平面形**：不整形

確認・調査：Ta-c火山灰除去作業後にⅤ層上面で検出した。焼骨片、灰、炭化物などのまとまりの範囲である。土壌水洗作業で焼骨片17.1ｇが得られた。シカの四肢骨と思われる。

出土遺物：Ⅴ群a類土器、焼成粘土塊、フレイクが出土した。フレイクは黒曜石製と玉髄製のものがあり一部は被熱している。

Ｆ－３④

位置：J26区　標高18.3m付近の平坦面　　**規模**：0.72×0.57/0.02m　　**平面形**：不整形

確認・調査：Ta-c火山灰除去作業後にⅤ層上面で検出した。上位は焼骨片、灰、炭化物を含む層、下位は焼成土である。土壌水洗作業で焼骨片256.0ｇが得られた。シカの四肢骨と思われる。

出土遺物：Ⅴ群a類土器、石鏃、Ｒフレイク、フレイクが出土している。フレイクは黒曜石製、頁岩製、チャート製、玉髄製のものがあり一部は被熱している。

時期：出土遺物からすべて縄文時代晩期初頭のものである。

Ｆ－４（図Ｖ－８　図版38）

位置：L25区　標高18.4m付近の平坦面　　**規模**：0.59×0.41/0.04m　　**平面形**：不整形

確認・調査：Ta-c火山灰除去作業後にＶ層上面で検出した。Ｖ層の焼成土の範囲である。東側に隣接してＶ群a類土器がまとまって出土した。土壌水洗作業で焼骨片10.2ｇが得られた。シカの四肢骨と思われる。また、炭化したクルミの種子片が出土している。

時期：出土遺物から縄文時代晩期初頭のものである。

出土遺物：Ｖ群a類土器、焼成粘土塊、石鏃、Ｒフレイク、フレイクが出土した。フレイクは黒曜石製、玉髄製、頁岩製、安山岩製のものがあり一部は被熱している。

焼土出土の遺物（図Ｖ－９　図版42）

土器

すべてＶ群a類である。１・２はF－１出土。３はF－２出土。４・５はF－３④出土。６～10はF－４出土のものである。１～３は無文のもの。４は突起部分。５は１条の沈線がめぐり、口唇上に刺突がある。７・８は同一個体で、沈線で文様帯を区画している。９・10は同一個体で、頚部に沈線がめぐる。

石器

11・12はＦ－２出土。13～15はＦ－３④出土。16～25はＦ－３ＦＣ出土。26・27はＦ－４出土のものである。11は黒曜石製の石槍。機能部側縁は直線的である。12は玉髄製の石錐。機能部以外は片面のみ加工がある。13～15は有茎の石鏃。13は玉髄製で被熱している。18～25はF－３ＦＣ出土のもの。16～23は有茎の石鏃。16は玉髄製。23は主剥離面と原石面を大きく残す。未成品の可能性がある。24は原石面を大きく残す薄い剥片を素材としている。25は頁岩製の石錐である。26、27は有茎の石鏃。26は玉髄製で鏃身は二等辺三角形を呈する。

（３）包含層出土の遺物

遺物出土状況（図Ｖ－10～14　図版39・40）

Ｖ層の遺物包含層から、土器等1,088点、石器等3,298点が出土した（表Ｖ－２）。土器等は、Ⅳ群a類187点、Ｖ群a類913点、土製品１点がある。石器等は、剥片石器類が3,293点、礫石器等が５点である。

土器は、Ⅳ群a類が発掘区北側と南側から少量出土している。Ｖ群a類は焼土周辺からの出土が大半を占める。石器等も焼土周辺からの出土が多い。

石器は、大半が剥片石器とフレイク類で、礫石器類は石斧片３点とたたき石２点が出土しているのみである。

Ｆ－３の南西側で、Ｊ26区・Ｋ26区にまたがってＶ群a類土器のまとまりが見られる。チャート製や玉髄製の石器原材と考えられる亜円礫が一緒に出土している（図Ｖ－10）。

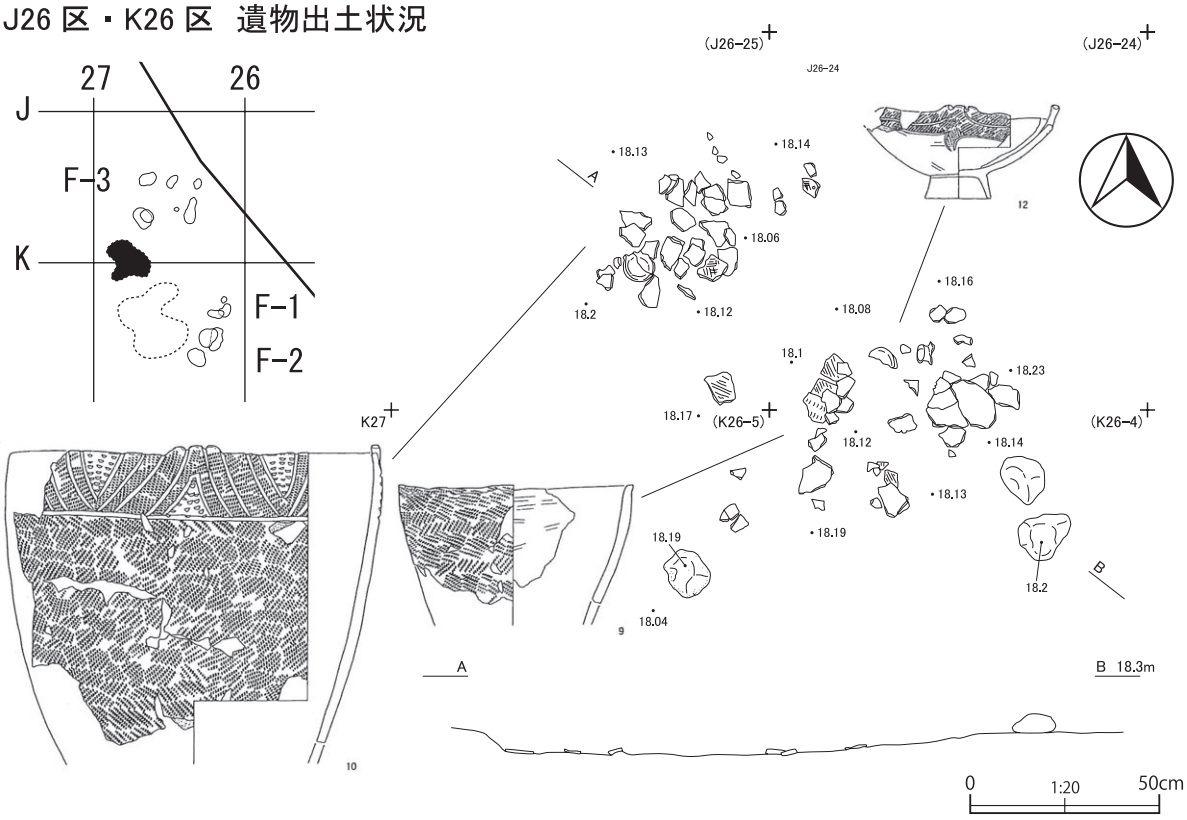
Ｆ－１・Ｆ－２の西側のＫ26区で、数個体のＶ群a類土器、礫石器、玉髄製の亜円礫などがまとまって出土している（図Ｖ－10）。Ｆ－２のＦＣに隣接しているため、フレイク・チップの出土も多い。

Ｆ－４の南側、Ｌ25区でＶ群a類土器がまとまって出土している（図Ｖ－11）。

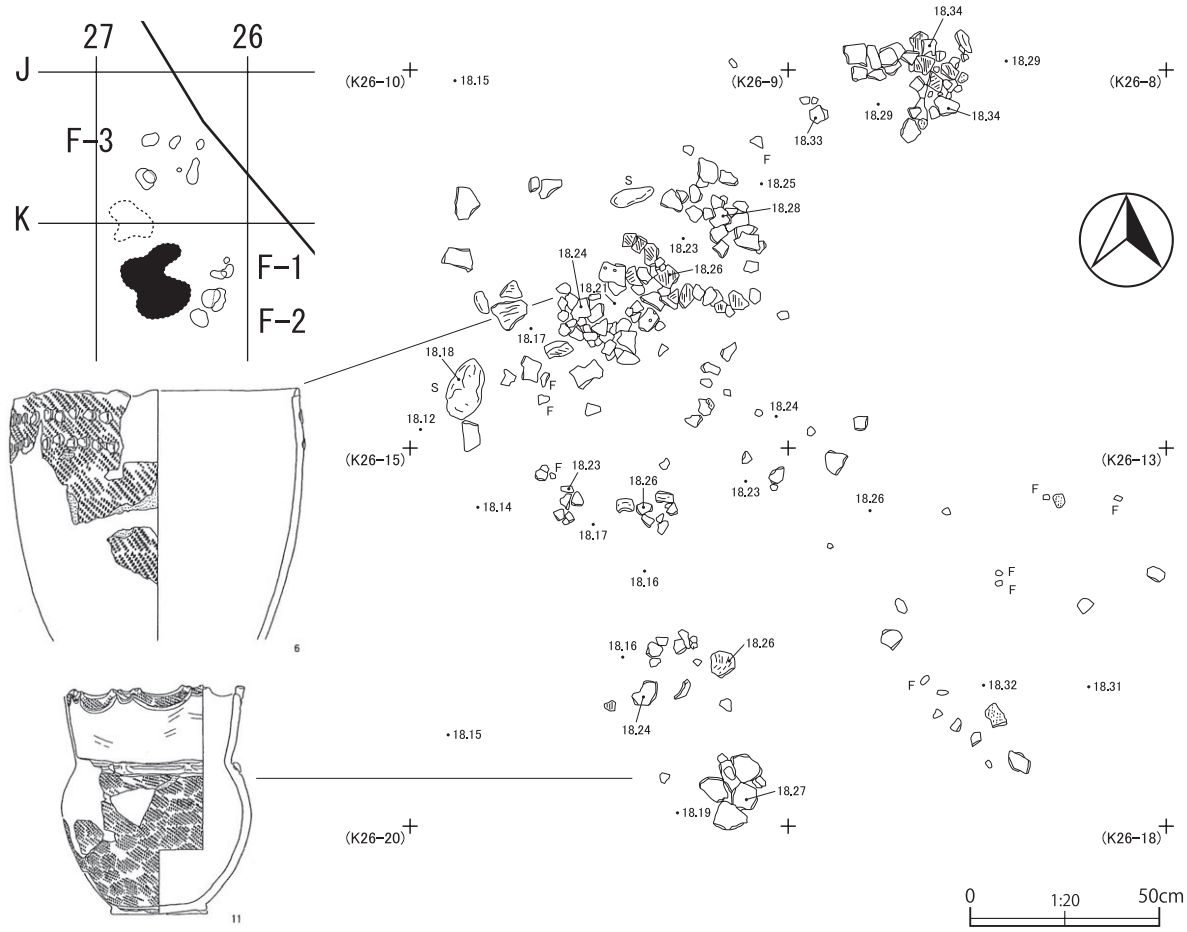
土器・土製品（図Ｖ－15～19　図版42～45）

１～４はⅣ群a類土器。１は円形の刺突が見られる。２・３は底部でやや張り出す。４は道南地方の涌元式もしくはトリサキ式に相当すると考えられる壺である。太い隆帯で文様が構成され、欠落しているが胴部の把手部分と思われる。赤色顔料が付着している。

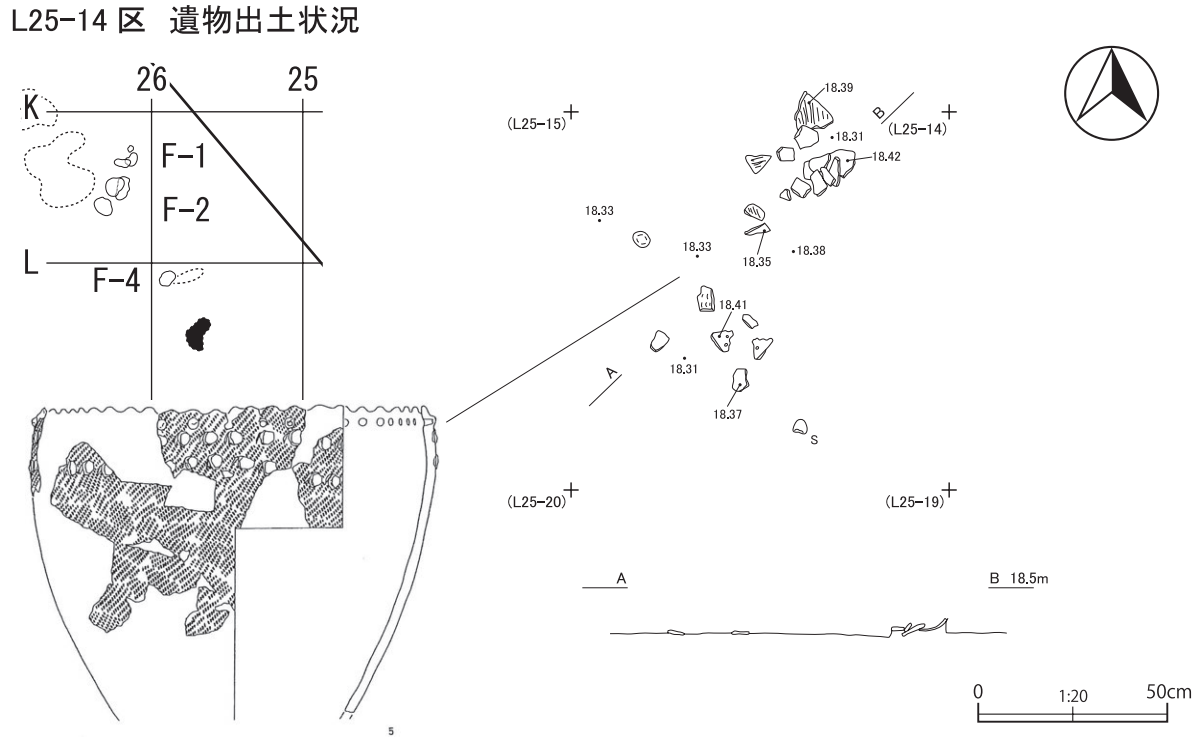
J26 区・K26 区　遺物出土状況



K26 区　遺物出土状況



図Ⅴ－10　遺物出土状況（1）

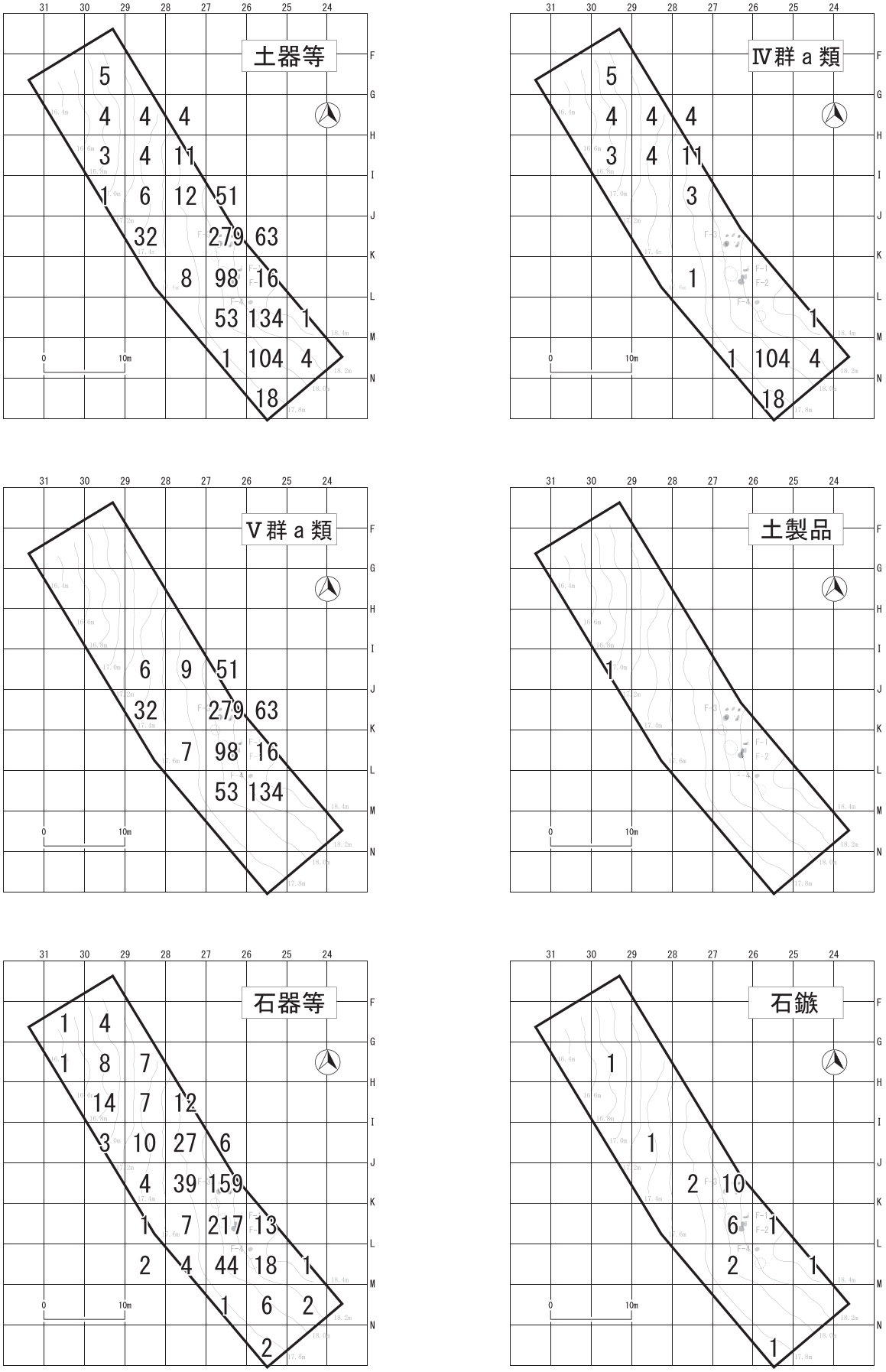


図Ⅴ－11　遺物出土状況（２）

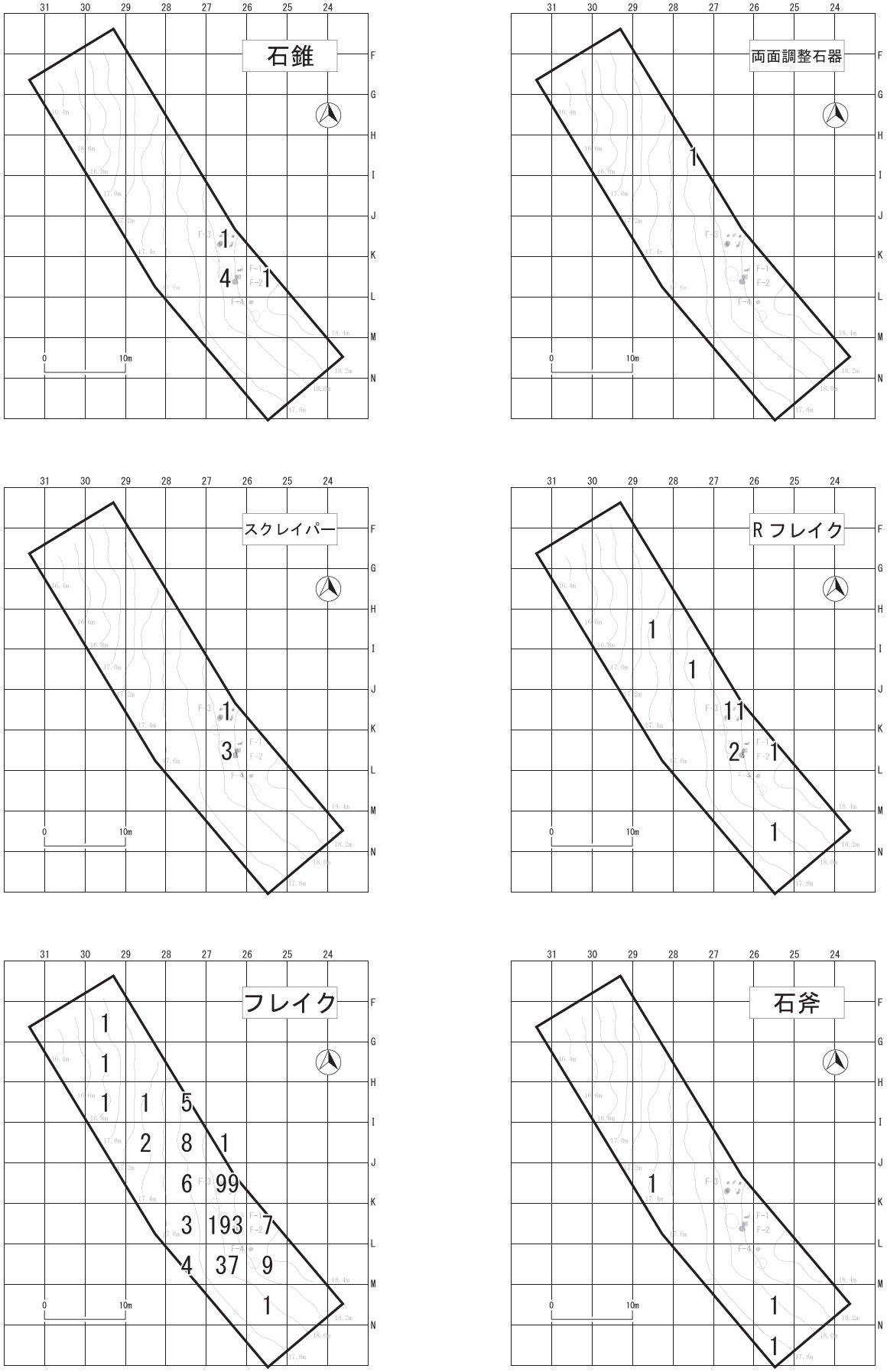
５～44はⅤ群a類土器。５と19は突瘤文と爪形文をもつもの。19は口唇上に斜めで長い刻みが加えられる。６と13～17は口縁部に爪形文がめぐる。17は小波状口縁となっている。７～９と25a～28、30は縄文のみのもの。７の底面は中心が凹む。F－２出土の２点と接合している。29は突瘤文のみのもの。10は刺突と沈線で文様が構成されるもの。11は頚部が無文となりA字状突起をもつ。F－２、F－４出土のものと１点ずつ接合している。12は台付きのもの。21a～23は縄文と沈線で文様が構成されるもの。21aは爪形文が１か所みられる。24は沈線で文様が構成されるもの。爪形文が１か所みられ、斜めに施文されている。31～35は無文のもの。35は壺の頚部である。36～40、42～44は底部。36・37は底面に縄文が施されている。42の底面の内側には沈線が見られる。41は注口土器の胴部で無文である。

45は土製品で板状の粘土を巻いて製作している。孔は貫通している。

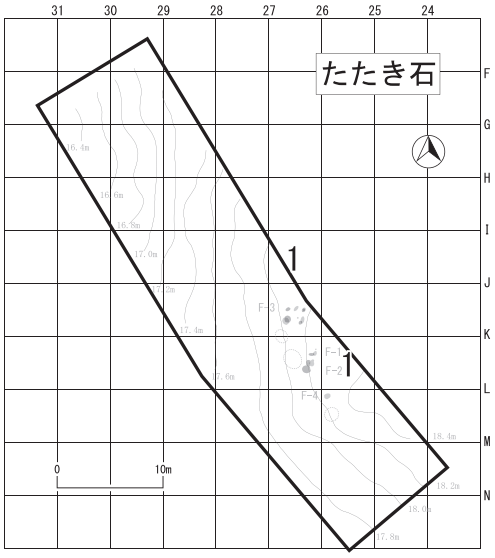
（村田）

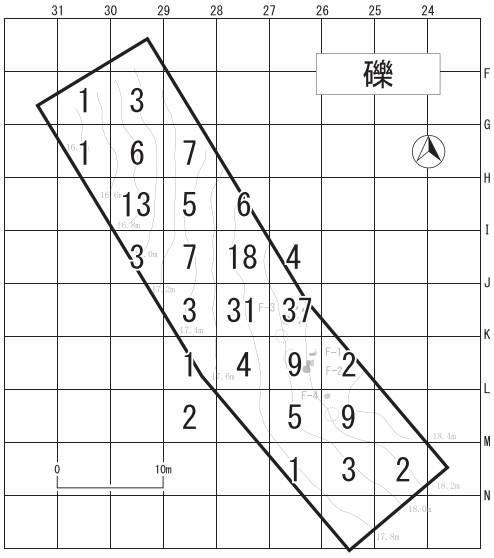


図Ⅴ－12　遺物分布図（１）


石錐
両面調整石器
スクレイパー
R フレイク
フレイク
石斧
31 30 29 28 27 26 25 24
F G H I J K L M N
0 10m

図Ⅴ－13　遺物分布図（２）



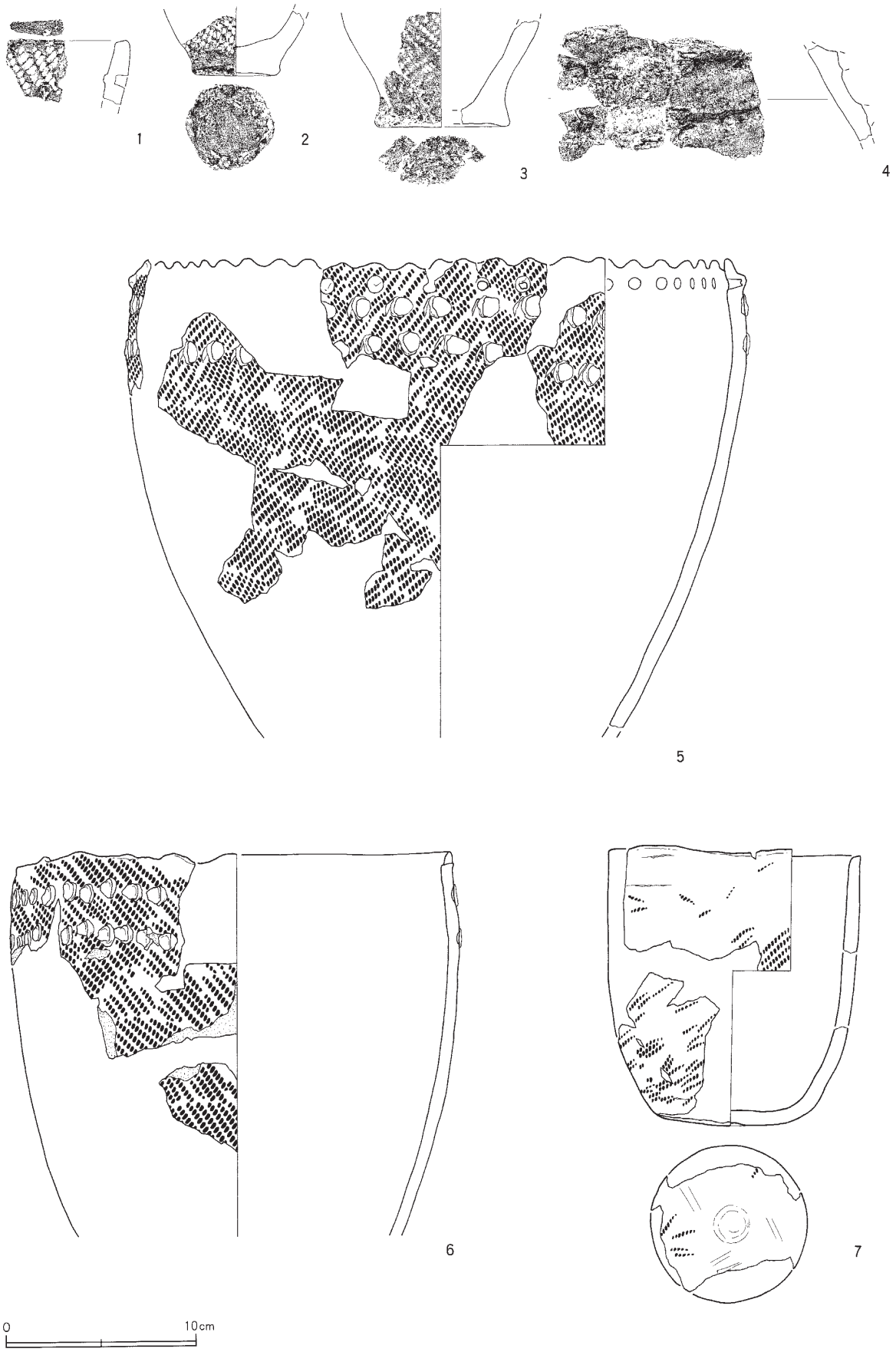


図Ⅴ－14　遺物分布図（３）

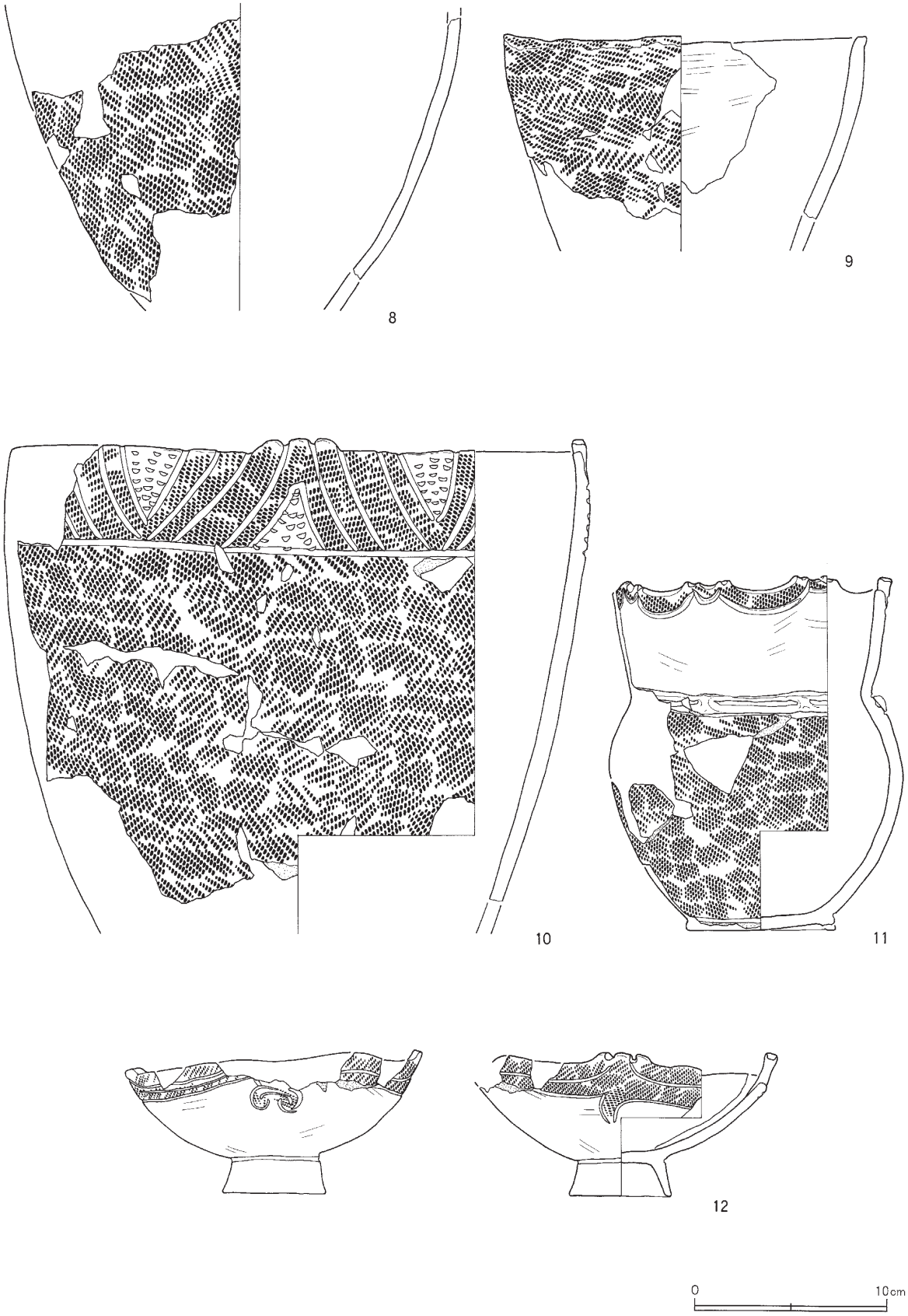
石器（図Ⅴ－20　図版46）

剥片石器は、特に記載がない限り黒曜石製である。１～20は石鏃。１は菱形を呈する。２～16は有茎のもの。３、11、12は玉髄製。10、16は珪質頁岩製。13は主剥離面を大きく残すもの。17～19は凹基または平基のもの。20は未成品の可能性がある。玉髄製。21～25は石錐。21、22は玉髄製。21は幅広のつまみ部を持つ。22は棒状のもの。23は主剥離面を大きく残す。24は頁岩製で両面調整が丁寧に行われている。25は珪岩製で細長い機能部が作出されている。26～29はスクレイパー。26、27は片面にのみ加工が加えられている。26は頁岩製。28は原石面を大きく残すもの。29は珪質頁岩製で、右側縁に背面からの微細な剥離が施されている。30は両面調整石器。腹面に主剥離面の一部を残している。31は緑色泥岩製の石斧。２点接合した。折れた刃部を再加工した敲打痕が見られる。32はチャート製のたたき石。両端に敲打痕がある。

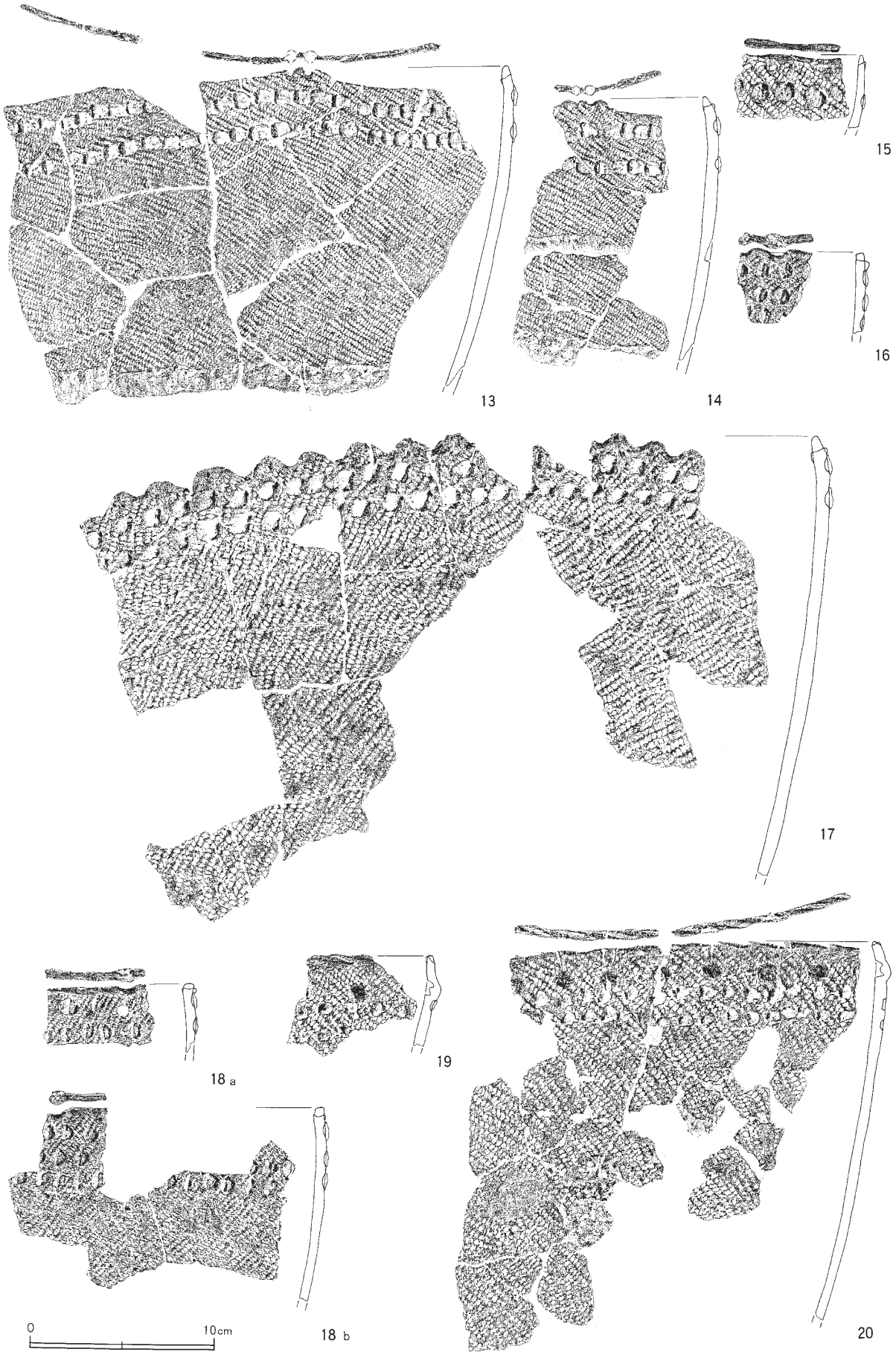
（村田）



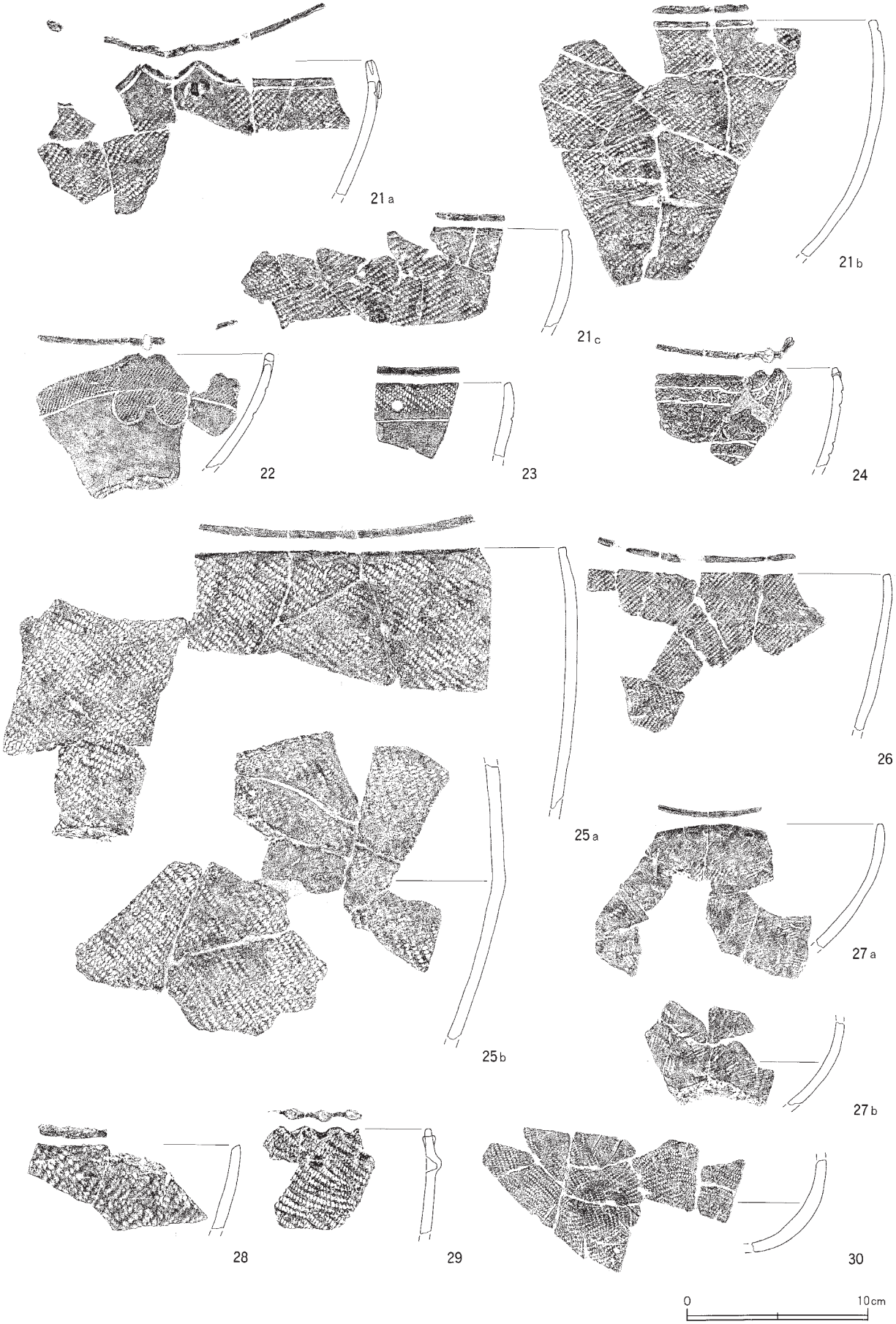
図Ⅴ－15　包含層出土の土器（１）



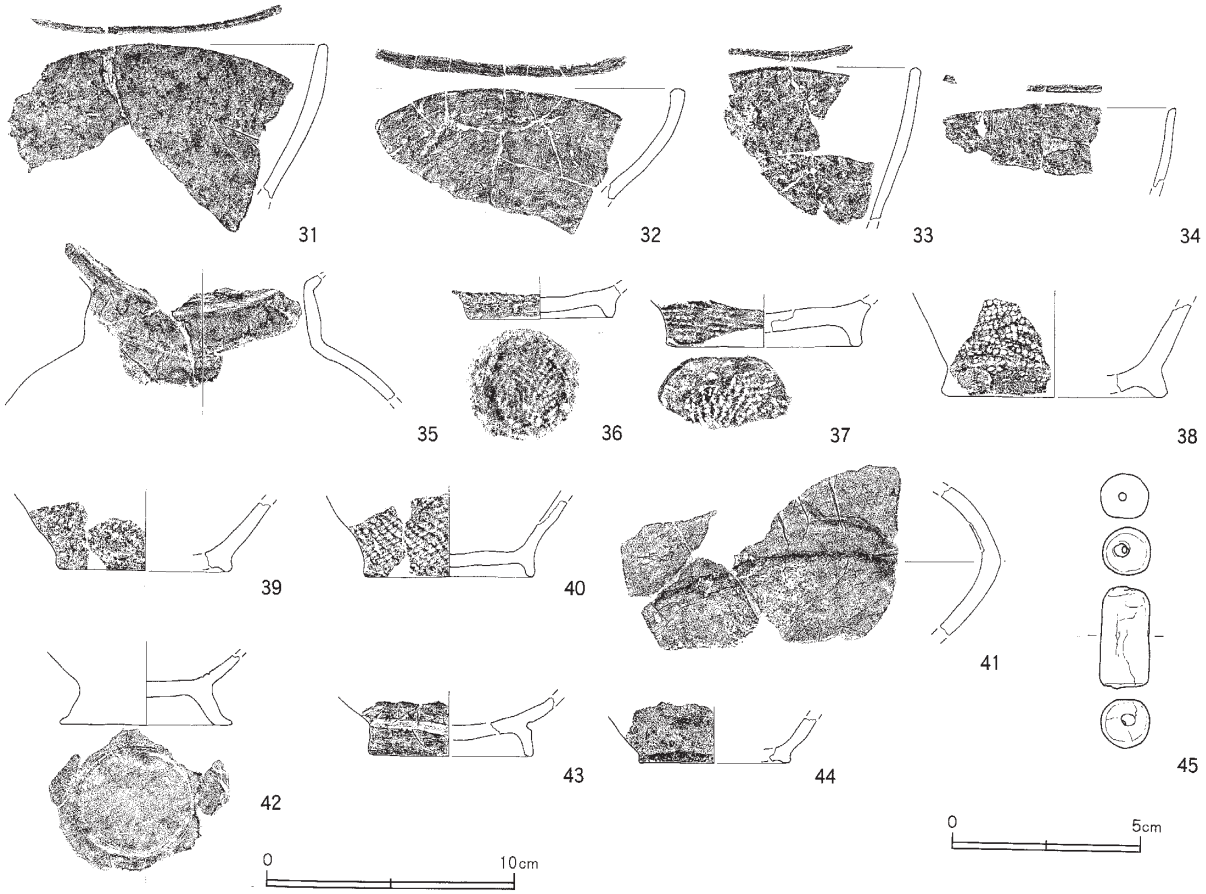
図Ⅴ－16　包含層出土の土器（2）



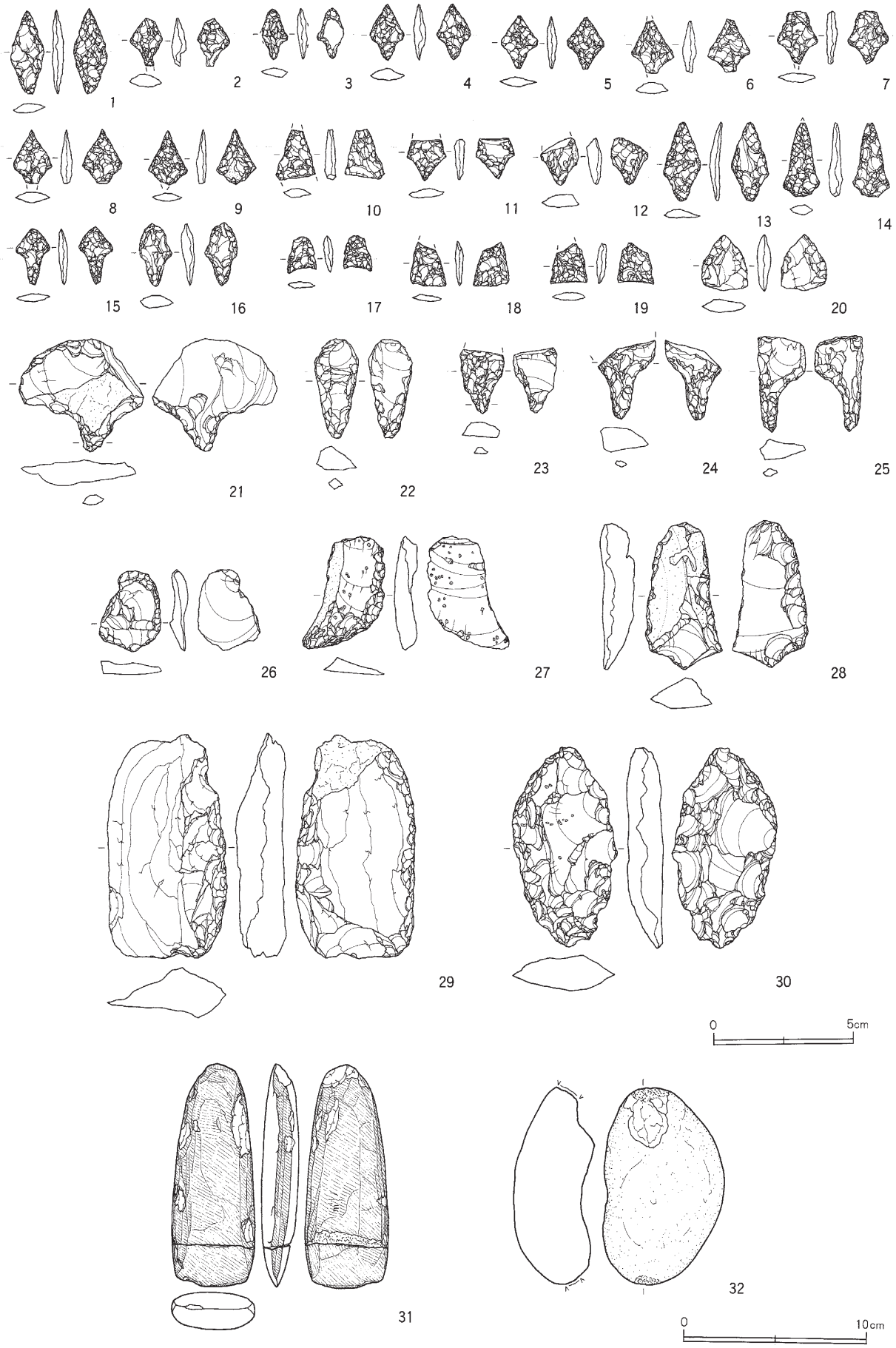
図Ⅴ－17　包含層出土の土器（３）



図Ⅴ－18　包含層出土の土器（4）



図Ⅴ－19　包含層出土の土器（５）・土製品



図Ⅴ－20　包含層出土の石器

表Ｖ－３　遺構規模一覧

遺構名	図	図版	発掘区	確認面	規模(m)			平面形	時期	備考
					長径	短径	深さ			
F-1	Ｖ－７	36	K26	Ｖ層上面	0.76	0.31	0.08	不整形	晩期初頭	大小２か所のうちの大　Ｖ層焼成範囲
F-1	Ｖ－７	36	K26	Ｖ層上面	0.22	0.18	0.06	不整形	晩期初頭	大小２か所のうちの小 Ｖ層焼成範囲＋灰、焼骨片などの範囲、FC伴う
F-2	Ｖ－７	36	K26	Ｖ層上面	0.78	0.75	0.06	不整形	晩期初頭	Ｖ層焼成土＋灰、焼骨片などの範囲
F-3①	Ｖ－７	37・38	J26	Ｖ層上面	0.47	0.26	0.03	楕円形	晩期初頭	Ｖ層焼成範囲、FC伴う
F-3②	Ｖ－７	37・38	J26	Ｖ層上面	0.35	0.25	0.04	不整形	晩期初頭	動かされた焼土の範囲
F-3③	Ｖ－７	37・38	J26	Ｖ層上面	0.88	0.38	0.03	不整形	晩期初頭	焼骨片、灰、炭化物のまとまりの範囲
F-3③	Ｖ－７	37・38	J26	Ｖ層上面	0.13	0.13	0.02	不整形	晩期初頭	動かされた焼土の範囲
F-3④	Ｖ－７	37・38	J26	Ｖ層上面	0.72	0.57	0.06	楕円形	晩期初頭	Ｖ層焼成土＋灰、焼骨片などの範囲
F-4	Ｖ－８	38	L25	Ｖ層上面	0.59	0.41	0.04	不整形	晩期初頭	Ｖ層焼成範囲、土器の集中域伴う

表Ｖ－４　出土遺物集計

種別		土器等					石器等											合計	自然遺物	
遺構包含層	層位	Ⅳ群a類	Ⅴ群a類	土製品	焼成粘土塊	計	石鏃	石槍	石錐	両面調整石器	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石斧	たたき石	礫	計		焼骨片(g)	炭化物(g)
F-1			6			6							14				14	20	13.8	
F-2			52		4	56		1	1			1	438				441	497	102.8	3.1
F-3①							11		1		1	4	1261				1278	1278		
F-3②													13				13	13	7.5	
F-3③			6		1	7							31				31	38	17.1	
F-3④			24			24	4					2	248				254	278	256.0	1.4
F-4			77		2	79	4					1	823				828	907	10.2	1.4
F29	Ⅴ	5				5							1			3	4	9		
F30	Ⅴ															1	1	1		
G27	Ⅴ	4				4											0	4		
G28	Ⅴ	4				4										7	7	11		
G29	Ⅴ	4				4	1						1			6	8	12		
G30	Ⅴ															1	1	1		
H27	Ⅴ	11				11				1			5			6	12	23		
H28	Ⅴ	4				4						1	1			5	7	11		
H29	Ⅴ	3				3							1			13	14	17		
I26	Ⅴ		51			51							1		1	4	6	57		
I27	Ⅴ	3	9			12						1	8			18	27	39		
I28	Ⅴ		6			6	1						2			7	10	16		
I29	Ⅴ			1		1										3	3	4		
J25	Ⅴ		63			63											0	63		
J26	Ⅴ		279			279	10		1		1	11	99			37	159	438		
J27	Ⅴ						2						6			31	39	39		
J28	Ⅴ		32			32								1		3	4	36		
K25	Ⅴ		16			16	1		1			1	7		1	2	13	29		
K26	Ⅴ		98			98	6		4		3	2	193			9	217	315		
K27	Ⅴ	1	7			8							3			4	7	15		
K28	Ⅴ															1	1	1		
L24	Ⅴ	1				1	1										1	2		
L25	Ⅴ		134			134							9			9	18	152		
L26	Ⅴ		53			53	2						37			5	44	97		
L27	Ⅴ												4				4	4		
L28	Ⅴ															2	2	2		
M24	Ⅴ	4				4										2	2	6		
M25	Ⅴ	104				104						1	1	1		3	6	110		
M26	Ⅴ	1				1										1	1	2		
N25	Ⅴ	18				18	1							1			2	20		
排土	排土												2				2	2		
	合計	167	913	1	7	1088	44	1	8	1	5	25	3209	3	2	183	3481	4569		

表Ⅴ－５　掲載土器等一覧（１）

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/発掘区	層位	点数	分類	器種	部位	特徴	備考
Ⅴ－９	1	図版42	F-1		1	Ⅴa	浅鉢	口縁	無文	
	2		F-1		1	Ⅴa	浅鉢	口縁	無文	
	3		F-2		5	Ⅴa	浅鉢	口縁	無文	
	4		F-3④		1	Ⅴa	浅鉢	口縁	RL縄文	
	5		F-3④		1	Ⅴa	浅鉢	口縁	沈線文	
	6		F-4		1	Ⅴa	浅鉢	口縁	無文	
	7		F-4		3	Ⅴa	深鉢	口縁	LR縄文　沈線文　胴部無文	８と同一個体
	8		F-4		7	Ⅴa	深鉢	口縁	LR縄文　沈線文　胴部無文	７と同一個体
	9		F-4		13	Ⅴa	壺	胴部	沈線文　無文	10と同一個体
	10		F-4		2	Ⅴa	壺	胴部	沈線文　無文	９と同一個体
Ⅴ－15	1	図版44	K27	Ⅴ	1	Ⅳa	深鉢	口縁	RL縄文	
	2		L24	Ⅴ	1	Ⅳa	深鉢	底部	RL縄文	
	3		G29	Ⅴ	4	Ⅳa	深鉢	底部	羽状縄文	
	4		G27	Ⅴ	4	Ⅳa	壺	胴部	隆帯	赤色顔料付着
			H28		1					
	5	図版42	L25		23	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	LR縄文、爪形文、突瘤	
	6		K26-3	Ⅴ	10	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	爪形文、RL縄文	
			K26-8		16					
			K26-9		22					
	7	図版43	F-1		1	Ⅴa	深鉢	口縁～底部	LR縄文、底面凹み	焼土出土
			F-2		1					焼土出土
			J26	Ⅴ	3					
			J26-24		1					
			J27		2					
			K26		3					
			K26-9		1					
			K26-24		1					
Ⅴ－16	8		J27	Ⅴ	12	Ⅴa	深鉢	胴部	RL縄文	
			J28		24					
	9		J26	Ⅴ	1	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	LR/RL縄文、口縁角	
			J26-25		1					
			J27		2					
			K26-4		3					
			K26-9		2					
	10		J25	Ⅴ	4	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	沈線、刺突	
			J26		2					
			J26-25		26					
	11		F-2		6	Ⅴa	壺	口縁～底部	沈線、RL縄文、貼付突起	焼土出土
			F-4		2					焼土出土
			J26	Ⅴ	4					
			K26		7					
			K26-8		1					
			K26-9		9					
			K26-13		3					
			K26-14		8					
	12		J26	Ⅴ	5	Ⅴa	浅鉢	口縁～底部	沈線、LR縄文、台付	
			J26-24		13					
			J26-25		1					
			K26-4		2					
Ⅴ－17	13	図版44	J26-14	Ⅴ	14	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	爪形文、RL縄文	
	14		J26	Ⅴ	8	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	爪形文、RL縄文	
	15		J27	Ⅴ	1	Ⅴa	深鉢	口縁	爪形文、RL縄文	
	16		J27	Ⅴ	1	Ⅴa	深鉢	口縁	爪形文、小波状口縁	
	17		L25	Ⅴ	25	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	爪形文、LR縄文	
	18a		J27	Ⅴ	1	Ⅴa	深鉢	口縁	爪形文、LR縄文	
	18b		J26	Ⅴ	5	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	爪形文、LR縄文	
			J27		1					
			K26		1					
	19		K26-9	Ⅴ	2	Ⅴa	深鉢	口縁	爪形文、RL縄文、突瘤	
	20		K26-9	Ⅴ	24	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	爪形文、RL縄文、突瘤	
Ⅴ－18	21a	図版45	J26	Ⅴ	2	Ⅴa	深鉢	口縁	爪形文、沈線文、LR縄文	
			K26		5					
	21 b		J26-24	Ⅴ	1	Ⅴa	深鉢	口縁～胴部	沈線文、LR縄文	
			K26		3					
			K26-9		1					
			L25		6					
	21 c		K26	Ⅴ	1	Ⅴa	深鉢	口縁	沈線文、LR縄文	
			K26-4		9					
			F-2		1					焼土出土
	22		I26	Ⅴ	1	Ⅴa	浅鉢	口縁～胴部	沈線文、LR縄文、胴部無文	
			I27		1					
	23		L26	Ⅴ	1	Ⅴa	浅鉢	口縁	沈線文、RL縄文、胴部無文	F-4と同一個体？
	24		K25	Ⅴ	4	Ⅴa	浅鉢	口縁	爪形文、沈線文、LR縄文	

表Ｖ－６　掲載土器等一覧（２）

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/発掘区	層位	点数	分類	器種	部位	特徴	備考
Ｖ－18	25a	図版45	K26	Ｖ	1	Ｖa	深鉢	口縁～胴部	RL縄文	
			K26-9		5					
	25b		K26	Ｖ	3	Ｖa	深鉢	口縁～胴部	RL縄文	
			K26-9		6					
	26		J26	Ｖ	6	Ｖa	浅鉢	口縁～胴部	LR縄文	
			J27		1					
	27a		K26	Ｖ	5	Ｖa	浅鉢	口縁～胴部	LR縄文	
			K26-13		2					
	27ｂ		K26	Ｖ	5	Ｖa	浅鉢	胴部	LR縄文	
	28		K26-14	Ｖ	3	Ｖa	浅鉢	口縁	LR縄文	
	29		J26	Ｖ	4	Ｖa	深鉢	口縁	RL縄文、突瘤	
	30		J26	Ｖ	6	Ｖa	浅鉢	胴部～底部	LR縄文	
			J27		2					
Ｖ－19	31		J26	Ｖ	2	Ｖa	浅鉢	口縁～胴部	無文	
	32		K26	Ｖ	9	Ｖa	浅鉢	口縁～胴部	無文	
	33		I26	Ｖ	4	Ｖa	浅鉢	口縁～胴部	無文	
	34		K26-14	Ｖ	3	Ｖa	浅鉢	口縁	無文	
	35		J27	Ｖ	8	Ｖa	注口	胴部	無文	
	36		K26	Ｖ	2	Ｖa	深鉢	底部	底面にRL縄文	
	37		J26	Ｖ	1	Ｖa	深鉢	底部	底面にLR縄文	
	38		J26	Ｖ	1	Ｖa	深鉢	底部	LR縄文	
	39		K26	Ｖ	2	Ｖa	深鉢	底部		
	40		J26-25	Ｖ	2	Ｖa	深鉢	底部	LR縄文	
	41		I26	Ｖ	4	Ｖa	深鉢	底部	無文	
			J26		1					
	42		I28	Ｖ	3	Ｖa	深鉢	底部	内部底面に沈線文	
	43		J26	Ｖ	4	Ｖa	深鉢	底部	沈線文	
	44		K26-14	Ｖ	1	Ｖa	深鉢	底部	無文	
	45		I29	Ｖ	1	土製品			棒状、孔は貫通	

表Ｖ－７　掲載石器等一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/発掘区	層位	遺物名	石材	長さ（ｃｍ）	幅（ｃｍ）	厚さ（ｃｍ）	重さ（ｇ）	備考
Ｖ－９	11	図版42	F-2		石槍	黒曜石	4.7	2.2	1.1	5.5	トレンチ出土
	12		F-2		石錐	玉髄	3.1	(1.8)	0.7	(2.1)	
	13		F-3④		石鏃	玉髄	1.5	1.2	0.4	0.5	被熱
	14		F-3④		石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.5	
	15		F-3④		石鏃	黒曜石	2.3	1.4	0.5	0.8	
	16		F-3		石鏃	玉髄	1.6	1.2	0.3	0.3	FC出土
	17		F-3		石鏃	黒曜石	(1.8)	1.2	0.5	(0.5)	FC出土
	18		F-3		石鏃	黒曜石	2.1	1.1	0.5	0.6	FC出土
	19		F-3		石鏃	黒曜石	2.8	1.2	0.4	0.8	FC出土
	20		F-3		石鏃	黒曜石	(2.0)	1.6	0.5	(0.8)	FC出土
	21		F-3		石鏃	黒曜石	2.5	1.3	0.4	0.7	FC出土
	22		F-3		石鏃	黒曜石	(2.1)	1.3	0.5	(0.6)	FC出土
	23		F-3		石鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.4	0.6	FC出土
	24		F-3		石鏃	黒曜石	(2.5)	1.8	0.4	(1.2)	FC出土
	25		F-4		石鏃	黒曜石	(2.0)	1.3	0.6	(0.8)	
	26		F-4		石鏃	玉髄	(2.2)	1.3	0.5	(0.8)	
	27		F-3		石錐	頁岩	(2.6)	1.7	0.6	(2.6)	FC出土
Ｖ－16	1	図版46	N25	Ｖ	石鏃	黒曜石	3.0	1.2	0.5	0.9	
	2		J26	Ｖ	石鏃	黒曜石	(1.7)	1.2	0.5	(0.6)	
	3		J26	Ｖ	石鏃	玉髄	1.8	(1.0)	0.4	(0.4)	
	4		K26	Ｖ	石鏃	黒曜石	2.0	1.2	0.5	0.6	
	5		J26	Ｖ	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.4	0.5	
	6		J26	Ｖ	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.5	0.5	(0.8)	
	7		J26	Ｖ	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.5	0.4	(0.6)	
	8		J26	Ｖ	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.5	0.5	(0.7)	
	9		J26-25	Ｖ	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.5	0.4	(0.5)	
	10		K26	Ｖ	石鏃	珪質頁岩(珪化岩)	(1.8)	1.4	0.5	(0.8)	
	11		J27	Ｖ	石鏃	玉髄	(1.5)	1.5	0.5	(0.3)	
	12		K26	Ｖ	石鏃	玉髄	(1.7)	1.4	0.5	(1.0)	
	13		K26	Ｖ	石鏃	黒曜石	2.8	1.4	0.5	0.9	
	14		K25	Ｖ	石鏃	黒曜石	(2.7)	1.4	0.6	(1.0)	
	15		L26	Ｖ	石鏃	黒曜石	2.1	1.2	0.3	0.4	
	16		J26	Ｖ	石鏃	珪質頁岩(珪化岩)	2.3	1.3	0.5	0.8	
	17		G29	Ｖ	石鏃	黒曜石	1.3	1.1	0.4	0.3	
	18		L26	Ｖ	石鏃	黒曜石	(1.6)	1.3	0.3	(0.4)	
	19		L24	Ｖ	石鏃	黒曜石	(1.5)	1.3	0.4	(0.5)	
	20		K26	Ｖ	石鏃	玉髄	2.0	1.7	0.5	1.3	
	21		K26	Ｖ	石錐	玉髄	4.0	4.5	1.0	10.9	
	22		K26	Ｖ	石錐	玉髄	3.5	1.7	0.9	4.0	
	23		K25	Ｖ	石錐	黒曜石	(2.3)	1.6	0.6	(1.9)	
	24		K26	Ｖ	石錐	頁岩	(2.8)	2.1	0.9	(3.4)	
	25		K26	Ｖ	石錐	珪岩	3.4	1.8	0.7	3.4	
	26		K26	Ｖ	スクレイパー	頁岩	2.9	2.3	0.7	2.8	
	27		K26	Ｖ	スクレイパー	黒曜石	4.1	3.0	0.9	5.6	
	28		K26	Ｖ	スクレイパー	黒曜石	5.3	2.8	1.3	12.1	
	29		J26	Ｖ	スクレイパー	珪質頁岩(珪化岩)	8.0	4.4	1.8	48.6	
	30		H27	Ｖ	両面調整石器	黒曜石	7.2	3.8	1.4	31.6	
	31		M・N25	Ｖ	石斧	緑色泥岩	11.9	4.5	2.0	160.3	２点接合
	32		I26	Ｖ	たたき石	チャート？	10.5	6.6	4.4	381.2	

Ⅵ章　豊丘２遺跡

１　遺跡の地形と環境

遺跡は、厚真川の支流、野安部川の左岸、標高約24～31ｍの緩斜面上に立地している。調査前の現況は、比較的平坦な北側は畑地で南側が山林であった。国土地理院２万５千分の１地形図『軽舞』（昭和53年改測、平成18年更新）の地図記号から、以前は水田として利用されていたようである（図Ⅵ－２）。

遺跡名の「豊丘」の以前の字名は「野安部」であった。厚眞村史（厚眞村　1956）には「ノヤシペ」（noyaspe）「ノヤウシペッ」（noya-us-pet　ヨモギが・そこに群生している・川）。「ノヤサロペッ」（noyasar-o-pet　ヨモギ原･にある･川）ともいったとある。陸地測量部５万分の１地形図『鵡川』（明治29年製版）に上厚真付近で厚真川に合流する河川名に「ノヤサロペ」の記載がある。

野安部川は、むかわ町との町境、標高150ｍ付近に源流部をもち、豊丘地区付近で沖積低地が拡がり主に水田として利用されている。富野地区で軽舞川、当麻内川を合わせ上厚真地区の上厚真大橋付近で厚真川に合流している（図Ⅵ－１）。現在、軽舞川と合流後の河川名は「軽舞川」であるが、国土地理院５万分の１地形図『鵡川』（大正８年測量）の、厚真川合流地点付近に「野安部太」、同地形図（大正８年測量、昭和28年修正測量）に「下野安部太」とあるので、厚真川と合流する河川は、古くから野安部川と認識されていたと思われる。地理調査所２万５千分の１地形図『上厚真』（昭和29年測量　仮製版）に「軽舞川」の表記がある。河川改修後に河川名が変更されたようである。

２　発掘区の設定

現地調査の基本図は、北海道開発局室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所作成「施工平面図1,000分の１」を使用した（図Ⅵ－３）。

発掘区の基線は、世界測地系（平面直角座標ＸⅡ系）を使用した。X座標＝－149,400とY座標＝－27,400の交点を起点Ａ・０とし、南にＢ、Ｃ、Ｄ・・・、西に１、２、３・・・と５ｍ幅の平行する線を設定した。北東側の杭を個々の発掘区の呼称とし、アルファベットとアラビア数字の組み合わせによった。

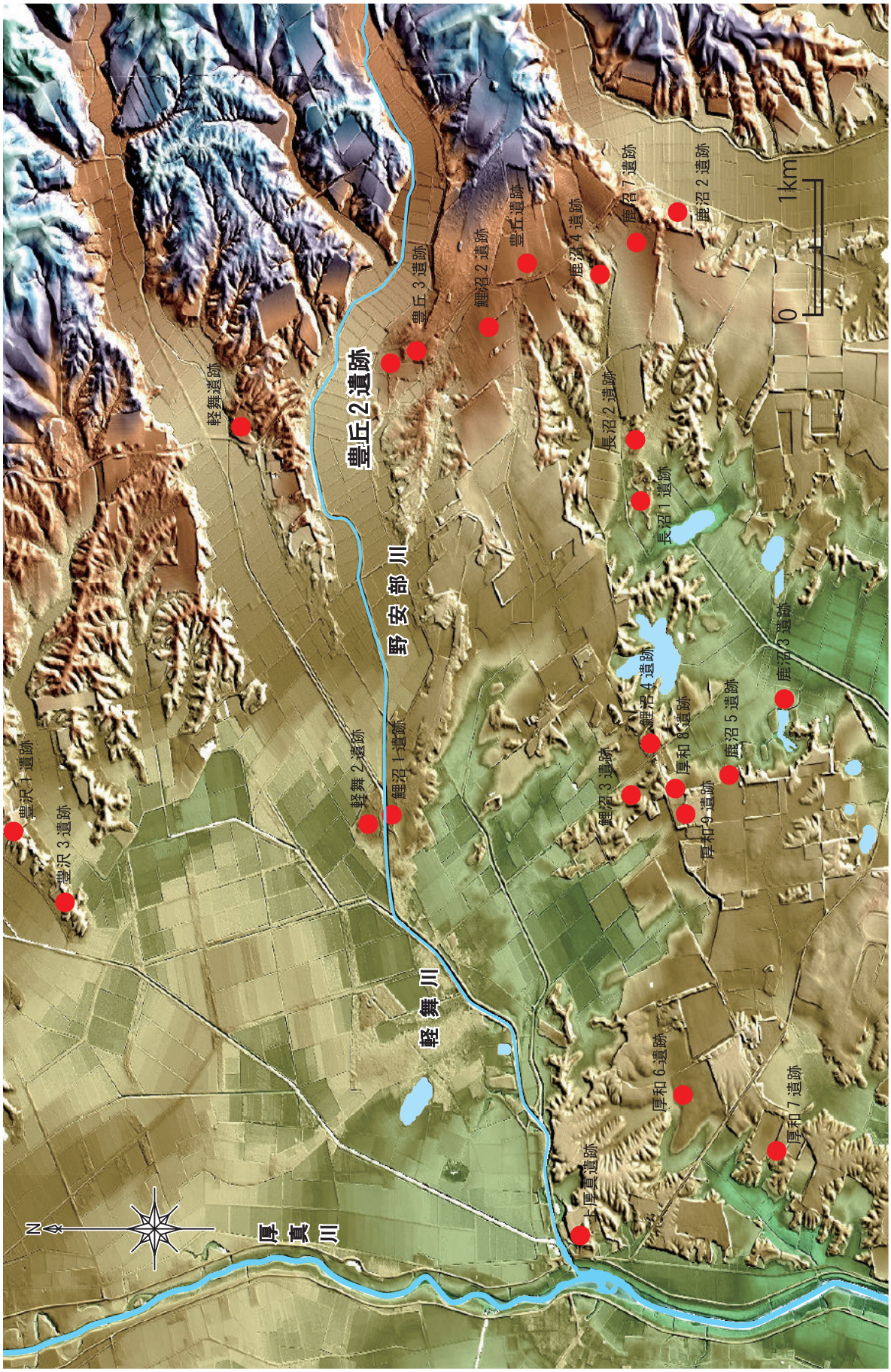
水準測量は発掘区付近に所在する、北海道開発局室蘭開発建設部設置の１級基準点「H-19-1-３　ＢＭ№53」（金属標）を用いて各測量に使用した。

平成19（2007）年11月設置　１級基準点「H-19-1-３　ＢＭ№53」　Ｈ＝29.236 ｍ

３　発掘調査の方法

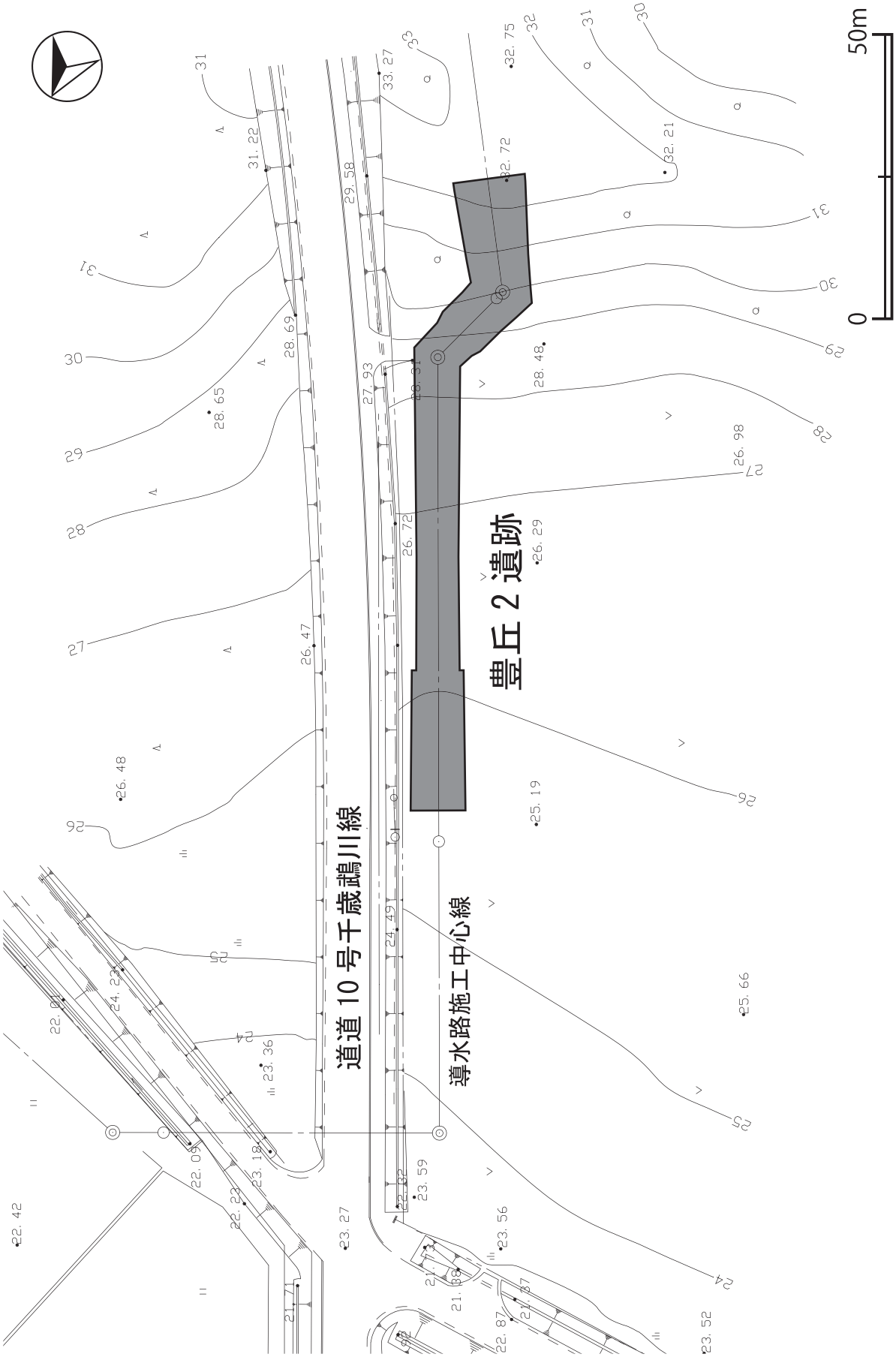
発掘区は５か所に分かれている。細長い調査範囲内の２か所に通常発掘調査区があり、隣接して遺構確認調査区がある。調査の際は、便宜的に北側遺構確認区、北側発掘区、中央遺構確認区、南側発掘区、南側遺構確認区と呼称して作業にあたった。発掘区の東側に隣接して、道道10号千歳鵡川線が通り、西側は耕作中の畑地で、調査排土場所の確保が難しいことから、３か所の遺構確認調査区の調査を先行して行い、調査終了後はここを排土場として２か所の通常発掘調査区の調査を実施した。

調査範囲の一部は、山林であったため、重機により伐木、抜根作業を行った。その後、通常発掘調査区は表土（Ⅰ層）からＴａ－ｂ火山灰層（Ⅱ層）までを重機により除去した。上位の黒色土層（Ⅲ層）は調査対象外であったがこの段階で、遺物や遺構の有無を確認した。遺物が出土しなかったので、



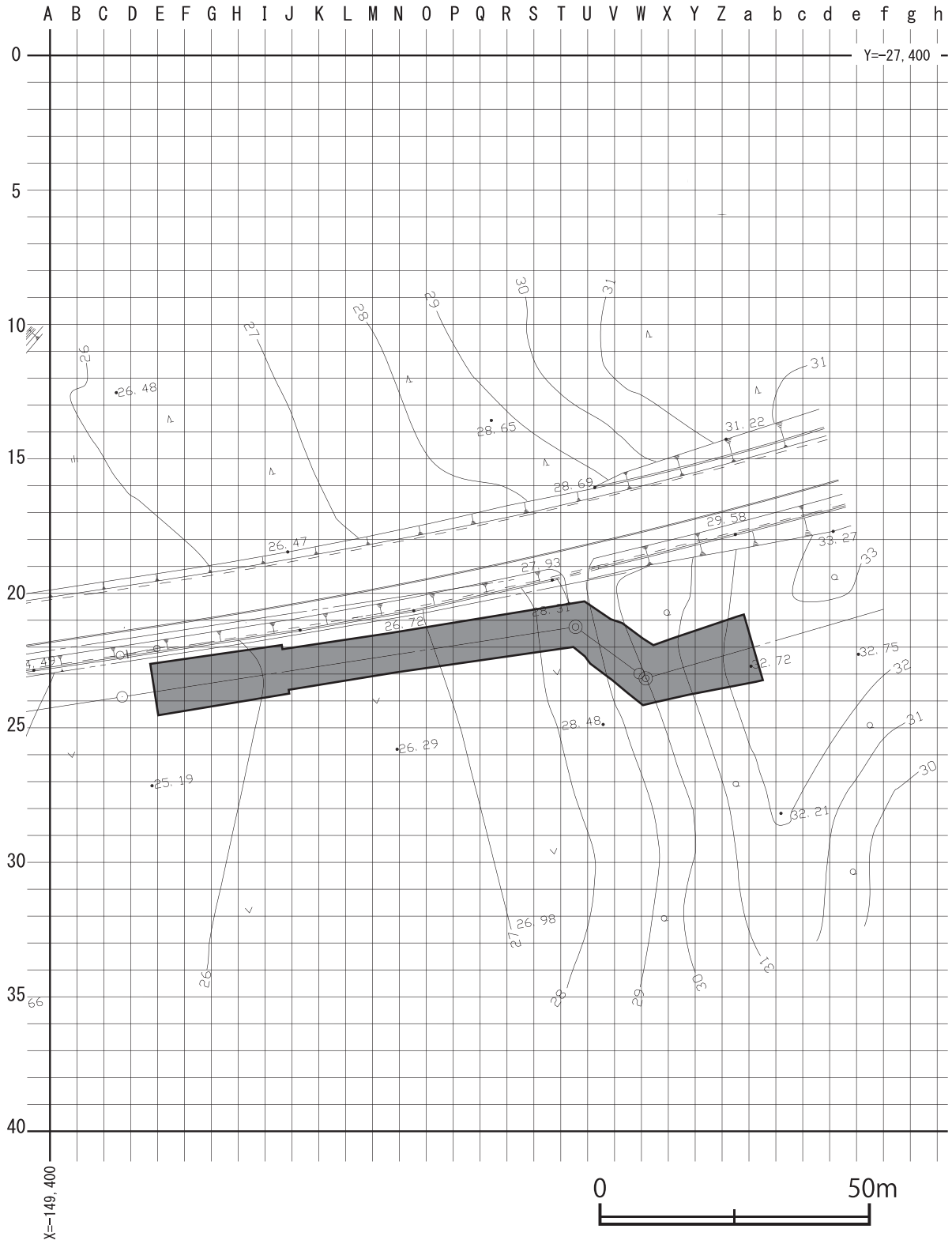
国土地理院基盤地図情報からカシミール３Ｄで作成したものに加筆

図Ⅵ－１　遺跡周辺の地形（１）



室蘭開発建設部胆振農業開発事業所作成「施工平面図」を加工、加筆

図Ⅵ－２　遺跡周辺の地形（２）


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z a b c d e f g h
0
5
10
15
20
25
30
35
40
Y=−27,400
X=−149,400
0
50m

図Ⅵ－３　発掘区設定図

Ⅲ層およびＴａ－ｃ火山灰層（Ⅳ層）を重機で除去した。Ⅴ層上面の検出は人力でジョレンやスコップを使用して行った。Ⅴ層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いて人力による手掘り作業により掘り下げた。

遺構確認調査区は、表土（Ⅰ層）からTa-b火山灰層（Ⅱ層）までを除去したのち、Ⅲ層からⅤ層は遺物の有無を確認しながらⅥ層上面まで除去した。いずれも重機を使用して行った。遺構検出作業は、移植ごて、ジョレン等を使って人力で行った。検出した遺構は、平面図、断面図、写真撮影などで記録した。

包含層出土の遺物は、発掘区および層単位での取上げとした。出土状況に応じて、写真や出土状況図の作成などで記録した。

現地調査での撮影機材は、Mamiya　RZ67PROⅡ、Nikon　D5600、Olympus　TG－４を状況に応じて使用した。

４　整理作業の方法

（１）一次整理

並行して現地調査を実施していた、厚幌２遺跡で当初想定を上回る遺物が出土した。現地の発掘調査を優先したため、一次整理作業は遺物水洗と分類作業のみを実施し、遺物注記や台帳作成作業などは、現地調査終了後に江別市の当センター整理作業棟で実施した。

遺物の注記は、以下のように行った。遺構から遺物は出土しなかった。

包含層出土の遺物は、「遺跡名」・「発掘区」・「層位」を記入した。

＊例　丘２・H23・Ⅴ

（２）二次整理

江別市の当センター整理作業棟で行った。土器は、接合･復元作業を行い、実測、拓本、図版作成、一覧表作成、写真撮影を行った。石器は、報告書掲載用石器の選び出しを行い、実測、トレース、図版作成、一覧表作成、写真撮影を行った。遺構図面の作成、表作成、原稿執筆を行い、報告書編集作業を行った。

整理作業後の遺物は「報告書掲載遺物」と「非掲載遺物」に区分してダンボール箱やコンテナに収納し、「遺物収納台帳」に記載した。報告書刊行後、北海道教育委員会の指示により厚真町へ移管予定である。写真・図面等の記録類は、北海道立埋蔵文化財センターで保管される。

５　遺物の分類

（１）土器等

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群。

ａ類：貝殻腹縁文・条痕文・沈線文のある土器群。

ｂ類：撚糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器群。東釧路系土器群に相当するもの。

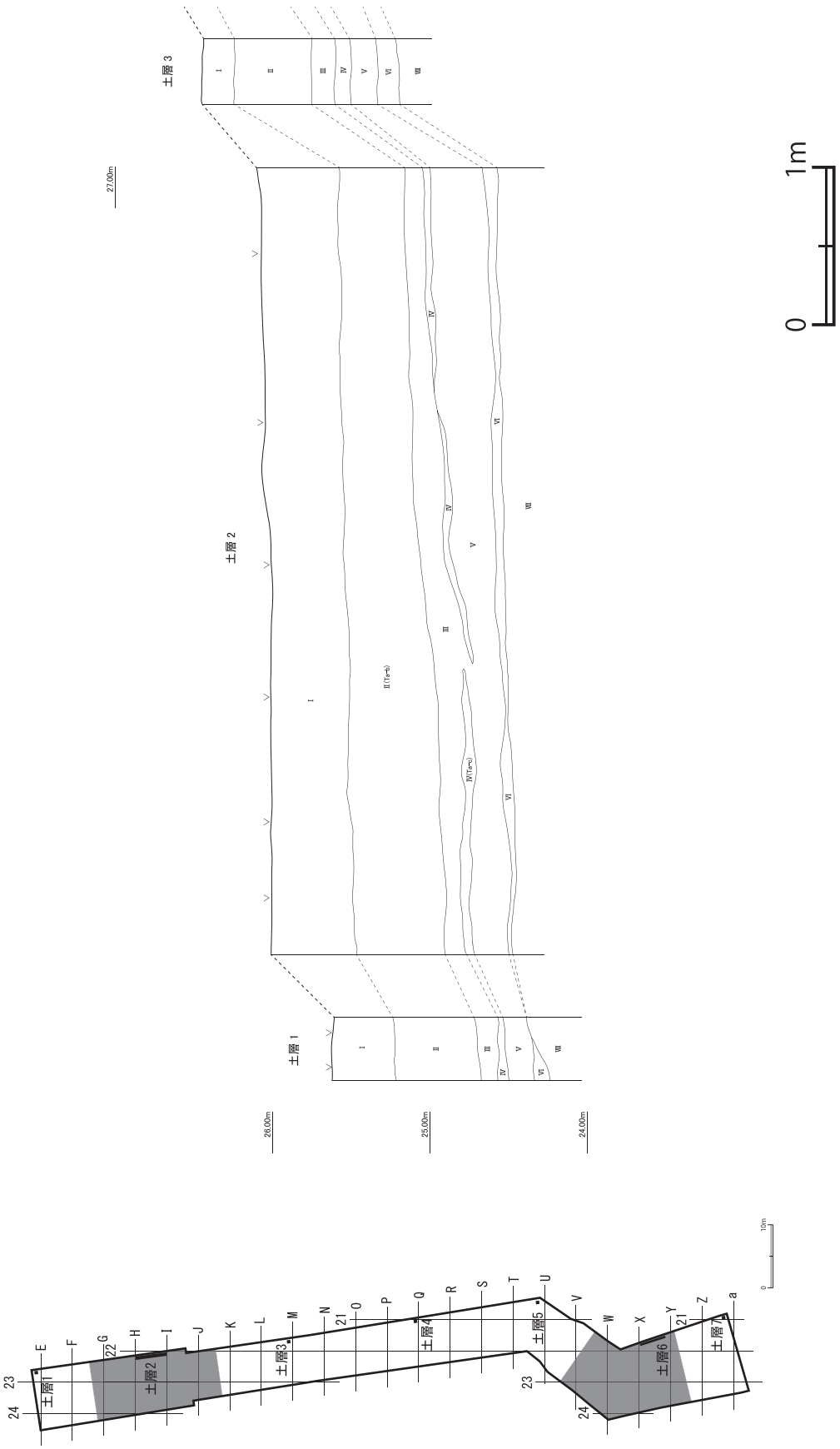
ｂ－１類：東釧路Ⅱ式

ｂ－２類：東釧路Ⅲ式・コッタロ式

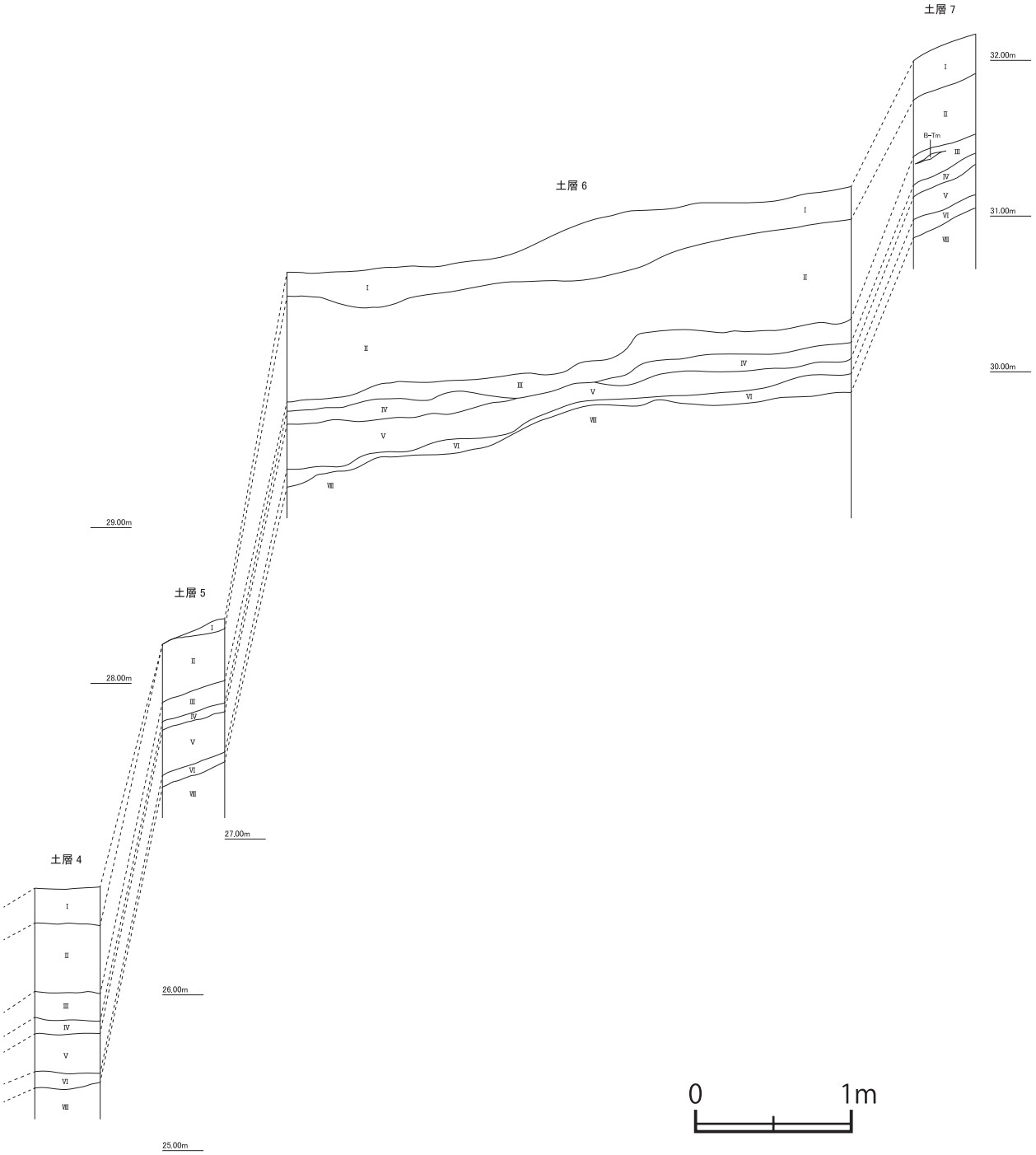
ｂ－３類：中茶路式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・遺跡の主体となる土器群。

ｂ－４類：東釧路Ⅳ式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・少量出土している。

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群。



図Ⅵ－４　土層断面図と柱状図（１）



図Ⅵ－５　土層断面図と柱状図（２）

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群
Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群。
Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群。
Ⅵ群　続縄文時代に属する土器群。
Ⅶ群　擦文文化期に属する土器群

（２）石器等

分類に使用している器種の名称、および掲載順は以下のとおりである。
剥片石器群:石鏃（長軸４ｃｍ未満）、石槍（長軸４ｃｍ以上）、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、ピエスエスキーユ、Ｒフレイク（二次加工のある剥片）、フレイク
礫石器群：石斧、たたき石、くぼみ石、すり石、砥石、礫・礫片

６　基本土層

層名は、これまでの厚真町教育委員会の調査に準じている。Ⅶ層は欠落する。調査区境の壁面７か所で土層断面図または土層柱状図を作成した（図Ⅵ－４・５）。

Ⅰ層：表土・耕作土など
Ⅱ層：Ｔａ－ｂ　樽前ｂテフラ　1667年降下　暗灰黄色（2.5YR5/2）層厚50～70ｃｍ
Ⅲ層：黒色土（10YR2/1）粘性あり。粒子細かい。
　Ｂ－Ｔｍ：白頭山－苫小牧火山灰　10世紀前半降下　にぶい黄褐色土（10YR6/4）Ⅲ層上部に部分的に堆積する。
Ⅳ層：Ｔａ－ｃ　樽前ｃテフラ　約2,500年前降下　黒褐色土（10YR2/3）層厚約５ｃｍ。堆積がほとんどない部分があり、Ⅲ層とⅣ層の境が不明瞭な部分がある。
Ⅴ層：黒褐色土（10YR2/2）縄文時代の遺物包含層　Ⅷ層の粒子が少量混じる　層厚20～25ｃｍ。
Ⅵ層：暗褐色土（10YR3/4）漸移層。
Ⅶ層：Ｔａ－ｄ　樽前ｄテフラ主体の再堆積層（本遺跡では欠落）。
Ⅷ層：Ｔａ－ｄ　樽前ｄテフラ　約8,000年前降下　黄褐色土（10YR5/6）　厚真町周辺で通常みられる、赤褐色の色調ではない。黄褐色を呈し、さらさらで粒子は細かい。橙色のパミスが微量混じる。

７　遺構と出土遺物

（１）概要

検出した遺構は、Ｔピット１基と焼土１か所である。Ｔピットは中央遺構確認調査区の南側山林へ向かって、斜面がやや急になる地形の転換点付近に位置している。焼土は北側通常発掘調査区のＶ層下位で検出した。木根の撹乱を受けており焼成土のみの検出であった。

出土した遺物は、土器では縄文時代早期後半の中茶路式が大半である。わずかに東釧路Ⅳ式が出土している。石器は、剥片石器では石鏃が多く、礫石器では断面形が三角形を呈するすり石が出土している。

表Ⅵ－１　遺構一覧

種　別	数(箇所)	備　　考
Ｔピット	1	細長タイプ
焼土	1	木根で撹乱された焼成土

表Ⅵ－２　出土遺物一覧

	土器等	石器等	礫	計
遺構	0	0	0	0
包含層	465	171	45	681
計	465	171	45	681

（２）Ｔピット・焼土

ＴＰ－１（図Ⅵ－７　図版48）

位置：R20区　標高26m付近の斜面　　**規模**：1.83×0.73/1.76×0.23/0.85m　　**平面形**：長円形

確認・調査：中央遺構確認調査区のⅥ層上面で検出した。半截し底面と壁を確認しＴピットとした。長軸は南北方向で、等高線に直行している。調査中は、Ⅷ層から常に湧水しており、排水しながら作業を行った。

覆土は、上位がＶ層の黒色土を主体とする自然堆積層。中位から下位はＶ層、Ⅵ層、Ⅷ層の崩落土が互層となっている。

時期：不明

Ｆ－１（図Ⅵ－７　図版48）

位置：Ｉ22区　　**規模**：0.58×0.25m　　**平面形**：不整形

確認・調査：北側通常発掘区のＶ層下位で確認した。木根の撹乱を受けており、焼成土の位置を記録した。

時期：周辺から縄文時代早期後半の土器が出土していることから、この頃のものと考えられる。

（３）包含層出土の遺物

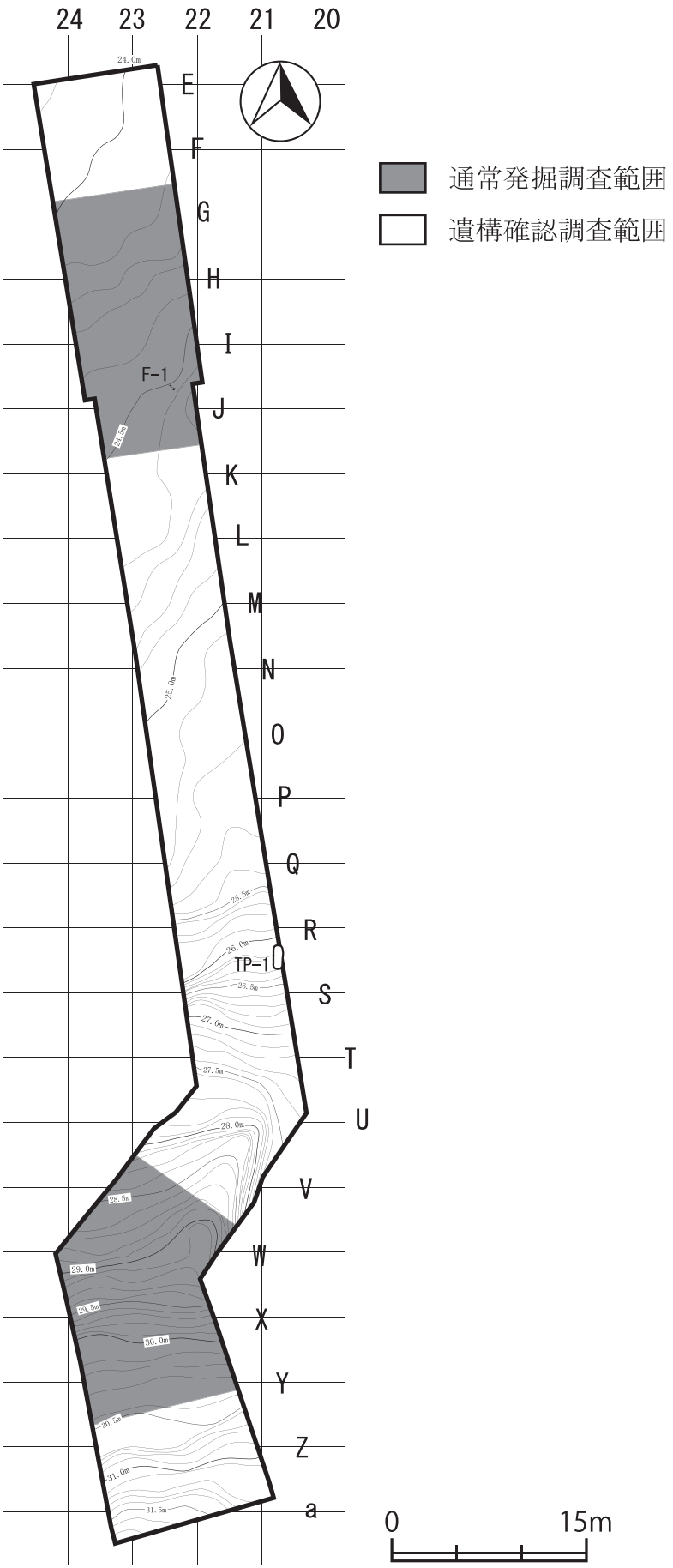
遺物出土状況（図Ⅵ－８～10　図版47）

通常発掘調査区と遺構確認調査区を合わせて、土器465点、石器類216点が出土した（表Ⅵ－４）。土器は縄文時代早期後半の中茶路式土器が大半で、北側調査区で東釧路Ⅳ式土器がわずかに出土している。

石器は、剥片石器類、礫石器類ともに北側発掘区で多く出土している。

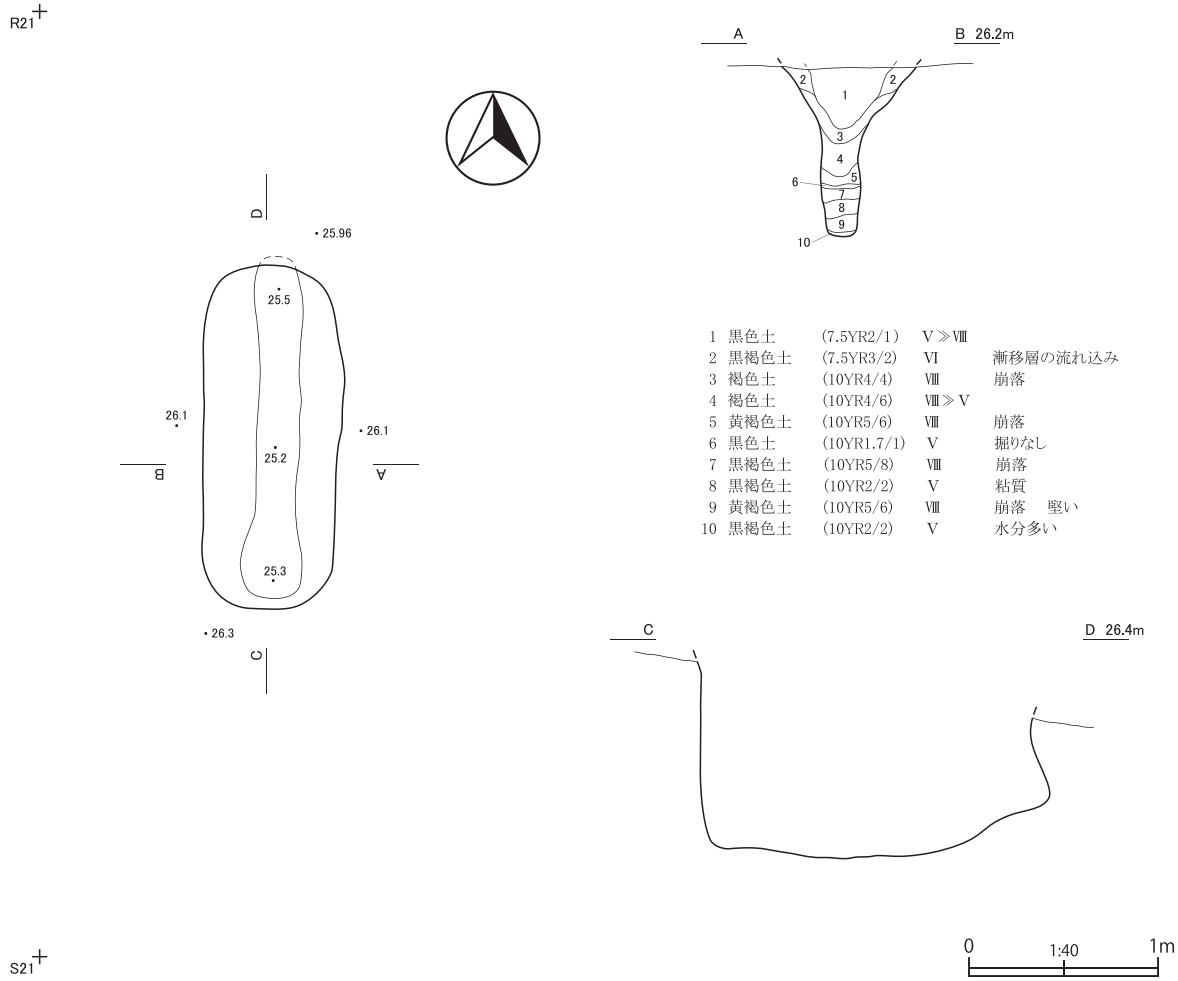
土器（図Ⅵ－８　図版49）

１～18は中茶路式。１～８は微隆起線文と縄文で文様が構成されるもの。１・２は口唇直下に微隆


24
23
22
21
20
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
Z
a
F-1
TP-1
24.0m
24.5m
25.0m
25.5m
26.0m
26.5m
27.0m
27.5m
28.0m
28.5m
29.0m
29.5m
30.0m
30.5m
31.0m
31.5m
通常発掘調査範囲
遺構確認調査範囲
0
15m

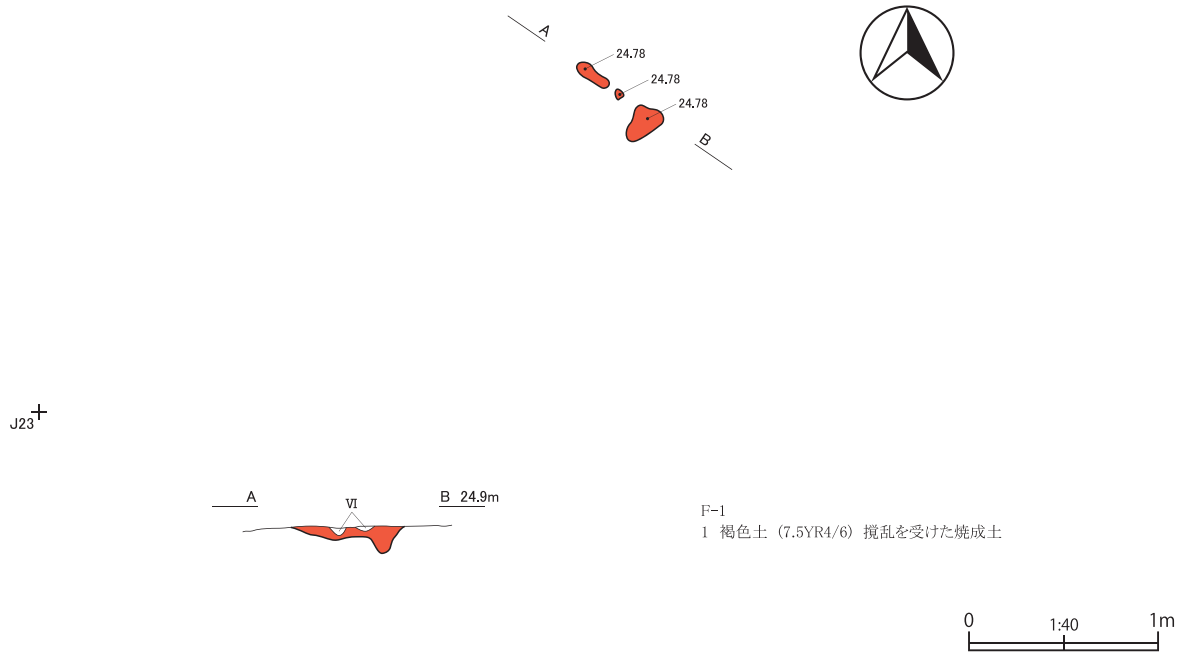
図Ⅵ－６　遺構位置図

TP−1



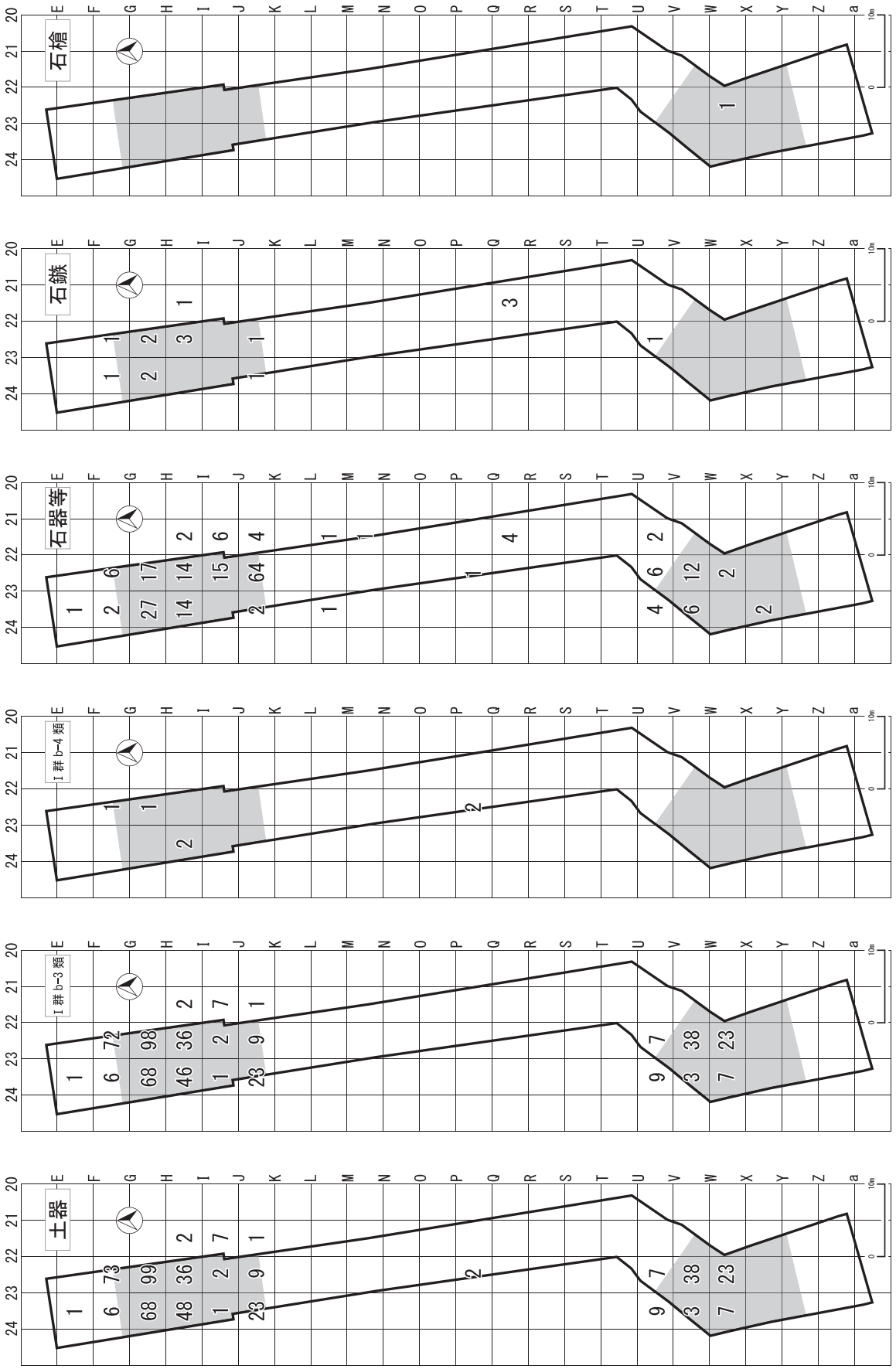
1	黒色土	(7.5YR2/1)	Ⅴ≫Ⅷ	
2	黒褐色土	(7.5YR3/2)	Ⅵ	漸移層の流れ込み
3	褐色土	(10YR4/4)	Ⅷ	崩落
4	褐色土	(10YR4/6)	Ⅷ≫Ⅴ	
5	黄褐色土	(10YR5/6)	Ⅷ	崩落
6	黒色土	(10YR1.7/1)	Ⅴ	掘りなし
7	黒褐色土	(10YR5/8)	Ⅷ	崩落
8	黒褐色土	(10YR2/2)	Ⅴ	粘質
9	黄褐色土	(10YR5/6)	Ⅷ	崩落　堅い
10	黒褐色土	(10YR2/2)	Ⅴ	水分多い

F−1

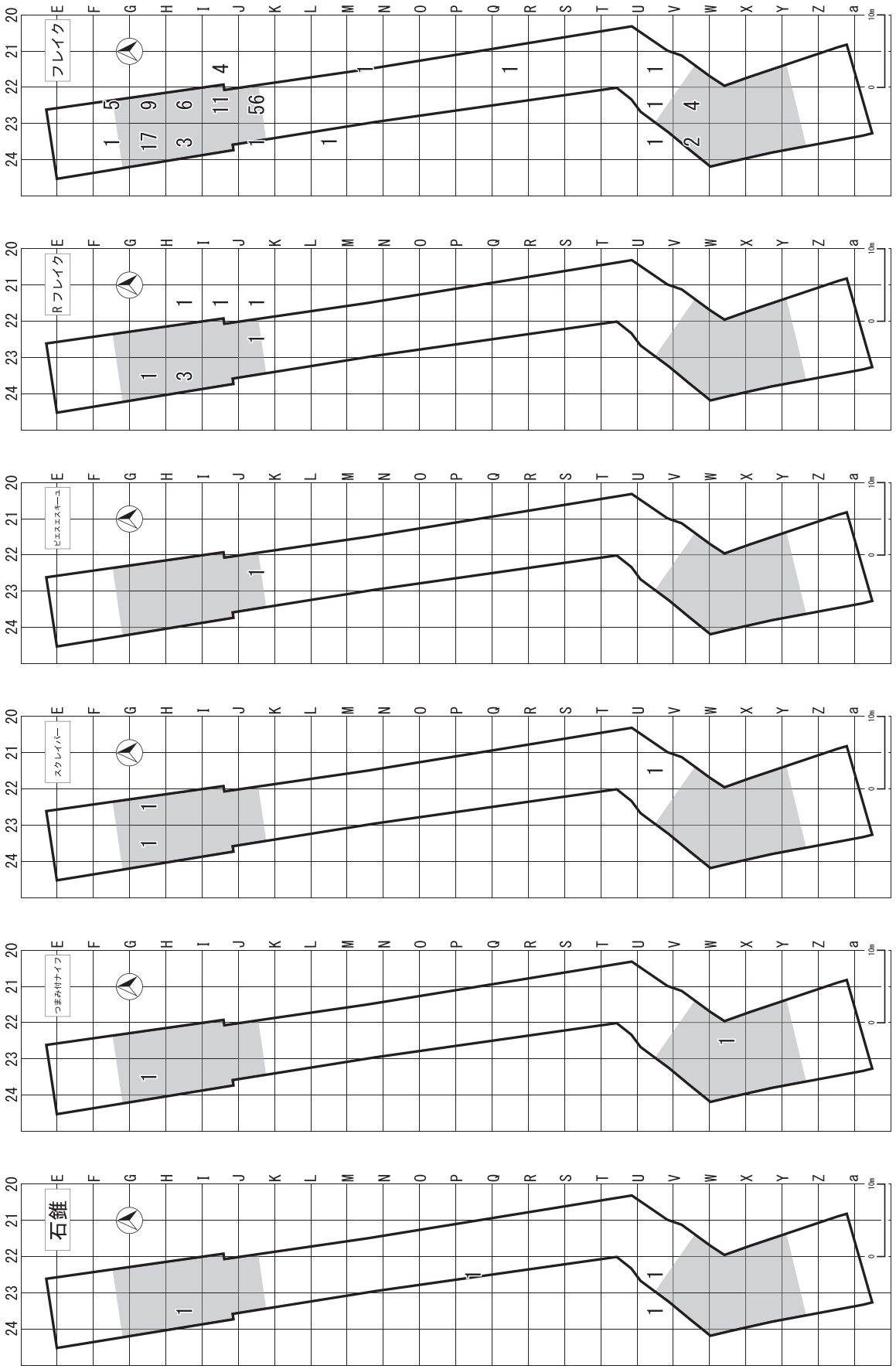


F−1
1　褐色土（7.5YR4/6）撹乱を受けた焼成土

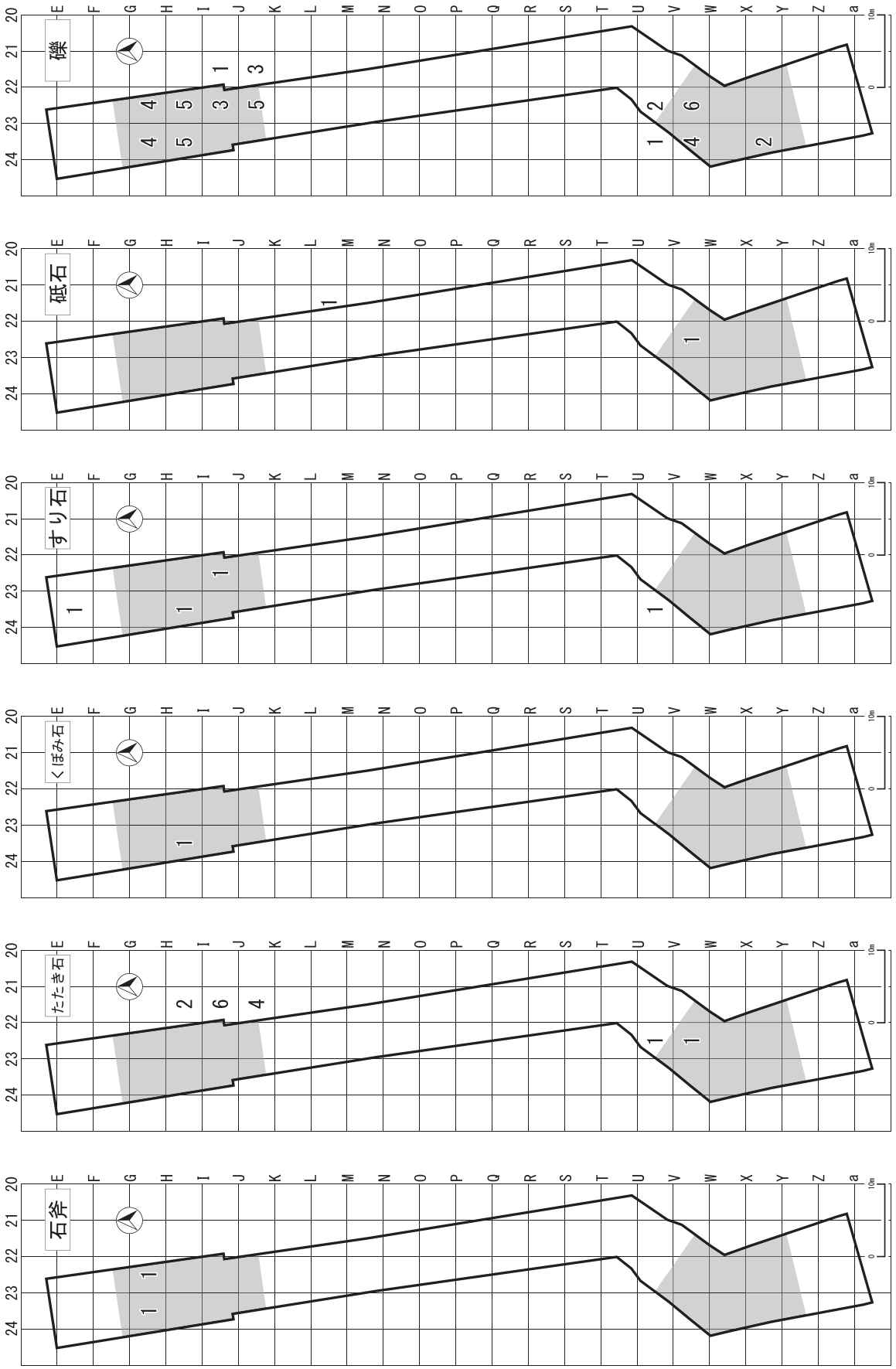
図Ⅵ−７　ＴＰ−１　Ｆ−１



図Ⅵ－８　遺物分布図（１）



図Ⅵ－９　遺物分布図（２）



図Ⅵ－10　遺物分布図（３）

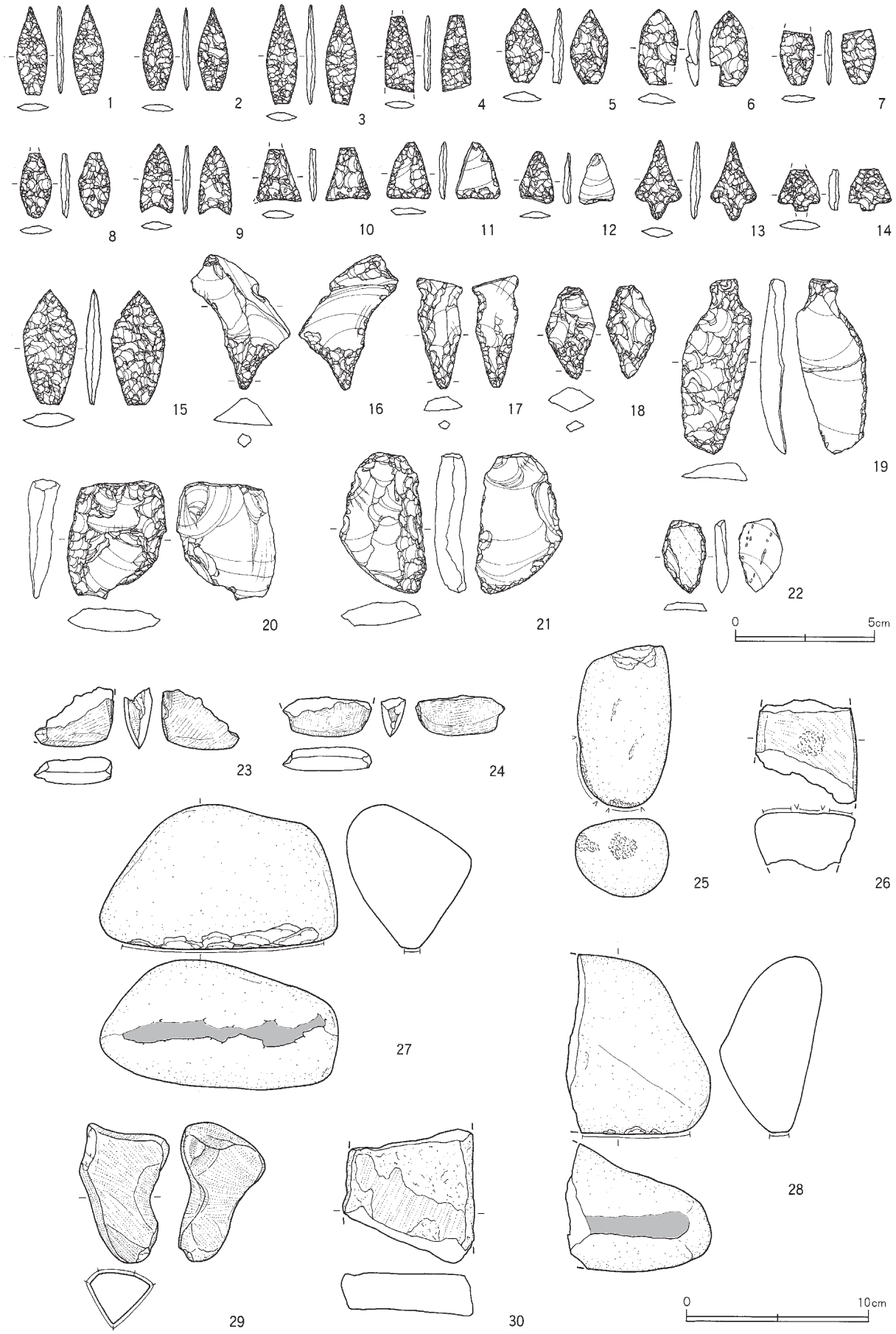
図Ⅵ－11　包含層出土の土器

起線があるもの。３の口唇はとがる。８は無節の縄文で羽状に施文されている。９は微隆起線の間が無文帯となる部分が見られる。10～16は微隆起線の間を短縄文で充填するもの。11の口唇は角型である。14は口唇直下に微隆起線が施されたもの。14～16の微隆起線文は緩い波状をえがく。17・18は絡条体の圧痕で、羽状に施文されている。19は東釧路Ⅳ式で羽状縄文である

石器（図Ⅵ－９　図版50）

剥片石器は、特に記載がない限り黒曜石製である。１～14は石鏃。１～８は柳葉形または互角形に近いもの。９は凹基で頁岩製。10～12は平基のもの。11・12は主剥離面を大きく残す。13・14は有茎のもの。15は石槍。16～18は石錐で17はつまみ部に抉りをもつもの。19は頁岩製のつまみ付ナイフで左側縁に背面からの連続する微細な剥離をもつ。20～21はスクレイパー。22は尖頭部をもつ。23・24は蛇紋岩製の石斧刃部。25～30は礫石器ですべて砂岩製である。25はたたき石。端部と側部にたたき痕がある。26はくぼみ石。27・28は断面が三角形を呈するすり石である。29・30は砥石。29は全面使用されている。

（村田）



図Ⅵ－12　包含層出土の石器

表Ⅵ－３　遺構規模一覧

遺構名	図	図版	発掘区	確認面	規模(m)					平面形	時期	備考
					確認面		底面		深さ			
					長径	短径	長径	短径				
TP-1	Ⅵ－６	図Ⅵ－７	R20	Ⅵ層上面	1.83	0.73	1.76	0.23	0.85	長円形	不明	細長タイプ
F-1	Ⅵ－６	図Ⅵ－７	I22	Ⅴ層下位	0.58	0.25			0.15	不整形	早期後半	木根のカクラン受ける

表Ⅵ－４　出土遺物集計

種別		土器			石器等															合計
遺構/包含層	層位	Ⅰ群b-3類	Ⅰ群b-4類	計	石鏃	石槍	石錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	ピエスエスキーユ	Rフレイク	フレイク	石斧	たたき石	くぼみ石	すり石	砥石	礫	計	
E23	Ⅵ	1		1												1			1	2
F22	Ⅴ	71	1	72	1							3							4	76
F22	Ⅵ	1		1								2							2	3
F23	Ⅴ	6		6	1							1							2	8
G22	Ⅴ	98	1	99	2				1			9	1					4	17	116
G23	Ⅴ	68		68	2			1	1		1	17	1					4	27	95
H21	Ⅴ	2		2	1						1								2	4
H22	Ⅴ	36		36	3							6						5	14	50
H23	Ⅴ	46	2	48			1				3	3			1	1		5	14	62
I21	Ⅴ	7		7							1	4						1	6	13
I22	Ⅴ	2		2								11				1		3	15	17
I23	Ⅴ	1		1															0	1
J21	Ⅵ	1		1							1							3	4	5
J22	Ⅴ	9		9	1					1	1	56						5	64	73
J23	Ⅴ	23		23	1							1							2	25
L21	Ⅵ			0													1		1	1
L23	Ⅴ			0								1							1	1
M21	Ⅵ			0								1							1	1
P22	Ⅴ		2	2			1												1	3
Q21	Ⅴ			0	3							1							4	4
U21	Ⅴ								1			1							2	2
U22	Ⅴ	7		7	1		1					1		1				2	6	13
U23	Ⅴ	9		9			1					1				1		1	4	13
V22	Ⅴ	38		38								4		1			1	6	12	50
V23	Ⅴ	3		3								2						4	6	9
W22	Ⅴ	23		23		1		1											2	25
W23	Ⅴ	7		7															0	7
X23	Ⅴ			0														2	2	2
合計		459	6	465	16	1	4	2	3	1	8	125	2	2	1	4	2	45	216	681

表Ⅵ－５　掲載土器等一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/発掘区	層位	点数	分類	器種	部位	特徴	備考
Ⅵ－11	1	図版50	H22	V	1	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、RL縄文	
	2		H22	V	1	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、RL縄文	
	3		J23	V	1	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、RL縄文	
	4		G23	V	10	Ⅰb-3	深鉢	胴部	微隆起線、RL縄文	
			H22		1					
	5		G23	V	3	Ⅰb-3	深鉢	胴部	微隆起線、RL縄文	
	6		H22	V	2	Ⅰb-3	深鉢	胴部	微隆起線、RL縄文	
			H23		1					
	7		H21	V	2	Ⅰb-3	深鉢	底部	微隆起線、LR縄文	
	8		F22	V	3	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、L・R縄文、羽状	
	9		G22	V	6	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、RL縄文、無文	
			F22		10			胴部		
	10		V22	V	2	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、短縄文	
	11		J23	V	1	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、短縄文	
	12		J23	V	1	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、短縄文	
	13		F22	V	5	Ⅰb-3	深鉢	口縁	微隆起線、短縄文	
	14		H23	V	3	Ⅰb-3	深鉢	口縁	弧状の微隆起線、短縄文	
	15		G22	V	2	Ⅰb-3	深鉢	胴部	弧状の微隆起線、短縄文	
	16		G22	V	4	Ⅰb-3	深鉢	胴部	弧状の微隆起線、短縄文	
	17		H23	V	1	Ⅰb-3	深鉢	口縁	絡条体	
	18		P22	V	1	Ⅰb-3	深鉢	胴部	絡条体、羽状？	
	19		P22	V	1	Ⅰb-4	深鉢	胴部	羽状縄文	

表Ⅵ－６　掲載石器等一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/発掘区	層位	遺物名	石材	長さ（ｃｍ）	幅（ｃｍ）	厚さ（ｃｍ）	重さ（ｇ）	備　考
Ⅵ－12	1	図版50	Q21	V	石鏃	黒曜石	3.2	1.2	0.3	0.7	
	2		Q21	V	石鏃	黒曜石	3.0	1.1	0.3	0.6	
	3		Q21	V	石鏃	黒曜石	3.6	1.1	0.4	0.9	
	4		U22	V	石鏃	黒曜石	(2.7)	1.1	0.3	(0.7)	
	5		F22	V	石鏃	黒曜石	2.7	1.5	0.4	1.1	
	6		G23	V	石鏃	黒曜石	2.7	1.4	0.5	1.4	
	7		G23	V	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.3	0.3	(0.6)	
	8		H22	V	石鏃	黒曜石	(2.4)	1.2	0.4	(0.7)	
	9		H22	V	石鏃	頁岩	2.5	1.3	0.3	0.8	
	10		H22	V	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.7	0.3	(0.6)	
	11		J23	V	石鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.3	0.8	
	12		G22	V	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.4	
	13		J22	V	石鏃	黒曜石	2.8	1.7	0.4	0.8	
	14		H21	V	石鏃	黒曜石	(1.5)	1.5	0.4	(0.6)	
	15		W22	V	石槍	黒曜石	4.1	2.0	0.6	3.5	
	16		P22	V	石錐	黒曜石	4.9	3.6	1.0	9.3	
	17		U22	V	石錐	黒曜石	4.0	1.7	0.6	3.1	
	18		H23	V	石錐	黒曜石	3.3	1.8	0.9	4.3	
	19		W22	V	つまみ付きナイフ	頁岩	6.3	2.6	0.9	11.3	
	20		G22	V	スクレイパー	黒曜石	4.3	3.6	1.2	14.5	
	21		U21	V	スクレイパー	黒曜石	5.1	3.2	1.2	15.3	
	22		G23	V	スクレイパー	黒曜石	2.6	1.6	0.6	1.7	
	23		G23	V	石斧	蛇紋岩	(3.2)	(4.2)	1.5	(14.7)	
	24		G22	V	石斧	蛇紋岩	(2.2)	(4.8)	1.3	(13.4)	
	25		V22	V	たたき石	砂岩	8.7	5.0	4.2	256.3	
	26		H23	V	くぼみ石	砂岩	(5.5)	5.5	(2.8)	(111.8)	
	27		E23	Ⅵ	すり石	砂岩	7.8	12.8	7.0	794.8	
	28		U23	V	すり石	砂岩	(9.7)	(7.8)	(6.8)	(479.8)	
	29		L21	Ⅵ	砥石	砂岩	7.5	4.9	2.7	99.5	
	30		V22	V	砥石	砂岩	(7.2)	7.1	2.3	(127.6)	

Ⅶ章　自然科学的分析

1　富里１遺跡における放射性炭素年代測定

（株）加速器分析研究所

（１）はじめに

富里１遺跡は、北海道勇払郡厚真町字富里42－１ほか（北緯42°45′12″、東経141°56′45″）に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化木片５点である（表Ⅸ－１）。

（２）測定の意義

遺構の時期を確定する参考とする。

（３）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（４）測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（５）算出方法

１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5,568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

（６）測定結果

測定結果を表Ⅸ－１、２に示す。

試料の^{14}C年代は、TM1-１、TM1-２が4,050±20yrBP、TM1-３が5,950±30yrBP、TM1-４が1,450±20yrBP、TM1-５が1,570±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は、TM1-１、TM1-２が縄文時代中期後葉から末葉頃、TM1-３が縄文時代前期初頭頃に相当する（小林編2008）。TM1-４は1,352～1,312cal BP（598～638cal AD）の範囲で示され、擦文文化前期に相当、TM1-５は1,521～1,415cal BP（429～535cal AD）の間に３つの範囲で示され、続縄文時代後半に相当する（臼杵編2007）。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C（2009）Bayesian analysis of radiocarbon dates, ***Radiocarbon*** 51(1), 337-360

小林達雄編（2008）総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al.（2013）IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A.（1977）Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

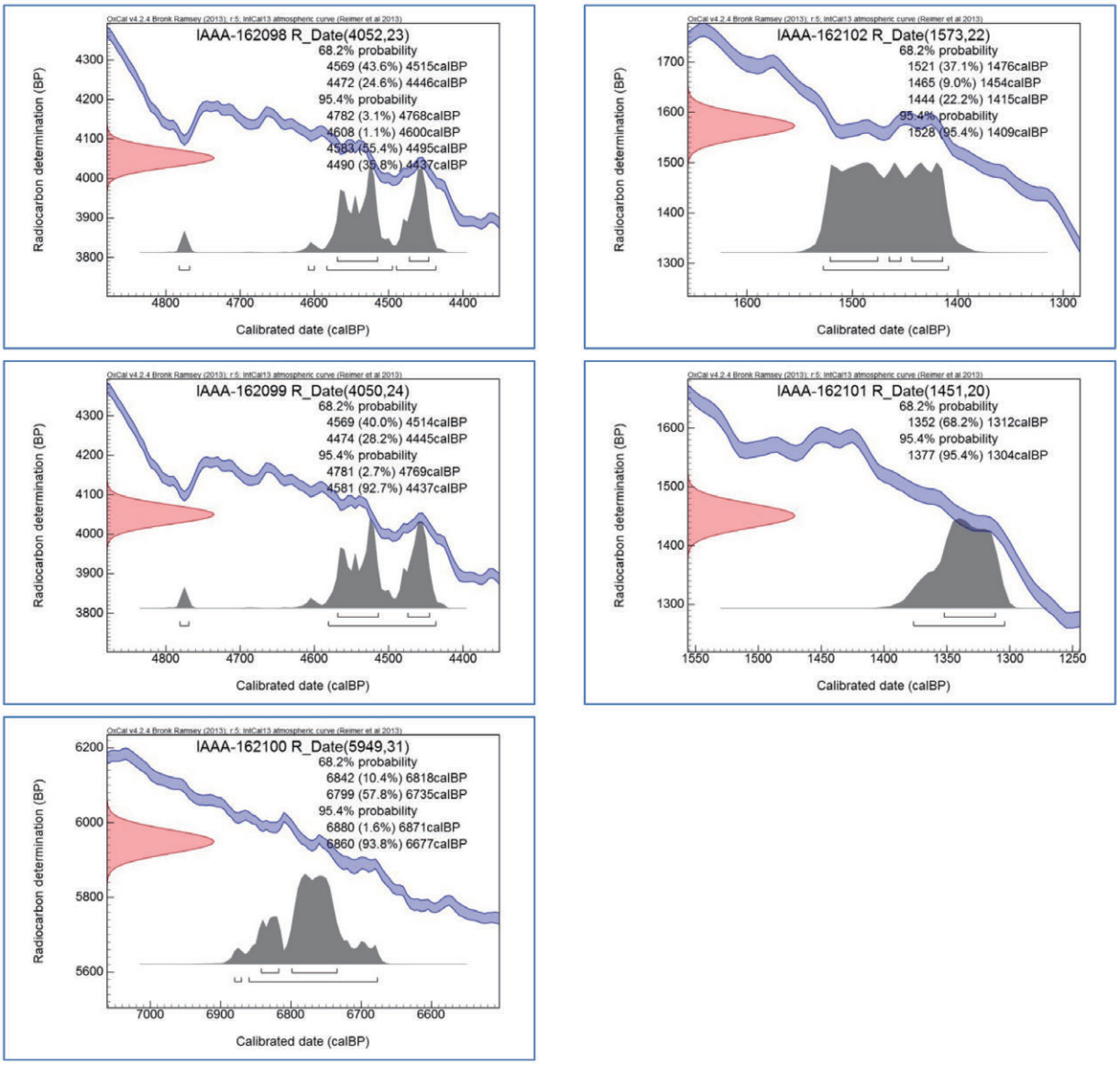
臼杵勲編（2007）科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代 研究成果報告書, 札幌学院大学人文学部

表Ⅶ－１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

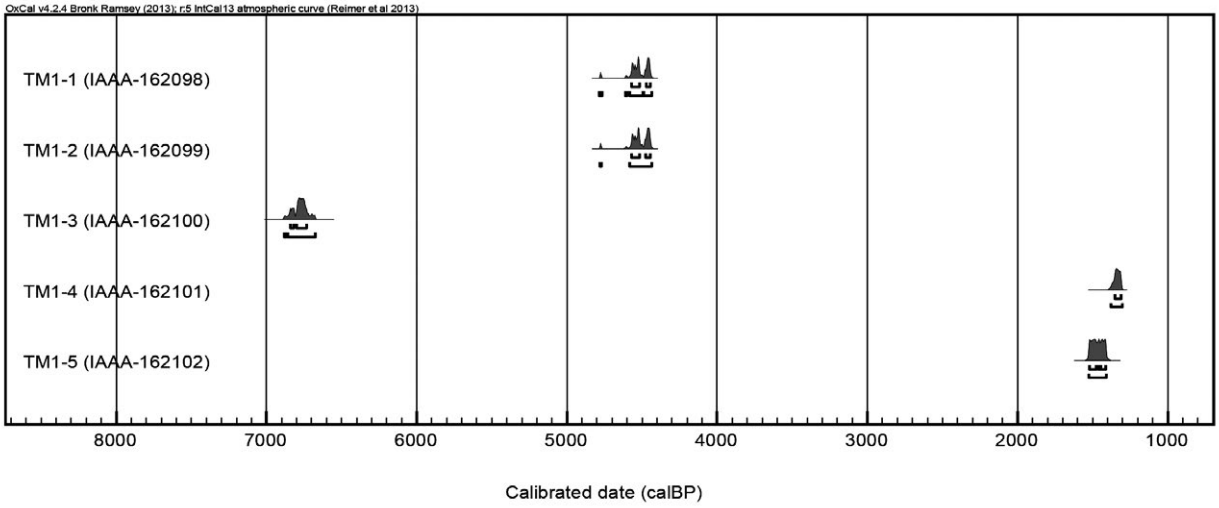
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-162098	TM1-1	VH-1　覆土	炭化木片	AAA	-26.80 ± 0.29	4,050 ± 20	60.38 ± 0.18
IAAA-162099	TM1-2	VH-3　覆土	炭化木片	AAA	-28.05 ± 0.25	4,050 ± 20	60.39 ± 0.19
IAAA-162100	TM1-3	VP-15　最下層	炭化木片	AAA	-26.76 ± 0.25	5,950 ± 30	47.68 ± 0.19
IAAA-162101	TM1-4	ⅢF-4　焼土上面	炭化木片	AAA	-25.78 ± 0.29	1,450 ± 20	83.47 ± 0.22
IAAA-162102	TM1-5	ⅢF-6　焼土上面	炭化木片	AAA	-25.47 ± 0.27	1,570 ± 20	82.21 ± 0.23

表Ⅶ－２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ13C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-162098	4,080 ± 20	60.16 ± 0.17	4,052 ± 23	4569calBP - 4515calBP (43.6%) 4472calBP - 4446calBP (24.6%)	4782calBP - 4768calBP (3.1%) 4608calBP - 4600calBP (1.1%) 4583calBP - 4495calBP (55.4%) 4490calBP - 4437calBP (35.8%)
IAAA-162099	4,100 ± 20	60.02 ± 0.18	4,050 ± 24	4569calBP - 4514calBP (40.0%) 4474calBP - 4445calBP (28.2%)	4781calBP - 4769calBP (2.7%) 4581calBP - 4437calBP (92.7%)
IAAA-162100	5,980 ± 30	47.51 ± 0.18	5,949 ± 31	6842calBP - 6818calBP (10.4%) 6799calBP - 6735calBP (57.8%)	6880calBP - 6871calBP (1.6%) 6860calBP - 6677calBP (93.8%)
IAAA-162101	1,460 ± 20	83.33 ± 0.21	1,451 ± 20	1352calBP - 1312calBP (68.2%)	1377calBP - 1304calBP (95.4%)
IAAA-162102	1,580 ± 20	82.13 ± 0.22	1,573 ± 22	1521calBP - 1476calBP (37.1%) 1465calBP - 1454calBP (9.0%) 1444calBP - 1415calBP (22.2%)	1528calBP - 1409calBP (95.4%)



図Ⅶ－１　暦年較正年代グラフ（マルチプロット図、cal BP、参考）



図Ⅶ－２　暦年較正年代グラフ（マルチプロット図、cal BP、参考）

2　富里１遺跡出土の炭化種実同定

株式会社パレオ・ラボ

（１）はじめに

厚真町に所在する富里１遺跡は、厚真川右岸、南に張り出す舌状大地の先端部に位置する。ここから出土した炭化種実を同定し、当時の植生と植物利用について検討する。

（２）試料と方法

試料は、Ⅲ層堆積物より水洗選別されたもので、グリットF－１の２点、F－2－３の１点、F－４の２点、S－５の１点、F－６の１点の計７点である。また想定時期はF－１、F－2－３、F－４、S－５は擦文時代後期、F－６は北大式期？である。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

（３）結果

１）分類群

樹木２分類群が同定された。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群の写真を図版に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

ブドウ属　*Vitis*　種子　ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し､先端がとがる。腹面には二つの孔があり､背面には先端が楕円形のへそがある。

ブドウ科　Vitaceae　種子（破片）ブドウ科

ブドウ属と思われるが、破片でカラザの部分が欠損しているためブドウ科までの同定とした。

不明種実　Unknown　seeds（破片）

種実と思われるが、表面模様が欠落し観察できず破片のため不明種実、不明種実？とした。

炭化物　charcoal　fraguments

種実とは異なる炭化物であり、菌核などの可能性もあるが、表面模様が欠落していたり観察不能のものでを炭化物とした。

２）種実群集の特徴

a）焼土F－１　炭化物３、菌類１である。

b）焼土F－２　樹木種実のブドウ科１が同定された。他に不明種実４である。

c）焼土F－４　不明種実？１、炭化物６である。

d）焼土F－３　樹木種実のブドウ属１が同定された。

e）焼土F－６　不明種実１、炭化物１である。

表Ⅶ－３　富里１遺跡における炭化種実同定結果

試料番号	遺構/盛土	遺構名/グリッド	層位	分類群 学名	分類群 和名	部位	個数	備考	想定時期	フローテーション処理番号
97	遺構	ⅢF－1	土サンプル	Charcoal fraguments	炭化物	種実以外	3		擦文後期	トミ1-1
98	遺構	ⅢF－1	土サンプル					菌類１	擦文後期	トミ1-2
99	遺構	ⅢF－2	土サンプル	Vitaceae	ブドウ科	種子(破片)	1	虫瘤２	擦文後期	トミ1-3
				Unknown seeds	不明種実	(破片)	4			
100	遺構	ⅢF－4	土サンプル	Charcoal fraguments	炭化物	種実以外	5	土塊１	擦文後期	トミ1-5
101	遺構	ⅢF－4	土サンプル	Unknown seeds?	不明種実？	(破片)	1	虫瘤１	擦文後期	トミ1-6
				Charcoal fraguments	炭化物		1			
102	遺構	ⅢF－3	土サンプル	Vitis	ブドウ属	種子	1		北大式期?	トミ1-7
103	遺構	ⅢF－6	土サンプル	Unknown seeds?	不明種実？	(破片)	1		北大式期?	トミ1-12
				Charcoal fraguments	炭化物	種実以外	1			

表Ⅶ－４　富里１遺跡における炭化種実同定結果

遺構名/グリッド	層位	分類群		部位	個数	備考	想定時期
		学名	和名				
ⅢF－1	土サンプル	Unknown charcoal fraguments	不明炭化物		3	菌類１	擦文後期
ⅢF－2	土サンプル	Vitaceae	ブドウ科	種子（破片）	1	虫瘤２	擦文後期
		Unknown seeds	不明種実	（破片）	4		
ⅢF－4	土サンプル	Unknown seeds?	不明種実？	（破片）	1	虫瘤１	擦文後期
		Unknown charcoal fraguments	不明炭化物		6	土塊１	
ⅢF－3	土サンプル	*Vitis*	ブドウ属	種子	1		北大式期?
ⅢF－6	土サンプル	Unknown seeds?	不明種実？	（破片）	1		北大式期?
		Unknown charcoal fraguments	不明炭化物		1		

（４）考察とまとめ

富里１遺跡における種実同定の結果、樹木種実のブドウ属１、ブドウ科１が同定された。ブドウ属はつる性の木本で林縁に多く、食用になる。数量は少ないが食用としてよく利用されたとみられる。他に種実とは異なる炭化物があり、食料あるいは生活域の周辺にあるものが熱を受けたか、利用されたものが燃焼した残滓とみられる。

写真Ⅶ－１　富里１遺跡の炭化種実

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131－139.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165－174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276－283.

渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

3　富里１遺跡出土鉄製品の金属考古学的調査

岩手県立博物館

（１）はじめに

北海道勇払郡厚真町富里１遺跡は、厚幌ダム建設事業に伴い、平成28年度発掘調査された遺跡である。一連の調査において、アイヌ文化期の遺構から刀の一部と判定された鉄器（以下、刀という。）、刀子、棒状鉄製品（加工途中の資料と推定される）などが検出された[1)]。検出された４点の鉄器については資料保全を図るため、保存科学的処理が施こされた。さらに、刀については、素材となった地金の組成を明らかにするため、金属考古学的調査が実施された。

富里１遺跡の周囲には、上幌内モイ遺跡、オニキシベ２遺跡、ヲチャラセナイ遺跡などが点在し、それらのアイヌ文化期の遺構から相当数の鉄器が検出されている。それらの一部が岩手県立博物館において金属考古学的調査に付されている。本稿では、金属考古学的調査によって明らかにされた刀の組成を、上幌内モイ遺跡、オニキシベ２遺跡、ヲチャラセナイ遺跡のアイヌ文化期の遺構から出土した鉄器の調査結果（赤沼　2007、2011、2013、2014）と比較し、素材となった地金の来歴について検討した。以下に調査結果を報告する。

（２）調査資料

１）調査資料の概要

調査資料は図Ⅶ－３a_1に示す刀である。残存状況も良好で、図Ⅶ－３b_1のマクロエッチング組織からも明らかなように、資料の相当部分がメタルによって構成されているものと推定された。なお、当該資料の出土状況および形態学的特徴については、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター・立田理氏によって別途記載されている。

２）調査試料の採取

刀剣の場合、組成の異なる鋼を合わせて作刀することがしばしばある。この点を調べるため、調査資料の刃および棟部から２つの微小試料片を摘出した。調査には、保存科学的処理の過程で図Ⅶ－３a_1に示すSa_1およびSa_2から摘出した微小試料片を用いた。Sa_1から摘出した試料片を２分し、大きい方の試料片を組織観察に、小さい方の試料片を化学成分分析に供した。Sa_2から摘出した微小試料片については、化学成分分析を実施した。

（３）調査方法

組織観察用試料についてはエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面をナイタール（硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5mlの混合溶液）で腐食した後、金属顕微鏡で組織観察した。次に、１μmのダイヤモンドペーストを用い表面を再研磨した後、メタル中に残留する代表的な非金属介在物を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA：JEOL JXA-8230）で分析した。

化学分析用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で２時間以上乾かした後、テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、全鉄（T.Fe）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、リン（P）、チタン（Ti）、ケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、クロム（Cr）、バナジウム（V）、およびイオウ（S）の14元素を、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）で分析した。

（４）調査結果

１）組織観察結果

図Ⅶ－３$a_1$$Sa_1$から摘出した試料のマクロエッチング組織（図Ⅶ－３$b_1$）である。マクロ組織領域Reg.1およびReg.2内部のEPMA反射電子組成像（BEI）は、パーライト（（αFe）とセメンタイト（Fe_3C）の共析組織）とフェライトによって（図Ⅶ－３$c_{1.2}$、１d_1）、マクロ組織領域Reg.3内部のEPMA反射電子組成像（BEI）はそのほとんどがフェライトによって（図Ⅶ－３d_2）構成されていた。

メタルには、灰色を呈した微細な粒状化合物（①）と暗灰色を呈した角状化合物（Tmag）が、微細な化合物が混在したガラス化した領域によって取り囲まれた非金属介在物が点在していた（図Ⅶ－４$a_{1.2}$）。EPMA分析によって、化合物①のFe-Lαおよび Fe-Lβの波形をウスタイト（Wus:FeO）、ヘマタイト（Hem:Fe_2O_3）、マグネタイト（Mag:Fe_3O_4）の標準試料と比較した結果、ウスタイトに近似していることが確かめられた（図Ⅶ－３c_1）。化合物①はウスタイトに近い組成の鉄酸化物である。EPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップによって（図Ⅶ－４$b_{1.2}$）、ガラス化した領域はFeO-MgO-SiO_2-CaO-TiO_2-Al_2O_3-K_2O系であることがわかった。表Ⅶ－５は灰色角状化合物のEPMAによる定量分析結果である。Tamg(1)～Tmag(3)はいずれもFeO、TiO_2、V_2O_5を主成分とする、チタノマグネタイトに近い組成の鉱物（Tmag）と判定された。

表Ⅶ－５　非金属介在物中に見出された化合物のEPMAによる定量分析結果（mass%）

測定箇所	FeO	TiO_2	V_2O_5	MgO	MnO	Na_2O	Al_2O_3	P_2O_5	SiO_2	K_2O	CaO	合計
Tamg(1)	63.1	22.5	3.70	0.48	0.28	<0.01	4.30	<0.01	0.15	0.01	<0.01	0.16
Tamg(2)	62.5	23.1	3.91	0.47	0.28	<0.01	4.28	<0.01	0.17	0.02	0.01	0.20
Tamg(3)	62.5	23.4	3.67	0.45	0.39	<0.01	4.27	<0.01	0.13	0.01	0.02	0.16

２）摘出した試料の化学組成

表Ⅶ－６に摘出した試料の化学成分分析結果を示す。Sa_1のT.Feは60.27mass%、Sa_2のT.Feは97.69mass%で、前者は錆化が進んだ試料、後者はほぼメタルによって構成された試料であることがわかる。Sa_1からは0.007mass%のCu、0.015mass%のNi、0.012mass%のCoが、Sa_2からは0.006mass%のCu、0.020mass%のNi、0.020mass%のCoが検出された。

表Ⅶ－６　調査資料の化学組成（mass%）

分析試料	化学成分														Cu・Ni・Co三成分比			
	T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Ca	Al	Mg	Cr	Si	V	S	Co^*	Cu^*	Ni^{**}	Cu^{**}
Sa_1	60.27	0.007	0.015	0.012	0.006	0.05	0.044	0.013	0.112	0.008	0.002	0.50	0.005	0.09	0.80	0.47	1.25	0.58
Sa_2	97.69	0.006	0.020	0.020	0.002	0.02	0.045	0.012	0.027	0.003	0.003	0.13	0.003	0.06	1.00	0.30	1.00	0.30

注）分析はICP-AES法による。Co^*＝(mass%Co)/(mass%Ni)、Cu^*＝(mass%Cu)/(mass%Ni)、Ni^{**}＝(mass%Ni)/(mass%Co)、Cu^{**}＝(mass%Cu)/(mass%Co)

（５）考察

１）鉄器地金の組成

鉄器の素材となる鉄は炭素量によって銑鉄と鋼に分類される。現代の金属工学の分類基準に従えば、炭素量２mass%未満の鉄を鋼、炭素量２mass%以上の鉄を銑鉄という（日本鉄鋼協会編　1981）。生産方法、生産設備、生産道具などが異なる現代に製造された鉄の分類基準を直ちに前近代の鉄に当てはめることは危険である。本稿が対象とする古代においては、当時の設備および道具で溶融可能であった鉄を銑鉄、溶融不能で加熱・鍛打して加工・整形された鉄を鋼として扱ったと考えられる。

調査試料の組織観察結果に基づけば、刀の棟部は炭素量0.5mass%未満の亜共析鋼を素材としていて（佐藤知雄編1968）（東北大学金属材料研究所編1953）、焼き入れや焼き戻しといった熱処理が施されたことを示す組織は見出されなかった。メタルにはチタノマグネタイトが混在した非金属介在物が観察された。この結果は、当該鉄器の素材となった鋼の製造過程で、鉄チタン酸化物を含む物質が使用された、あるいは鉄チタン酸化物を含む物質が生産設備あるいは道具類に使用され、その一部が不純物として鋼に取り込まれた可能性が高いことを示している。

２）Ni・Co・Cu三成分比に基づく調査資料の分類

鋼製鉄器の素材として使用された鋼は、製錬をはじめとする複数の操作を経て製造される。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件によって最終的に得られる鋼の組成にばらつきが生じる。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ摘出した試料の化学組成や非金属介在物組成を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料分類は難しい。

表１のうちNi、Co、Cuの３化学成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度鉄中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまると推定される[2)]。従って、合金添加処理が施されていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると考えられる[2)]。

図Ⅶ－５は、表１から摘出した試料に含有されるNi、Co、およびCuの三成分比、すなわち｛(msas%Co)/(mass%Ni)(Co*) と (mass%Cu)/(mass％Ni)(Cu*)｝ および (mass％Ni)/(mass％Co)(Ni**) と (mass％Cu)/(mass％Co)(Cu**)｝ を求めプロットした図である。なお、図には厚真町上幌内モイ遺跡、オニキシベ２遺跡、ヲチャラセナイ遺跡のアイヌ文化期の遺構から出土した試料の調査結果を示した。図では、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された鉄器を黒丸（●）、鉄チタン酸化物が見出されなかった鉄器を白丸（○）、非金属介在物が見出されなかった鉄器を白三角（△）で示した。

図Ⅶ－５から明らかなように、Sa_1およびSa_2の２試料はいずれも図Ⅶ－５a_1では左下の近接した位置に、図Ⅶ－５a_2では右方の近接した位置に分布し、その近傍には、ヲチャラセナイ遺跡出土Rf10-３がプロットされている。この結果は調査した刀の刃部と棟部に同じ組成の鋼が配されていた可能性が高いことを示している。これまでの調査によると、上幌内モイ遺跡、オニキシベ２遺跡、ヲチャラセナイ遺跡から出土したアイヌ文化期に比定される鉄器は、領域Ａおよび領域Ｂに濃密に分布する。今回調査した刀は領域ＡおよびＢから離れた位置にプロットされている。最近の調査結果を加味すると、８世紀に比定される福岡県の鉄生産関連工房から出土した鉄塊系資料の組成（小野、赤沼ほか　2018）とほぼ合致するが、調査した刀とは時期が異なる資料であることをふまえ、当該資料の来歴については今後の課題としたい。

（赤沼英男）

注）

１）公益財団法人北海道埋蔵文化財センター・立田　理からの御教授による。

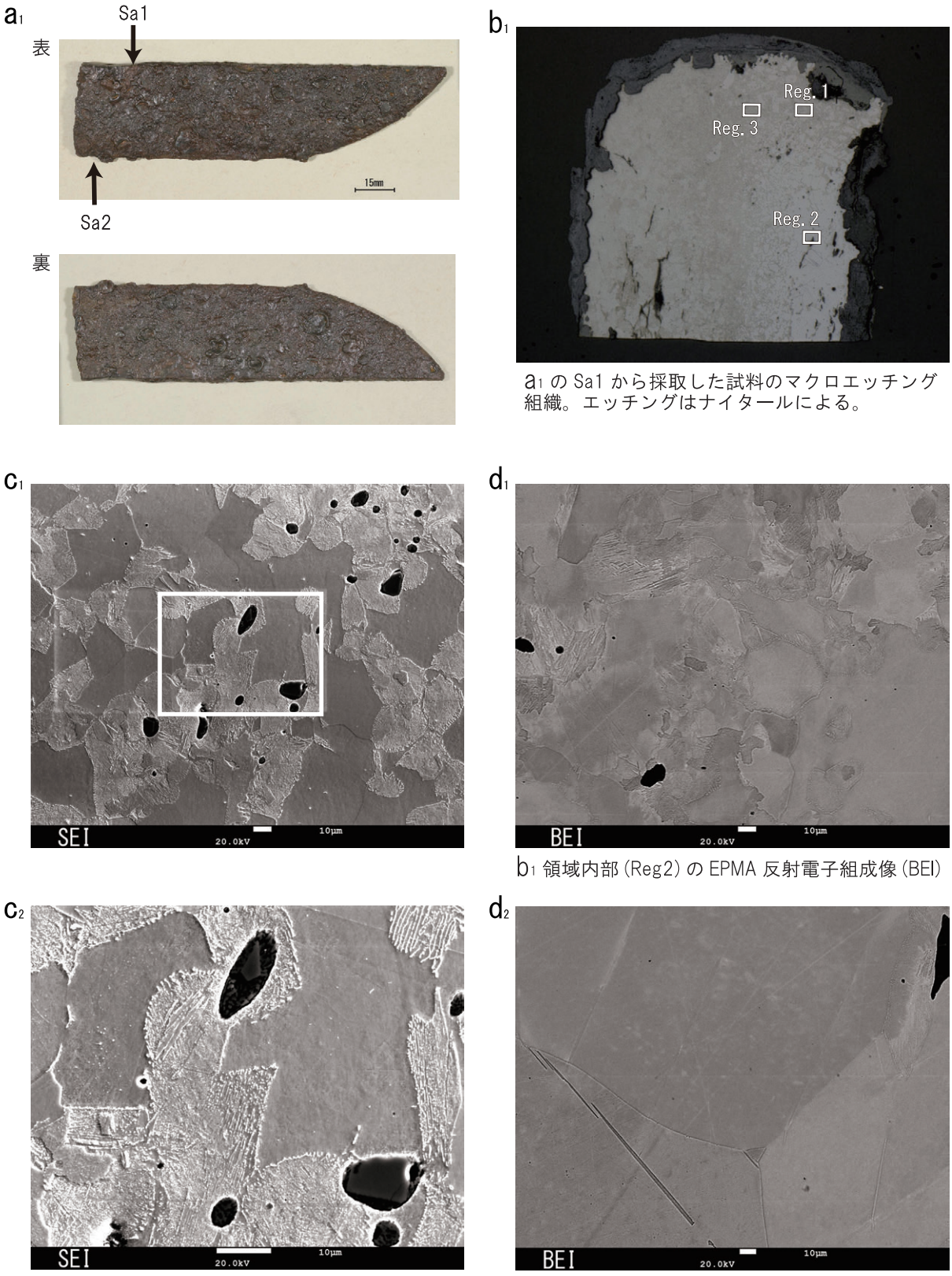
２）早稲田大学理工学術院基礎理工学部・伊藤公久教授からの御教授による。

引用・参考文献

赤沼英男2007「厚真町上幌内モイ遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果」『上幌内モイ遺跡（２）』厚真町教育委員会、pp.326-346

赤沼英男2011「厚真町オニキシベ２遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果－アイヌ文化期成立過程における鉄器地金の組成変化－」『厚真町　オニキシベ２遺跡』厚真町教育委員会、pp.379-433

赤沼英男2013「ヲチャラセナイ遺跡出土金属器の金属考古学的調査結果－中世アイヌ文化期における金属器の再利用－『厚真町　ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡』厚真町教育委員会、pp.93-123
赤沼英男2014「ヲチャラセナイ遺跡出土コイル状鉄製品の金属考古学的調査結果『厚真町　ヲチャラセナイ遺跡』厚真町教育委員会、pp.287-294
小野哲也、赤沼英男、目時和哉、小杉山大輔　2018「前近代の北方社会における鉄器流通実態の解明（４）～列島内鉄生産関連遺跡出土資料との比較検討～」『岩手県立博物館研究報告』第35号、編集中
佐藤知雄編1968『鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社
東北大学金属材料研究所編1953『金属顕微鏡組織』丸善株式会社
日本鉄鋼協会編1981『鉄鋼便覧』



a1 の Sa1 から採取した試料のマクロエッチング組織。エッチングはナイタールによる。

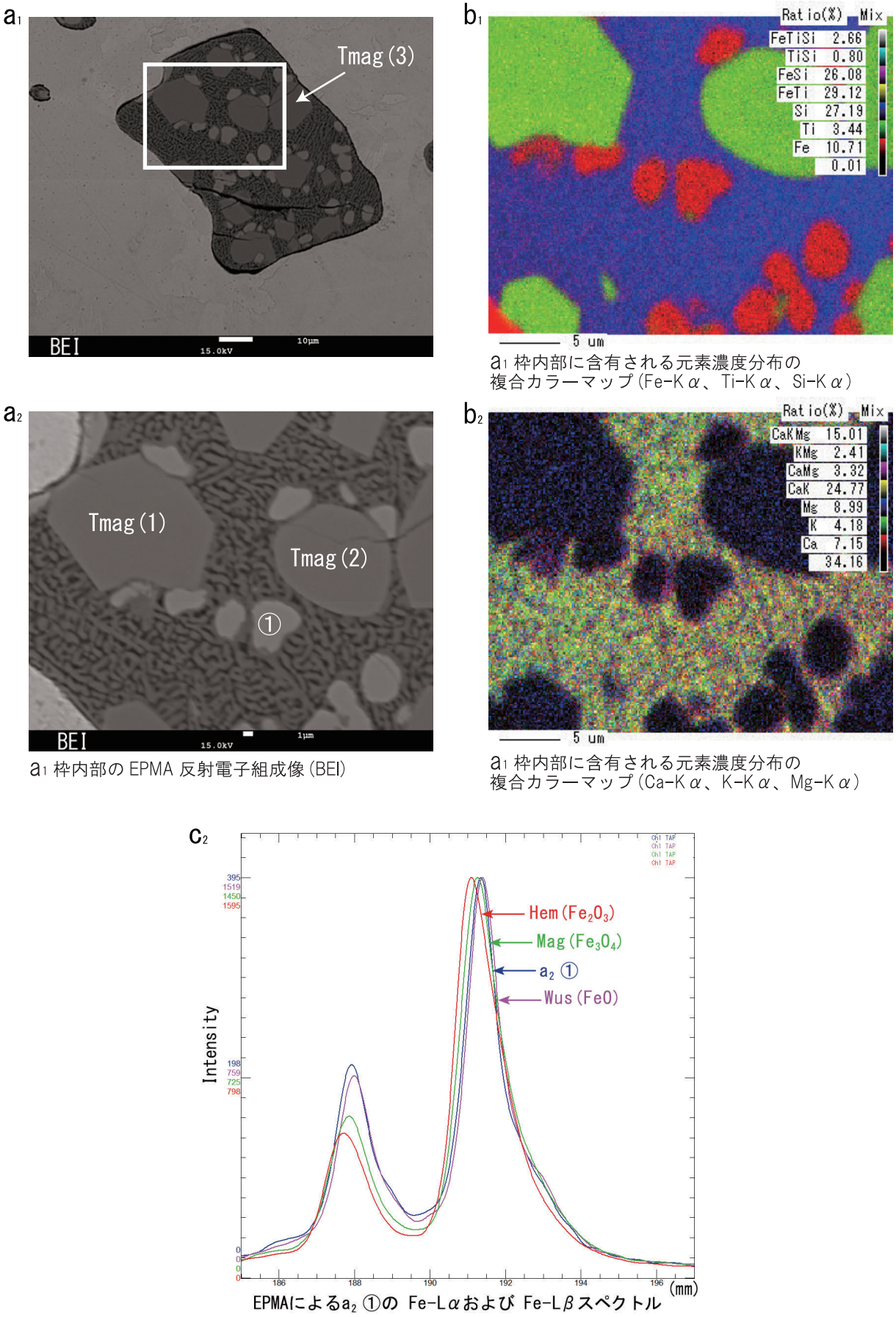
b1 領域内部（Reg2）の EPMA 反射電子組成像（BEI）

c1 枠内部（Reg1）の EPMA 反射電子組成像（BEI）

b1 領域内部（Reg3）の EPMA 反射電子組成像（BEI）

SEI=2 次電子組成像　BEI=EPMA 反射式電子組成像

図Ⅶ－３　採取した試料の組織観察結果



a1 枠内部の EPMA 反射電子組成像 (BEI)

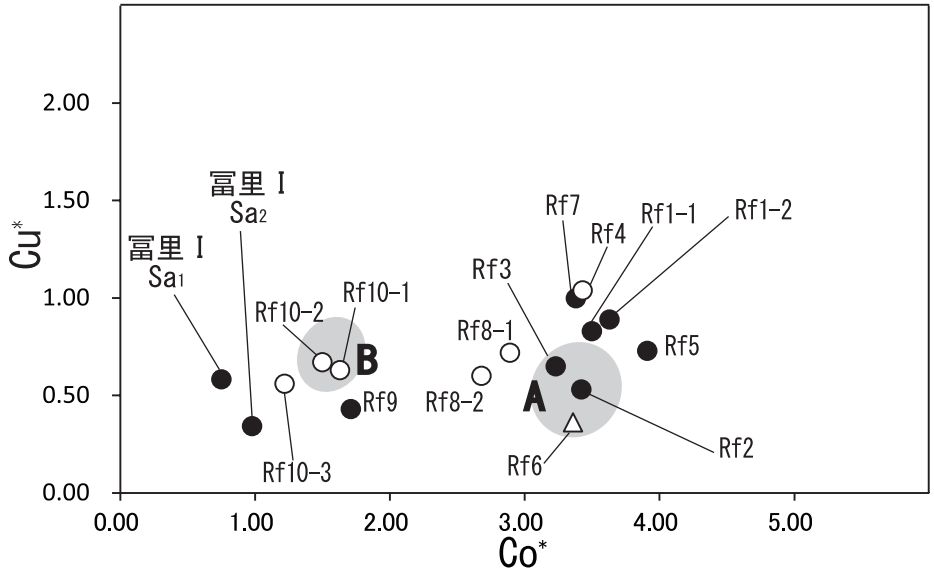
a1 枠内部に含有される元素濃度分布の
複合カラーマップ (Fe-Kα、Ti-Kα、Si-Kα)

a1 枠内部に含有される元素濃度分布の
複合カラーマップ (Ca-Kα、K-Kα、Mg-Kα)

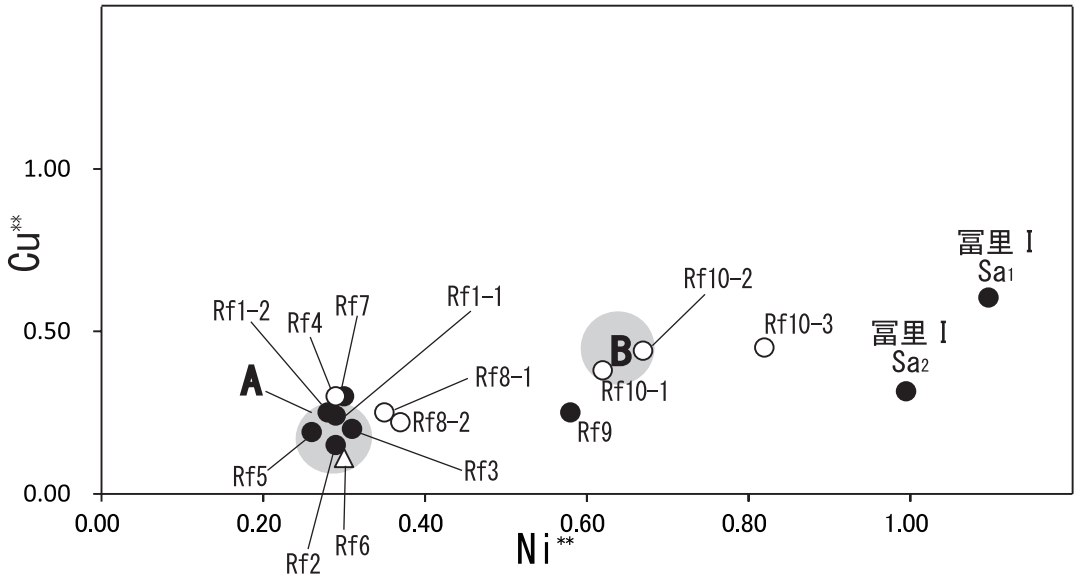
EPMAによるa2 ①の Fe-Lαおよび Fe-Lβスペクトル

図Ⅶ－４　採取した試料のEPMAによる分析結果

a1



b1



Co*＝(mass%Co)/(mass%Ni)、Cu*=(mass%Cu)/(mass%Ni)、Ni**=(mass%Ni)/(mass%Co)、Cu**=(mass%Cu)/(mass%Co)。図には上幌内モイ遺跡(Rf1-1・2～Rf4)、オニキシベ２遺跡Rf5～Rf8-1・2)、ヲチャラセナイ遺跡(Rf9・10-1・2・3)の調査結果も掲載。図では非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された鋼製鉄器を黒丸(●)、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった鋼製鉄器を白丸(○)、非金属介在物が見出されなかった鋼製鉄器を白三角(△)で示した。

図Ⅶ－５　調査鉄器に含有されるCu・Ni・Co三成分比

４　富里１遺跡出土動物遺存体

株式会社　パレオ・ラボ

（１）はじめに

厚真町に位置する富里１遺跡の発掘調査で出土した動物遺体について報告する。

（２）試料と方法

試料は焼土Ｆ－２からフローテーション法で回収された骨片７点である。Ｆ－２の時期はおそらく擦文後期とされている。

観察は実体顕微鏡下で行い、標本との比較により部位を同定した。

（３）結果と考察

７点とも焼けた鳥綱の骨である。

右足根中足骨近位端破片が見られた。近位端最大幅は4.2㎜である。小型のサギ類の可能性があったが、同定には至らなかった。

左右不明の趾骨１点が見られた。完存である。

その他に、四肢骨破片５点が見られた。

焼けた状況から、鳥綱が人為的に利用されたと考えられる。ただし、目以下の同定ができなかったため、詳細な検討はできなかった。

（中村賢太郎）

図版１　富里１遺跡から出土した鳥網骨片
※スケールの目盛は１㎜
左：左足根足骨　右：趾骨

Ⅷ章　総括

1　豊沢５遺跡・富里１遺跡

豊沢５遺跡、富里１遺跡の調査結果については、Ⅰ章の概要、Ⅲ章、Ⅳ章に記載のとおりである。富里１遺跡の出土遺物に関し、町内２遺跡目となる北大Ⅰ式土器の記述内容を補完し、多く出土した、たたき石について、想定される使用法を近年の研究進展を踏まえ実証実験を行い総括とする。

（１）北大Ⅰ式土器について

富里１遺跡の調査区中央に位置する沢状地形の周囲で、北大Ⅰ式土器がややまとまって出土した。当該期の資料は町内では朝日遺跡において表採遺物が知られ（厚真村1956）、調査により土坑墓が検出される（北埋調報313）以外にはなく、本遺跡は２遺跡目である。

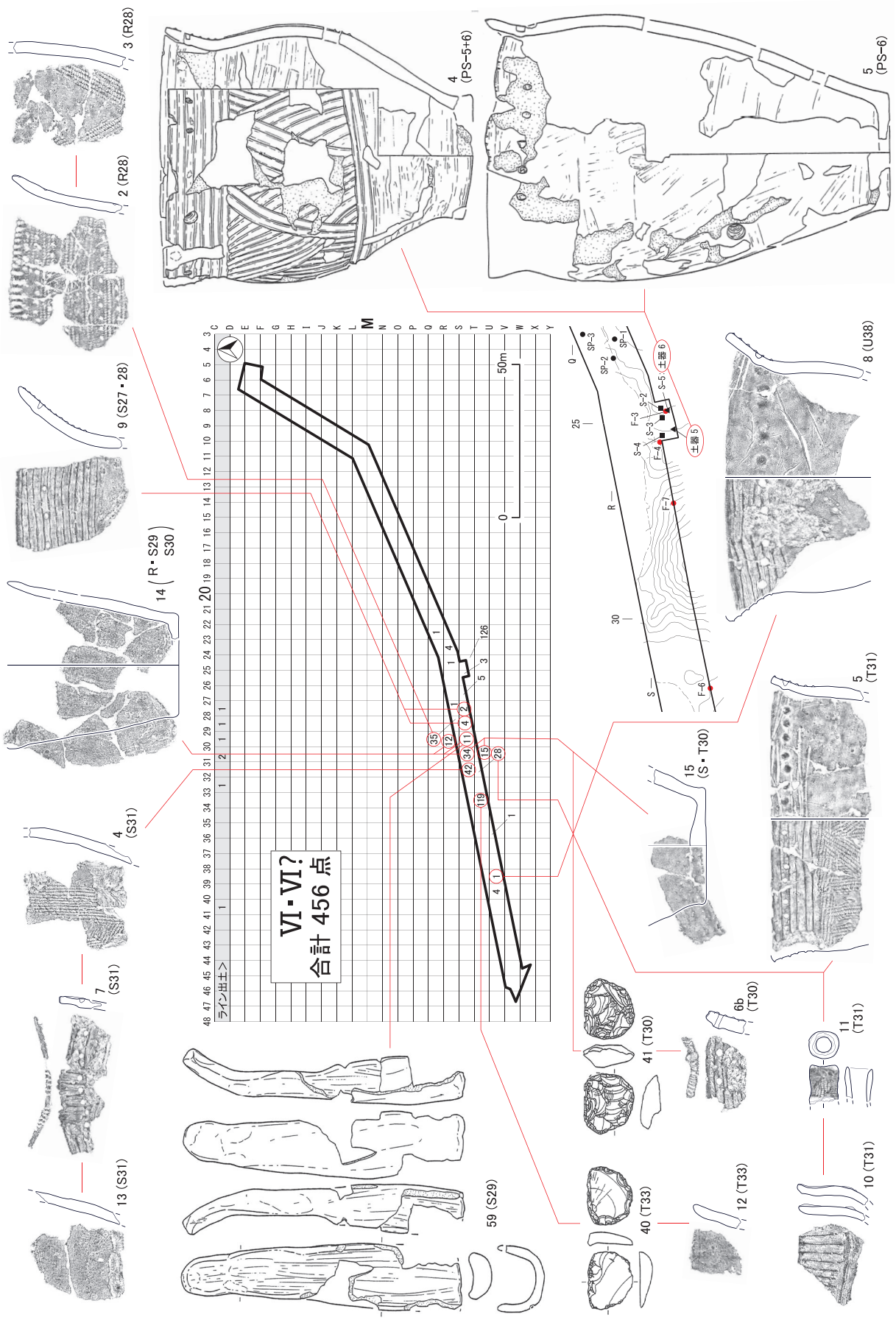
図Ⅷ－１は本遺跡から出土した続縄文時代に相当するとみられる資料の分布状況である。Ⅵ群土器（後北A・北大Ⅰ式）の出土点数に加え、掲載土器の図を示した。さらに、いわゆる拇指状の黒曜石製スクレイパー、出土層位と胎土から当期とみられる土製品の出土位置を示したものである。多く出土している北大Ⅰ式土器について図を基に器形、文様、器種の順に特徴を述べる。

器形のわかる復元土器（復元４、５）は頸部のくびれは浅く、胴部の膨らみは少ない。底部は張り出しがなくほぼ直立に近く立ち上がる器形（復元５､14)､僅かに張り出しが認められる器形（復元４、15）がある。口唇の形状は角張るものとやや丸みを帯びるものがある。角張る口唇には、平坦面が内傾（復元５）と外傾（復元４、５、６b)、ほぼ水平（７）の三種がある。丸みを帯びる口唇は２点に認められる（８、９)。角張る口唇のうち比較的古い要素とみられる端部の刻みは３個体にみられる（復元５、６b、７)。胴部の地文はRL０段多条の帯状縄文が施されるもの（３、４、５）があり、うち４には帯状縄文に沿う刺突列がみられる。このほか、箆ナデのみの無文のもの（復元４・５、13、14）がある。器種には深鉢･甕の他、浅鉢（６b、７)、片口もしくは注口（11)、鉢（14）がある。浅鉢６の上面観は楕円形または多角形状となる可能性がある。

これらの土器の特徴は、口縁が外反し、口唇が丸みを帯びるもの（８、９）を除けばほぼ大沼忠春の北大Ⅰ式（新）に相当するとみられる（大沼1997)。無文の鉢（14)、復元６の平坦面が内傾する、刻みのつく口唇を持つ土器、帯状縄文に沿う刺突列はより古い要素であり、これらを含めた器種構成は鈴木信の円形刺突文土器Ⅰ～Ⅳ期に相当するものである（鈴木2007)。推定暦年は４世紀中葉～５世紀中葉となる。

図Ⅷ－１に示した続縄文時代の遺物が比較的まとまる地区では、２か所で炭素年代測定を行っている。焼土Ｆ－６とＦ－４である。Ｆ－６はT32区Ⅲ層に位置する。包含層調査時に確認できず、平面での記録はできなかったが、断面観察ではB-Tmの下位約２㎝に形成されており、明瞭で上面に骨片を伴う。層位から続縄文時代に相当する可能性があった。このＦ－６から得られた炭化材の放射性炭素年代は、1,580yrBP±20であり、１σ暦年代範囲は1,521～1,415calBPである。この値は、北大Ⅰ式期の値とされる、長沼町幌内D遺跡の年代値４（1,565±20～1,635±20yrBP）：（350AD－542AD）に近い（北埋調報308)。一方、北大Ⅰ式の土器集中５、６に近接して検出されたＦ－４出土炭化材はやや下って1,352～1,312calBPを示している。両者とも確実に伴う例ではないが、土坑墓以外の遺構の検出例が少ない時期であるので、参考数値として提示しておく。

図Ⅷ－１－59に示した土製品は、出土状況、胎土から、続縄文時代に相当するものとみられる。類例は見当たらなかったが､伊達市南有珠７遺跡の包含層出土土製品はその可能性があるものである（伊



図Ⅷ－１　Ⅵ群遺物詳細分布状況

達市教委1984　pp189)。漏斗状に推定復元され、鞴口としているが鉄滓の付着や被熱による赤化がないと記されている。北大Ⅰ式の完形個体（pp181）と同じグリッドで出土しており、写真図版を見ると本遺跡出土資料のような形状となる可能性もあるように思える。

（２）たたき石について

１）概要

富里１遺跡で出土した、たたき石282点の内208点（74％）の多数を占める細別がある。棒状または角柱状の礫を用い、表裏面の中心からずれた平坦な部分に敲打痕があるたたき石である。敲打痕は重複の結果明瞭なくぼみとなるものもあり、本遺跡では区分していないが、くぼみ石（＝凹石）とされることもある。

くぼみ石については様々な用途推定がなされている。代表的なものに、火きり臼の上端の抑え（鈴木1991）、木の実を割る道具（木村1972）、石器製作道具との想定がある（桃野1982ほか）。これらくぼみ石の研究史は野村一寿、上條信彦によりまとめられている（野村1987、上條2015）。

本遺跡の出土状況をみると、大量に出土しているにも関わらず、石器製作の痕跡が希薄であることから石器製作の道具である可能性は低い。くぼみがすり鉢状の磨滅痕を呈するものがほとんどないことから、発火具の可能性もほぼないとみてよい。研究史上蓋然性の高いものは「木の実割の道具」となる。

道内の本遺跡類似の資料については、比較的早くから木の実を割った可能性が指摘されている。江別市江別太遺跡において炭化したクルミを多く伴うことから、クルミなどの堅果類を割る道具と想定されている（江別市教委1979）。深川市の納内３遺跡でも同様の想定を行っているが、多様な敲打痕の存在から、多くの用途があった可能性を指摘している（葛西1989）。

近年の使用痕分析の結果は、木の実割道具の想定を支持している。池谷勝典は実験結果からこの石器を用いるとクルミを割って中身を取り出すことが容易に行えること、縄文時代のクルミ出土資料が上下方向に割れる例が多いことを根拠とし、敲打の対象物がクルミであることを積極的に推測している（池谷2003、2004）。池谷の指摘のように、本遺跡出土例も鋭利な先端のある対象物を垂直に敲打した結果と推測されることから、実証実験を試みることとした。

２）実験（P166写真）

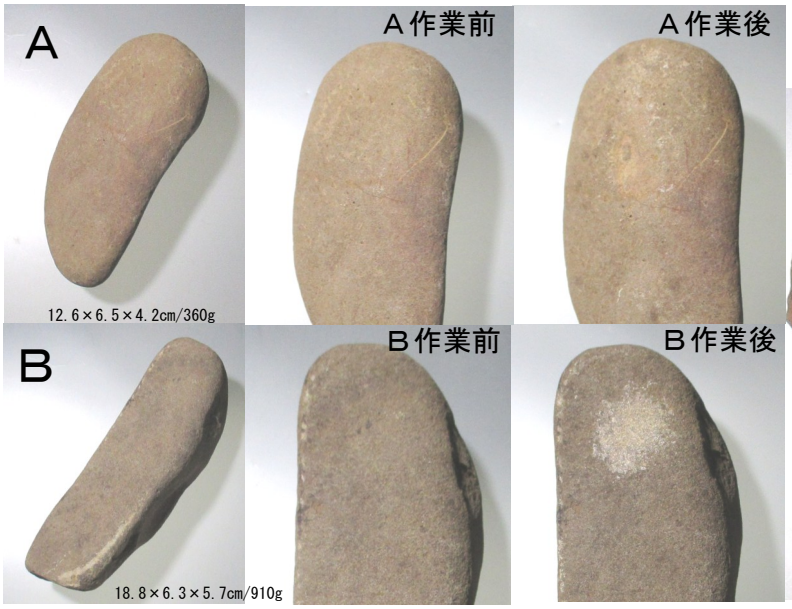
実験にはオニグルミ（宮城県仙台市産）を使用した。P166写真１（以下写真を略する）。たたき石、台石は遺跡周辺で採取した砂岩礫で、それぞれよく似た形態を持つものを選んだ（２、３）。池谷の実験を参考にし、クルミを左手で保持し、右手にたたき石を持って振り下ろす形で行った。実験に客観性を持たせるため、２名の実験者（A・B）で異なる石を用いている。[注1)]

中身の回収を主眼とし、約50個のクルミを割った。作業前後の道具の変化を写真２、３に示した。たたき石Aには明瞭なくぼみが、Bは肌触りが変わる程度の敲打痕ができているが、両者ともに出土遺物と同等な敲打痕が認められる石器となった。一方、台石A、Bについてはともに特段の変化が認められず、先行研究の指摘通りの結果である。

池谷は上記の論文中に、クルミの中身を効率的に採取する方法として一つのコツがあると述べており、そうしなければクルミがつぶれてしまう結果になるとしている。そのコツとは、「クルミの頂部だけを打ち欠くようにして凹石を振り動かす」というものである。このことについて、２名で追試を行ったが、クルミが堅いせいか割ることができなかった。誤読かもしれないが、この方法では擦痕のような痕跡となり、敲打痕の形成部位も異なるのではないだろうか。

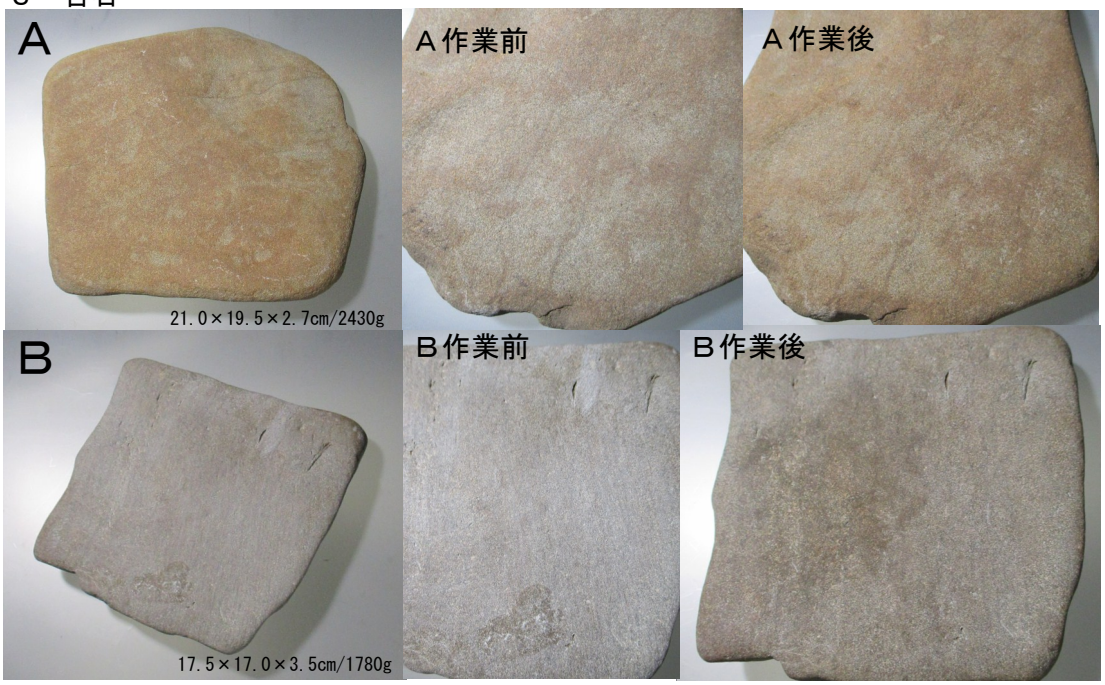
50個のクルミを割る作業に約２時間の時間を要したが、結果かなり上手に中身を取り出すことができるようになった。思い込みの側面もあろうが、終了時の掃除を度外視すればペンチや専用の道具を

２　たたき石



１　オニグルミ
（宮城県産・4cm/9g前後）

３　台石



４　作業の様子

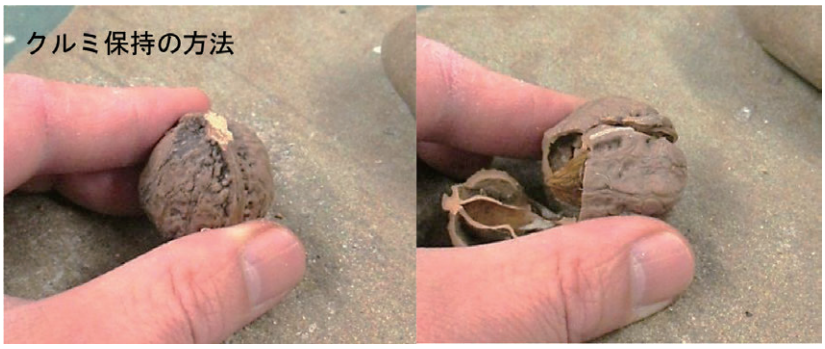
使うよりむしろ効率的なのではと思えるほどであった。試行錯誤の結果最も効率的と思える方法は、２名とも同じ結論にたどりついた。以下に、たたき石の保持の方法、クルミの敲打方法について説明する。

ａ）たたき石保持の方法

たたき石は写真４のように保持する。保持する指が敲打面にかからないような大きさの礫を選ぶこととと、野球のボールを持つように人差し指、中指はたたき石の上方にかかるようにすることが重要である。この方法は敲打位置のコントロールが容易であるうえ、指を挟んでしまう事故は一度も起こらなかった。

ｂ）クルミの敲打方法

クルミは左手人差し指と親指で挟む。最初にくるみの先端（尖頭部）を上にして正立させ、尖った部分をつぶすように数回敲打する（下写真左）。先端がつぶれたら、クルミを横倒しにして縫合線を天地とする。そして縫合線の頂部に向かい同様にたたき石を振り下ろす（下写真右）。先端を上にした状態のみでも割ることは可能であるが、結果的に半割の状態に近くなり、クルミの隔壁奥に入り込んだ実を回収することが困難となる場合が多い。上記の方法ではクルミが縫合線以外の場所でななめに割れ、うまくいけば実を簡単に回収することができる。



３）実験結果から

使用痕がくぼむか否かは、たたき石の硬度の差異、または個人的敲打技術の差、または敲打頻度の差である可能性が推定される。多様な敲打痕とされるものの少なくとも一部は、多様な用途によるものではなく使用者の技量と素材礫自体の硬度等の差異を示しているのではないか。

またたたき石Ａは明瞭なくぼみが生じたが、くぼみ部分で割り続けるのは徐々に困難となり、平坦な部分を探して敲打痕が広がる結果となった。このことは、熊谷仁志が「ある深さ以上になると、使用に適さなくなった」と推測するとおりであり、氏のたたき石の持ち替えによる敲打位置の変化の規則性（熊谷1993）を極めて明瞭に説明できるものである。

４）追試の必要性

実験結果は、池谷氏の先行研究に同じく、この種のたたき石について少なくとも作業の一つとしてクルミ割りが行われたことを支持する結果となった。しかし詳細な手順やコツについては池谷氏の実験との整合性が取れなかった。

このことからもおそらく、異なる条件下では違った結果となる可能性が高い。たとえば対象物が同じクルミであってもオニグルミ以外のヒメグルミであった場合、たたき石の石材が異なる場合には、違った結果となる可能性は多分にあるように思う。検証のためには使用痕分析も含めたさらなる追試、石材も含めたたたき石、凹石の詳細な分析を行う必要があるだろう。

注１）普及活用課　坂本尚史主査にご協力いただいた。　（立田）

２　豊沢10遺跡・豊丘２遺跡の遺構と遺物

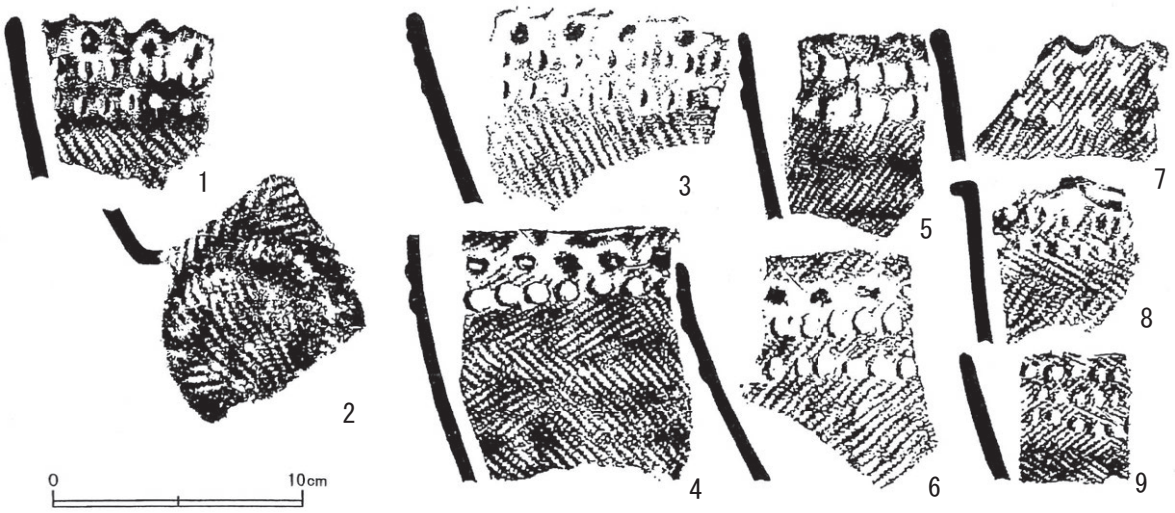
豊沢10遺跡では、４か所の焼土が検出され、遺物は土器、石器など計4,569点が出土した。焼土は調査区東側の平坦部縁付近で見つかった。調査区境まで遺物の出土が多い事などから、焼土群は北東側（山側）の平坦面へ続いていると思われる。焼土には、灰、炭化物（クルミ片）、焼骨片（シカの四肢骨が大半）やフレイクチップの集中域（FC）を伴うものが多い。周辺からＶ群a類土器がまとまって出土している。町内出土の古いものでは、図Ⅷ－２の例がある（厚眞村郷土研究会・厚眞村教委1956）。

石器は剥片石器類が大半を占め、特に石鏃の出土が多い。玉髄製やチャート製の原石（河原石）が出土している。礫石器の出土はほとんどない。キャンプサイト的な利用が想定される。

緩斜面部からは、縄文時代後期初頭の余市式土器が少量出土している。また、湧元式もしくはトリサキ式と考えられる壺の把手（把手は欠落）部分に、赤色顔料が付着した土器片（図Ｖ－15－４）が出土しており、道南地方との関連が指摘できる。

豊丘２遺跡では、Ｔピット１基と焼土１か所が検出された。遺物は土器、石器など計681点が出土した。Ｔピットは南側の緩斜面が平坦になる地形の変換点付近で見つかっている。細長のタイプで長軸は等高線に直行している。時期は不明である。出土した土器は、縄文時代早期後半の中茶路式のものが大半である。絡条体で羽状に文様を構成するもの（図Ⅵ－11－17・18）は少し新しいものと考えられる。北側（野安部川側）の平坦な部分からは、東釧路Ⅳ式土器が少量出土している。石器は石鏃の出土が多く、断面形が三角形を呈するすり石も出土している。

（村田）



厚眞村郷土研究会・厚眞村教育員会　1956『厚眞村古代史』より引用加筆
１・２は、「第６図　振老発見の土器２」より
３～９は、「第７図　振老発見の土器３」より

図Ⅷ－２　厚真町出土のＶ群a類土器

引用・参考文献

〈報告書〉

厚真町教育委員会

2009 『ニタップナイ遺跡（１）』
国営土地改良事業勇払東部（二期）地区　厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2010a 『厚幌 1 遺跡（２）・幌内 7 遺跡（１）』
国営土地改良事業勇払東部（二期）地区　厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

2010b 『幌内 5 遺跡（１）・富里 2 遺跡・ニタップナイ遺跡（２）』
国営土地改良事業勇払東部（二期）地区　厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

江別市教育委員会　1979 『江別太遺跡』江別市文化財調査報告書Ⅸ

伊達市教育委員会　1984 『伊達市南有珠 7 遺跡発掘調査報告書』

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

2013　調査年報25

2014 『長沼町　幌内Ｄ遺跡』 北埋調報308

2014　調査年報26

2015 『厚真町　朝日遺跡』 北埋調報313

2015　調査年報27

2016　調査年報28

2017　調査年報29

2016 『厚真町　富里 3 遺跡』 北埋調報326

2017 『厚真町　厚幌 1 遺跡　幌内 6 遺跡　幌内 7 遺跡』 北埋調報336

〈論文・その他書籍等〉

厚眞村　1956 『厚眞村史』

厚眞村郷土研究会・厚眞村教育委員会　1956 『厚眞村古代史』

松野久也・石田正夫　1960 『５万分の１地質図幅「早来」および同説明書』北海道開発庁

山口昇一　1960 『５万分の１地質図幅「鵡川」および同説明書』地質調査所

木村剛朗　1972 「実験からみた敲石とその用途(1)、(2)」『考古学ジャーナル』№74、75

池田実・亀井喜久太郎　1976 『厚真の旧地名を尋ねて』

池田実・亀井喜久太郎　1978 『続厚真の旧地名を尋ねて』

桃野真晃　1982 「石器を作るハンマー－凹石の用途について－」考古学論考

高倉新一郎・秋葉実　1985 『戊牛東西蝦夷山川地理取調日誌　松浦武四郎』中　北海道出版企画センター

野村一寿　1987 「凹石研究のために（１）―学史―」長野県埋蔵文化財センター　紀要 1

大沼忠春　1989 「続縄文土器様式」『縄文土器大観』小学館

葛西智義　1989 「４．石器について」『深川市　納内 3 遺跡』北埋調報60　財団法人北海道埋蔵文化財センター

鈴木道之助　1991 「（５）凹石・蜂の巣石」『石器入門辞典―縄文』柏書房

熊谷仁志　1993 「５　所謂「くぼみ石」について」『芽室町　北明１遺跡（２）　音更町　西昭和２遺跡　池田町　十日川５遺跡』北埋調報82　財団法人北海道埋蔵文化財センター
大沼忠春　1997 「８・９世紀の土器―口縁部に沈線文のある甕形土器」『蝦夷・律令国家・日本海―シンポジュウムⅡ・資料集』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
池谷勝典　2003 「第３節　酒呑場遺跡の凹石、敲石、磨石の使用痕について」『酒呑場遺跡』山梨県教育委員会
池谷勝典　2004 「縄文時代石器の機能研究―使用痕分析を中心に―」『考古学ジャーナル』№520
鈴木信　2007 「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒトの文化交流の研究』
上條信彦　2015 「第６章　縄文時代諸段階における磨石・敲石類、石皿・台石の様相」『縄文時代における脱穀・粉砕技術の研究』六一書房

写真図版

豊沢５遺跡

調査状況（北から）

調査状況（南から）

図版 2

土層断面（南西から）

土層断面（西から）

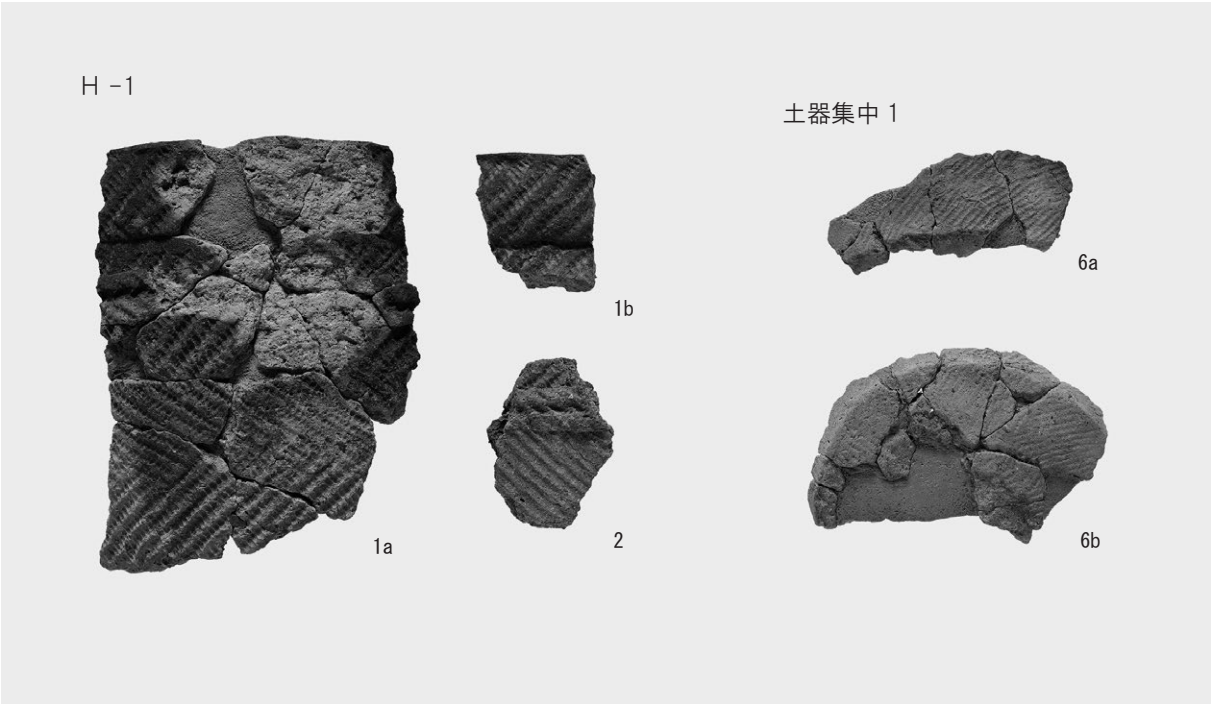
Ｈ -1 全景（南から）

Ｈ -1 床面土器出土状況 (南から)

Ｈ -1　ＨＰ -1 全景 (南から)

土器集中 1 出土状況 (北から)

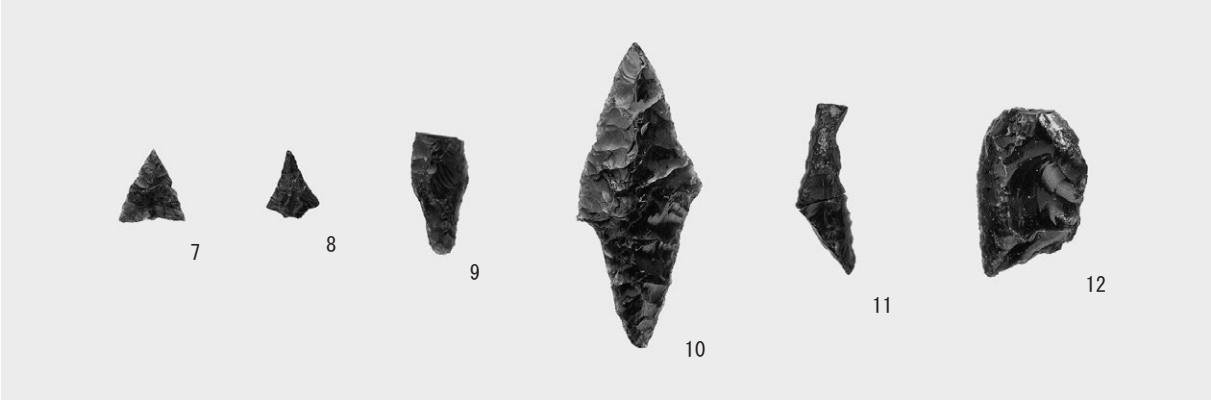
石槍出土状況 (北から)



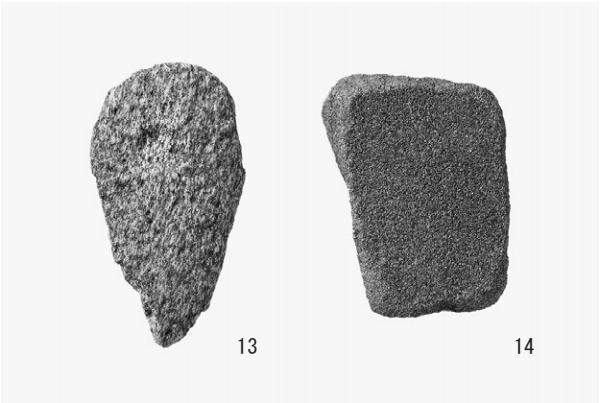
遺構出土の遺物

図版 4

包含層出土の土器



包含層出土の剥片石器



包含層出土の礫石器

写真図版

富里１遺跡

調査状況（西から）

調査状況（北から）

図版 6

メインセクション　R 22 区南壁（北から）

メインセクション　38 ライン付近南壁（北西から）

F -1 断面（北から）

F -2 断面（北から）

ＳＰ -1 断面 (北から)

ＳＰ -2 断面 (北から)

ＳＰ -3 断面 (北から)

Ｓ -1 検出 (北東から)

Ｆ -3 断面 (北から)

Ｆ -4 断面 (北西から)

Ｆ -5 検出 (東から)

Ｆ -6 断面 (北から)

Ｆ -7 断面 (北から)

図版 8

S -2・3 検出（西から）

S -4 検出（西から）

土器集中 5 検出（西から）

S -5/ 土器集中 6 検出（北から）

土器集中 2 検出（北から）

土器集中 1 検出（北から）

土器集中 1・2 検出（北から）

図版 10

Ｈ -1 全景（北西から）

Ｈ -2 全景（西から）

H -2 全景（北から）

H -2 土層断面（西から）

図版 12

Ｈ -3 全景（北西から）

Ｈ -3 土層断面（南西から）

Ｈ -3　ＨＰ -1 土層断面（南西から）

Ｈ -3　ＨＰ -3 土層断面（北西から）

Ｐ -1 全景（東から）

Ｐ -2 土層断面（西から）

Ｐ -3 土層断面（北西から）

Ｐ -4 土層断面（北西から）

Ｐ -5 土層断面（南西から）

Ｐ -6 土層断面（西から）

図版 14

Ｐ -3 ～ 7 全景（西から）

Ｐ -7 土層断面（西から）

Ｐ -8 土層断面（東から）

Ｐ -9 土層断面（東から）

Ｐ -10 土層断面（南から）

Ｐ -11・12 全景（東から）

Ｐ -11 土層断面（北東から）

Ｐ -12 土層断面（東から）

Ｐ -11 全景（東から）

Ｐ -12 全景（東から）

図版 16

P -14 土層断面（南西から）

P -15 検出面遺物出土状況（南から）

P -15 土層断面（南東から）

P -15 全景（南から）

P -16 土層断面（東から）

P -17 土層断面（南西から）

P -18 土層断面（西から）

P -19 全景・土層断面（北から）

P -20 全景・土層断面（南から）

P -21 土層断面（南から）

P -22 土層断面（南から）

P -23 全景（南から）

図版 18

P -24 全景・土層断面（北から）

P -25 全景（北から）

P -26 全景（北西から）

P -27 土層断面（西から）

P -28 検出状況（北から）

P -28 土層断面（東から）

Ｐ -29 全景・土層断面（北から）

Ｐ -30 全景（南西から）

Ｐ -31 土層断面（東から）

ＴＰ -1 土層断面（南西から）

ＴＰ -1 坑底検出状況（北西から）

図版 20

ＴＰ -1 全景（北東から）

ＴＰ -1 杭土層断面（西から）

ＴＰ -1 杭土層断面（東から）

ＴＰ -1 杭完掘（北東から）

ＴＰ -1 杭完掘（南東から）

Ｆ -8 土層断面（北東から）

Ｆ -9 土層断面（南から）

ＳＰ -4 土層断面（北から）

ＳＰ -5 土層断面（北から）

ＳＰ -6 土層断面（南東から）

ＳＰ -7 土層断面（東から）

ＳＰ -8 土層断面（西から）

ＳＰ -9 土層断面（東から）

図版 22

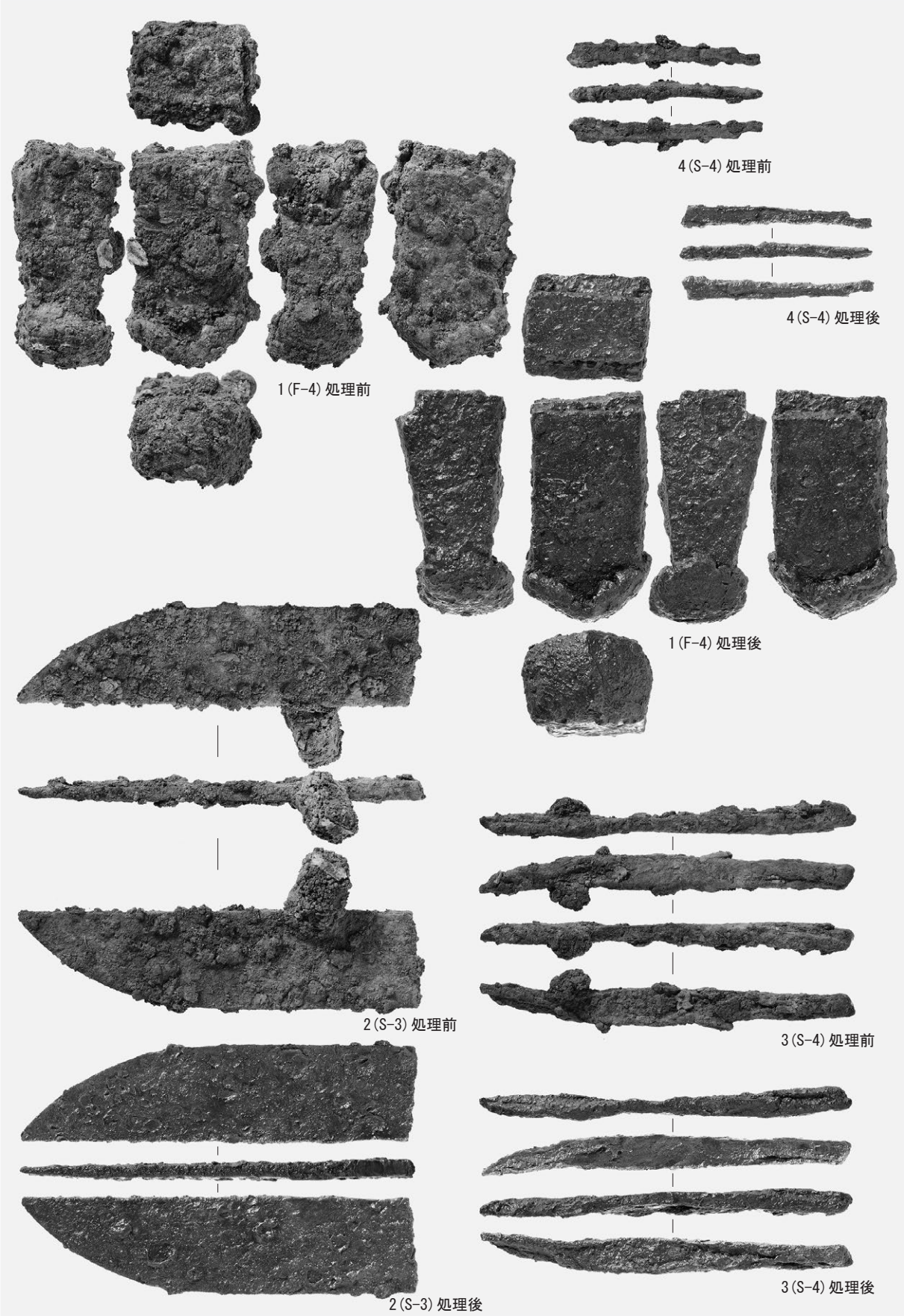
ＳＰ -10 土層断面（北東から）

ＳＰ -11 土層断面（東から）

ＳＰ -12 土層断面（北東から）

土器集中 3 検出（西から）

土器集中 4 検出（東）から

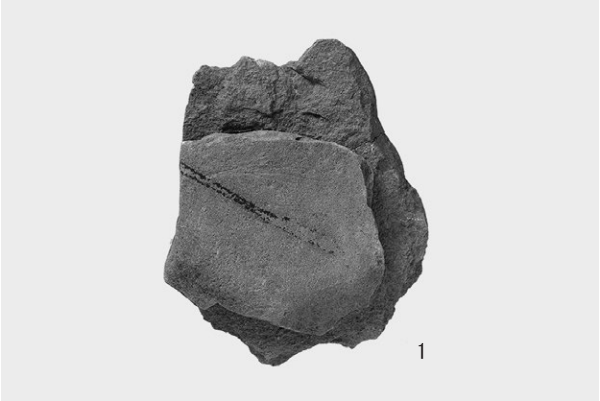


鉄製品

図版 24

土器集中の出土遺物 1

土器集中の出土遺物 3

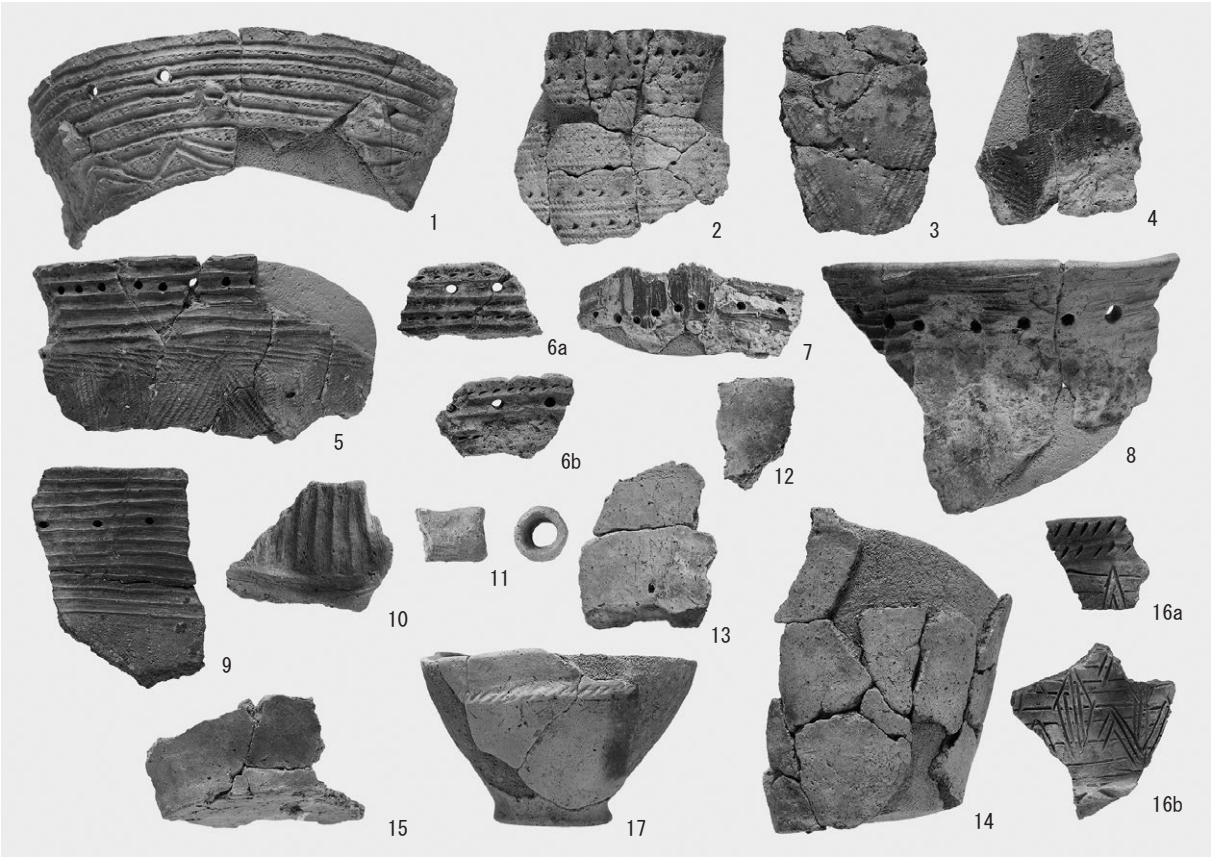


F -4 出土遺物

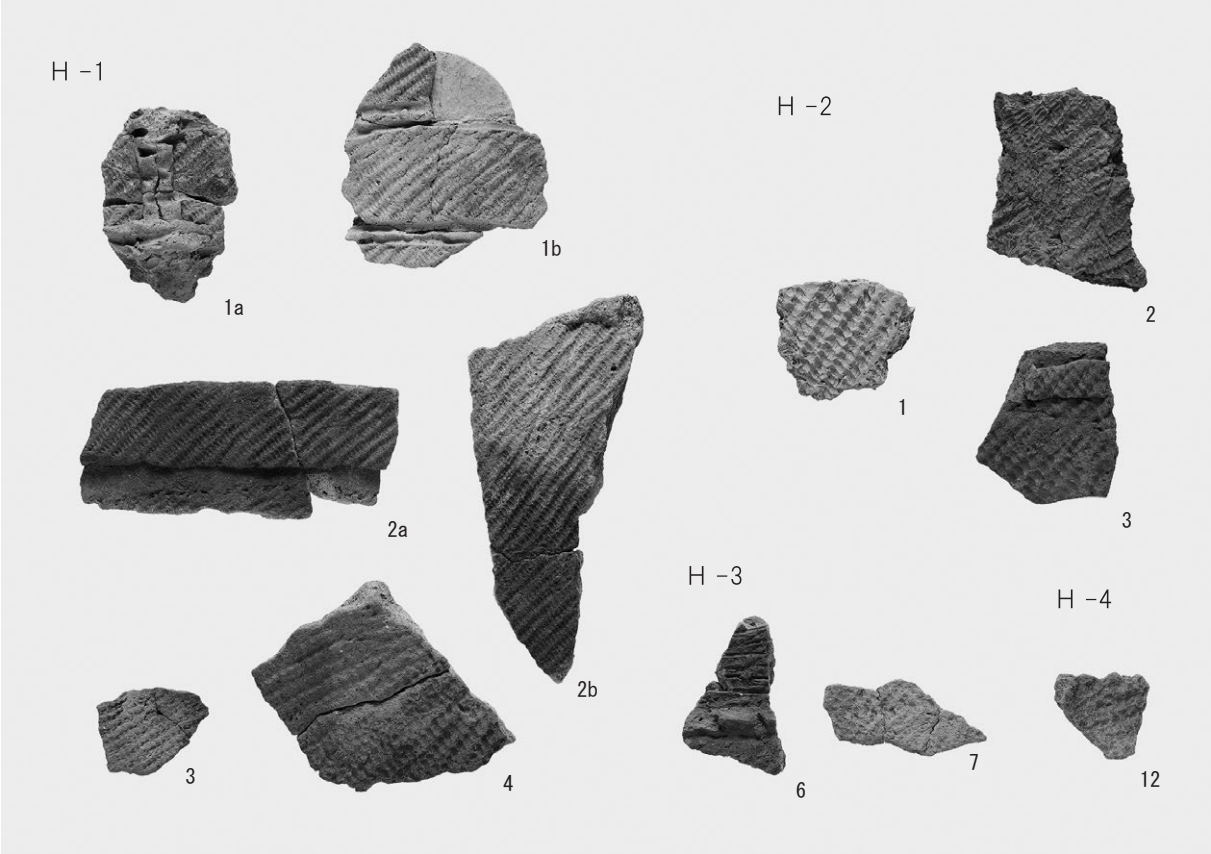
土器集中の出土遺物 2

土器集中の出土遺物 4

土器集中の出土遺物 5

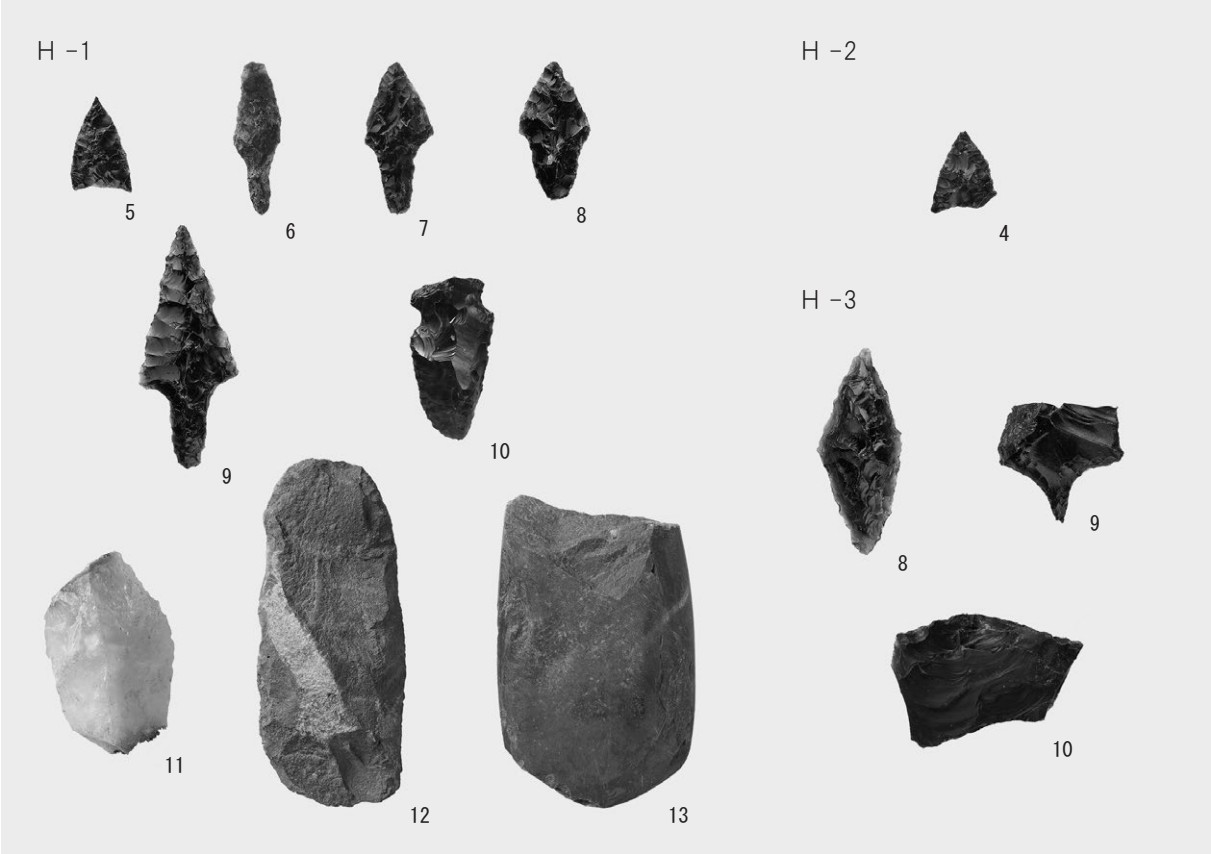


Ⅲ層出土の土器

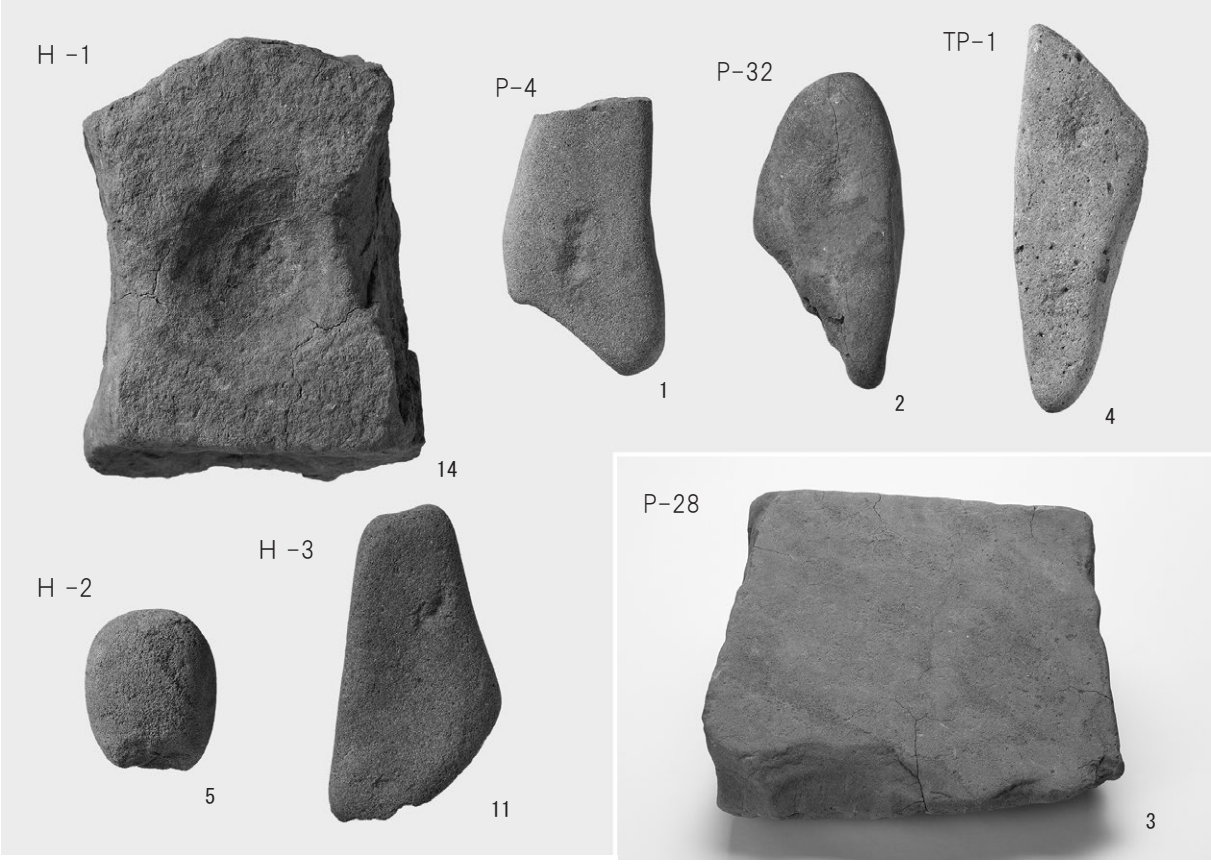


住居跡出土の土器

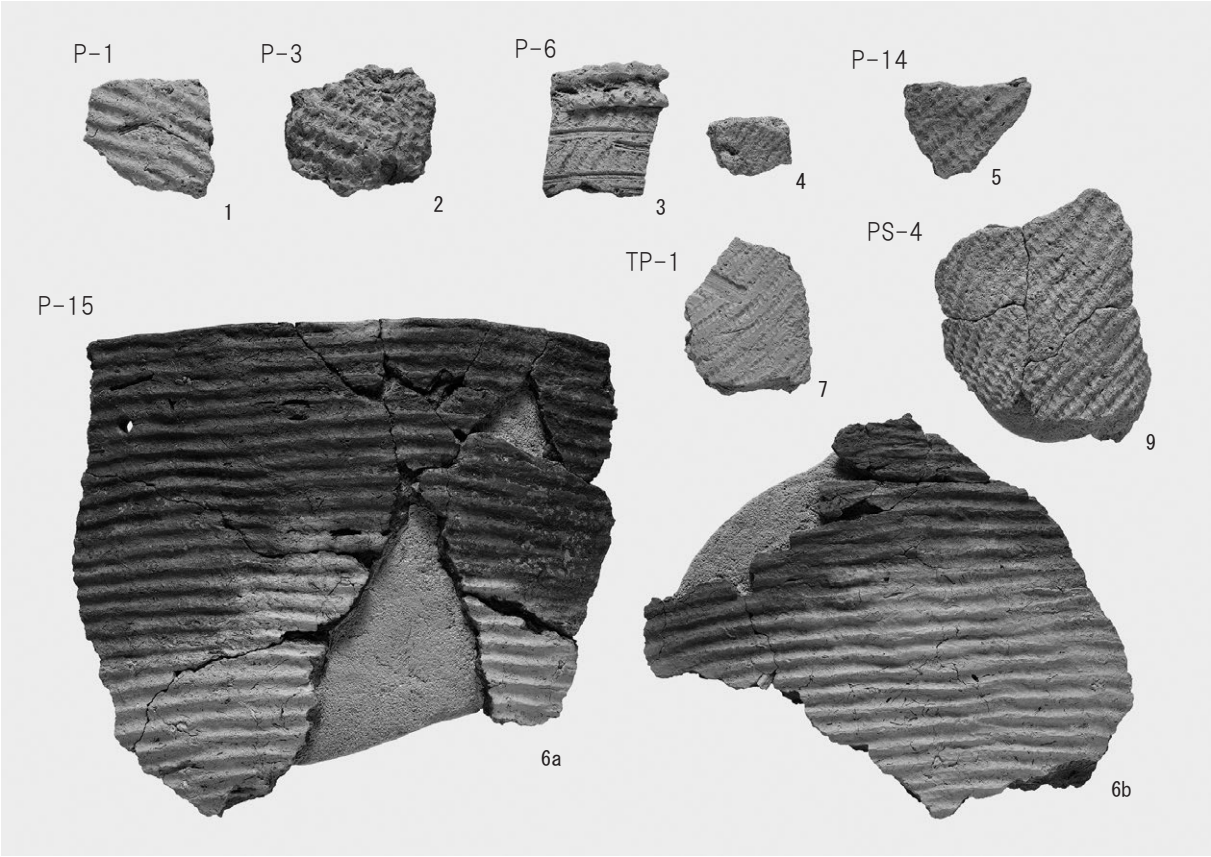
図版 26



住居跡出土の剥片石器・石斧



住居跡・土坑出土の礫石器

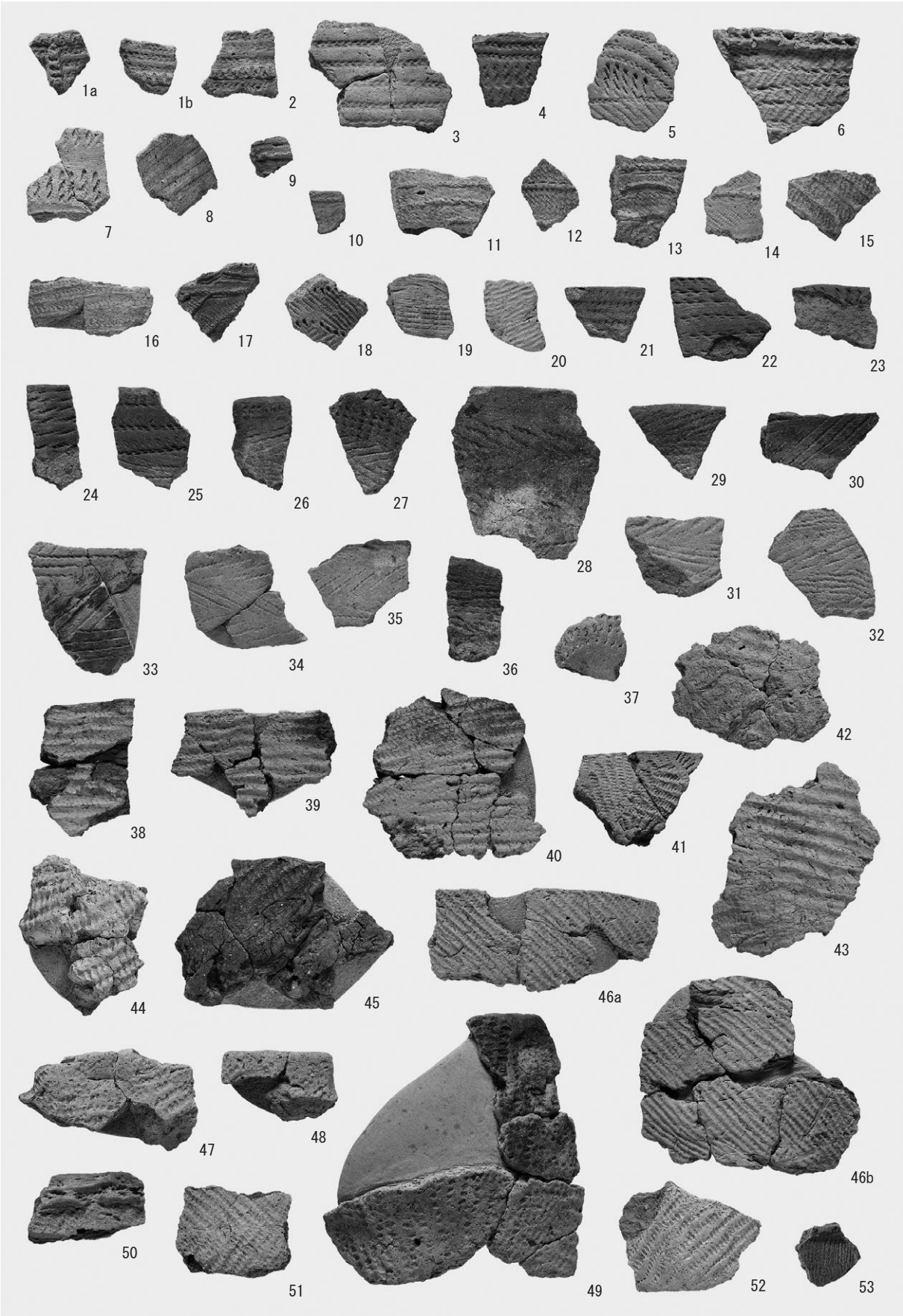


土坑出土の土器

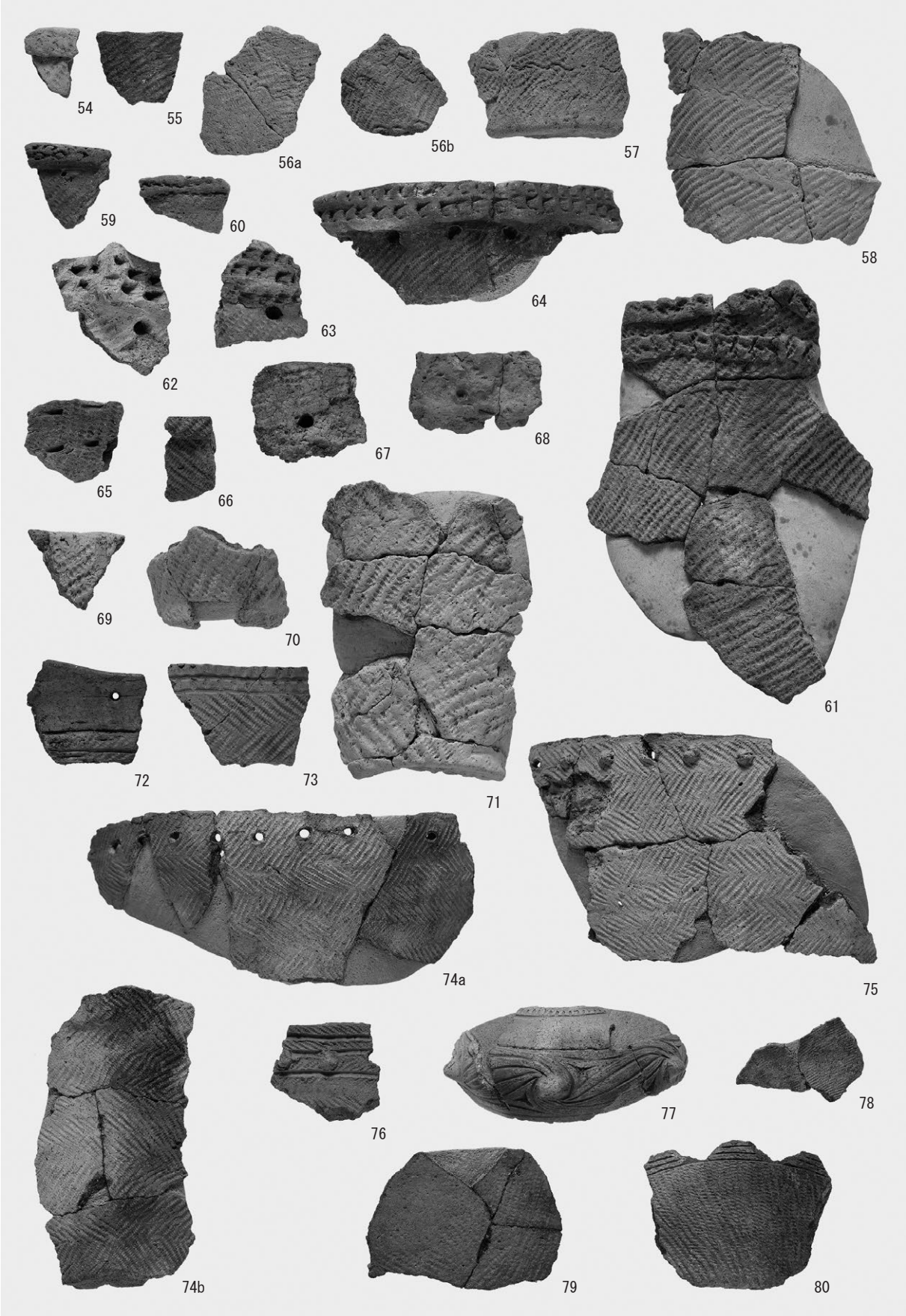
土器集中 4 出土の土器

土器集中 3 出土の土器

図版 28

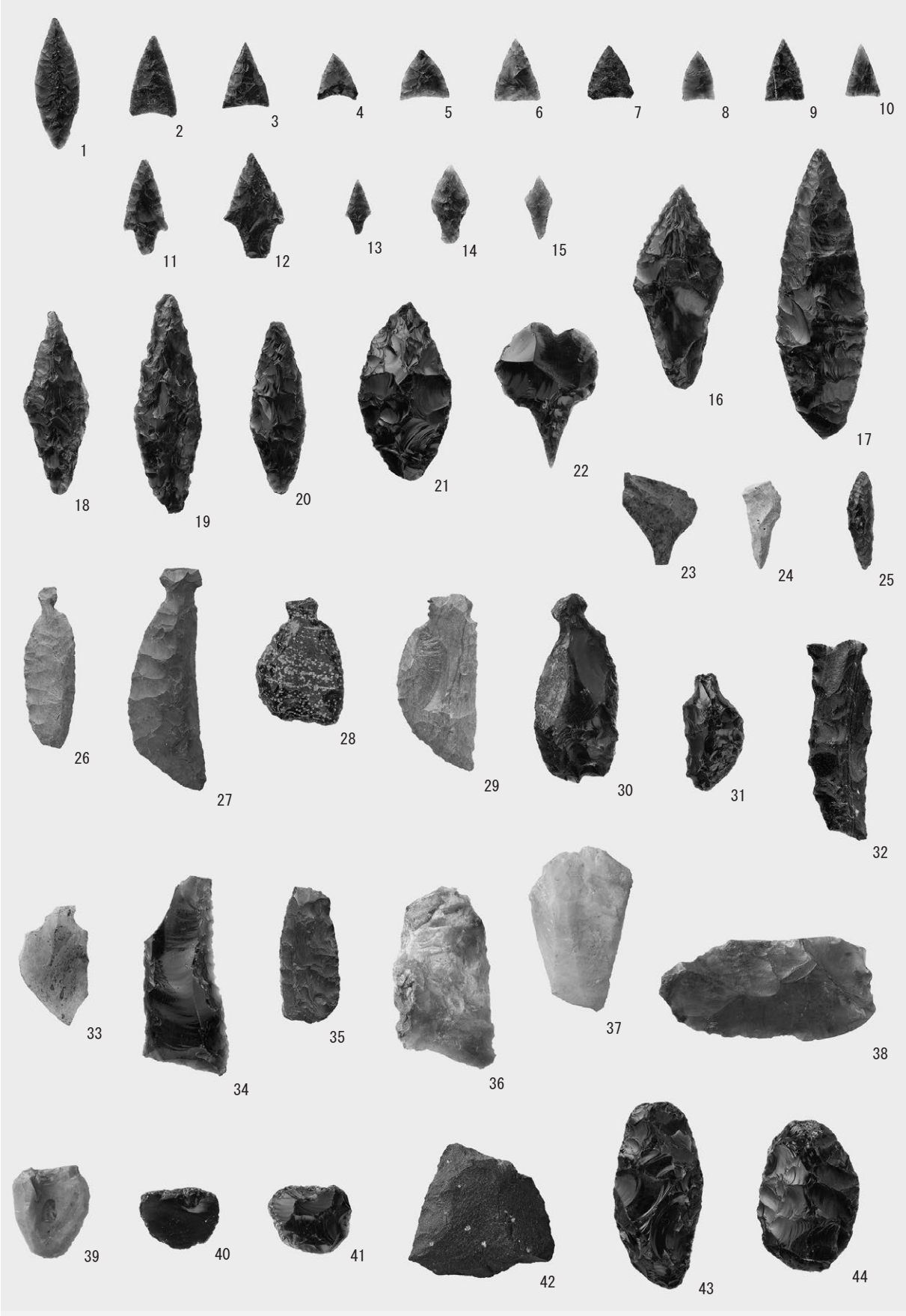


Ⅴ層出土の土器(1)


54
55
56a
56b
57
58
59
60
64
62
63
61
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74a
75
74b
76
77
78
79
80

Ⅴ層出土の土器(2)

図版 30

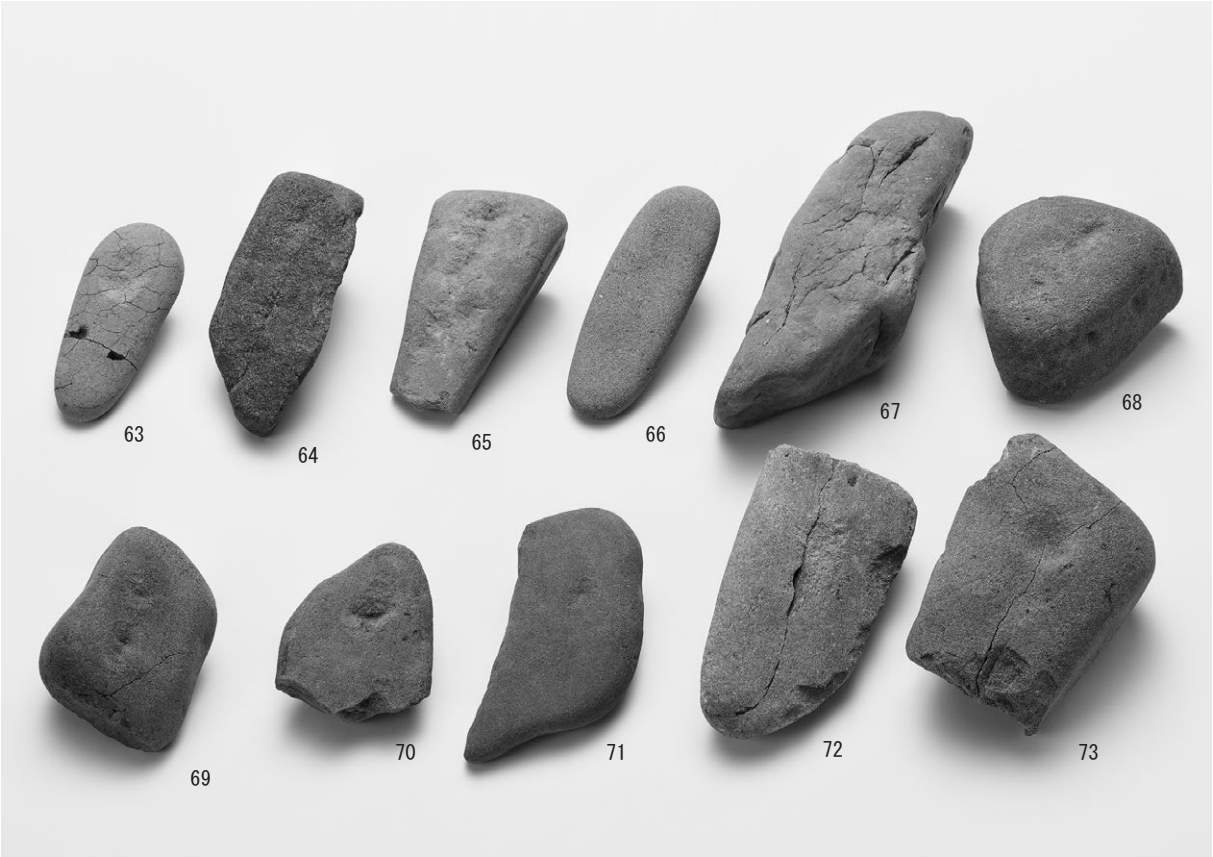


包含層出土の剥片石器

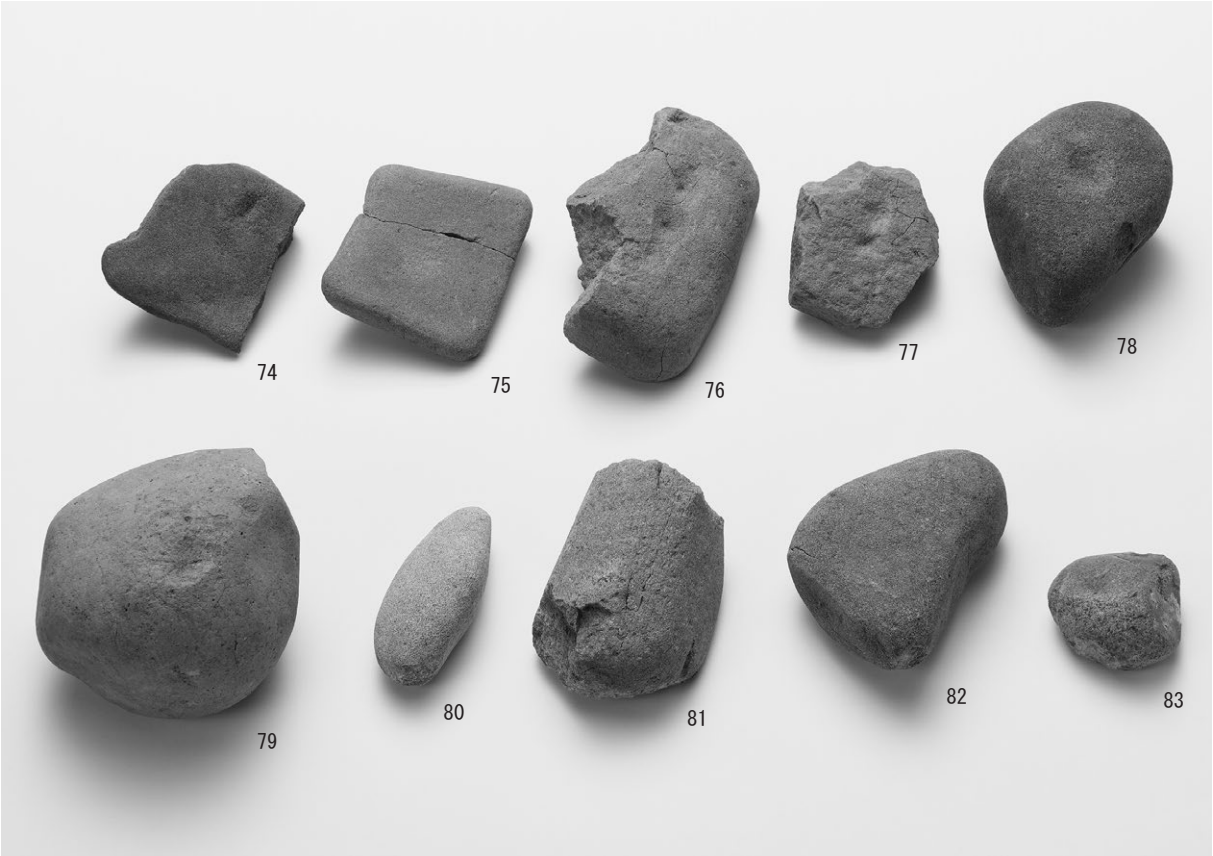
包含層出土の磨製石器

包含層出土のたたき石(1)

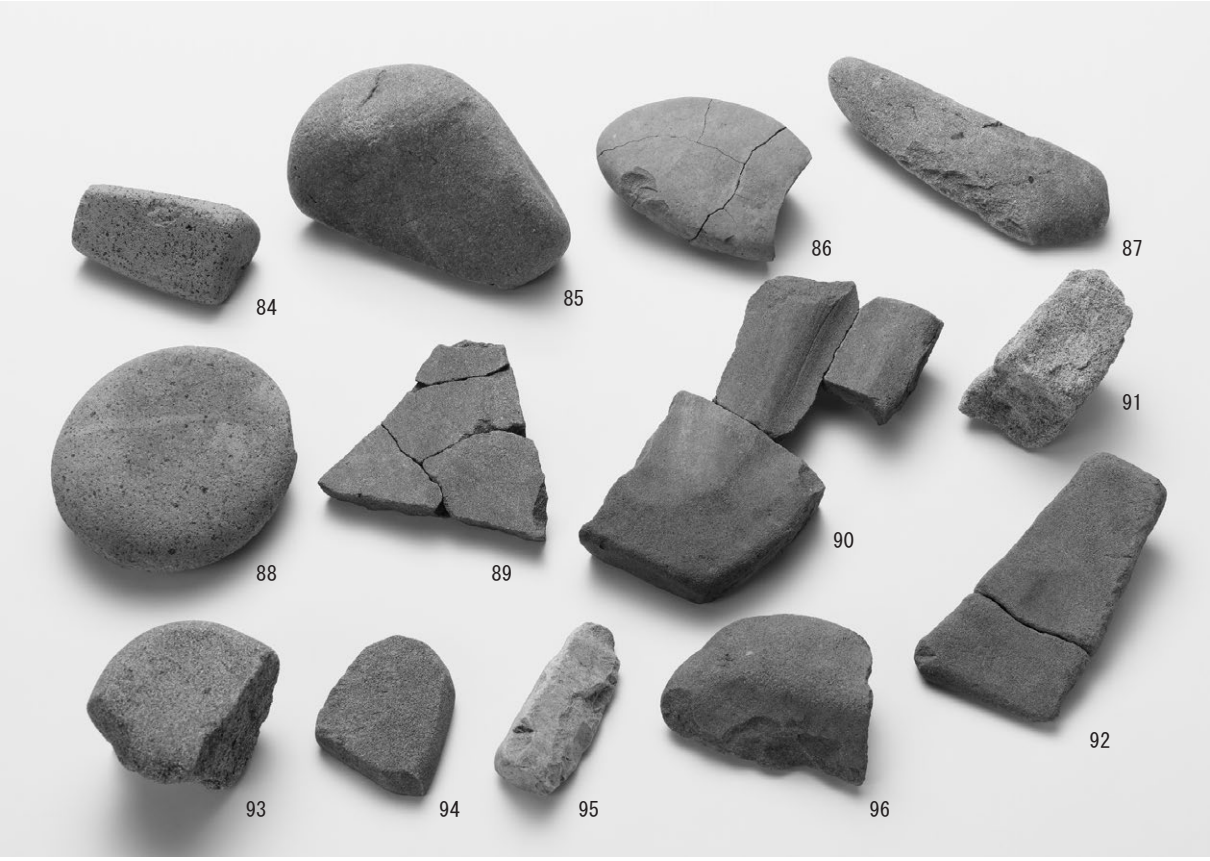
図版 32



包含層出土のたたき石(2)



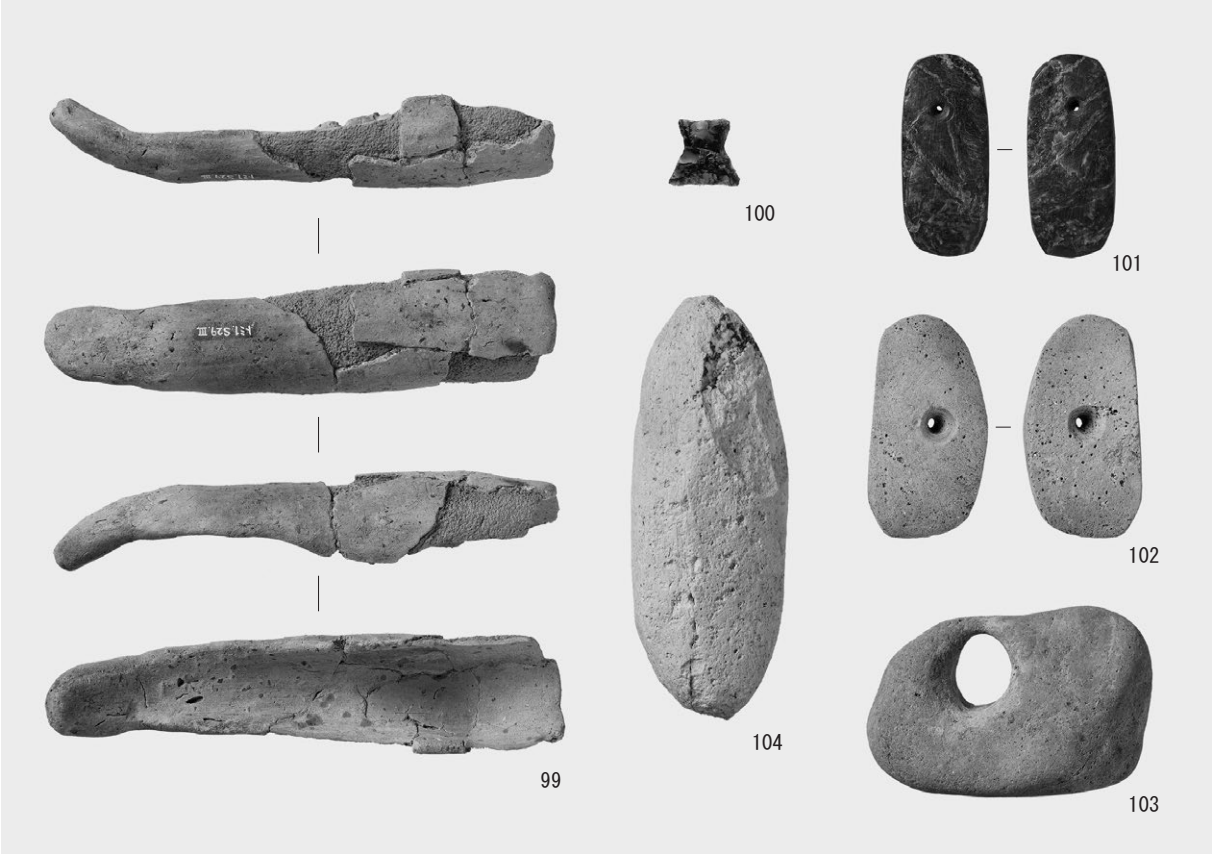
包含層出土のたたき石(3)



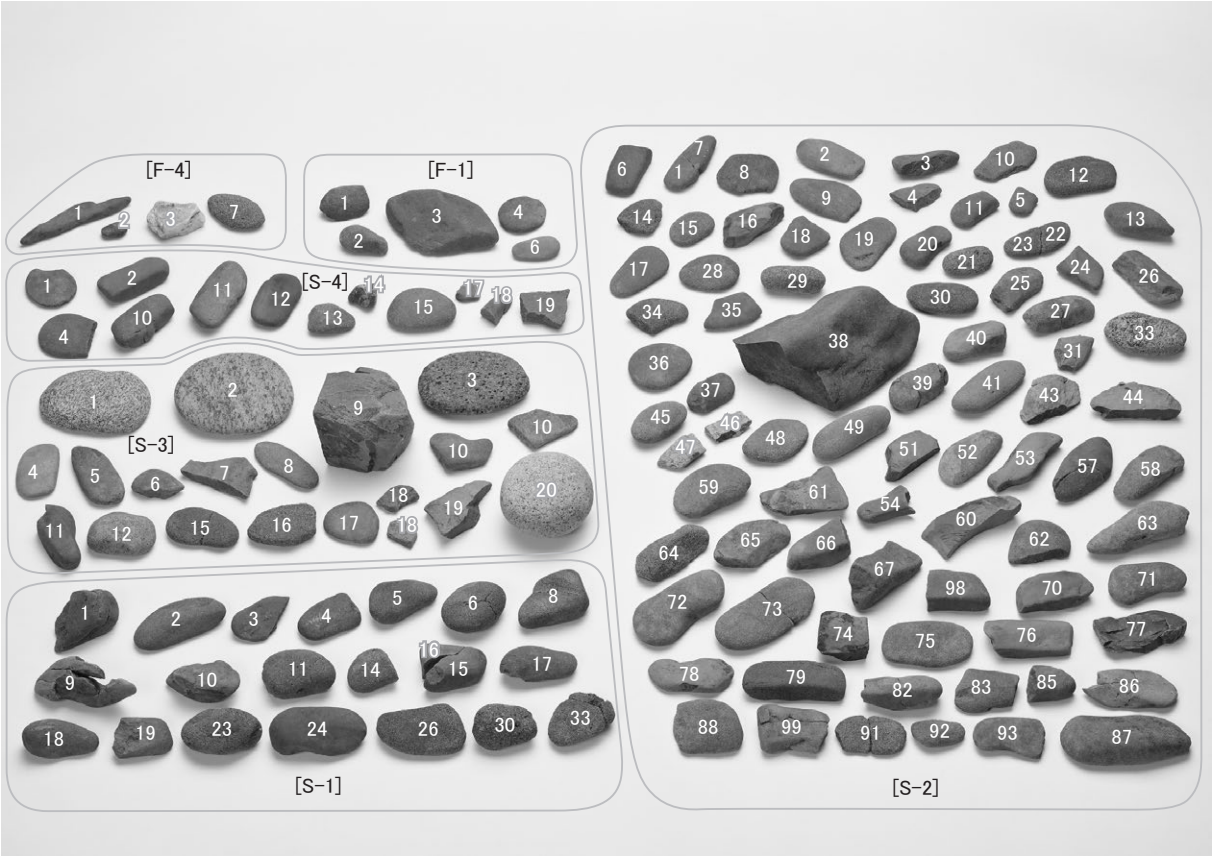
包含層出土の礫石器

包含層出土の石皿

図版 34



包含層出土の土製品・石製品



Ⅲ層検出遺構出土の棒状礫・円礫

写真図版

豊沢10遺跡

図版35　調査状況　基本土層
図版36　Ｆ－１・Ｆ－２
図版37　Ｆ－３（１）
図版38　Ｆ－３（２）・Ｆ－４
図版39　遺物出土状況（１）
図版40　遺物出土状況（２）
図版41　調査状況
図版42　焼土の遺物・包含層出土の土器（１）
図版43　包含層出土の土器（２）
図版44　包含層出土の土器（３）
図版45　包含層出土の土器（４）・土製品
図版46　包含層出土の石器

1　遺跡全景（北東から）

2　調査状況（南から）

3　基本土層

調査状況　基本土層

図版 36

1　焼土検出（手前Ｆ－２　奥Ｆ－１　南西から）

2　Ｆ－１断面（北東から）

3　Ｆ－２断面（北東から）

4　Ｆ－１・Ｆ－２断面（北東から）

1　Ｆ－３検出（左Ｆ－３④　奥Ｆ－３①　右奥Ｆ－３②　右手前Ｆ－３③　南西から）

2　Ｆ－３①検出（西から）

3　Ｆ－３①断面（北西から）

図版 38

1　Ｆ－３③検出（南西から）

2　Ｆ－３③断面（北西から）

3　Ｆ－３④　　焼骨出土状況

4　Ｆ－３④断面（北西から）

5　Ｆ－４検出（北東から）

6　Ｆ－４検出（北西から）

7　Ｆ－４土器出土状況

8　Ｆ－４断面（北西から）

1　J・K26 区付近遺物出土状況（左手前Ｆ－１・２　右Ｆ－３　東から）

2　J・K26 区遺物出土状況（北西から）

3　J・K26 区遺物出土状況（南東から）

4　J・K26 区土器底部出土状況

5　J・K26 区土器口縁部出土状況

図版 40

1　K26 区遺物出土状況（南西から）

2　K26 区遺物出土状況（北西から）

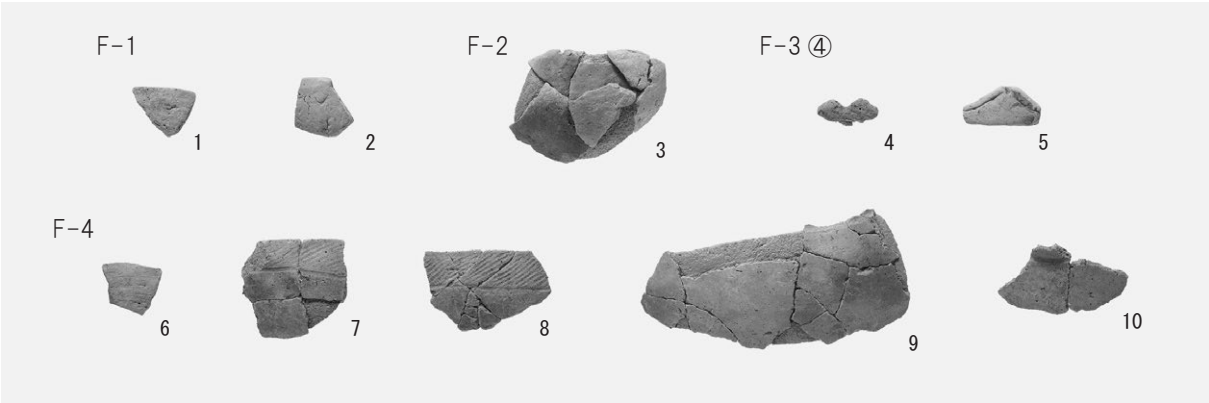
3　L25 区遺物出土状況（西から）

4　調査状況（南西から）

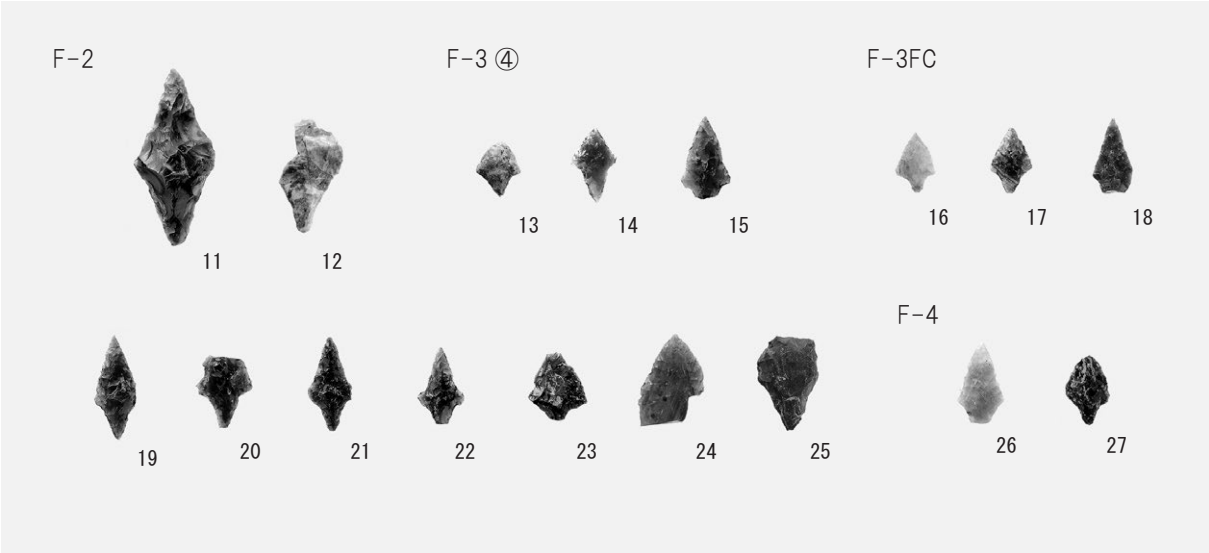
1　調査状況（南西から）

2　調査状況（北西から）

図版 42



1　焼土出土の土器



2　焼土出土の石器

3　図Ⅴ－15－5

4　図Ⅴ－15－6

1　図Ⅴ－15－7

2　図Ⅴ－15－8

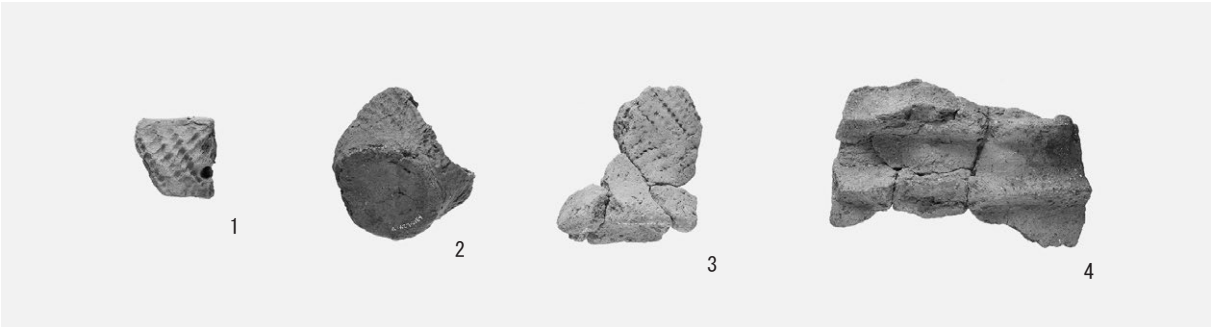
3　図Ⅴ－15－9

4　図Ⅴ－15－10

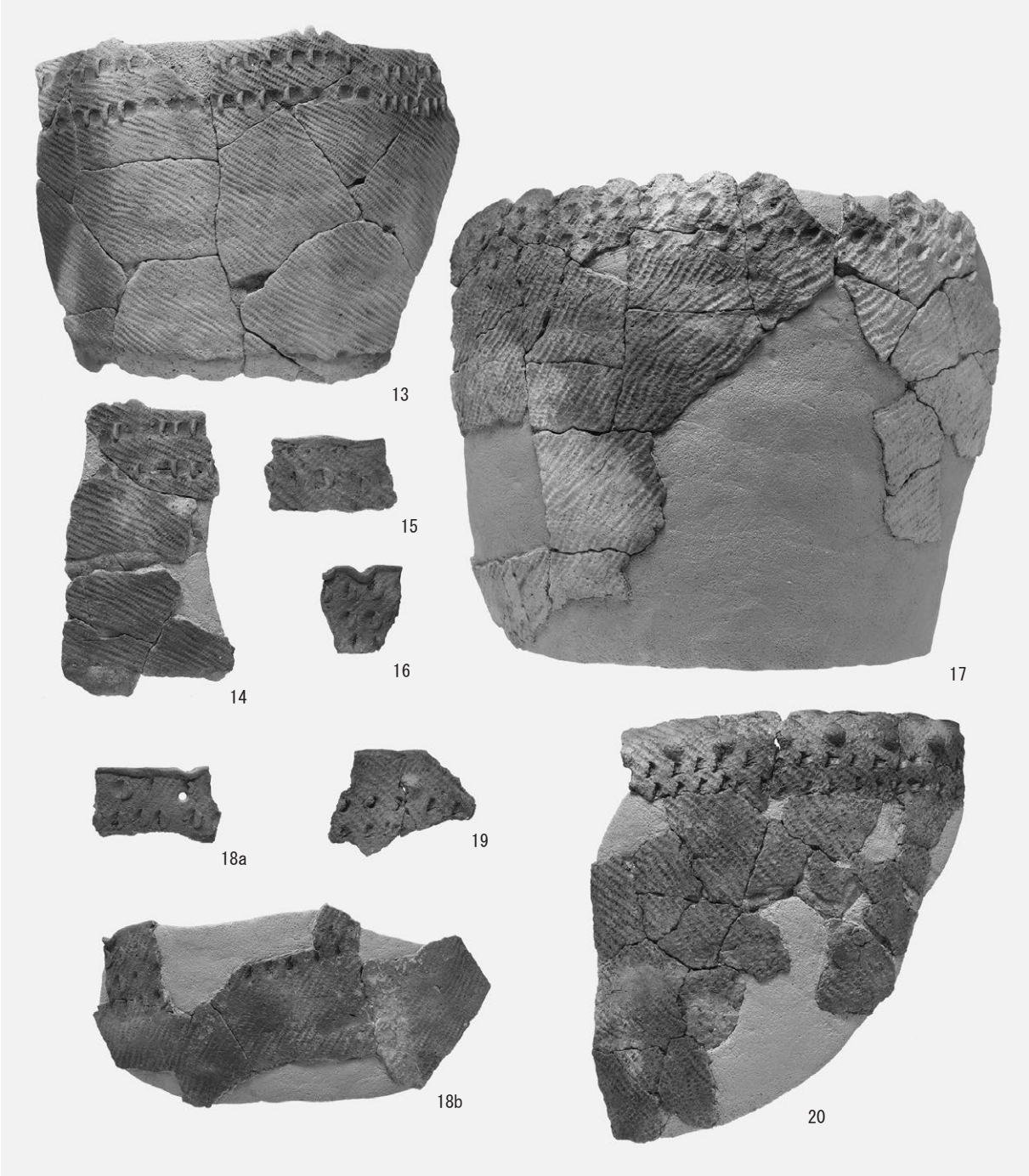
5　図Ⅴ－15－11

6　図Ⅴ－15－12

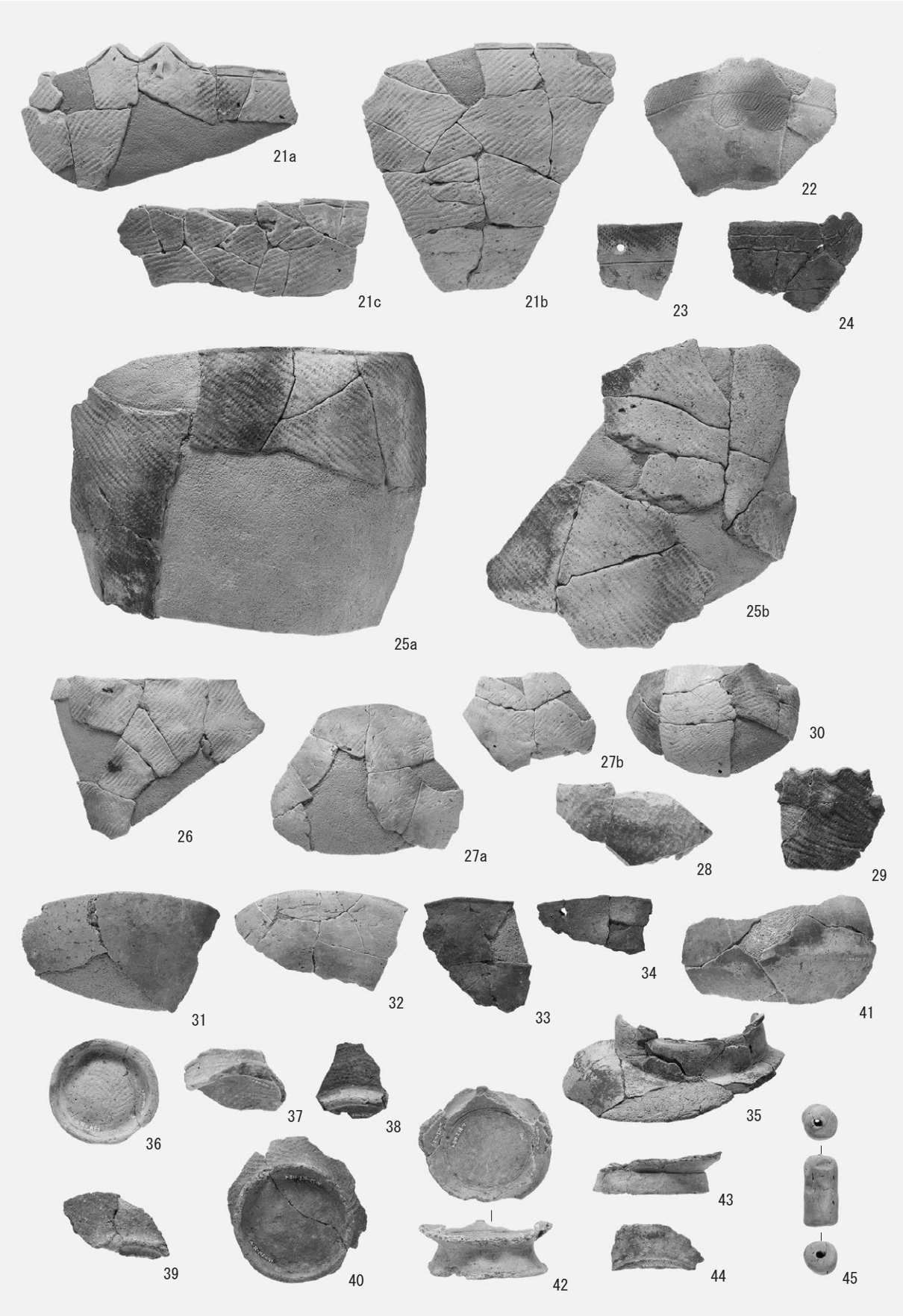
図版 44



1　Ⅳ群 a 類土器

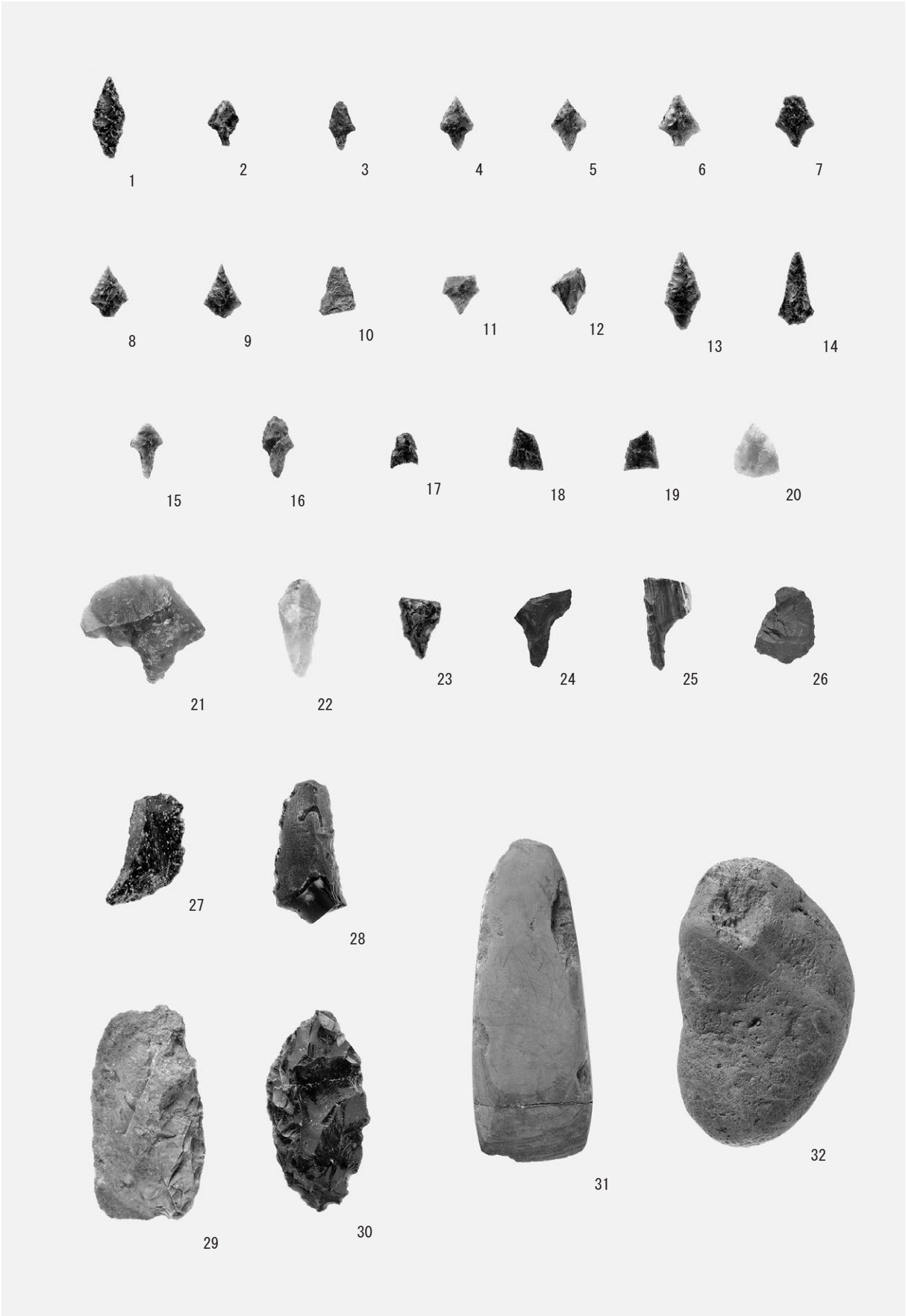


2　Ⅴ群 a 類土器（1）



1　Ⅴ群 a 類土器（2）・土製品

図版 46



1　包含層出土の石器

写真図版

豊丘２遺跡

図版47　調査状況
図版48　基本土層
図版49　焼土　Ｔピット
図版50　包含層出土の遺物

1　調査前現況（南から）

2　遺構確認作業状況（南から）

図版 48

1　基本土層

2　斜面部の土層

3　遺物出土状況

4　調査状況（北から）

1　Ｆ－１調査状況

2　Ｆ－１断面（南西から）

3　TP－１断面（南から）

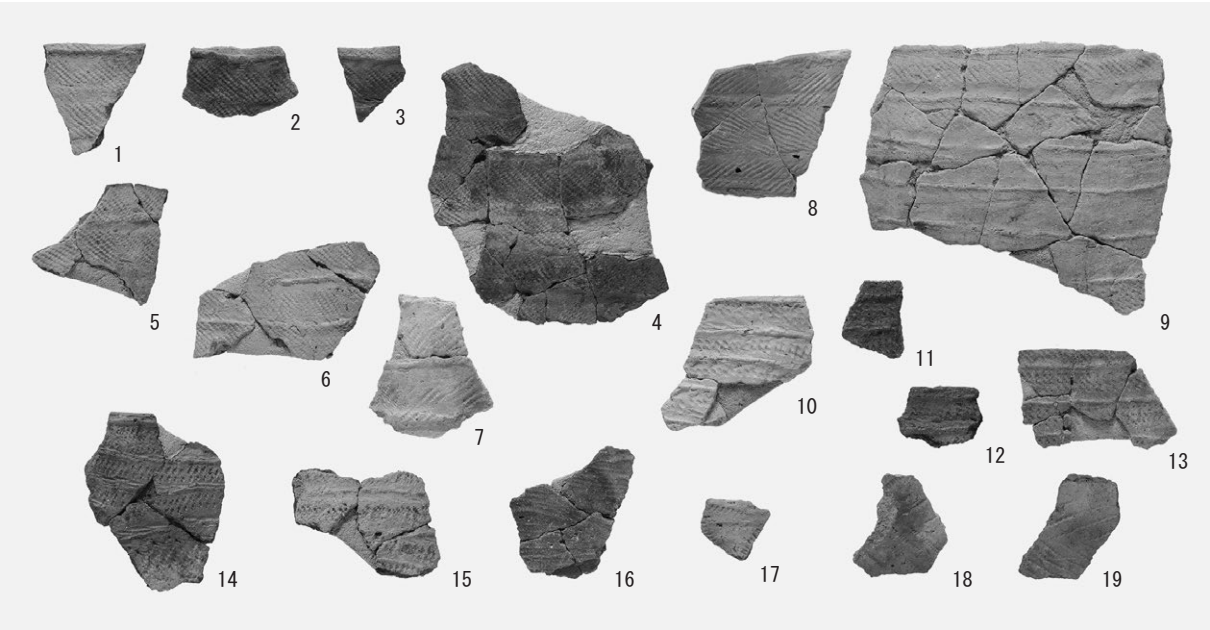
4　TP-１完掘（南から）

5　TP－１調査状況

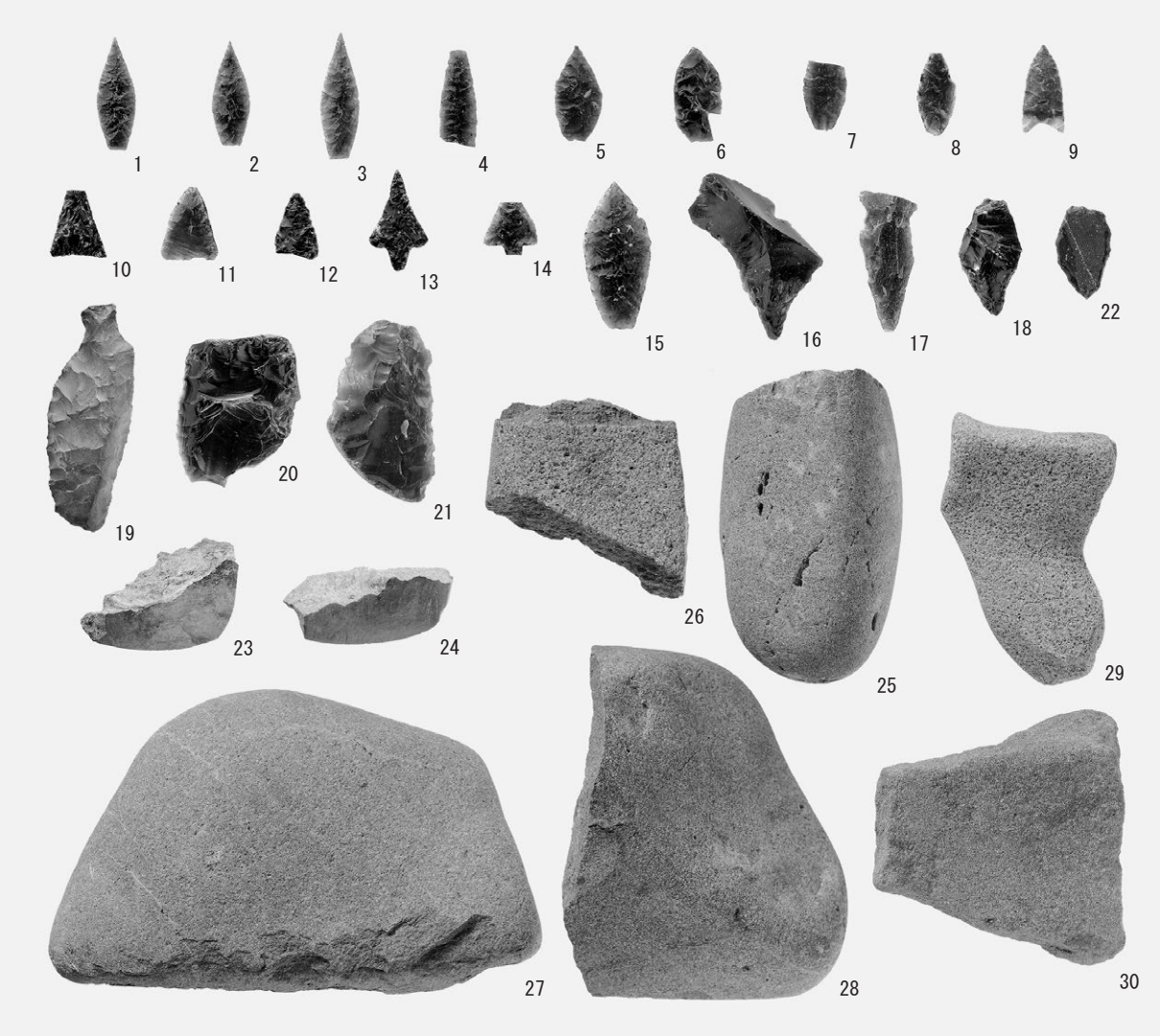
6　斜面部の調査状況（北西から）

焼土　Ｔピット

図版 50



2　包含層出土の土器



2　包含層出土の石器

報告書抄録

ふりがな	あつまちょう　とよさわ５いせき　とみさと１いせき　とよさわ10いせき　とよおか２いせき
書名	厚真町　豊沢５遺跡　富里１遺跡　豊沢10遺跡　豊丘２遺跡
副書名	勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）
シリーズ番号	第341集
編著者名	村田　大・立田　理
編集機関	公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター（http://www.domaibun.or.jp）
所在地	〒069－0832　北海道江別市西野幌685－1　　Tel.（011）386－3231
発行年月日	平成30（西暦2018）年３月29日

収録遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
豊沢５遺跡（とよさわ いせき）	北海道勇払郡厚真町字豊沢284－1（ほっかいどうゆうふつぐんあつまちょう あざとよさわ）	01371	J－13－109	42°41′3″	141°53′31″	20160714～20160810	729㎡	厚幌導水路
富里１遺跡（とみさと いせき）	北海道勇払郡厚真町字富里42－1（ほっかいどうゆうふつぐんあつまちょう あざとみさと）	01371	J－13－103	42°45′12″	141°56′44″	201608030～20161028	1,551㎡	厚幌導水路
豊沢10遺跡（とよさわ いせき）	北海道勇払郡厚真町字豊沢473－1（ほっかいどうゆうふつぐんあつまちょう あざとよさわ）	01371	J－13－139	H29杭 42°41′36″	H29杭 141°58′11″	20170522～20170607	613㎡	厚幌導水路
豊丘２遺跡（とよおか いせき）	北海道勇払郡厚真町字豊丘325－3（ほっかいどうゆうふつぐんあつまちょう あざとよおか）	01371	J－13－111	N22杭 42°39′14″	N22杭 141°54′52″	20170726～20170807	1,034㎡	厚幌導水路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
豊沢５遺跡	遺物包含地	縄文時代後期前葉 縄文時代晩期後葉	竪穴住居×１軒 土器集中×１か所	縄文後期：余市式 晩期後葉	なし
富里１遺跡	遺物包含地	縄文時代早期後半～晩期 続縄文時代 擦文文化期	竪穴住居×４軒 土坑31基 焼土４か所 遺物集中５か所 柱穴状土坑11基 土器集中×６か所	早期後半：コッタロ・東釧路Ⅳ 前期前半：綱文・静内中野式 中期前半：萩ケ岡式 中期後半：煉瓦台式 後期前葉：余市式 後期後葉：堂林式 続縄文：北大Ⅰ式 擦文後期	なし
豊沢10遺跡	遺物包含地	縄文時代晩期前葉	焼土４か所	土器（縄文後期前葉～少量　晩期前葉主体） 土製品 石器（剥片石器、石斧、石器各種）	なし
豊丘２遺跡	遺物包含地	縄文時代早期後半	Tピット１基 焼土１か所	土器（縄文早期後半中茶路式） 石器（石鏃、断面三角形すり石、石器各種）	なし

要約	豊沢５遺跡：当麻内川左岸の微高地。余市式の竪穴住居と晩期後葉の土器集中を検出。 富里１遺跡：厚真川右岸、舌状台地の先端部。擦文後期（11世紀）の平地住居とみられる焼土、土器集中、続縄文時代（北大Ⅰ式）の土器集中、縄文時代早期後半、中期後半の竪穴住居の他、縄文晩期の土坑群を検出している。 豊沢10遺跡：当麻内川の支流左岸の緩斜面に立地。焼土４か所を検出。灰･炭化物､焼骨片(鹿四肢骨)､フレイク･チップのまとまりを伴うものがある。出土した土器は､縄文時代晩期前葉のものが大半である。 豊丘２遺跡：厚真川支流の野安部川左岸緩斜面に立地。Tピットと焼土を検出。縄文早期後半の土器と石器類が少量出土。

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登載番号、経緯度は世界測地系による。

（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第 341 集

厚真町

豊沢 5 遺跡　富里 1 遺跡　豊沢 10 遺跡　豊丘 2 遺跡

－勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行年月日　平成 30 年 3 月 29 日

編集・発行　公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

〒069－0832　江別市西野幌 685 番地－ 1

TEL（011）386－3231（代表）　FAX（011）386－3238

URL http://www.domaibun.or.jp

印　　刷　北海道印刷企画株式会社

〒064-0811　札幌市中央区南11条西９丁目３番35号

TEL（011）562－0075　　FAX（011）562－0355